―― 千 葉 県 市 原 市 ――

草 刈 遺 跡

1 9 8 5

市　原　市　街　路　課
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

市原市は，東京湾東岸の房総半島中央に位置し，自然環境にも恵まれ，古くから栄えてきた土地であります。縄文時代には数多くの貝塚が形成され，古代に至っては上総国の中心地として上総国府，上総国分寺・国分尼寺がこの地に置かれたことからも，その繁栄ぶりの一端をうかがうことができます。また，村田川の北岸台地上も遺跡の宝庫で，先土器時代から連綿と先人の足跡が記されている地域であります。一方で本市は首都圏に近接するという地理的条件により，近年における人工増加は著しく，それに伴って宅地開発，道路整備等が急速に進んでおり，これら地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回ここに報告する「草刈遺跡」は住宅・都市整備公団によって開発が進められている千原台ニュータウンと西広地区を結ぶ，都市計画道路草刈・西広線の建設に先立ち，関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施いたしました。もとより，千原台地区では財団法人千葉県文化財センターにより広範囲に発掘調査が行われており，今回当センターが調査を実施いたしました部分はその一角を占めるにすぎませんが，縄文時代の住居址を始めとして多くの成果を得ることができました。本報告書は，これらの調査成果をまとめたもので，学術資料としてだけでなく，市民をはじめ多くの方々の埋蔵文化財保護思想の育成の一助となれば幸いです。

本書の刊行にあたり，御指導・御協力をいただいた，千葉県教育庁文化課，財団法人千葉県文化財センター，市原市街路課，市原市教育委員会文化課の方々をはじめ，地元の皆様方に厚くお礼申し上げます。

昭和６０年３月

財団法人　　市原市文化財センター
理事長　　星野一郎

例　　言

1. 本書は，都市計画道路草刈・西広線建設事業に先行して実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は，昭和58年度に調査の対象となった千葉県市原市草刈1319他に所在する草刈遺跡（3859m²）の発掘調査報告である。
3. 発掘調査は，市原市街路課の依頼により，千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会文化課の要請と指導のもとに，財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は，昭和58年7月15日～昭和59年1月5日まで行い，調査課長郷田良一・主任調査研究員山口直樹の指導のもとに，調査研究員高橋康男・森本和男が担当し，寺島博・田所真の協力を得た。
5. 整理作業は，昭和59年4月2日より昭和60年3月25日まで行い，郷田・山口の指導のもとに，調査員全員の協力・助言を得て，高橋が担当した。
6. 本書の執筆・編集は高橋が担当した。
7. 人骨・獣骨に関しては，早稲田大学考古学研究室の金子浩昌氏の御協力を賜った。
8. 本書掲載の土器展開写真については，中央航業株式会社武田勉氏の御協力を得た。
9. 調査および本書の作成にあたっては，千葉県教育庁文化課，財団法人千葉県文化財センター，市原市街路課，市原市教育委員会文化課をはじめとして，多くの方々に御指導・御協力をいただいた。
10. 遺物および実測図等の資料は，財団法人市原市文化財センターで保管している。

目　　次

序　　文
例　　言

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査概要 …… 5
　1.　調査に至る経緯 …… 5
　2.　調査開始前の所見 …… 5
　3.　調査の方法・経過 …… 5
　4.　整理の方法 …… 6
Ⅲ　各時代の遺構・遺物 …… 10
　縄文時代の概観 …… 10
　　住居址および出土遺物 …… 10
　　炉址　　〃 …… 32
　　土壙　　〃 …… 34
　　非遺構伴出の縄文土器 …… 39
　　土器片錘 …… 56
　　土器片利用の円盤 …… 70
　　石器 …… 70
　弥生時代の概観 …… 79
　　住居址および出土遺物 …… 79
　　非遺構伴出の弥生土器 …… 90
　古墳時代前期の概観 …… 93
　　遺構と出土遺物 …… 95
　　遺構外出土の古墳時代前期遺物 …… 107
　弥生土器・土師器の容量について …… 108
　古墳時代後期の概観 …… 111
　　住居址 …… 111
　　草刈型土器（仮称） …… 117

歴史時代以後の概観 ---------- 121
土壙 ---------- 121
台地整形部 ---------- 124
道路状遺構 ---------- 126
溝状遺構 ---------- 130
遺構外出土の歴史時代遺物 ---------- 130
鉄製品 ---------- 131
Ⅳ　小結（草刈台地の断片史の素描） ---------- 132

挿　図　目　次

1. 草刈遺跡と周辺の遺跡 ---------- 2
2. 隣接する遺跡と周辺の地形 ---------- 6
3. 遺構配置図 ---------- 8
4. 大グリット設定図，先土器グリッド配置図 ---------- 9
5. 縄文時代遺構配置図 ---------- 11
6. 1号住居址平面図・土層断面図・エレベーション ---------- 13
7. 1号住居址出土遺物実測図 ---------- 14
8. 〃　拓影図 ---------- 14
9. 2・3・4号住居址・土層断面図 (1) ---------- 15
10. 〃 (2) ---------- 16
11. 2号住居址出土遺物拓影図 ---------- 18
12. 〃　石鏃実測図 ---------- 18
13. 3・4号住居址出土遺物実測図 ---------- 19
14. 3号住居址出土製品実測図 ---------- 20
15. 3号住居址出土縄文土器拓影図 ---------- 20
16. 4号住居址出土縄文土器拓影図 ---------- 21
17. 〃　石鏃実測図 ---------- 21
18. 5号住居址平面図・土層断面図 ---------- 23
19. 〃　遺物実測図 ---------- 24
20. 〃　出土石鏃実測図 ---------- 24

21. 5号住居址出土縄文土器拓影図 25
22. 6・7号侍居址平面図・土層断面図 26
23. 〃 エレベーション 27
24. 〃 出土縄文土器拓影図 28
25. 8号住居址平面図・土層断面図・エレベーション 29
26. 〃 出土遺物実測図 29
27. 9号住居址平面図 30
28. 〃 出土遺物実測図 31
29. 〃 〃 縄文土器拓影図 31
30. 10・11・12号炉址平面図 33
31. 10・11号炉使用土器実測図 33
32. 12号炉使用土器実測図 33
33. 13～17号土壙実測図 35
34. 14号土壙出土縄文土器拓影図 36
35. 15号土壙出土縄文土器実測図 36
36. 17号土壙出土縄文土器拓影図 36
37. 18号土壙平面図・土層断面図 37
38. 〃 出土縄文土器実測図 38
39. 〃 〃 拓影図 39
40. 26号方形周溝墓出土縄文土器拓影図 (1) 41
41. 〃 (2) 42
42. 〃 顔面把手実測図 42
43. 24号方形周溝墓出土縄文土器拓影図 (1) 43
44. 24号方形周溝墓出土縄文土器拓影図 (2) 44
45. 21号住居址出土縄文土器拓影図 45
46. 25号方形周溝墓出土縄文土器拓影図 46
47. 19号住居址出土縄文土器拓影図 47
48. 20号住居址出土縄文土器拓影図 48
49. 22号住居址出土縄文土器拓影図 48
50. 27号住居址出土縄文土器拓影図 49
51. 縄文土器拓影図 50

52. 遺構外出土縄文土器拓影図 (1) ---------- 52
53. 〃 (2) ---------- 53
54. 縄文土器実測図 (1) ---------- 54
55. 〃 (2) ---------- 55
56. 土器片錘計測値グラフ ---------- 58
57. 諸遺跡出土土器片錘重量分布図 ---------- 59
58. 土器片錘実測図 (1) ---------- 60
59. 〃 (2) ---------- 61
60. 〃 (3) ---------- 62
61. 〃 (4) ---------- 63
62. 〃 (5) ---------- 64
63. 〃 (6) ---------- 65
64. 土器片利用の円盤実測図 ---------- 70
65. 石鏃実測図 (1) ---------- 71
66. 石鏃実測図 (2) ---------- 72
67. 石器実測図 (1) ---------- 73
68. 〃 (2) ---------- 74
69. 〃 (3) ---------- 75
70. 〃 (4) ---------- 76
71. 〃 (5) ---------- 77
72. 弥生時代主要遺構分布図 ---------- 80
73. 19号住居址平面図・土層断面図 ---------- 81
74. 〃 出土土器実測図 ---------- 82
75. 20号住居址平面図・土層断面図 ---------- 83
76. 20号住居址出土遺物実測図 ---------- 84
77. 21号住居址平面図・土層断面図・エレベーション ----------
78. 〃 出土遺物実測図 (1) ---------- 86
79. 〃 〃 (2) ---------- 86
80. 22号住居址平面図・土層断面図 ---------- 88
81. 〃 出土台付甕実測図 ---------- 88
82. 〃 壷実測図 ---------- 89

83. 遺構外出土遺物実測図(1) ---------- 91
84. 弥生土器拓影図 ---------- 91
85. 遺構外出土弥生土器拓影図 ---------- 92
86. 古墳時代前期主要遺構分布図 ---------- 94
87. 24号方形周溝墓実測図 ---------- 96
88. 25号方形周溝墓実測図 ---------- 98
89. 26号方形周溝墓実測図 ---------- 99
90. 〃 出土遺物実測図 (1) ---------- 101
91. 〃 〃 (2) ---------- 102
92. 〃 〃 (3) ---------- 103
93. 玉類実測図 ---------- 105
94. 古墳時代前期遺物実測図 ---------- 106
95. 遺構外出土鉄剣実測図 ---------- 107
96. 遺構外出土甕実測図 ---------- 107
97. 古墳時代後期主要遺構分布図 ---------- 112
98. 28号住居址平面図・土層断面図 ---------- 113
99. 28号住居址出土遺物実測図 ---------- 113
100. 29号址・33号台地整形部出土遺物実測図 ---------- 114
101. 30号住居址エレベーション ---------- 116
102. 草刈型土器（仮称）実測図 ---------- 119
103. 歴史時代主要遺構分布図 ---------- 122
104. 31号土壙平面図・土層断面図・エレベーション ---------- 123
105. 歴史時代土器実測図 ---------- 124
106. 29号址・33号台地整形部実測図 ---------- 125
107. 34・35号道路状遺構実測図 ---------- 127
108. 36～42号道路状遺構平面図 ---------- 128
109. 〃 土層断面図 ---------- 129
110. 鉄製品実測図 ---------- 131

表　目　次

1. 土器片錘計測表 …… 66 ～ 69
2. 石器一覧表 …… 78
3. 非遺構伴出弥生土器観察表 …… 92
4. 土器容量計測値一覧表 …… 109

図　版　目　次

1. 調査区全景
2. 1. 1号住居址全景　2. 3・4号住居址全景
3. 1. 5号住居址全景　2. 5号住居址炉土器埋置状況
4. 1. 6・7号住居址全景　2. 9号住居址全景
5. 1. 8号住居址全景　2. 8号住居址炉埋置状況
6. 10～12号炉址土器埋置状況
7. 1. 18号小竪穴全景　2. 18号小竪穴人骨出土状況
8. 1. 13号土壙全景　2. 14号土壙全景
9. 1. 15号土壙 貝・土器出土状況　2. 15号土壙全景
10. 1. 19号住居址全景　2. 20号住居址全景
11. 1. 21号住居址全景　2. 21号住居址土器出土状況
12. 1. 22号住居址全景　2. 22号住居址台付甕出土状況
13. 1. 22号住居址壷出土状況　2. 23号址土器出土状況
14. 1. 方形周溝墓配置状況　2. 24号方形周溝墓全景
15. 1. 25・26号方形周溝墓全景　2. 26号方形周溝墓全景
16. 26号方形周溝墓遺物出土状況
17. 〃
18. 1. 27号址土器出土状況　2. 遺構外甕鉄剣出土状況
19. 29号址手捏ね土器出土状況
20. 1. 29号址土　出土状況　2. 29号址土製円盤出土状況
3. 33号台地整形部小型甕出土状況
21. 1. 28号住居址全景　2. 30号住居址全景

22.　1.　31号土壙全景　　2.　33号台地整形部全景

23.　縄文土器　(1)

24.　〃　(2)

25.　〃　(3)

26.　〃　(4)

27.　〃　(5)

28.　〃　(6)

29.　〃　(7)

30.　〃　(8)

31.　〃　(9)

32.　〃　(10)

33.　〃　(11)

34.　〃　(12)

35.　〃　(13)

36.　土器片錘　(1)

37.　〃　(2)

38.　〃　(3)

39.　〃　(4)

40.　土器片錘　(5)．　土器片利用の円板，石鏃　(1)

41.　石鏃　(2)

42.　石器　(1)

43.　石器　(2)．　弥生土器　(1)

44.　弥生土器　(2)

45.　26号方形周溝墓出土遺物

46.　土師器・出土玉類・鉄剣

47.　草刈型土器・歴史時代土器・鉄製品・鞴の羽口・古銭

48.　縄文土器展開写真

Ⅰ．遺跡の位置と環境

本遺跡は市原市草刈字扇谷1319他に位置し，面積は3859m²である。

村田川北岸の標高30m前後の台地上にあり，同川の小支谷をとり込んだ形で本遺跡は存在する。この地域一帯は，現在，住宅・都市整備公団により，千原台団地の造成が進められており，それに先行する埋蔵文化財調査が（財）千葉県文化財センター・千原台事務所により実施されているが，本遺跡の北側は草刈遺跡（B区），南側は六之台遺跡があり，既に昭和55年度に調査が行われ，西側は，千葉急行電鉄線建設に先立つ調査が，同センター・千葉急行事務所により昭和57年度に実施されている。

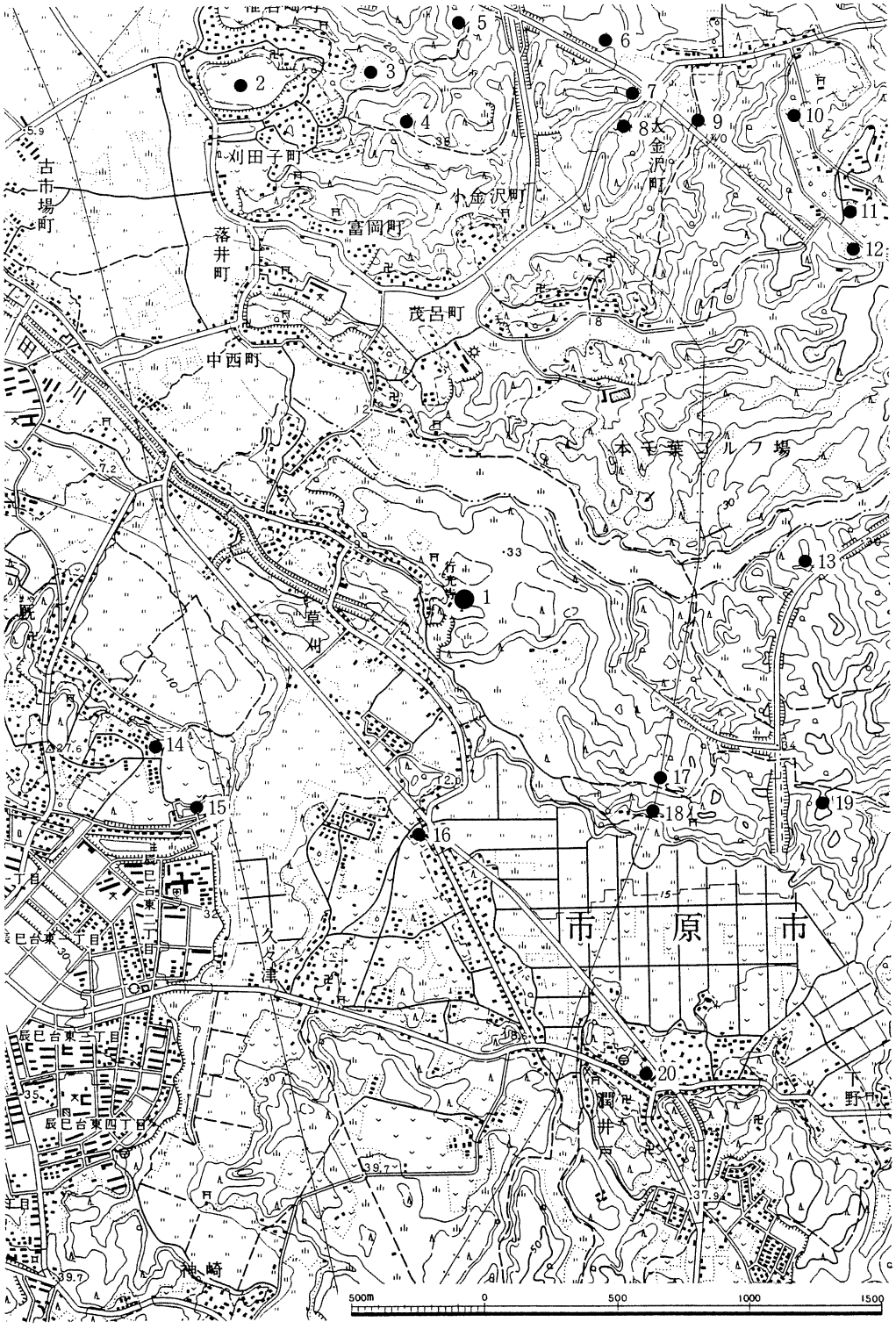
地理学的には，下総下位面として把えられる，いわゆる「草刈台」の中南部に位置し，標高30m前後の平坦面上にある。この「草刈台」の先端は縄文海進以降に形成された海食崖が見られる。

周辺の縄文時代の環境については，全てについて明確にされているわけではないが，縄文海進・海退期における水域環境に関して，沖積面のボーリングサンプルに基づく分析がなされている。(1) その成果によると，縄文前，中期を通して海岸線が，台地の中央付近まで達しており，それ以後は，上部砂層の発達によりハマグリ，シオフキ・イボキサゴの生息に適した環境であったとのことである。

千原台地区の考古学的成果については，現在も調査が継続中であり，全体の把握はまだ困難であり，その成果の公表に期待するところは大きいが，千原台以外の諸遺跡も含めて，村田川流域における考古学的成果について触れておく。(2)

縄文時代においては，草創期・早期の土器群が，草刈遺跡西端部・鶴牧遺跡・ナキノ台遺跡・押沼遺跡で出土しており，また前述の六之台遺跡からは茅山期の住居址が2軒，押沼遺跡からは諸磯期の住居が検出されている。中期に至ると，草刈貝塚に見られるような阿玉台～加曽利E期の遺構・遺物が増大する。今回報告する部分もこの時期の資料が最も多い。また，村田川南岸では，阿玉台式の良好な資料を出土した小田部新地遺跡が存在するが，(3) この遺跡からは，加曽利E式の資料はほとんど見られない。中期において爆発的とも言えるほど，資料が増大するのに対し，後期に入るとまったくと言っていいほど，資料の出土は見られなくなる。村田川南岸では，菊間手永貝塚が存在することと対照的である。晩期に関しては，小田部新地遺跡でわずかに土器片が出土している程度で不明瞭である。

弥生時代に入って，村田川の沖積層の形成が進み，可耕地を増大していき，村田川南岸では菊間(4)・大厩(5)の両遺跡の出現を見，草刈台においても宮ノ台期の集落の成立を見ている。また，六之台遺跡においても宮ノ台式の土器片が出土している。しかし，この時期の遺跡は，まだ少



第１図　草刈遺跡と周辺の遺跡

第1図　遺　跡　名

1. 草刈遺跡　2. 刈田子台遺跡　3. 今台遺跡　4. 椎名崎古墳群C支群
5. 椎名崎古墳群B支群　6. 小金沢貝塚　7. 小金沢古墳群
8. 御塚台遺跡　9. ムコアラク遺跡　10. 六通金山遺跡　11. 大膳野北遺跡
12. 大膳野北貝塚　13. ばあ山遺跡　14. 浅間山古墳　15. 大厩遺跡
16. 西山遺跡　17. 川焼台遺跡　18. 川焼瓦窯跡　19. 鶴牧古墳群
20. 山王後一号墳

なく，増加を見るのは後期以降である。草刈台では 100軒を越える住居址が検出され，今回報告する数軒の住居址もその集落の一部を構成するものである。しかし，この集落に伴うと考えられる墓域は把握されておらず，今後の調査に期待するところが大きい。村田川南岸では，小田部新地遺跡において，この時期の方形周溝墓群が検出されている。

古墳時代前期にかけての時期には，それまでの集落と立地を同じくして墓域の形成が認められ，草刈遺跡全体の数量的把握は現状では不可能であるが，今回報告する部分においても方形周溝墓3基が検出されており，六之台遺跡や，既に報告されている草刈遺跡（A区）においては五領期の集落が調査されている。また，高塚古墳の築造も開始されており，例えば草刈3号墳では周溝から多くの五領期の遺物を出土している。村田川南岸においても，新皇塚古墳に代表されるような前期古墳の成立が見られる。

古墳時代後期に入ると，集落・古墳ともに分布を広げることになるが，古墳群と集落との関係等の把握は未調査の部分が多いので資料の増加をまちたい。

奈良・平安時代以降に関しては川焼台遺跡[(6)]で瓦の散布が見られる以外にはこの時期の集落は不明である。川焼台に隣接して川焼瓦窯が存在するが，この瓦窯に関しても未調査で，製品の実態はもちろんのこと，供給先等も不明な点が多い。なお，村田川の南岸には菊間廃寺があり（ただし詳細は不明であるが），付随する瓦窯として菊間瓦窯がある。

これまで述べてきたように，村田川両岸には多様な時期の遺跡が存在し，両岸における様相の相違は興味深いものであるが，千原台地区一帯はまだ調査中であり，今後の成果に期待するところは大きい。

註

(1) 松島義章　「千原台地区の沖積低地」『千原台ニュータウン』I　千葉県文化財センター　1980．3

(2) 千原台地区の概要については

高田　博　「遺跡の位置と環境」『千原台ニュータウン』II　千葉県文化財センター　1983．3

に拠るところが大きい。

(3) 1983年に市原市文化財センターにより発掘調査実施。

(4) 斉木　勝他　『市原市菊間遺跡』　千葉県都市公社　1975．8

(5) 三森俊彦他　『市原市大厩遺跡』　千葉県都市公社　1974．3

(6) 1983年に小型銅鐸を出土した遺跡である。その詳細については，

榊原弘二・山口典子　「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌』第7・8合併号

千葉県文化財センター　1984．3

を参照されたい。

II．調査概要

1. 調査に至る経緯

昭和55年９月３日付けで，市原市長井原恒治は，都市計画道路草刈・西広線建設に先がけて「埋蔵文化財の存在の有無およびその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出した。それを受けて現地踏査を実施した結果，昭和55年10月17日付けで千葉県教育委員会教育長より，貝塚・縄文式土器・土師器散布地の回答がなされた。その遺跡の取扱いについて，千葉県教育庁文化課，市原市街路課及び市原市教育委員会による再々の協議の結果，記録保存とする結論となった。

発掘調査は，調査対象面積3859m²を，（財）市原市文化財センターへの委託事業として，昭和58年７月15日より開始した。　　（市原市教育委員会　文化課）

2. 調査開始前の所見（第２図）

前章でも述べた通り，本遺跡に隣接する箇所では既に調査が行われており，調査開始前からある程度の内容が把握できていたので，以下に見通しを立てていた諸点について記しておく。

今回調査部分の北側台地上は，草刈貝塚・草刈古墳群を含む草刈遺跡の調査が継続して行われており，今回調査部分に隣接する区域（「草刈Ｂ区」）では，縄文時代中期の住居址群・土壙群が広がっており，その延長部分が検出される可能性が高いということが第１点。貝殻の散布は見られるが，後世の耕作・台地削平等による二次堆積の可能性も考えられることが第２点。

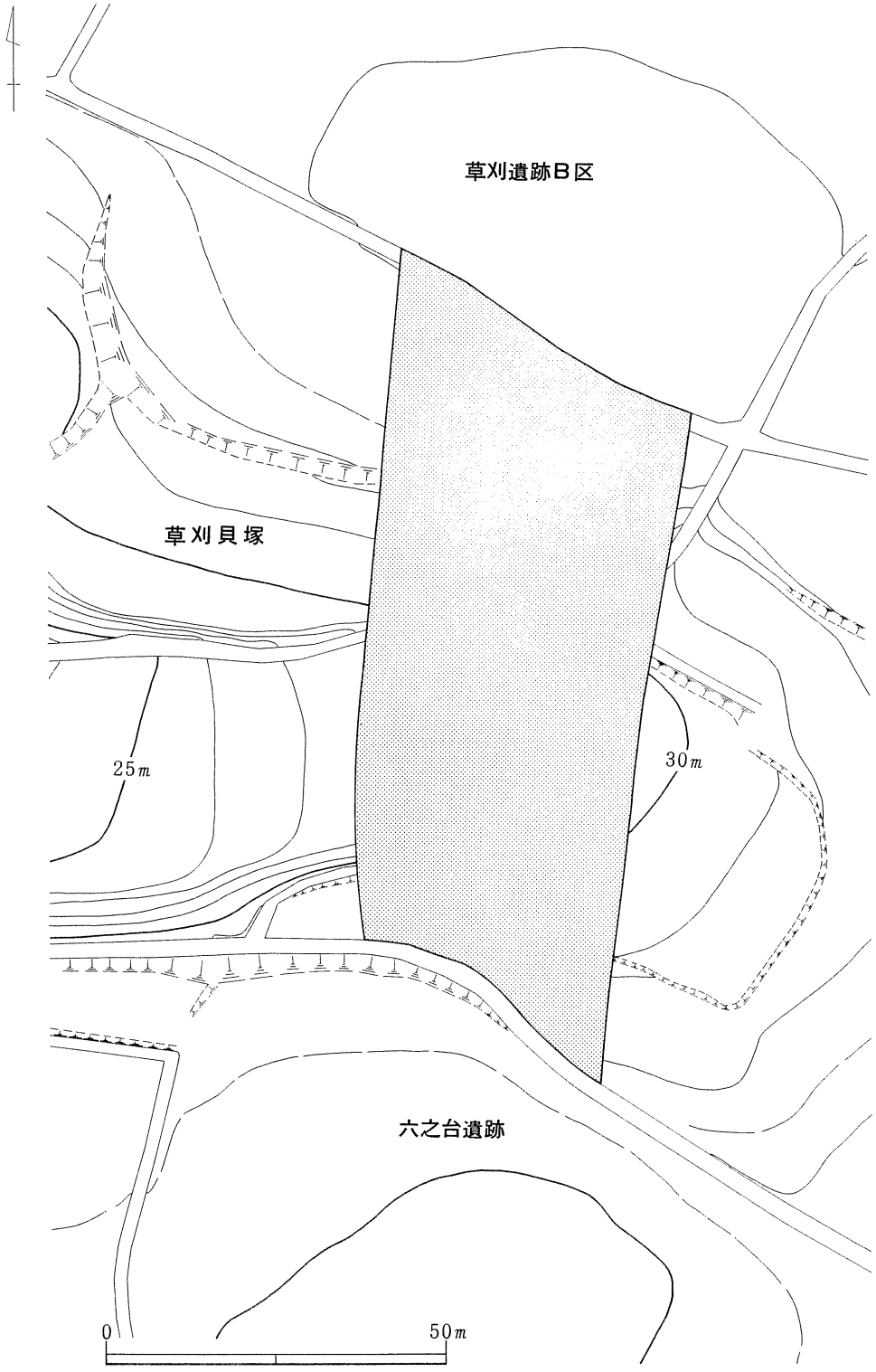
西側隣接部においても，縄文時代中期の住居址群・土壙群の広がりが見られ，さらに方形周溝墓群が存在し，周溝内に人骨の埋葬が見られたものもある。また，いくつかの方形周溝墓が今回調査部分の中に掘り残された形で残存しており，その周溝内から人骨が出土する可能性がある。これが第３点。谷の部分は黒色の砂質土が厚く堆積しており，遺構等の存在の可能性は低いこと。これが第４点である。

谷をはさんだ南側の部分は，六之台遺跡として調査されており，草刈３号墳を含む五領～鬼高期の遺構が濃密に分布し，その延長部分が検出される可能性があるが，平坦部分はかなり狭いので及んでいるとしても密度は薄いであろうということ。これが第５点。さらに中近世に台地整形が大規模に行われ，その延長部分が及んでいると思われること。これが第６点目である。

以上６点の大まかな予見をもって調査に臨んだわけであるが，調査の結果，必ずしも正鵠を得ていなかったことが明らかになったが，その点については個別の報告に譲ることとする。

3. 調査の方法・経過（第３・４図）

調査前の当地は，小木や雑草が繁茂しており，まず伐採を行い，その後基準杭の設定を行っ



第2図　隣接する遺跡と周辺の地形

た。基準杭は，20m間隔で設定することにし，後，表土除去終了後，遺構の密度等を考慮して４m間隔で小杭を設定することとした。基準杭設定後，ただちに，重機により表土除去を開始した。

表土除去の結果，大まかな遺構の配置の傾向をつかむことができた。調査区は大きく分けて４つの部分からなる。北側のロームの残存している部分，一段低い粘質土を確認面とする部分，谷部分，南側の台地部分である。それらを仮にA～Dとすると，Aの部分では，住居址群・小ピット群・方形周溝墓等比較的まとまって遺構が検出され，土器の量も多い。Bでは遺構はAに比べるとかなり少なく，住居址が数軒みられる他に，溝や道路状遺構が散在して見られる。Cの谷部は表土が厚くわずかに土器の細片が見られる程度で遺構の有無を確認するにはかなり深く表土を下げる必要がある。（最終的には，道路状遺構を検出するところとなった。）Dでは，溝状遺構を思わせる黒褐色土の帯が東西に長くのびている以外は，住居址等の存在は見られない。以上である。

重機による表土除去後，遺構確認作業を開始し，それと平行して，谷部の黒土の除去を行ない，谷のヘリの部分で道路状遺構は確認できたが，谷がかなり深く入っており，その面をもって谷の掘り下げは断念した。

遺構確認終了後，ただちに掘りを始めた。遺構番号は，種類・時期にかかわらず着手した順に付し，遺物も種類に関係なく取り上げた順に番号を付していった。また，遺構外出土遺物については，20m×20mの大グリッドをさらに０～99までの２m×２mの小グリッドに分けてグリッド単位で取り上げることとした。

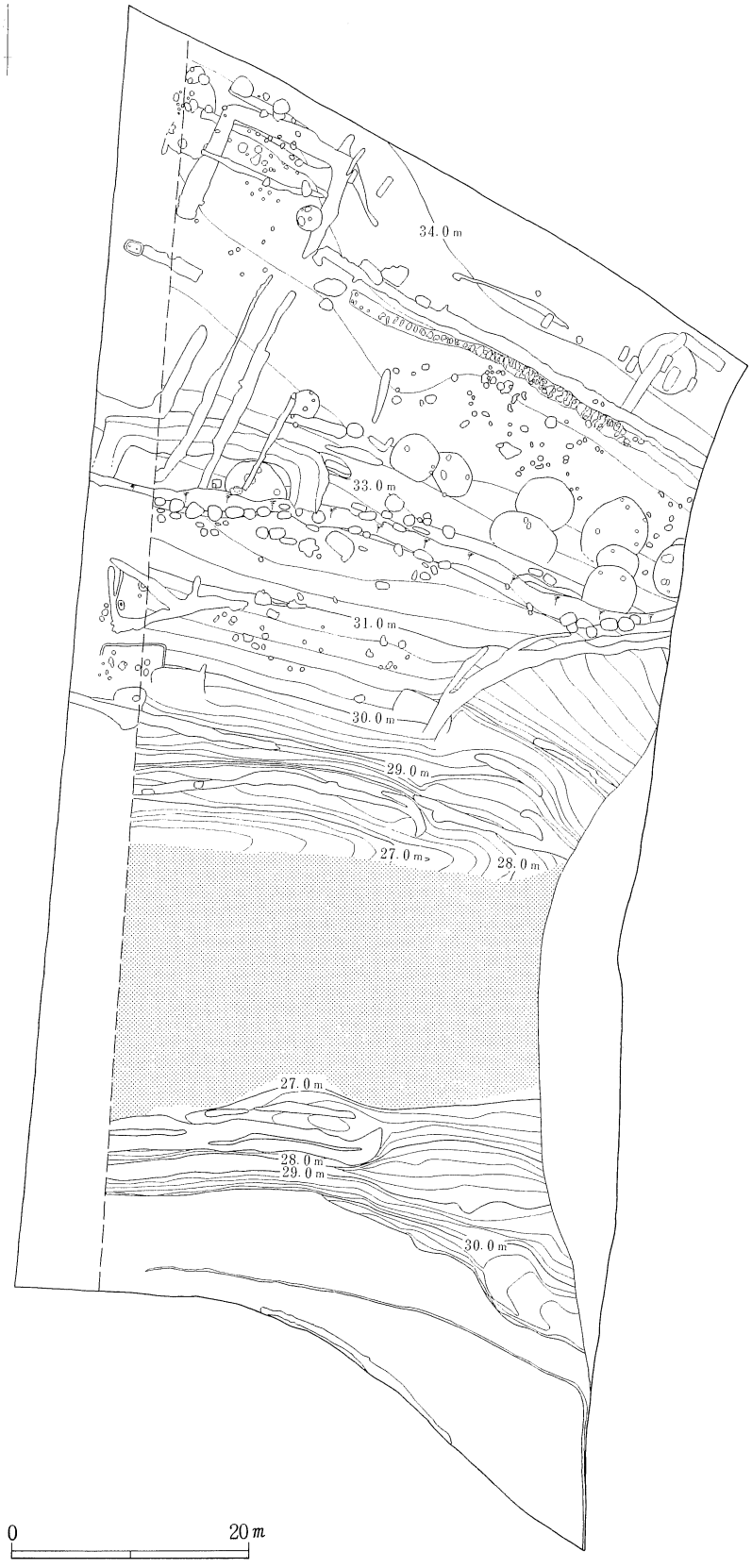
上層遺構が掘り上がった時点で，航空写真撮影を行った。垂直方向および斜方向から，４×５のモノクロおよびリバーサル，35㎜のリバーサルを使用した。

航空写真撮影後，実測等未了部分に関してはその作業を継続し，すでに調査終了部分に関しては，先土器調査の確認グリッドを設定し，順次ロームの掘り下げを始めた。２箇所で，黒曜石のチップが出土したため，それぞれグリッドを拡張したが，それ以上の遺物の出土はなく，先土器の調査を終了し，ただちにグリットの埋め戻しをし，今回の調査を終了した。

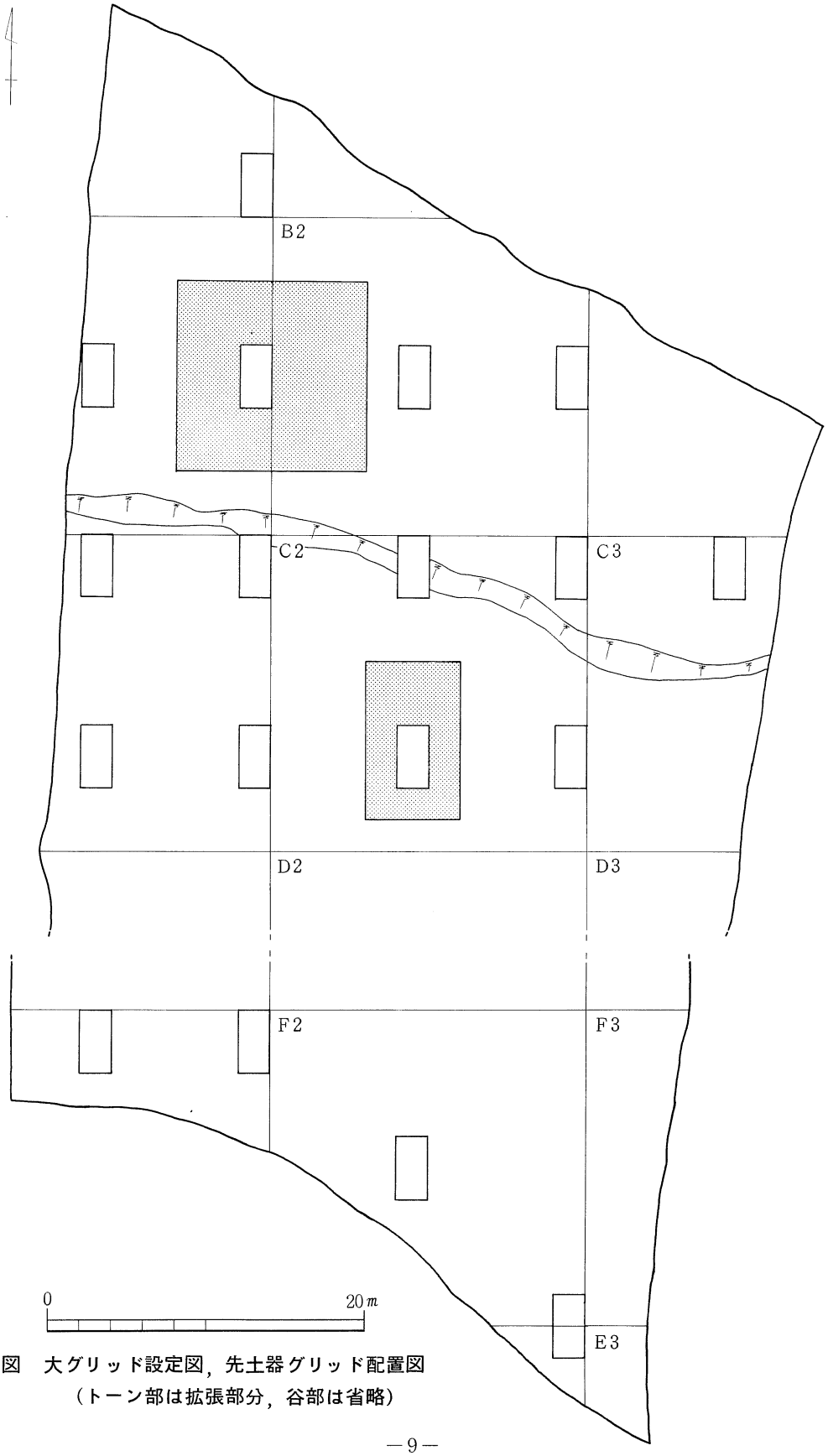
4. 整理の方法

整理は通常の方法によった。なお，下記の方々には実測等でお世話になった。記して謝意を表する次第である。

宇田川恵，石坂俊郎（早稲田大学大学院生），安藤敏孝（国学院大学生），矢野淳一（国士館大学生），渡辺嘉幸・吉田　誠（明治大学生）



第3図　遺構配置図（トーン部分は未調査）



第４図　大グリッド設定図，先土器グリッド配置図
（トーン部は拡張部分，谷部は省略）

III. 各時代の遺構・遺物

縄文時代（第５図）

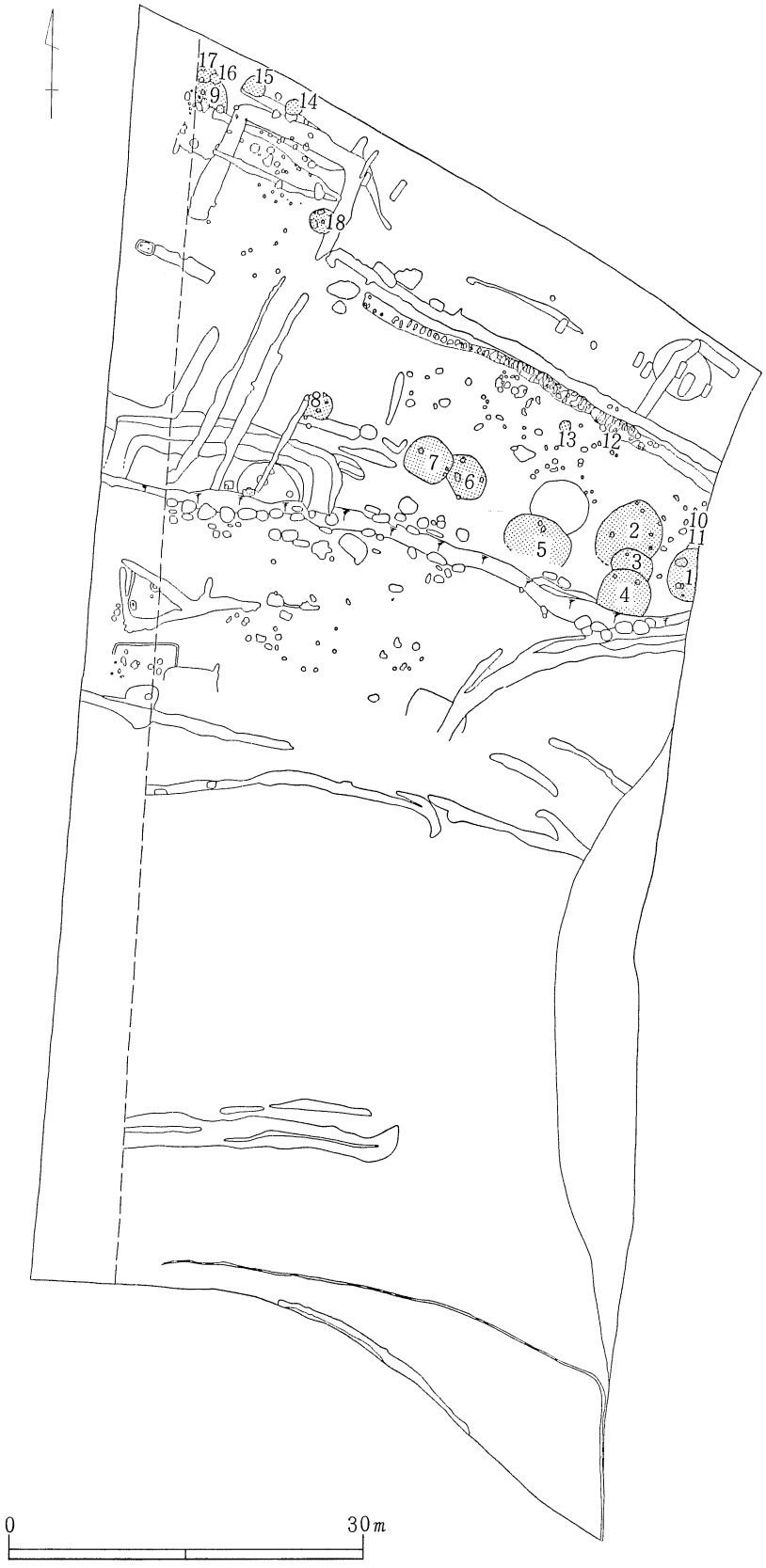
今回調査した縄文時代の主な遺構は住居址・貯蔵穴・小竪穴・小ピット群である。住居址は平面形を完全に把握できるものは必ずしも多くなかったが，ほとんどが楕円形を呈し，壁柱穴をもち，わずかに周溝をめぐらす例も見られた。炉については，地床炉以外に，埋甕炉も見られた。なお，炉に関しては，住居址に伴わずに一見単独して存在するかのように思われる例が見られたが，屋外炉ではなく，後世の開墾・削平等により床面以上が消失した結果によると思われる。貯蔵穴として扱ったものは，相対的に径が大きく，深い掘り込みをもち，底面が比較的平坦なものであるが，実際に何らかの貯蔵があったことをうかがわせるような遺物の出土は見られなかった。うち一例については覆土中層からイボキサゴのブロックおよび深鉢の大型破片が出土したが，これは本来の機能停止後の投棄によるものと思われる。ただし，イボキサゴの出土は，水域環境の反映とも考えられ，その意味では貴重な資料である。小竪穴としたものはほぼ円形の掘り込み内に小ピットを伴うもので，今回は一例のみの検出であったが，人骨が出土しており，この種の遺構の性格を示唆していると思われる。また，これらの遺構とは別に小ピットが多数検出されたが，それらから，遺構を復原することは困難であった。

遺物は阿玉台式～加曽利Ｅ式が主体を占めるが，典型的なものだけでなく，諸要素の複合した形態を有するものも見られる。遺構外からの出土ではあるが，顔面把手があり，土器本体の形態は不明であるが，中部山岳地方との直接的文化交流をうかがわせている。いずれにせよ，縄文中期の所産と見てよく，本遺跡が縄文時代中期を中心に展開したと考えられる。また，多くの土器片錘が覆土中や，遺構外から出土している。

要するに，縄文時代中期におけるこの地の様相として考えられることは，居住地でもあり，何らかの生産活動の場でもあったということである。しかし，後期以降になると，縄文時代の様相は何もうかがえず，この地に新たに人間の営みが現れてくるのは弥生時代後期以降となる。

住居址

今回調査した縄文時代の住居址は９軒である。形態・規模共に大きな相違は見出せないが，炉の形態等細部には若干の相違が見られる。炉は地床炉・埋甕炉が見られたが，埋甕炉をもつ５号址・８号址について比較すると，基本的には胴部下半を欠く深鉢を使用している。しかし炉全体の形態としては，５号址では，土器前面に浅い掘り込みを伴っているが，８号址にはそれは見られない，土器の埋置のみでも炉としての機能は果し得ると思われるが，その掘り込みを伴うことが，いかなる機能の附随を意味するかは不明である。



第５図　縄文時代遺構配置図

平面形はほとんど楕円形を呈し，断続的に周溝が見られる例がある（1，2，3）。柱穴はいずれも壁際にあるが，切り合い・攪乱等により整然とした状態で検出し得た遺構は少なく，やや不整な感じを与えるものが多くなっているが，これは調査員の現場での検討がやや不充分であったことにもより，その責任は痛感している。

住居址に伴う遺物は，前述の炉に使用された土器以外には，明らかに伴うと思われる遺物の出土は少ない。住居内のピットから出土した例もあるが（1号），他はほとんど覆土中からの出土である。台地上が畑であったこともあり，かなりの攪乱を受けていたことを考えるべきであり，土の移動も考えなければならないであろう。したがって，覆土中出土の遺物と，遺構外出土の遺物との資料的価値はほぼ同等ではないかと考えられる。しかし，住居に伴う遺物と，それ以外の遺物の対比を明らかにするためもあり，遺構ごとに図示しうる限り報告することにした。その内容については個別の報告を見れば明らかであるが，住居址に明らかに伴うものは土器に関して言えば加曽利E式であるが，覆土中からは，阿玉台式と加曽利E式の混在しているのが見てとれる。

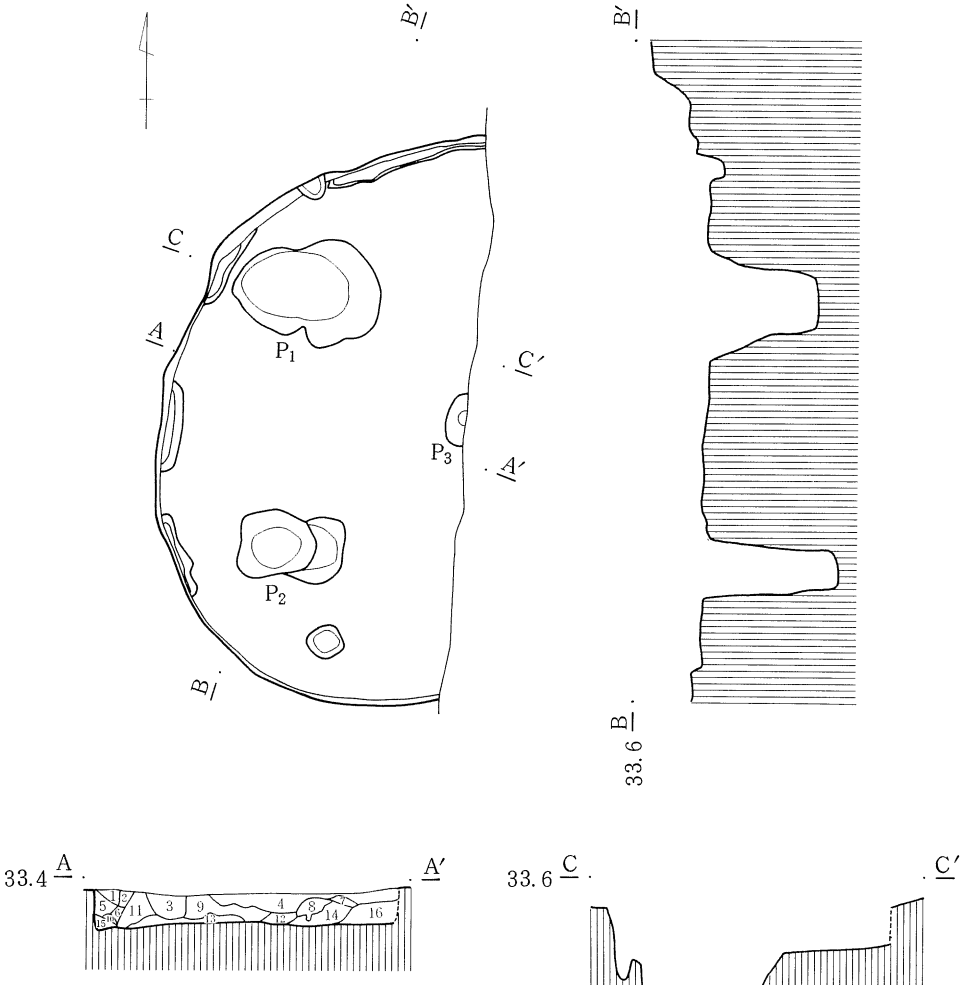
つまり，今回の調査範囲のみに限って言えば，阿玉台式期にはこの範囲に居住地は及んでおらず，加曽利E式期に至って居住が開始されたと言えよう。そして同じ加曽利E式期のうちに居住地としてのこの地の利用を終えている。この中期を以って，一旦は居住の地としての利用を放棄するということは，今回の調査範囲内に限ったことではなく，広く草刈台地一帯に見てとれる様相であることを付け加えておく。

1号住居址（第6図，図版2－1）

東半は調査範囲外（畑）であったため西半のみしか調査できなかった。調査部分で南北 4.4m東西 2.4mである。壁際には幅12～14cmの周溝が断続的に巡り，炉址は確認できなかった。柱穴と思われるピットは2つ検出でき（P_1，P_2），P_1は下場で長軸84cm，短軸45cmの東西に長い楕円形を呈し，P_2は長軸40cm，短軸32cmの楕円形を呈する。P_1と比べ小さいピットである。また，調査範囲の境界線上にもピット（P_3）が検出され，中から土器が出土したが，ピット全体の形状は不明である。

出土遺物（第7図，図版23－1，25－1～2）

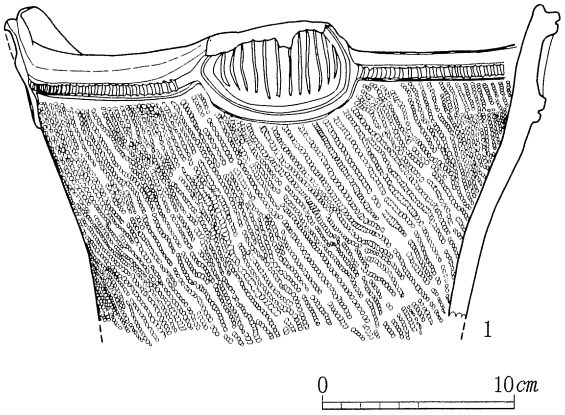
遺物は，P_3から出土した深鉢の他に，覆土から出土の土器片が若干ある。1は，P_3から破片がまとまって出土したもので，底部及び胴部下半を欠く。胴部から口縁部にかけて，やや外反しながら開く。口縁部は，4つのワラジ状文様部分の上半部が突出した形で付され，この文様部は2本の突帯で区画され，その中はたて方向の沈線が入れられている。この文様部と文様部



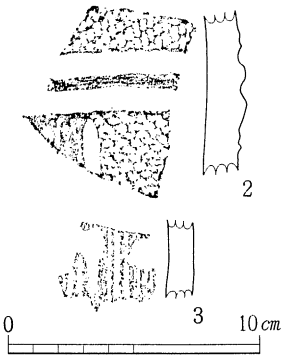
1号址土層説明

1. 暗褐色土（全体に挾雑物は少ない）
2. 暗褐色土（わずかにローム粒子含む）
3. 暗褐色土（全体に黒味が強く，しまりが悪い。撹乱か）
4. 暗褐色土（ローム粒，焼土粒をわずかに含む）
5. 暗褐色土（わずかに径1～2cmのロームブロックを含む）
6. 暗褐色土（やや黒味が強く，ロームをわずかながら一様に含む）
7. 暗褐色土（色調は4とほぼ同一。ローム粒をやや多く含む）
8. 暗褐色土（4よりやや黒味が強く，ローム粒をわずかながら一様に含む）
9. 暗褐色土（径2～3cmのロームブロックをわずかに含む）
10. 暗褐色土（色調は6とほぼ同一，挾雑物が少ない）
11. 暗褐色土（径5mm前後のローム粒を一様に含み，わずかに炭化粒を含む）
12. 暗褐色土（径1cm前後のロームブロックを一様に含む）
13. 暗褐色土（径1～2cmのロームブロックを一様に含む）
14. 暗褐色土（径1～2cmのロームブロックを含み，全体にしまりがある）
15. 暗褐色土（全体に黄色味を帯び，挾雑物は概して少ない）
16. 暗褐色土（ローム粒，焼土粒をわずかに含む）

第6図　1号住居址平面図・土層断面図



第７図　１号住居址出土遺物実測図（1/4）



第８図　１号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）

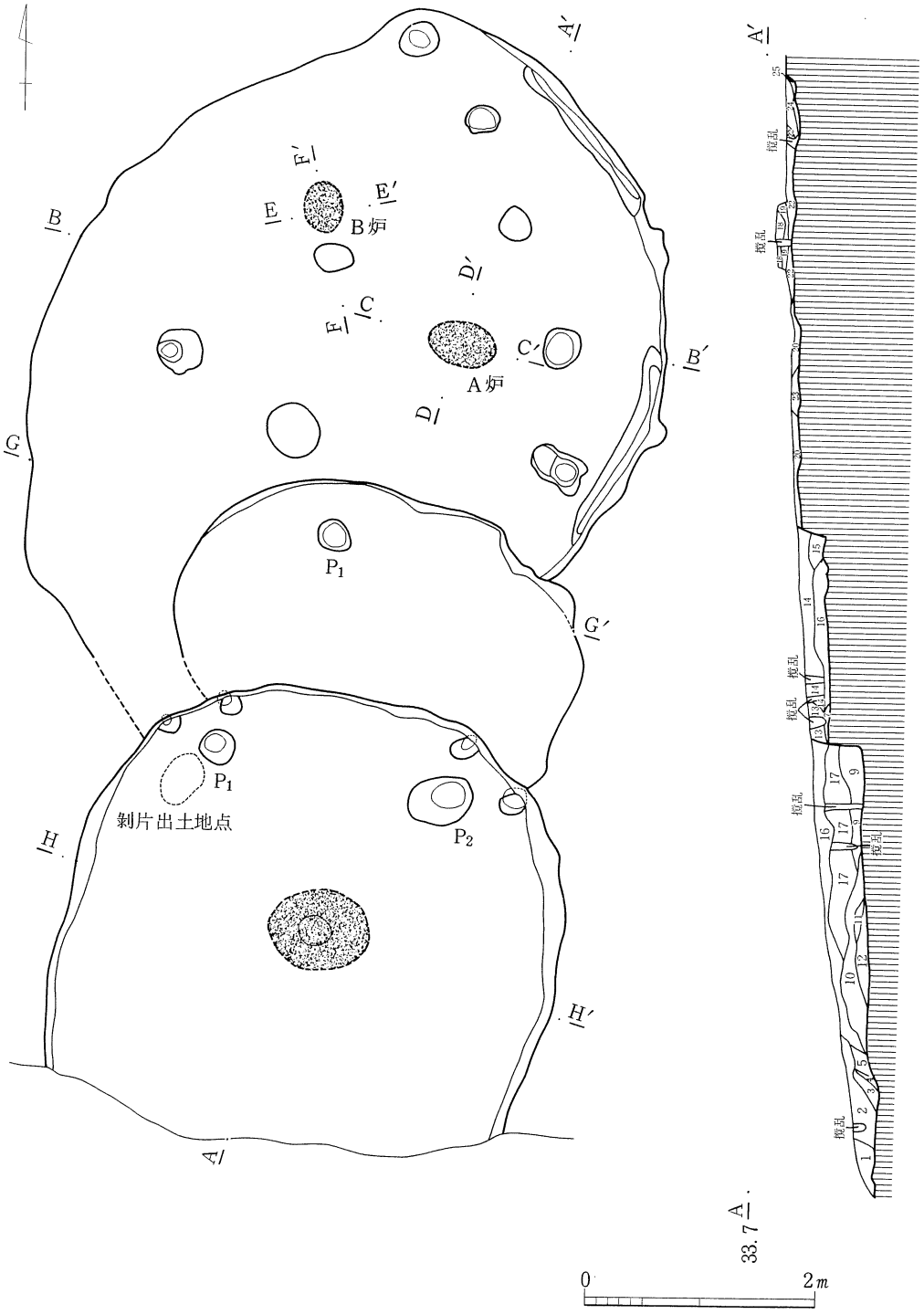
の間は一本の突帯で結ばれ，突帯には刻みが入れられている。この突帯以下は，縄文が施され，縄文部には隆線等による装飾は見られない。口縁下の隆帯とその上に刻みをもつ点では加曽利ＥＩ式に比定し得えよう。しかし，ワラジ状文の突出する点でやや趣を異にしている。２・３はいずれも覆土中からの出土である。深鉢の胴部の破片であるが，２は，平行する２条の横位の沈線から垂下する沈線がひかれている。その脇は無文である。加曽利ＥII式あるいはIII式と思われる。３は，撚糸文を地文とするものである。

２号住居址（第８・９図，図版２－２）

西半は掘り込みが浅く，壁の立ち上がりは確認できなかった。硬化した床面の広がりから平面形をつかもうと努めたが，壁際に近づくに従って硬化が弱く，範囲の確定には至らなかった。したがって平面図には，覆土の広がりを示すにとどめてある（破線の部分）。また南端部分は３号址によって切られている。復原的になるが，平面形は長軸約 6.6m，短軸約５mの楕円形で周溝が断続的に巡る。焼土のブロックは４箇所認められ，うち２箇所が，やや浅い掘り込みに堆積しており，炉址と考えられる（炉Ａ・Ｂ）。炉Ａは長軸60m，短軸40cmの楕円形で約６cmの掘り込みが認められ，炉Ｂは長軸40cm，短軸30cmの楕円形で約５cmの掘り込みが認められた。ピットは５箇所検出されたが，やや不揃いな並びである。また３号址のP_1も深さ，大きさ等形状が類似し，この住居址に帰属する可能性もある。なお，一箇所，ハマグリのブロックが検出された。

出土遺物（第11図，図版25－３～14）

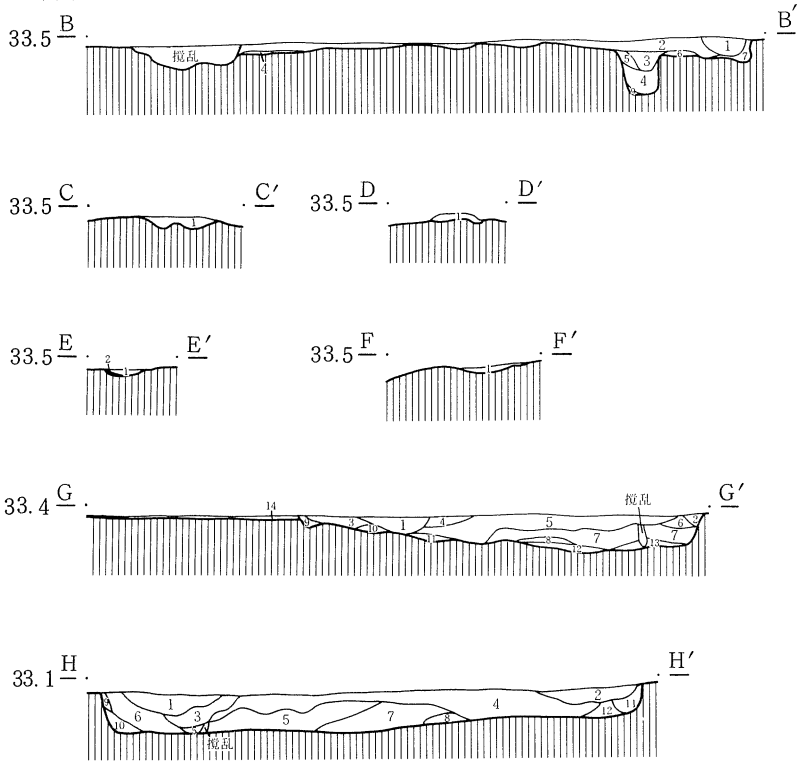
この遺構からは，図示したような土器片が出土している。１・２については，１は連続刺突文および，波状文が見られ，２は，縦位の隆帯と波状文が認められ，共に阿玉台式に属するも



第９図　２・３・４号住居址平面図・土層断面図

A～A′（2～4号址覆土）

1. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，わずかにローム粒を含む）
2. 暗褐色土（やや黄色味が強く，ロームブロックを含む。全体に汚れた感じ）
3. 暗褐色土（2より黒味が強く，ローム粒を一様に含む）
4. 暗褐色土（ロームをマダラ状に含み，汚れた感じ）
5. 暗黄褐色土（ローム主体で暗褐色土をマダラ状に含む。撹乱か）
6. 暗褐色土（やや褐色味が強く，ローム粒を一様に含む）
7. 暗褐色土（色調は6とほぼ同一。ローム粒・径1㎝前後のロームブロックを一様に含む）
8. 暗褐色土（7よりやや黒味が強く，径1㎝前後のロームブロック，ローム粒を含む）
9. 暗褐色土（7よりやや黄色味が強く，径1～2㎝のロームブロックを一様に含む）
10. 暗褐色土（7よりやや褐色味が強く，径1㎝前後のロームブロックを含む）
11. 暗褐色土（黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
12. 暗褐色土（11より黒味が弱く，ローム粒をわずかながら一様に含む）
13. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，ローム粒を一様に含む。比較的しまりがある）
14. 暗褐色土（径2～3㎜のローム粒をわずかながら一様に含む）
15. 暗褐色土（14よりも黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
16. 暗褐色土（15よりもやや黒味が強く，径2～3㎜のローム粒をわずかに含む）
17. 暗褐色土（径1㎝前後のロームブロックを含む）
18. 暗褐色土（黒味が強くローム粒等の混入少ない。イボキサゴが見られる。しまりは悪い）
19. 暗褐色土（ローム粒をわずかに含む）
20. 暗褐色土（径5㎜前後のロームブロックを一様に含み，全体に黄色味が強い）
21. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，わずかにローム粒を含む）
22. 暗褐色土（黒味を帯び，一様にローム粒を含む）
23. 暗褐色土（色調は21とほぼ同一。わずかに焼土粒を含む）
24. 暗褐色土（ローム粒を含み，全体にやや黄色味を帯びる）
25. 暗黄褐色土（ロームと暗褐色土の混合土。やや粘性）



第10図　2・3・4号住居址土層断面図

0　2m

2～4号住居址土層説明

B～B′（2号址覆土）

1. 暗褐色土（ローム粒をわずかに含む。しまりは良い）
2. 暗褐色土（1よりわずかに褐色味が強く，ローム粒をわずかながら一様に含む）
3. 暗褐色土（やや黒味を帯び径2～3cmのロームブロックを含む）
4. 暗褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層，暗褐色土主体）
5. 暗褐色土（3よりやや黒味を帯び，径2～3cmのロームブロックを含む）
6. 暗褐色土（2より黄色味が強く，ローム粒を一様に含む）
7. 暗褐色土（黄色味を帯びローム粒を多く含む。しまりはやや悪い）
8. 暗褐色土（3，5より黄色味を帯び，径2～3cmのロームブロックを含む）
9. 暗黄褐色土（ロームブロック主体で，暗褐色土を含む）

C～C′（2号址A炉覆土）

1. 暗褐色土（焼土粒，径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）

D～D′

1. 暗褐色土（焼土粒，径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）

E～E′（2号址B炉覆土）

1. 暗褐色土（焼土粒をわずかながら一様に含む）
2. 暗褐色土（①に比べやや赤味を帯び，焼土粒を含む）

F～F′

① 暗褐色土（全体にやや赤味を帯び，焼土粒をわずかに含む）

G～G′（3号址覆土）

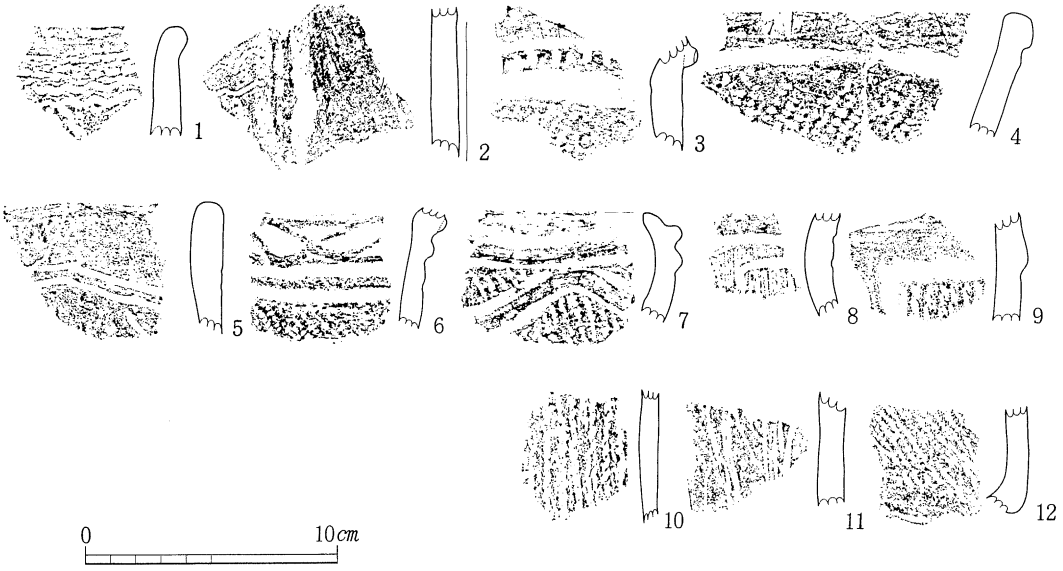
1. 暗褐色土（やや黒味が強く，ローム粒・焼土粒をわずかに含む）
2. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，わずかにローム粒を含む）
3. 暗褐色土（色調は1とほぼ同一。径1～2cmのロームブロックをわずかに含み，ローム粒を含む）
4. 暗褐色土（挾雑物はほとんど見られない）
5. 暗褐色土（わずかにローム粒を含む）
6. 暗褐色土（2よりも黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
7. 暗褐色土（6よりも黒味が強く，わずかながら一様にローム粒を含む）
8. 暗褐色土（7よりやや黒味を帯び，わずかにローム粒を含む）
9. 暗褐色土（黄色味を帯び，ローム粒を多く含み，ややしまりが悪い）
10. 暗褐色土（径2～3mmのローム粒を含む。ややしまりが悪い）
11. 暗褐色土（全体にやや黄色味を帯び，径1cm前後のロームブロックを含む）
12. 暗褐色土（5の中にロームをマダラ状に含む）
13. 暗褐色土（7よりも黄色味が強くわずかにローム粒を含む）
14. 暗褐色土（一様に径1cm前後のロームブロックを含む）＝2号址の覆土

H～H′（4号址覆土）

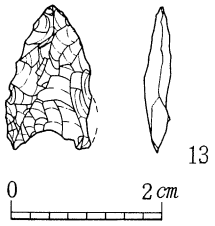
1. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，ローム粒を含み径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
2. 暗褐色土（ローム粒をわずかに含む。しまりは悪い）
3. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，ローム粒を一様に含む）
4. 暗褐色土（黒味が強くローム粒を一様に含む）
5. 暗褐色土（やや黒味を帯びローム粒を一様に含む。部分的にややしまりがある）
6. 暗褐色土（黄色味が強く，径1～2cmのロームブロックを一様に含む）
7. 暗褐色土（色調は4とほぼ同一。ローム粒を一様に含み，径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
8. 暗褐色土（4より黄色味を帯び，ローム粒を一様に含む。ややしまった感じ）
9. 暗黄褐色土（ローム主体で暗褐色土を含む）
10. 暗褐色土（6より黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
11. 暗褐色土（ロームをマダラ状に含む。全体にややしまりが悪い）
12. 暗褐色土（ローム粒を一様に含む。ややしまった感じ）

のである。3～12については，いずれも加曽利E式期の所産と思われる。3は，ほぼ直立する口縁部の横位の隆帯が巡りそこに刻みを施しており，若干古い様相が見られる。6は，やや外反気味の口縁下部に波状の隆帯を2本交互に貼りつけている点で，異った様相がうかがえる。7は典型的な加曽利E式の口縁部である。8・9は地文が沈線・撚糸文であるがほぼ同時期の所産であろう。

また，石鏃が一点出土している。



第11図　2号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）



第12図　2号住居址出土石鏃実測図

3号住居址（第9図，図版2－2）

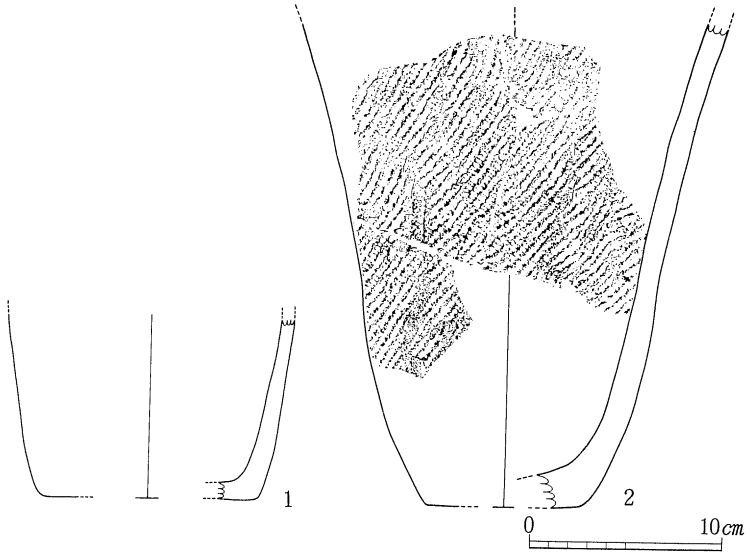
西半は2号址同様掘り込みが浅く，壁の立ち上がりは不明瞭であった。また南半は4号址に切られている。復原的に考えると，長軸 3.6m，短軸 3.0mの楕円形で，住居址としては小振りであると言える。周溝や炉は検出できず，わずかにピット（P_1）を検出したのみである。こ

のP_1については，既述のように2号址に伴うものである可能性もあり，直ちに本址に伴うとは即断し難い。

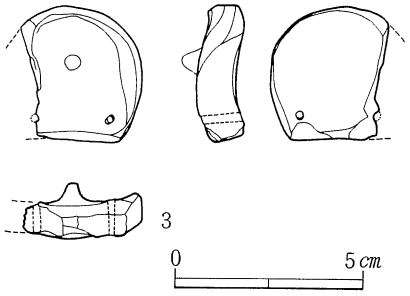
出土遺物（第13～15図，図版25－15～28）

1は本址の覆土と2号址の覆土から出土した破片が接合した深鉢である。同部の上半約⅓のみ残存しており，口縁部・底部等の形状は不明である。全面に縄文を施し，沈線等は見られない。また，3は覆土からの出土であるが，用途不明の土製品である。たて 3.5cm，横 3.6cm厚さ約7㎜の半楕円形で，ほぼ中央に5㎜の突起をもつ。また，両外縁に径3㎜の穿孔がなされており，孔の中心間の間隔は 1.9cmである。突起のある面から見ると上下方向には凸で，左右方向では凹を呈する。穿孔部には，擦痕等は見られず，紐を通したという痕跡も見出せない。

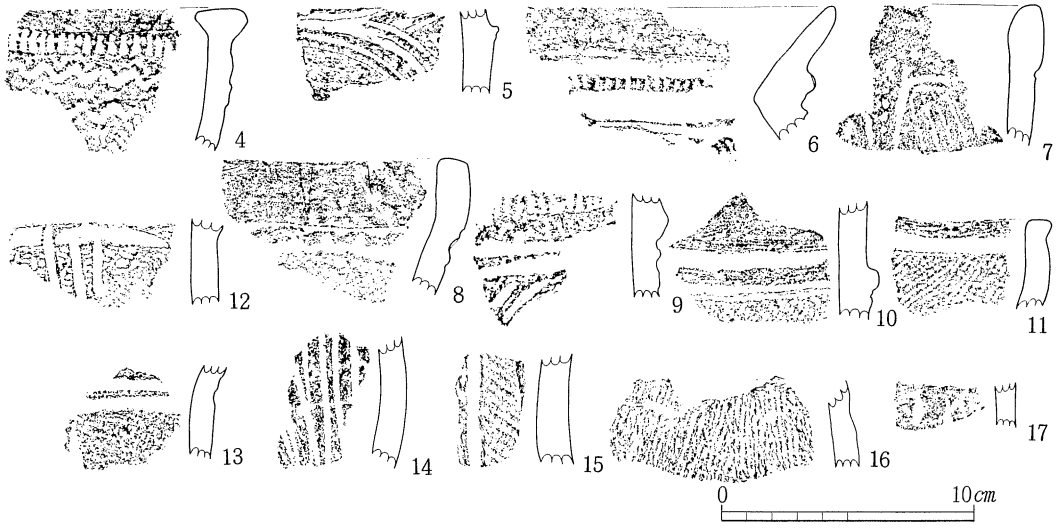
4～17は，覆土中より出土した土器片である。4は連続刺突文を有し，5は，楕円状の隆帯による区画と，平行する沈線が見られる。共に阿玉台式に属するであろう。6～16は加曽利EⅠないしⅡ式に属すると思われる。6は，浅鉢の口縁部であるが，頸部に隆帯を巡らし，その上に刻みを行っており，8はやや外反する口縁下に無文帯をもちその下に横位の沈線を2本ひき，その間を円形の刺突を上下に交互に行い，波状を呈しており，6と共に古い様相を見せている。17については小片であり，不明な点が多いが爪形の刺突が認められる。



第13図　3・4号住居址出土遺物実測図（¼）



第14図　3号住居址出土土製品実測図



第15図　3号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）

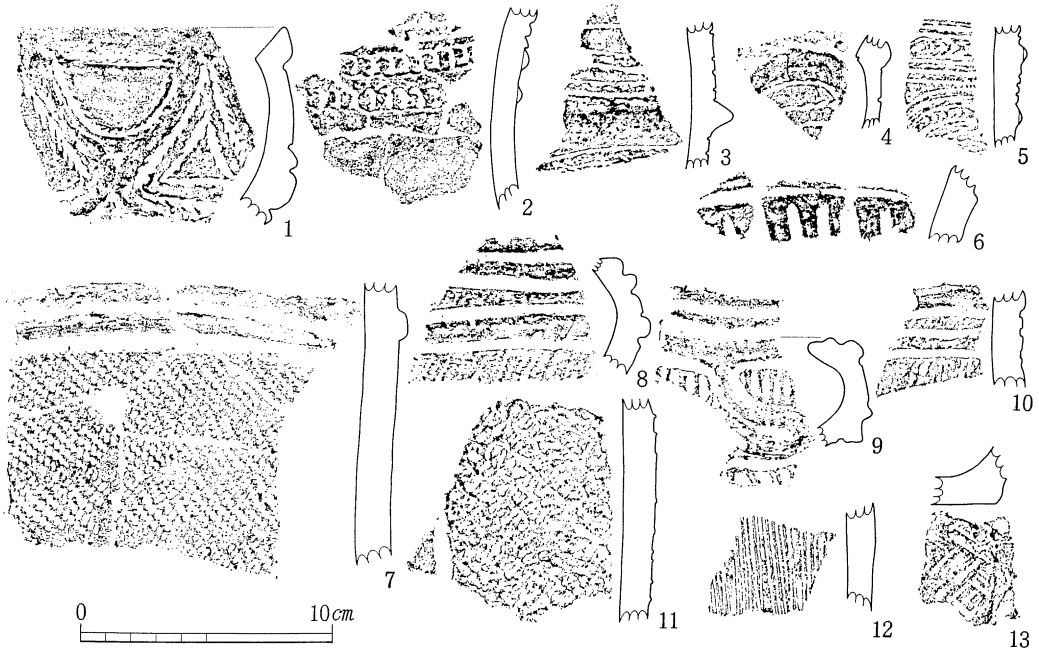
4号住居址（第8図，図版2－2）

3号址の南半を切っており，北端は後世の台地整形により消失している。長軸を北よりやや東にふれた方向にもつ楕円形である。検出部分で，長軸 3.9m，短軸 4.3mである。柱穴は2個検出されている（P_1，P_2）。なお，それぞれの柱穴に対応するような形で，壁際に2個ずつの小ピットが検出されており，それぞれ内傾している。主柱を補助するような何らかの付属施設の存在を思わせるが，推測の域を出ない。炉はほぼ中央で検出されている。南北70cm，東西90cmのやや凹んだ部分にわずかに焼土粒の堆積が見られた。ローム面の赤化はわずかであった。また，東西壁際の覆土中位から，黒曜石のチップが集中して出土している。総点数は 260点であるが，ほとんどが， 0.1g以下のもので，特に大きな別片等は見られず，石器製作の痕跡とは考えられない。

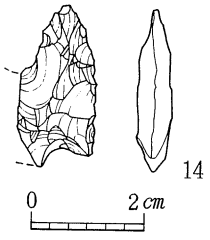
出土遺物（第16～17図，図版26－１～13）

１～13は，覆土中より出土した土器である。１～５はいずれも，連続刺突文または，断面三角形の隆帯，楕円形および三角形の文帯区間が認められ，阿玉台式に属するものと思われる。７～11は，加曽利Ｅ式に属するものと思われるが，７は，無文帯の下に横位の隆帯を一本巡らし，それ以下は，地文の縄文のみであり古い様相を示している。８は，底部の破片であるが，網代の痕跡が認められる。

14は，黒曜石の石鏃と思われる石器であるが，形態的には，完結した感がなく，未製品とも考えられるが，どのような形態を指向しているのか不明である。（図版41－61）



第16図　４号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）



第17図　４号住居址出土石器実測図

5号住居址（第8図，図版3）

ややゆるい南向き斜面の末端に位置し，南端は崩れており，壁の立ち上がりは検出し得なかった。長軸6m，短軸4m（推定）の楕円形を呈し，中央やや西寄りの部分で，埋甕炉が検出された。柱穴と思われるピットは4箇所検出された（P_1～P_4）が並び方は不整な感じがある。P_1の下場は最下部で径約40cmの不整な円形を呈し，再度の掘り直しがあったとも考えられる。P_2は，径約30cmのほぼ円形の下場をもち，P_3は，長軸40cm，短軸30cmの楕円形の下場をもつものであり，P_2の方が30cmほど深い。P_2・P_3が併存して機能していたとは考えられないが，時期差に関しては不明である。また，この2つのピットに関しては20号址に帰属する可能性も否定できない。P_4は前3者に比べ掘り込みが浅かったが，柱穴と見ておきたい。炉は，径約25cm，深さ約10cmの掘り込みの北寄りに胴部下半および口縁部を欠く深鉢が置かれており，南側は掘り込みのまま残されていた。焼土の堆積はわずかに見られたが，ローム面の赤化は見られなかった。

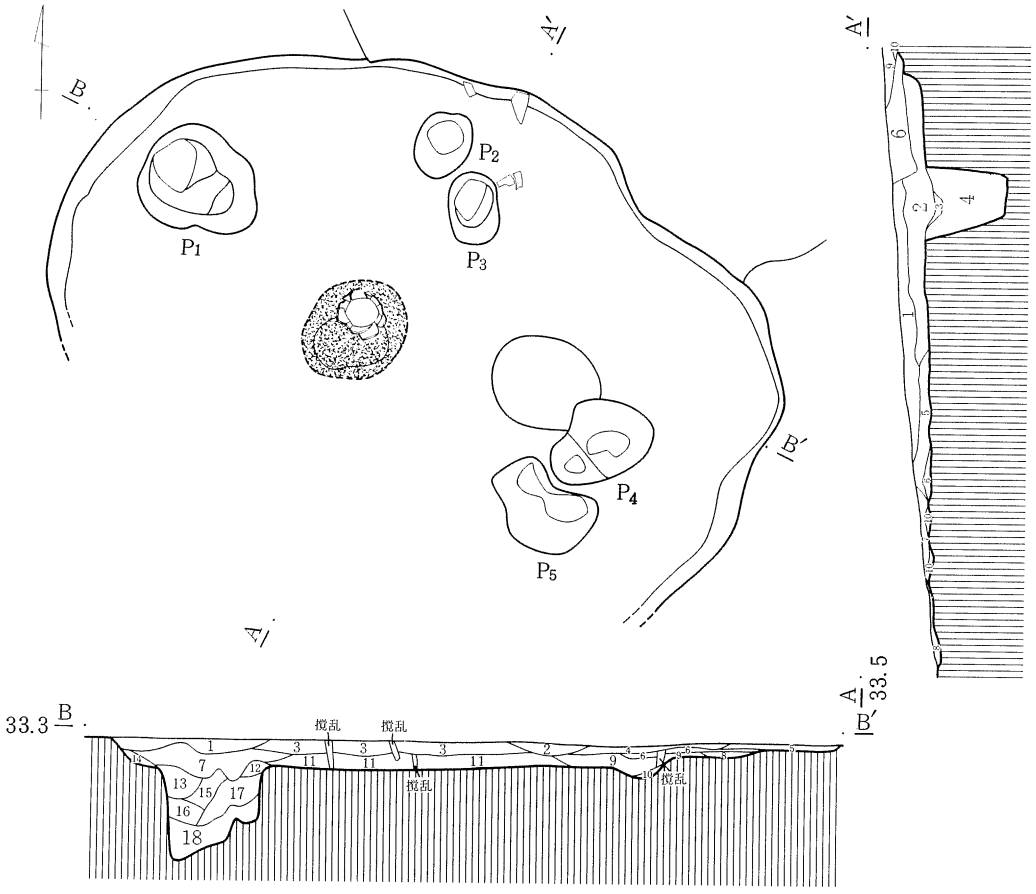
出土遺物（第19～21図，図版23－3，26－14～27，27－1～5）

1は，炉使用土器である。口縁部および胴部下半を欠く深鉢である。文様帯はほとんど残存していないが，隆帯による方形区画が見られ，その内部は縄文が施され，その区画部以下は，巾3～4cmで無文帯が存在する。さらにその下は，一本の隆帯が巡り，以下は，地文の縄文のみで，装飾等は認められない。帰属する型式は，即断し難いが，加曽利ＥＩ式に属するのではないかと思われる。

2は20号址の覆土中の破片との接合関係が認められた浅鉢である。口径，頸部径はそれぞれ推定で39cm，37cmである。内外面ともに部分的に赤味の強い部分が認められる。3は，覆土上層から出土した深鉢である。口縁部および底部は残存していない。地文に縄文を巡らし，沈線等による装飾は認められない。口縁部にかけてはやや外反する傾向が認められる。

4～6は黒曜石製の石鏃である。いずれも無茎凹基で，大きさもほぼ等しい。

4～25は，覆土中から出土の土器片である。7～10は，連続刺突文および数条の沈線が認められ，阿玉台式に属するものであろう。11～25は，加曽利Ｅ式に属すると思われるが，11～13は比較的古い様相を呈している。16は地文に縦位の沈線を施し，その上に波状の隆帯をはりつけており，中部地方の様相がうかがえる。21は，平行する二条一組の沈線間を波状の沈線が巡っており，加曽利Ｅ式に比定できるものである。



5号住居址土層説明

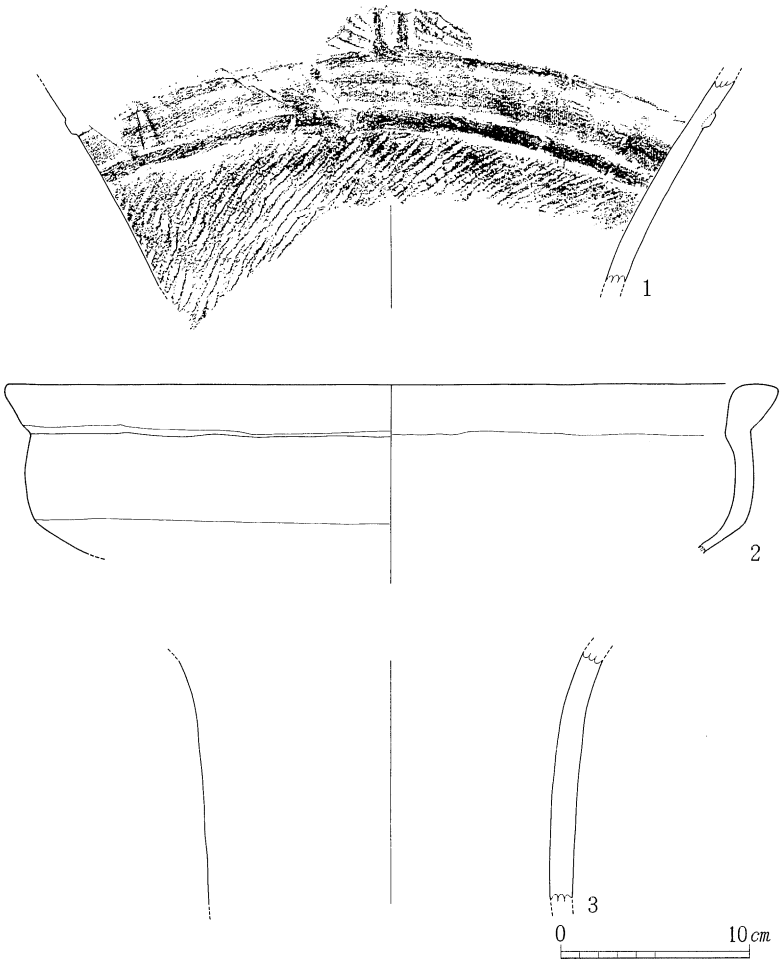
A～A′

1. 暗褐色土（褐色味が強く、ローム粒を一様に含む）
2. 暗褐色土（ローム粒を一様に含む）
3. 暗褐色土（ローム粒を多く含み、径1～2cmのロームブロックをわずかに含む）
4. 暗褐色土（褐色味が強く、わずかにローム粒を含む）
5. 暗褐色土（3より黄色味が強く、径1～2cmのロームブロックを一様に含む）
6. 暗褐色土（色調は土とほぼ同一、ローム粒を顕著に含む）
7. 暗褐色土（全体に黄色味を帯び、わずかにロームブロックを含む。壁のくずれか）

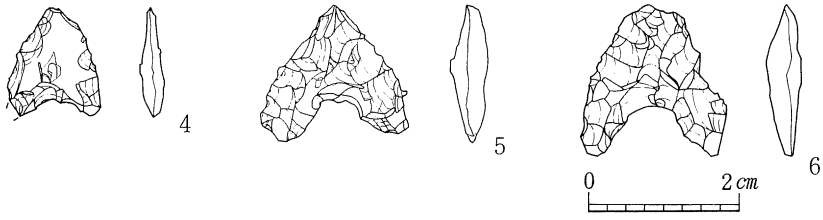
B～B′

1. 暗褐色土（ローム粒を多く含む）
2. 暗褐色土（黒味を帯びローム粒を一様に含む）
3. 暗褐色土（ローム粒をわずかながら一様に含む）
4. 暗褐色土（褐色味が強く、ローム粒を一様に含む）
5. 暗褐色土（全体に黄色味を帯び、一様にローム粒を含む）
6. 暗褐色土（ローム粒をわずかに含み、じまりがある）
7. 暗褐色土（1より黒味が強く、ローム粒を一様に含み、径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
8. 暗褐色土（ローム粒・径1cm前後のロームブロックを一様に含む）
9. 暗褐色土（やや黒味が強く、ローム粒を一様に含み、径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
10. 暗褐色土（9よりやや黄色味を帯び、径5mm前後のロームブロックをわずかながら一様に含む）
11. 暗褐色土（4よりやや黒味を帯び、ローム粒を一様に含む）
12. 暗褐色土（色調は7とほぼ同一。ローム粒を一様に含む）
13. 暗褐色土（色調は7とほぼ同一。7ほどローム粒を含まない）
14. 暗褐色土（7より黄色味が強く、ローム粒を一様に含む）
15. 暗褐色土（黄色味がきわめて強く、径2～3cmのロームブロックを一様に含む）
16. 暗褐色土（やや黒味が強く、径1cm前後のローム粒をわずかに含む）
17. 暗褐色土（全体に黄色味が強く、径2～3cmのロームブロックを含む。ローム粒は顕著ではない）
18. 暗褐色土（色調は17とほぼ同一。径4～5cmのロームブロックを含む）

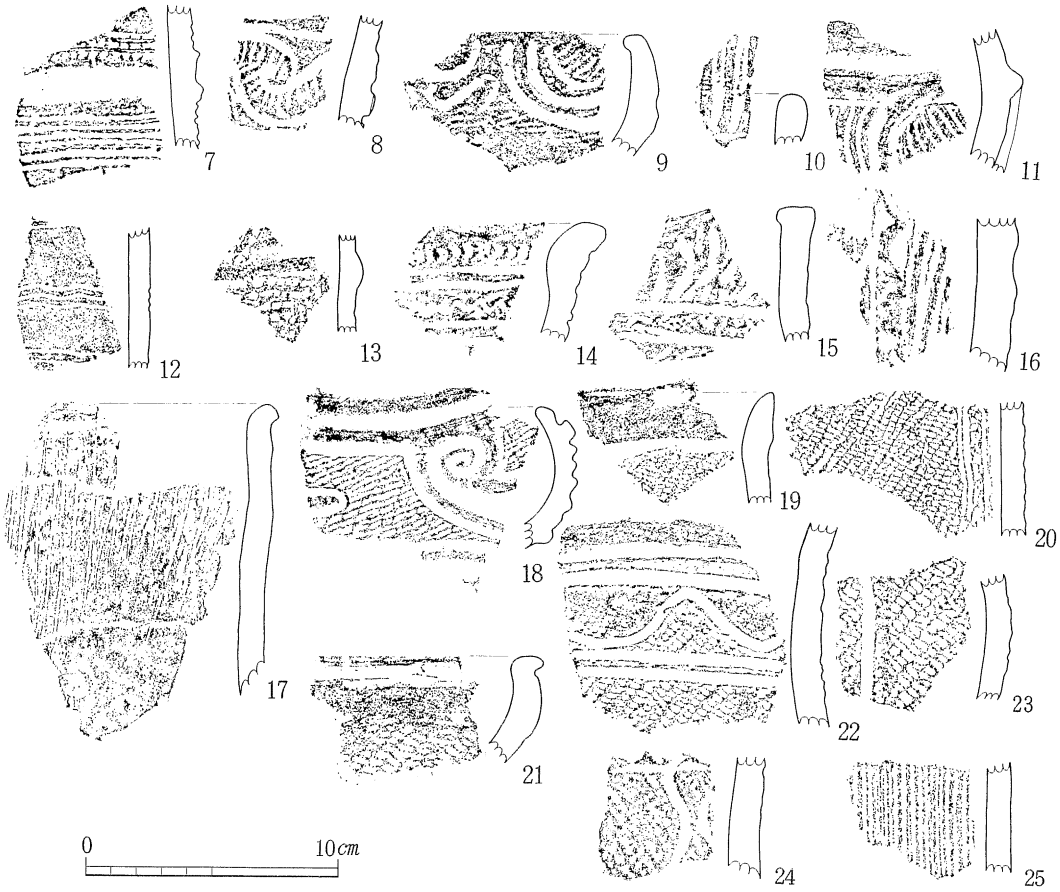
第18図　5号住居址平面図・土層断面図（1／60）



第19図　5号住居址出土遺物実測図（1/4）



第20図　5号住居址出土石鏃実測図



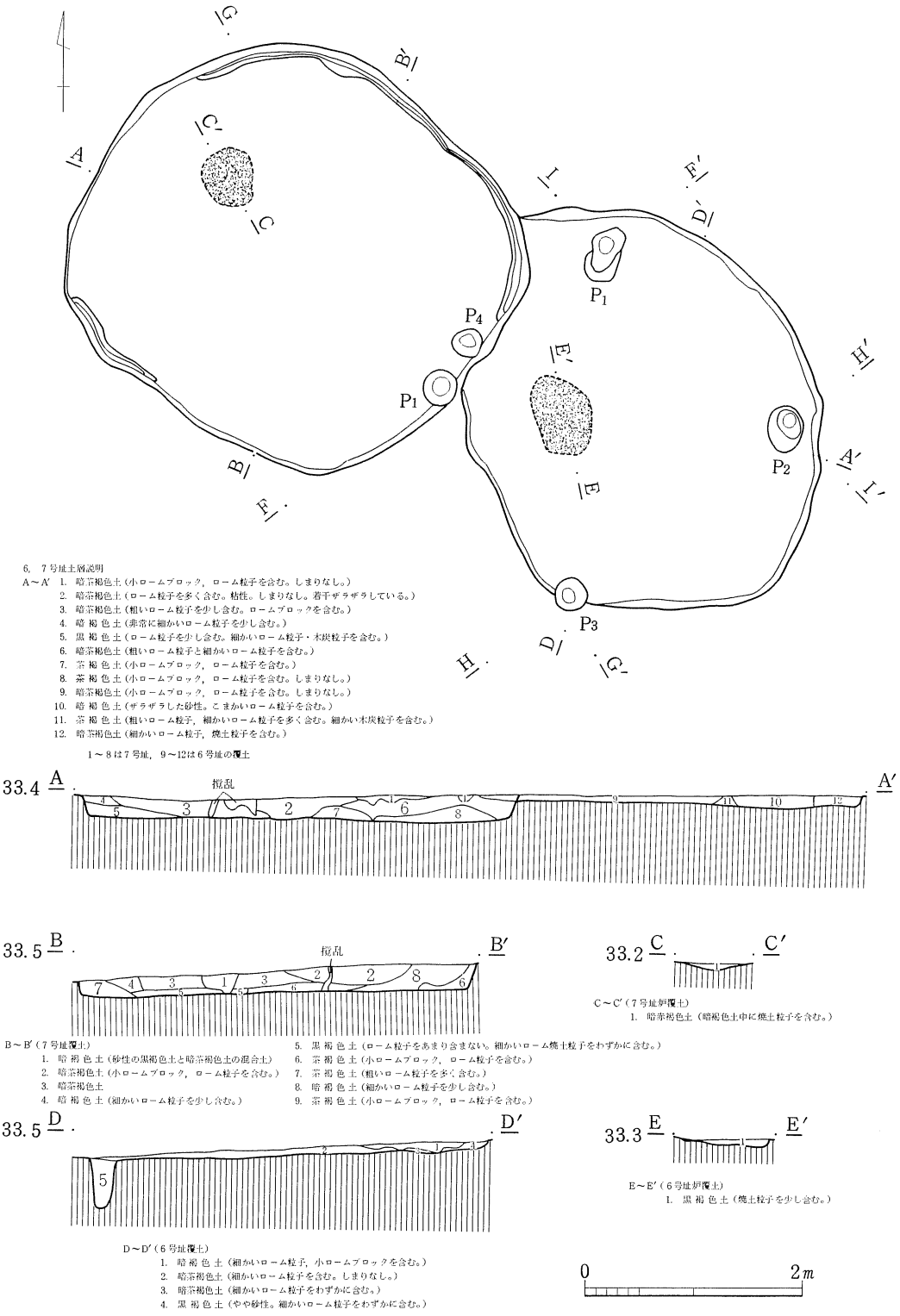
第21図　5号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）

6号住居址（第22図，図版4－1）

北西端は7号址に切られている。その部分を復原的に考えると長軸約4m，短軸点 3.2mの楕円形を呈す。柱穴は壁際に4つ検出でき，いずれも下場の径が10cm前後で，掘り込みの深さにはややばらつきが見られる。特にP_4は7号址内に入っているが，本址に伴うものと考えたい。炉はP_1～P_3の中間やや西寄りに見られた。深さ5～6cmの不整形の掘り込みに，若干焼土粒を含む黒褐色土の堆積が見られ，掘り込み面はわずかに赤化している部分が見られたのみであった。

7号住居址（第16図，図版4－1）

長軸 3.8m，短軸 3.6mのやや長方形に楕円形を呈する。部分的に浅い周溝が巡り，柱穴と思われるピットは，6号址P_1に近接して検出されたのみである。炉は中央より北西寄りに検出され，径約40cm，深さ数cmの掘り込み面が焼けて赤化しているのが見られた。



6, 7号址土層説明

A～A′ 1. 暗茶褐色土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。しまりなし。）
2. 暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む。粘性。しまりなし。若干ザラザラしている。）
3. 暗茶褐色土（粗いローム粒子を少し含む。ロームブロックを含む。）
4. 暗 褐 色 土（非常に細かいローム粒子を少し含む。）
5. 黒 褐 色 土（ローム粒子を少し含む。細かいローム粒子・木炭粒子を含む。）
6. 暗茶褐色土（粗いローム粒子と細かいローム粒子を含む。）
7. 茶 褐 色 土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。）
8. 茶 褐 色 土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。しまりなし。）
9. 暗茶褐色土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。しまりなし。）
10. 暗 褐 色 土（ザラザラした砂性。こまかいローム粒子を含む。）
11. 茶 褐 色 土（粗いローム粒子，細かいローム粒子を多く含む。細かい木炭粒子を含む。）
12. 暗茶褐色土（細かいローム粒子，焼土粒子を含む。）

1～8は7号址，9～12は6号址の覆土

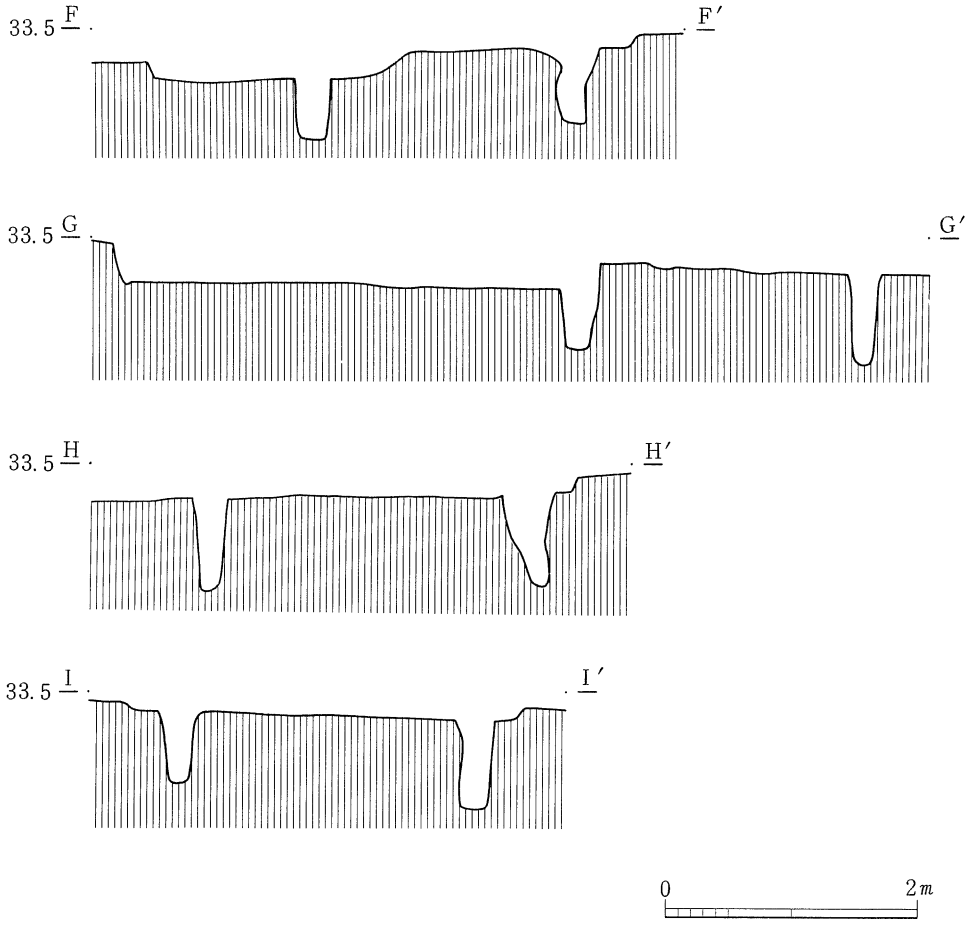
B～B′（7号址覆土）
1. 暗 褐 色 土（砂性の黒褐色土と暗茶褐色土の混合土）
2. 暗茶褐色土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。）
3. 暗茶褐色土
4. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を少し含む。）
5. 黒 褐 色 土（ローム粒子をあまり含まない。細かいローム焼土粒子をわずかに含む。）
6. 茶 褐 色 土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。）
7. 茶 褐 色 土（粗いローム粒子を多く含む。）
8. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を少し含む。）
9. 茶 褐 色 土（小ロームブロック，ローム粒子を含む。）

C～C′（7号址炉覆土）
1. 暗赤褐色土（暗褐色土中に焼土粒子を含む。）

E～E′（6号址炉覆土）
1. 黒 褐 色 土（焼土粒子を少し含む。）

D～D′（6号址覆土）
1. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子，小ロームブロックを含む。）
2. 暗茶褐色土（細かいローム粒子を含む。しまりなし。）
3. 暗茶褐色土（細かいローム粒子をわずかに含む。）
4. 黒 褐 色 土（やや砂性。細かいローム粒子をわずかに含む。）

第22図　6・7号住居址平面図・土層断面図

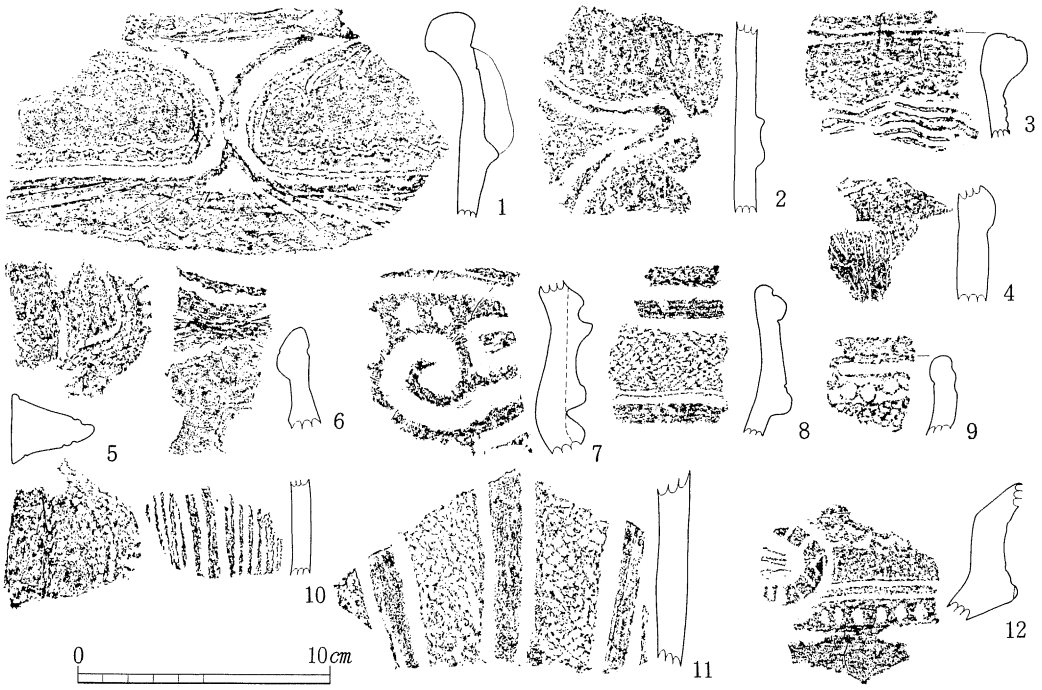


第23図　6，7号住居址エレベーション

出土遺物（第24図，図版27－6～18）

1～11は，7号址から出土した土器である。1～6は，波状文，連続刺突文が見られ，楕円形の文様区画が認められ，阿玉台式に属するであろう。7～11は加曽利E式に属するもので，9は，口縁部に連続する円形刺突文を巡らしており，7，8に比べやや新しい段階の所産と思われる。

12は，6号址出土で，浅鉢の口縁部で，円形の隆帯をはりつけ，その上に刻みを施し，屈曲部にも刻みが見られる。また，その上位には二本の横位の平行沈線が巡っている。加曽利EⅠ式であると思われる。



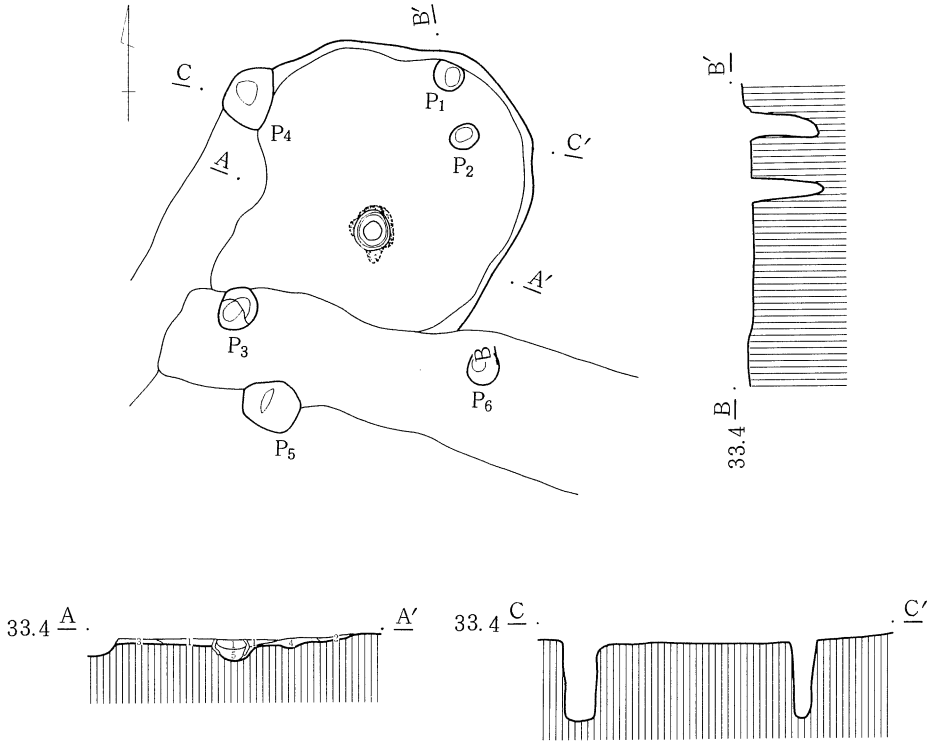
第24図　6・7号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）

8号住居址（第25図，図版5）

南端は31号址に切られ，西端は18号址に切られている。平面形は不整な円形を呈していたと考えられる。径は約 2.7mと推定される。ほぼ，中央に深鉢の口縁部を利用した炉が設けられている。柱穴と思われるピットは，床面（切り合いにより床が残存していない部分を含む）に3つ（P_1～P_3），壁際に1つ（P_4），壁から外れた部分に2つ（P_5.P_6）である。これらのピットは大きさに多少ばらつきは見られるが，深さには大きな開きは見られない。掘り込んだ部分の内外に柱穴を持つということは不自然な感があるが，仮にすべての柱穴が掘り方内にあった場合，中心に炉が存在することを考え合わせると有効な利用空間はかなり狭くなると考えられ掘り方の外に柱穴が存在すると考えることは，特に本例のような小規模な住居址の場合，蓋然性は必ずしも低くないと思われる。

出土遺物（第26図，図版23－4）

1は，炉に使用されていた深鉢である。口径は26.5cmで胴部及び把手を1つ欠いている。2つの把手を持ち把手間のほぼ中央に沈線による渦巻文を作り出している。把手と，この渦巻文の上下端は沈線で結ばれ，その部分の中央をさらに二分し，図示するごとく施文し口縁部文様帯を形成している。頸部は縄文の地文に，口縁部から垂下する3条の沈線およびその端部から延びる横位の3本の沈線により区画された部分に，横位の波状沈線を描いている。頸部文様帯と胴部文様帯の境界には2条の沈線が巡っているのが認められる。

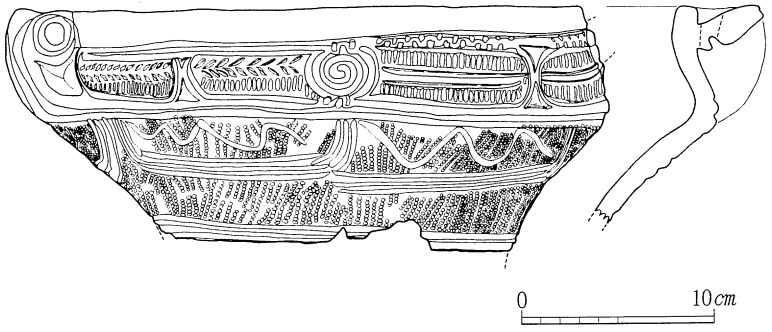


8号址土層説明

1. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子を少量含む）
2. 暗 褐 色 土
3. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を多く含む）
4. 暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む）
5. 暗 褐 色 土（ローム粒子をさほど含まない。しまりなし。軟かい土）

0　2m

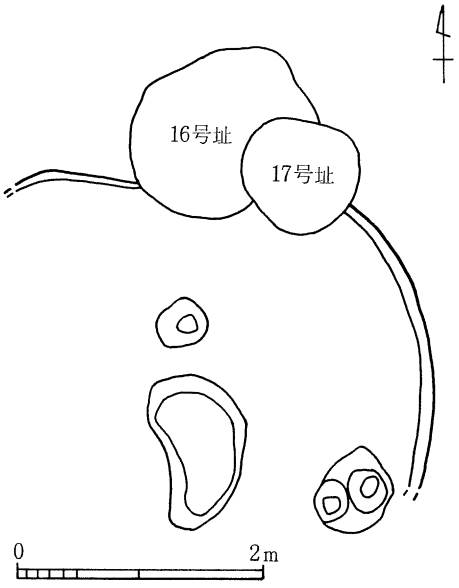
第25図　8号住居址平面図・土層断面図



第26図　8号住居址出土遺物実測図（¼）

9号住居址（第27図，図版4－2）

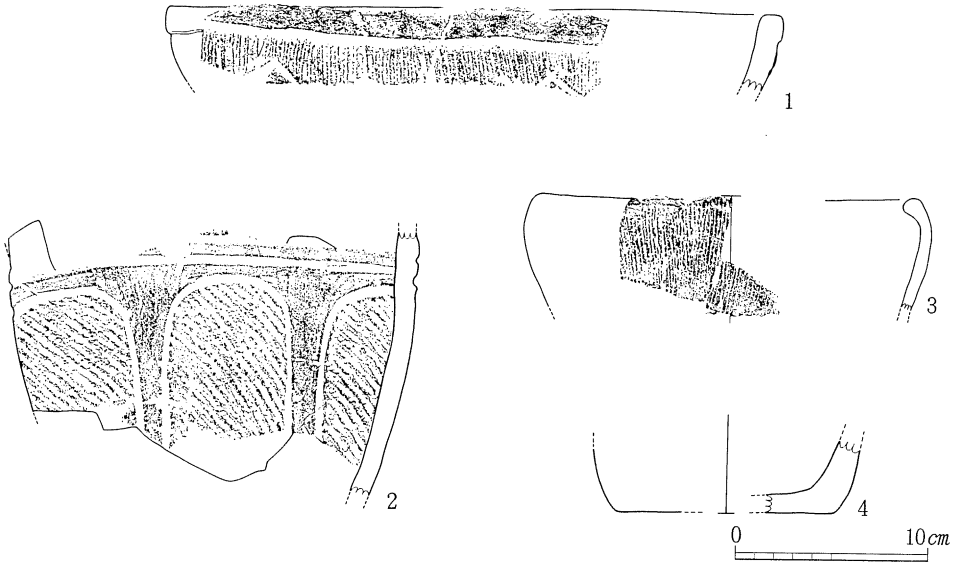
西半は既に，調査されており，南半は後世の溝に切られており，さらに北側も貯蔵穴（16・17号址）により切られているため壁の立ち上がりは東側でわずかに認められただけである。したがって全体の大きさの把握は難しいが，径5m前後の円形あるいはそれに近い楕円形を呈するものと考えられる。柱穴と思われるピット（P_1・P_2）は検出されたが，近接する位置に類似する形状のピットがあり，ただちにP_1，P_2を本址に伴うものとは断定し難い。また炉址は，住居址のほぼ中央と思える位置にあり，焼土粒とともに，十数片の土器片が見られた。これらの土器片については，炉で使用した（たとえば5，8号址），土器の破片とも考えられたが，接合関係を見ると，必ずしもそうとはいい難いものである。



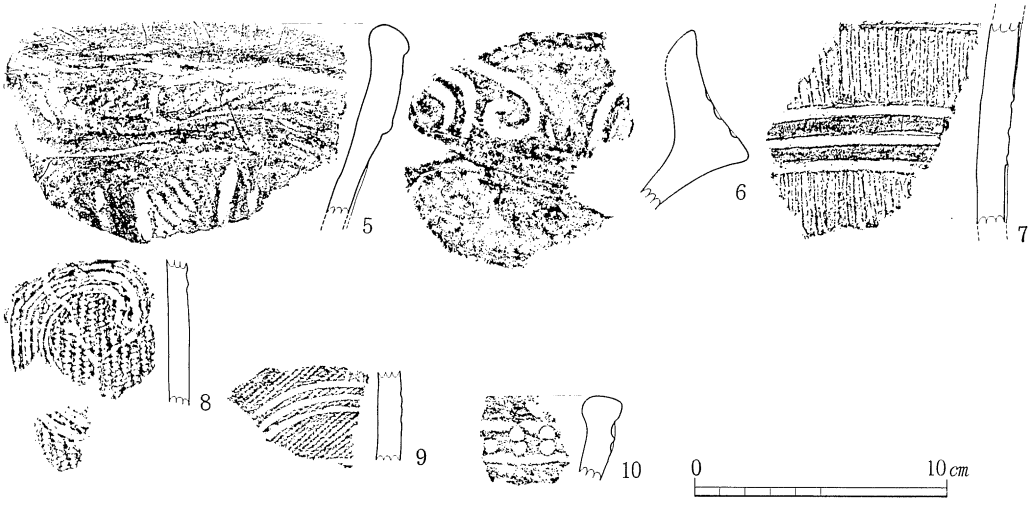
第27図　9号住居址平面図（1/60）

出土遺物（第28・29図，図版23－５，27－19～24）

１～４は，炉址内出土の土器である。１は，炉址内出土の浅鉢である。口径は推定で19.5cmで，底部の形態は不明である。口縁はやや内彎し，鉄鉢状を呈している。縦位の沈線を全面に巡らしており，他の装飾は認められない。加曽利ＥⅢ式に比定し得る。２は口縁部及び胴部下半を欠く深鉢である。横位の二条の沈線により文様帯を区画し，その下方は，アーチ状の沈線により胴部を区画しその中は縄文で埋められているが，それ以外の部分の縄文は磨り消されている。口縁部は欠いているが，わずかに，縦位の沈線が巡っているのが認められる。１同様加



第28図　９号住居址出土遺物実測図（1/4）



第29図　９号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）

曽利ＥⅢ式の所産であろう。３の浅鉢は口縁部のみの残存で，口径は推定で32cmである。口縁直下には幅 1.5cm前後の無文帯を有し，その下位は，へら状工具による縦位の沈線が巡り，その上に山形文を巡らしているのがわずかにうかがえる。加曽利ＥⅡ式あるいはＥⅢ式と思われる。５は炉址内出土，６～10は覆土中出土の土器である。いずれも加曽利ＥⅡ式あるいは，ＥⅢ式の所産と思われる。７は地文の縦位の沈線の上を，平行する横位の沈線が走っており，やや趣を異にしている。

炉址

今回の調査においては，数箇所で炉のみを検出し，住居址の平面形態や柱穴との関係を把握し得ない場合があった。ここでは，このような遺構を炉址として報告する。

10号炉址（第30図，図版６－１）

長軸約40cm，短軸約20cmのわずかにくぼんだ楕円形の部分のやや北寄りに，深鉢の胴下半部が置かれていたもので，わずかに焼土の堆積が見られ，周辺のローム部分は，赤化してもろくなっていた。

出土遺物（第31－１図，図版23－７）

炉使用土器は，口縁部の及び胴部下半を欠く。胴部はやや外反し，地に縄文を巡らし，二条あるいは三条の沈線を垂下させており，沈線間の縄文は磨り消されている。内外面ともに，斑点状の剝落が著しい。なお，炉使用時には，割れ口の状況から見て，口縁部は残っていたと思われる。

11号炉址（第30図，図版６－２）

10号址のすぐ南側にあり，様相も10号址と類似している。長軸約40cm，短軸約20cmの，わずかにくぼんだ部分に深鉢の胴下半部が置かれていた。わずかに焼土の堆積が見られ，周辺のローム部分は赤化してもろくなっていた。

出土遺物（第31－２図，図版23－６）

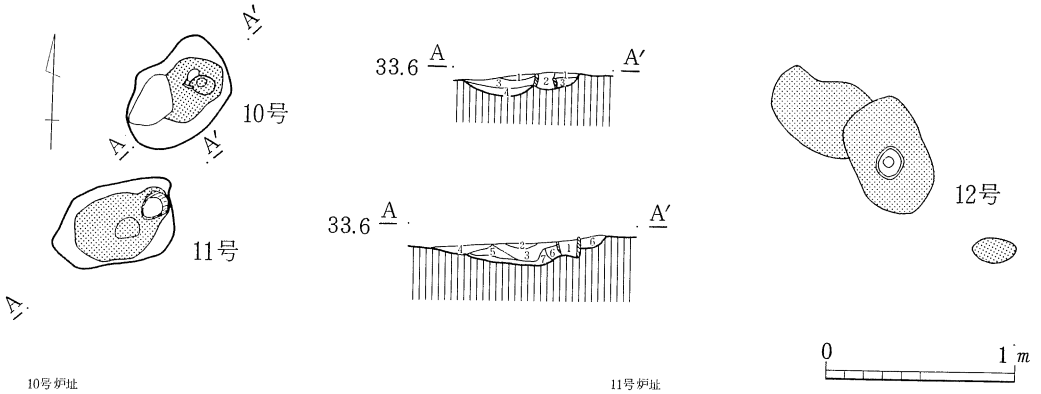
使用土器は，口縁部及び胴部下半を欠いている深鉢の胴部で，地に縄文を巡らし，それ以外の文様等は見られない。10号址使用土器同様，炉使用時には口縁部は残存していたと思われる。

12号炉址（第30図，図版６－３）

10・11号址ほどの掘り込みをもたず，わずかに周辺のロームの赤化が見られた。この遺構の周辺にはいくつかのピットが存在するが，この炉との対応関係は不明確である。土器はロームの赤化範囲のほぼ中央に埋設されていた。

出土遺物（第32図，図版23－８）

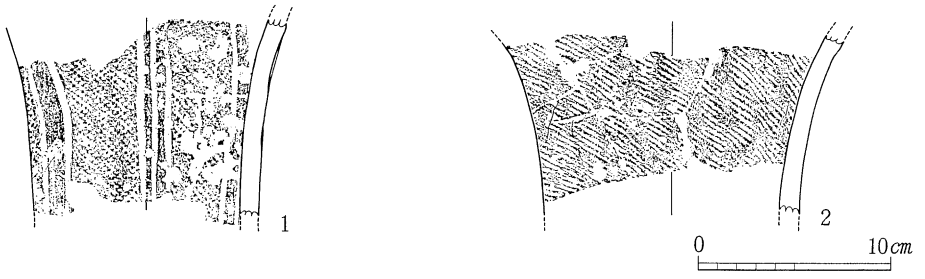
１は，炉使用土器である。胴部下半と口縁の一部を欠き，口径内推定で17.2cmである。胴部は外反しながら開き，口縁はほぼ直立する深鉢で，口縁部は，太い沈線により渦巻文，かこい文による文様帯が構成され，かこい文の中には縄文が充塡されている。頸部から胴部にかけては，地の縄文を，口縁直下から垂下する２条の太い沈線が区画している。加曽利ＥII式であろう。



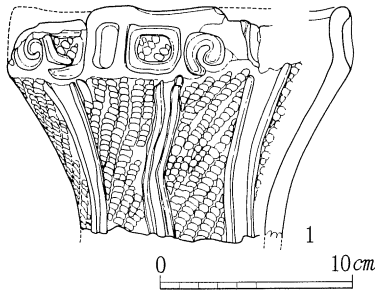
10号炉址
A～A′ 1. 暗褐色土（焼土粒子含み、全体にしまりが悪い）
2. 暗褐色土（①よりやや褐色味が強く、焼土を含み、しまりが悪い）
3. 暗褐色土（焼をうけてポロポロになったローム、わずかに焼土を含む）
4. 暗黄褐色土（ハードローム地山）

11号炉址
A～A′ 1. 暗褐色土（わずかにローム粒子含む）
2. 暗褐色土（わずかにローム粒・焼土粒子含む）
3. 暗褐色土（色調は②とほぼ同一焼土粒子を②より多く含む）
4. 暗褐色土（ローム粒子をわずかに含み、全体にやや砂っぽい）
5. 暗褐色土（焼土ブロックとの混合層、炉壁の崩落したものか）
6. 暗黄褐色土（焼けてもろくなったロームほぼ単一）
7. 暗黄褐色土（やや熱に容けて硬化したローム単一）

第30図　10・11・12号炉址平面図



第31図　10・11号炉使用土器実測図（¼）



第32図　12号炉使用土器実測図

土壙

13号土壙（第33図，図版８－１）

形90cmのほぼ円形を呈し，底面までの深さは60cmである。下場はやや狭くなっているが，円筒形の土壙と言える。底面および覆土中からはほとんど遺物は出土しなかった。

14号土壙（第33・34図，図版８－２）

長軸 1.4m，短軸 1.2mのやや歪んだ楕円形を呈し，底面までの深さは約50cmである。良好な資料の出土はなかったが，覆土中から図示したような資料が出土している。１は波状口縁の深鉢の口縁部で，櫛状工具による曲線文様が見られる。２は，深鉢の胴部で，地文の縄文に沈線を垂下させ，その間の縄文を磨り消している。３は地文に斜方向の条線文を巡らしている。１は加曽利ＥII式，２は同IIあるいはIII式と思われ，３は曽利式系統の土器であろう。

15号土壙（第33・35図，図版９）

径 1.8mのやや歪んだ円形を呈する。底面までの深さは約50cmである。覆土上層からイボキサゴのブロックと，深鉢の比較的大形の破片を出土したが，底面近くでは遺物は見られなかった。覆土中のイボキサゴ，深鉢はほぼ同一レベルで出土しており，ある程度堆積が進んだ時点で一括して投棄されたものと考えられる。いずれも，どのような形の利用を経ての投棄であるか不明である。

１は浅顔型の深鉢である。口径42cmで胴部下半以下を欠いている。四単位の肥厚した波状口縁を有し，各頂部は４個の比較的深い刻みが入れられ，頂間は隆帯上下を刺突し波状を作り出した文様が巡り，下を頂部で見られたような刻みが巡っている。口縁直下は無文帯を有し横位の３条の沈線により，胴部文様帯を区画している。胴部は斜向縄文により充塡され，垂下する３本の沈線間を１～２本の波状沈線が垂下している。加曽利ＥＩ式に属するものであろう。

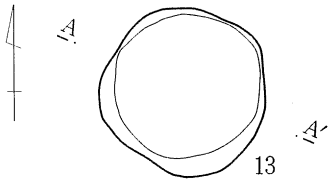
他に１とほぼ同じレベルで２～４が出土している。いずれも深鉢であり，口縁部等を欠き文様構成も不明である。地文に縄文が巡るのみで，沈線等による装飾も見られない。

16・17号土壙（第33・36図）

９号址の北側に，２つが切り合って検出された。土層観察によると１７号址が１６号址を切っている。１７号址は長軸 1.6m，短軸 1.2mの楕円形で，底面までの深さ約30cm，１６号址は，下場で径80cmのやや歪んだ円形を呈する。いずれからも良好な資料の出土はなく，わずかに，１７号址の覆土中より，図示したような破片が出土したのみであった。１は，太い隆帯による文様（渦巻文の延長部か）が見られ加曽利ＥＩあるいはII式と思われ，２は横位の隆帯とそれに平行する沈線が特徴的である。

14号土壙土層説明

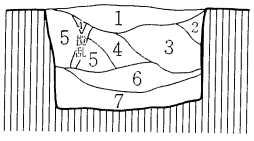
A～A′ ① 暗褐色土（ローム粒を一様に含み、径1～2cmのロームブロックをわずかに含む）
② 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層、ロームブロック主体）
③ 暗褐色土（①より黒味を帯び、径1～2cmのロームブロック、ローム粒を含む。ロームは①ほど顕著ではない）
④ 暗褐色土（色調は③とほぼ同一、径4～5cmのロームブロックを一様に含む）
⑤ 暗褐色土（全体に黄色味が強く、径2～3cmのロームブロックを一様に含む）
⑥ 暗褐色土（①より黒味を帯び、径3～4cmのロームブロックをわずかに含む。ローム粒は①ほど顕著には見られない。
⑦ 暗褐色土（⑥より黒味を帯び、径1～2cmのロームブロックをわずかながら一様に含む）
⑧ 暗褐色土（⑥より黒味を帯び、わずかに径1cm前後のロームブロックを含む）
⑨ 暗褐色土（⑦よりやや黄色味を帯び、径数cmのロームブロックを含む）
⑩ 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層、暗褐色土主体）



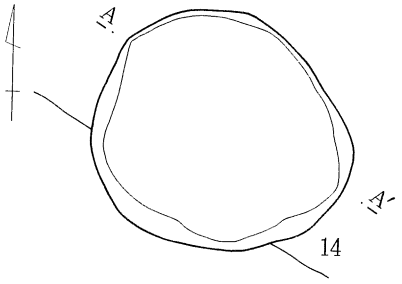
13号土壙土層説明

A～A′ ① 暗褐色土（ローム粒をわずかながら一様に含む）
② 暗褐色土（①よりやや黄色味を帯び、わずかにローム粒を含む）
③ 暗褐色土（②より褐色味が強く、径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
④ 暗褐色土（③より黄色味が強く、ロームブロックを含む）

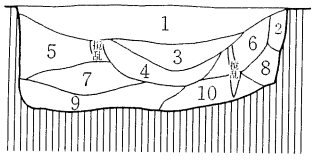
33.7 A. .A′

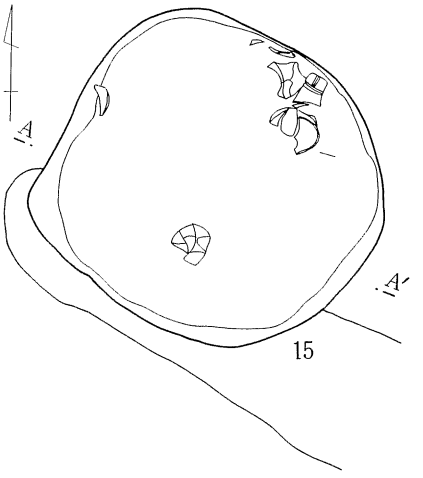


⑤ 暗褐色土（④よりやや黒味を帯び、ローム粒、径1cm前後のロームブロックをわずかに含む）
⑥ 暗褐色土（黒味を帯び、径1cm前後のロームブロックをわずかながら一様に含む）
⑦ 暗褐色土（⑥に比べ黄色味が強く、わずかにロームブロックを含む）

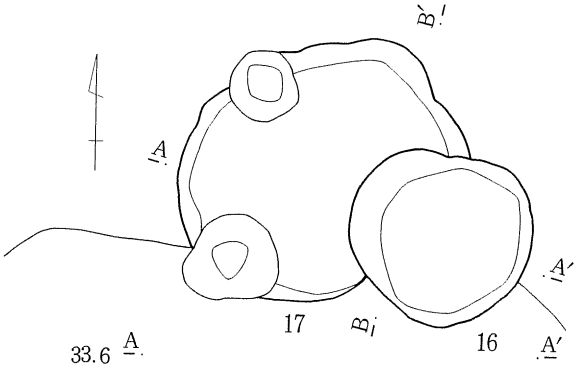


33.9 A. .A′

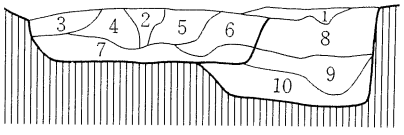




33.9 A. .A′

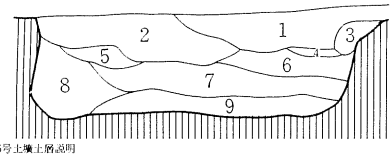


33.6 A. .A′



16～17号土壙土層説明

A～A′ ① 明茶褐色土
② 茶褐色土（ローム粒子を含む）
③ 暗茶褐色土
④ 明茶褐色土（小ロームブロック、ローム粒子を含む）
⑤ 明茶褐色土（小ロームブロック、ローム粒子を含む）
⑥ 暗茶褐色土
⑦ 茶褐色土
⑧ 暗茶褐色土
⑨ 茶褐色土
⑩ 茶褐色土



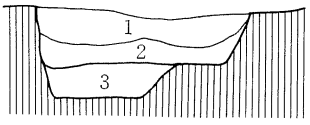
15号土壙土層説明

A～A′ ① 暗褐色土（②よりも褐色味を帯び、ローム粒をわずかながら一様に含む）
② 暗褐色土（全体に黄色味を帯び、ローム粒を一様に含む）
③ 暗黄褐色土（ほぼソフトロームに単一で、夾雑物ほとんどなし）
④ 暗褐色土（①よりやや黒味を帯び、ローム粒をわずかに含む）
⑤ 暗黄褐色土（ソフトロームと暗褐色土の混合層、ローム主体でわずかにロームブロックを含む）
⑥ 暗黄褐色土（ソフトロームと暗褐色土の混合層、ローム主体、径1～2cmのロームブロックをわずかに含む）
⑦ 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層。ロームブロック主体。⑤よりは暗褐色土を多く含む）

0 1 m

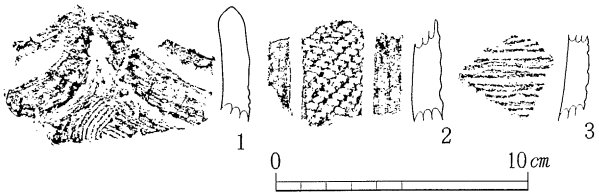
⑧ 暗褐色土（②より黒味を帯び、ローム粒を一様に含み、径2～3cmのロームブロック、焼土粒をわずかに含む）
⑨ 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層、ロームブロック主体、⑦よりも大きいブロックを多く含む）

33.6 B. .B′

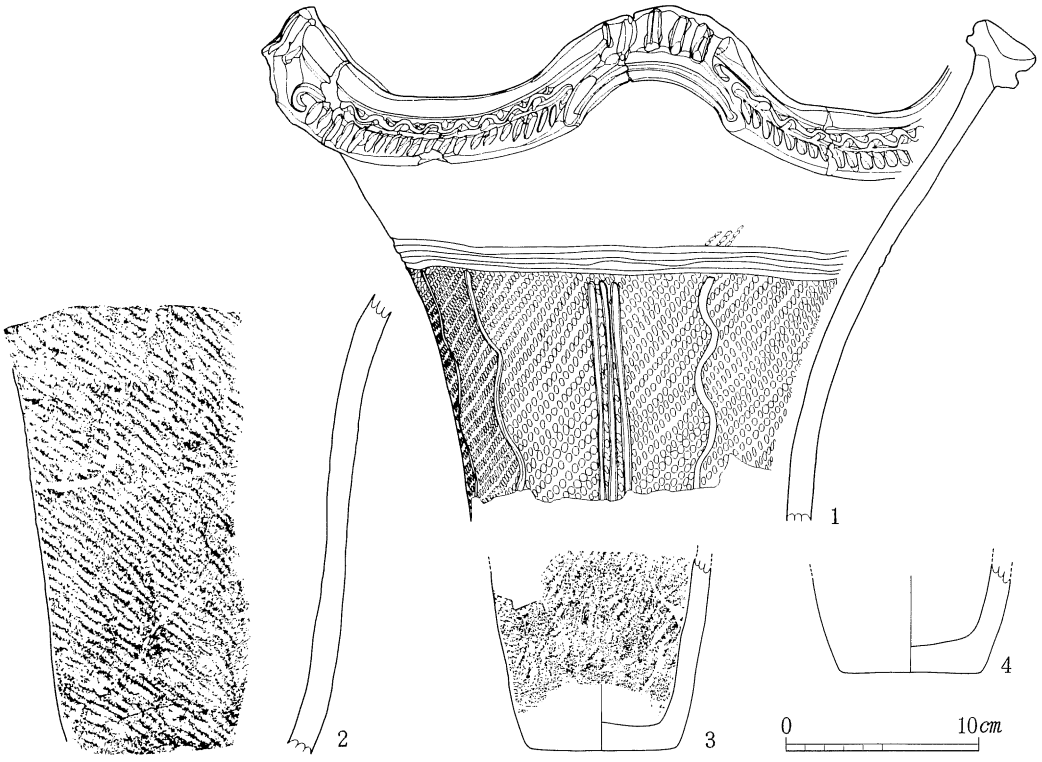


B～B′ ① 暗茶褐色土（ロームブロックを多く含む）
② 茶褐色土（ローム粒子、ロームブロックを含む）
③ 茶褐色土

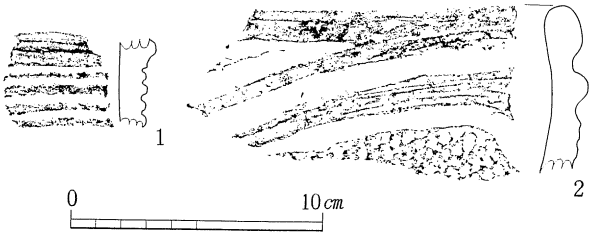
第33図　13～17号土壙実測図



第34図　14号土擴出土縄文土器拓影図（⅓）



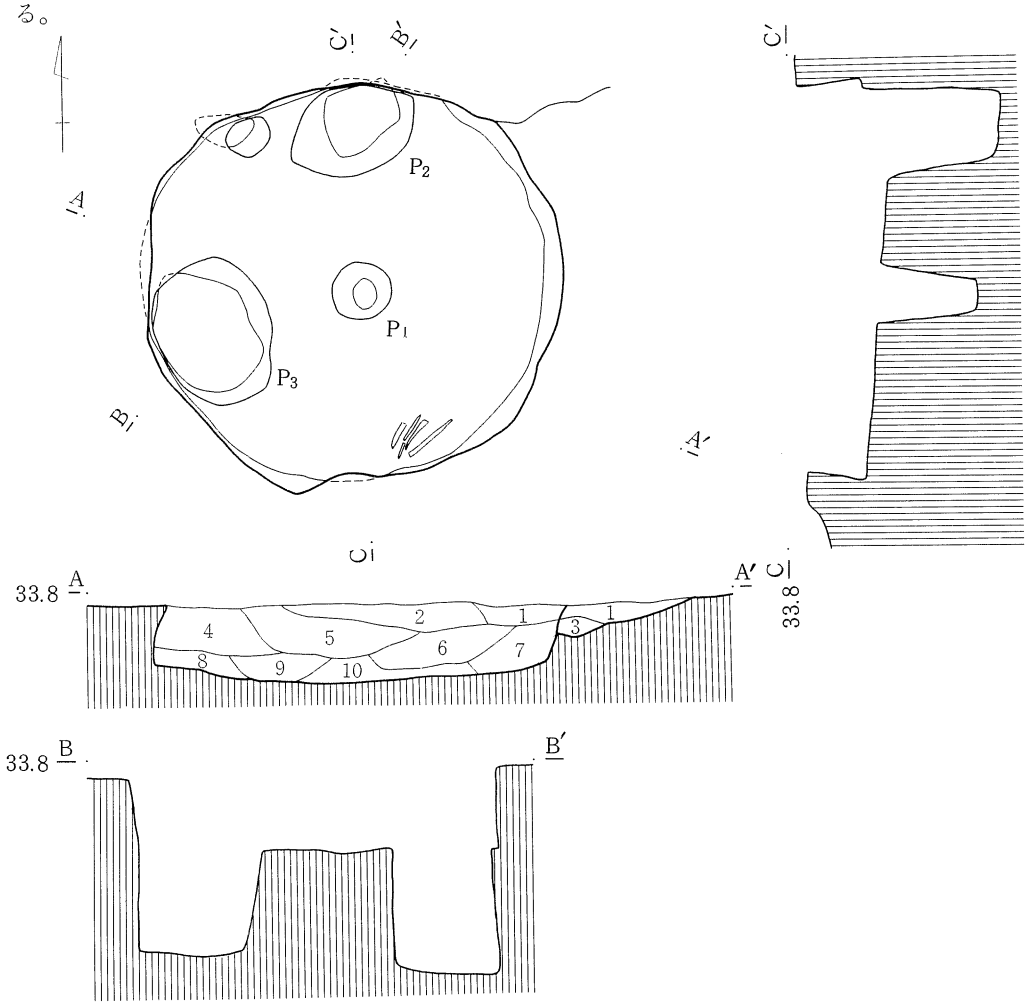
第35図　15号土擴出土遺物実測図（¼）



第36図　17号土擴出土縄文土器拓影図（⅓）

18号土壙（第37図，図版７）

いわゆる小竪穴である。南北 2.1m，東西 2.2mとほぼ円形を呈す。ほぼ中央に，径30cmの小ピットがあり（P_1），北側及び西側の壁際にそれよりも大きなピットがある。（P_2，P_3）。さらにP_2の西の壁際にも小ピットがあり，これは大きさはP_1に近く，やや内傾して掘られている。



18号小竪穴

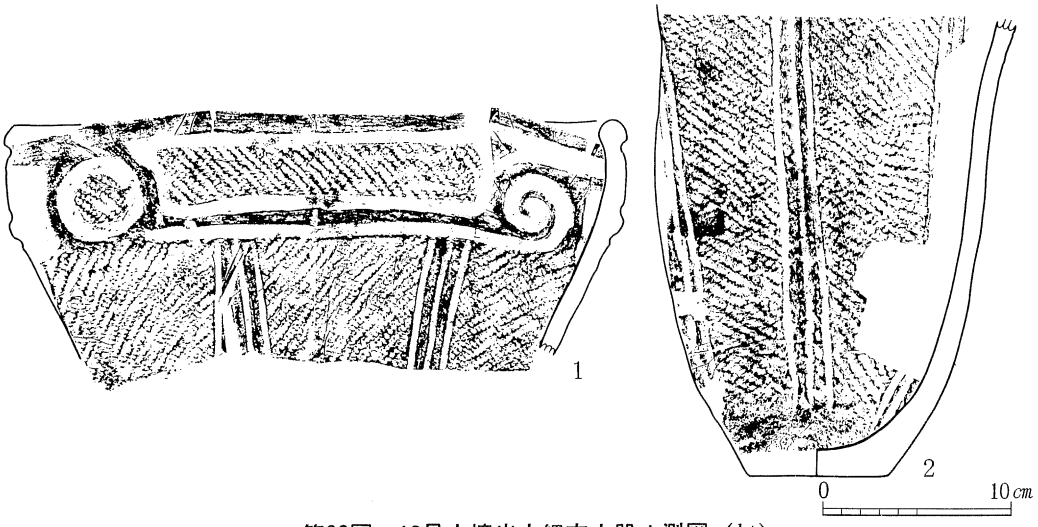
A～A′ 1. 黒褐色土
2. 茶褐色土（ロームブロック・ローム粒子を含む）
3. 暗褐色土（ローム粒子を含む）
4. 暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む）
5. 茶褐色土（大粒のローム粒子を多く含む）
6. 暗茶褐色土（ロームブロックを少じ含む。ローム粒子を含む）
7. 暗褐色土（ローム粒子を含む）
8. 暗褐色土（細かいローム粒子を少し含む）
9. 暗茶褐色土（大粒のローム粒子を含む）
10. 明褐色土（ロームブロック・ローム粒子を多く含む）

第37図　18号土壙平面・土層断面図

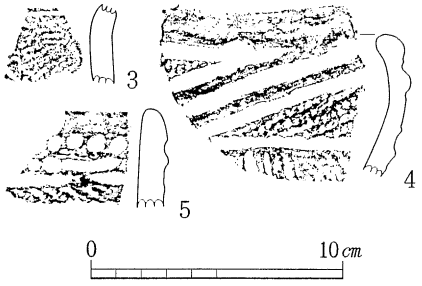
この小竪穴からは土器片及び，人骨が出土している。この遺構の上面を，方形周溝墓（24号址）の周溝が切っているが，骨片出土レベルまでは達していないと思われる。したがって，この人骨はこの遺構に伴うものと考えたい。そうした場合，この種の遺構の性格づけが問題となってくるが，埋葬に関わるものと考えるできであろう。しかし，骨片の出土状況からみると，二次埋葬的であり，また，ピットを伴う点についてもどのような機能を有していたのかという問題が残る。本址をもってこの種の遺構の一般的性格づけを行うのは，いささか早急に過ぎると言え，今後の検討をまちたい。

出土遺物（第38・39図，図版28－5～7）

1，2は共に底面またはピット内出土の土器である。1は底面およびP_1からの出土である。深鉢の口縁部の約⅓の破片で，口縁部文様帯は円形のかこい文，渦巻文により構成され，その両者は隆帯により結ばれる。文様間およびかこい文の中は縄文で埋められている。胴部は地の縄文が，口縁部文様帯下端から垂下する三条の沈線により区画されており，沈線間の縄文は磨



第38図　18号土壙出土縄文土器実測図（⅓）



第39図　18号土壙出土縄文土器拓影図（⅓）

り消されている。加曽利ＥII式であろう。２は底面およびP_1・P_2からの出土である。口縁部を欠く深鉢で，底径は 7.6cmである。地の縄文を垂下する三条の沈線により区画し，沈線間の縄文は磨り消されている。３～５は覆土中より出土した土器である。３は阿玉台式に，４・５は加曽利Ｅ式に属すると思われる。

非遺構伴出の縄文土器（第40図～第38図，図版28－９～図版35）

再三述べてきたように，今回の調査部分を含めて，この草刈台上では土の移動がかなり行なわれたと思われ，それは加曽利Ｅ式期の住居址の覆土から阿玉台式土器の破片が出土することや，方形周溝墓の周溝の覆土から多くの縄文土器の破片が出土することからもうかがわれる。原位置を離れた遺物であり，資料的価値が低いものであるといわざるを得ないが，不報告で済まし得るとは考えられないので，ここではバラエティーの提示という形で報告することにする。原則として，弥生時代以降の遺構から出土したものと，遺構外から出土したものを扱うが，土の移動を前提としているので，縄文時代の遺構の覆土中から出土した遺物と資料的価値は大きな隔たりはないと理解すべきであろう。

比較的多くの縄文時代の遺物を出土した遺構については遺構毎に報告し，少数の出土しかなかった遺構に関しては，遺構の位置，性格等は考慮に入れず，土器そのものの類似性でまとめることにした。また遺構外出土の遺物に関しても，出土状況に関する要素は捨象してある。

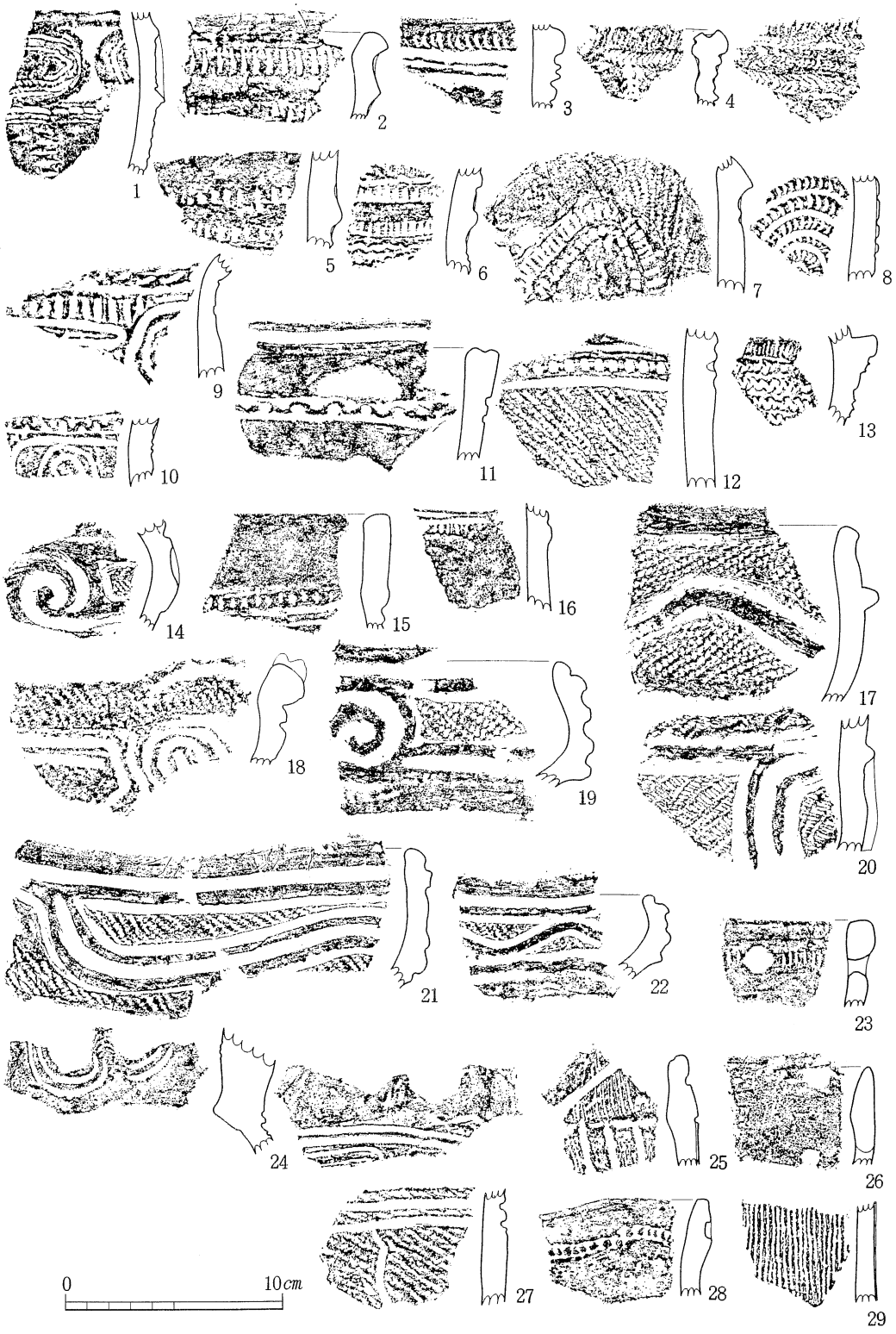
個別の記載は後に譲ることとして，ある程度の傾向が認められるので，一応最初にまとめておくと，最も多く認められるのは加曽利ＥＩ及びII式と言え，ついで阿玉台式，加曽利ＥIII式と言える。さらに，勝坂式や曽利式も比較的目につくものである。ただし，この報告中の各型式間の割合が，実際に出土した土器群中に占める割合とは言えない。報告すべき遺物を抽出すす時点の選択にかなり偏りがあったからである。つまり，バラエティーの抽出を考えた場合，阿玉台式や加曽利ＥＩ式にはかなり個体差が認められたが，加曽利ＥII式以降は，個体間のバラツキが少ないような印象を受けたからである。たとえば，阿玉台式における連続刺突文の施文方法などについては一つとして同様の文様構成をもつものはほとんどないと言え，したがって例示数が多くなり，逆に加曽利ＥII期の隆帯による渦巻文は，個体偏差が前の時期ほど大きくなく，例示数を多くする必要が認められない。結局，後の報告を見ればわかる通り，報告例中特に多いのは，加曽利Ｉ式でも古い段階と考えられる土器となっている。

遺構の項で述べた通り，今回の調査部分において，遺構に伴うと断定し得る縄文土器のほとんどは加曽利ＥＩ式に位置づけられ，上述の傾向を考え合わせても，加曽利ＥＩ式期における活発な営みがうかがえるのではないだろうか。

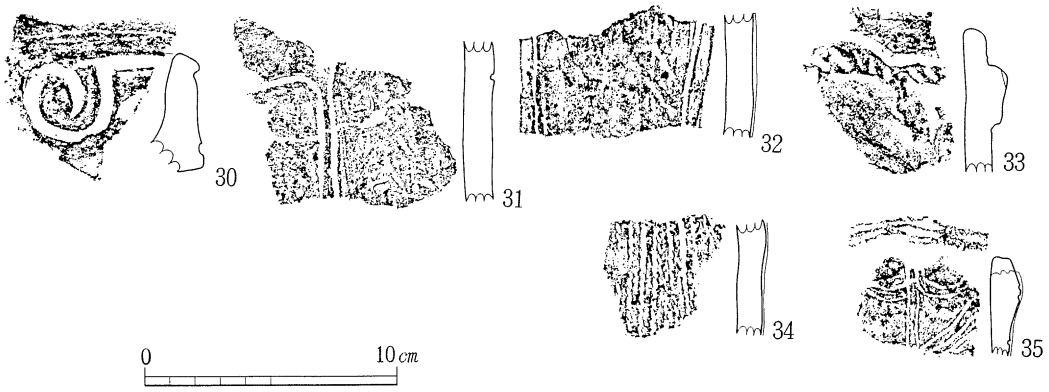
なお，これら土器片の他に多くの土器片錘が出土しているが，ここでは扱わず，別項で触れることにする。

26号方形周溝墓出土の縄文土器（第40～42図，図版28－９～図版29－18）

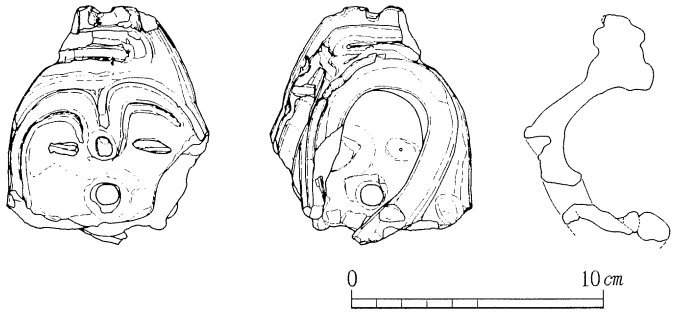
１～８および13は阿玉台式に属するものである。１は隆帯による楕円上区画を有し，区画内には沈線により楕円が描かれ，区画の下には，横位の連続刺突文が見られる。さらにその下位には，横位の刺突が縦に並べられている。２は外反する口縁下に縦位の刺突が横に巡らされる文様が２単位見られる。３は，横位の隆帯に刻みが入れられ，その下の隆帯には連続刺突文が見られ，さらにその下の隆帯には，上下に交互の刺突がなされ，一見波状を呈している。４は口唇部および，内外面に爪形の刺突がなされ，外面では隆帯の上面，側面共に施文されている。５・６は隆帯の上に施文が見られ，６ではさらに下部に波状の沈線描かれている。７・８は突起の部分で７は外面の縁部には縄文が施され，それより下位には連続刺突文が付される。８は弧状の沈線と，沈線間の径方向の刺突が特徴的といえる。９～22は加曽利Ｅ式に属すると考えられ，９・10は基本的には沈線により文様が描出されている。10では３で見られたような上下交互の刺突が見られるが，それは11で顕著である。11では，口唇部に一条の沈線が巡っている。なお11・12・15・16はほぼ直立する口縁をもつもので，口縁直下は無文帯と思われ，その下に，文様（上下交互の刺突，一列の刺突，刻み）が施される点で共通している。加曽利Ｅ式に典型的な渦巻文は上述の９・10の他に14・18・19　でも見られるが，14・19は隆帯より表現されているが，18は９・10同様沈線により描出されており，さらに口縁部に縄文が施され，また渦巻文上部の波状を呈する口縁部には沈線が入れられ，やや古い様相を示していると言える。17・20～22はいずれも隆帯による文様が描出されているが，20は胴部下半に向かって隆帯が垂下しており，やや趣を異にしている。25は地文は沈線で，波状口縁で，口縁端部にまで沈線が及び，その下に沈線をひき，それより下部は横位の面に隆帯がありこの上から太い沈線を垂下させている。23・26は共に有孔の土器である。23は，口縁下部に縦位の刺突を横に巡らしており，その刺突文様部に穿孔している。27は地文の縄文の上から三条の横位の沈線と垂下する波状の沈線が見られ，加曽利ＥⅡあるいはⅢ式と思われる。29・34は地文を撚り糸文とする胴部の破片である。30は，浅鉢の頸部であり比較的平坦にされた下部分に沈線により渦巻文が描出されており，加曽利ＥⅡあるいはⅢ式の所産と思われる。31・32は無文の胴部に沈線がひかれているものである。33は口縁下部に弧状の隆帯をもちその上に刻みが入れられ，口縁側の際には連続刺突文が加えられている。34は口縁下部に半截竹管による連続刺突文が見える。時期的に前後してしまったが，33・34共に阿玉台式と考えられる。35は，２つの突出部をもつ口縁部であり，口縁部に２条の沈線が入れられ，外面にも沈線による文様が描出されているが，時期的には不明である。縄文時代中期末あるいは後期初頭の所産かもしれない。



第40図　26号方形周溝墓出土縄文土器拓影図 (1)　(1/3)



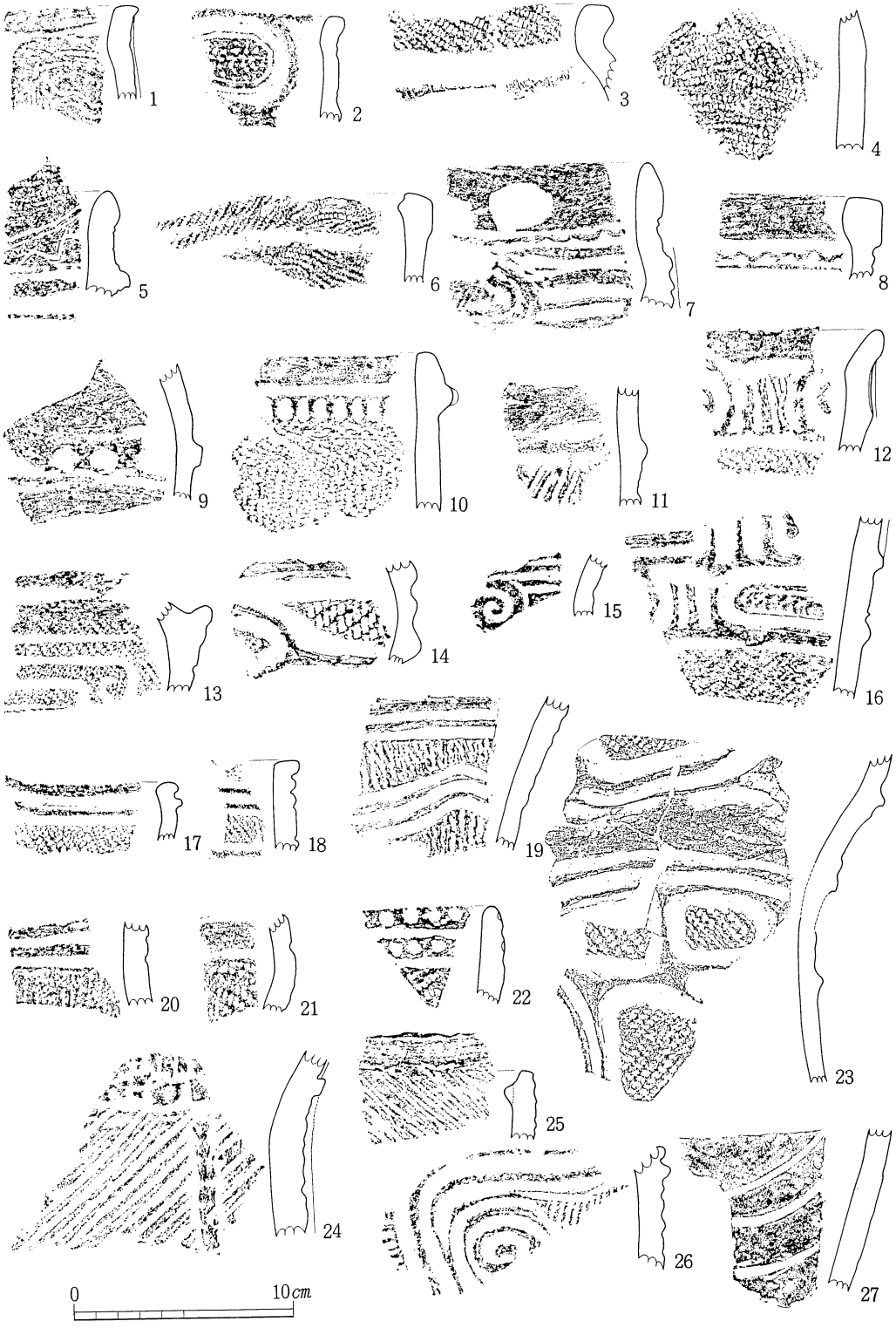
第41図　26号方形周溝墓出土縄文土器拓影図（2）（1/3）



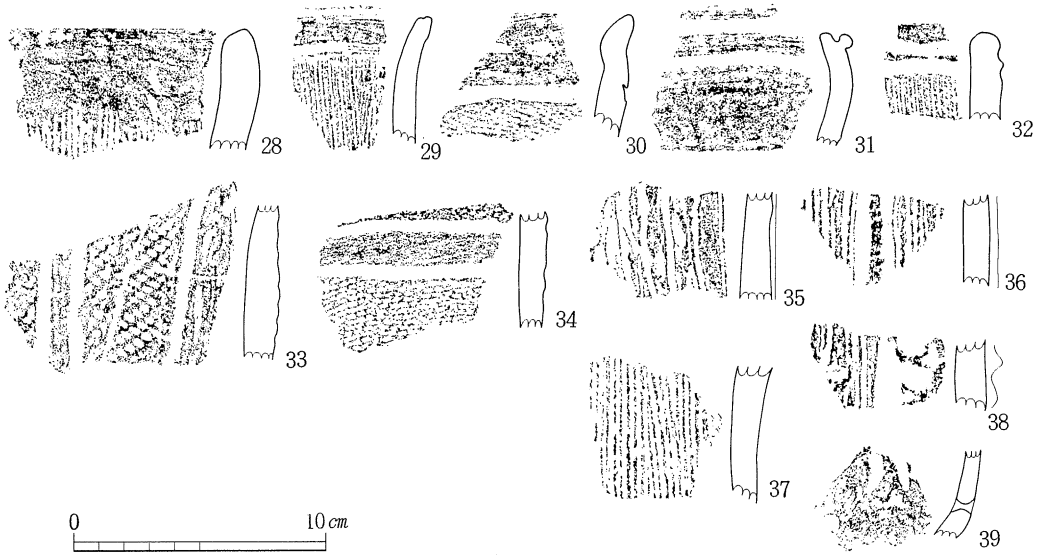
第42図　26号方形周溝墓出土顔面把手実測図（1/3）

24号方形周溝墓出土の縄文土器（第43・44図，図版29－19～図版30）

1は，やや波状を呈する口縁下に，隆帯による楕円形の区画を有し，区画に沿って内側に連続刺突文が巡り，さらに内側に波状文を有するものである。2は楕円形の区画に連続刺突文と，沈線，連続刺突が見られる。3～6は共に口縁端まで縄文が付されるもので，3では口縁下に縦長の刺突を巡らしており，5では横位の連続刺突文の下に山形文，さらにその下に連続刺突文が横走し，上面に縄文を付した隆帯による区画がなされる。7・8は口縁下に無文帯を有し交互刺突文が見られるものである。9・10は突帯上に刻みをもつものであるが，9は突帯の上下で縄文は見られず，10では下方に縄文が付されている。13～15はいずれも渦巻文をもつものである。13は口縁端まで縄文が付され，沈線により渦巻が描出され，14では隆帯による表現によっており，15では沈線により描出されている。19は地文の縄文に横位の沈線と波状の沈線が描出されている。22は口縁直下に円形刺突が二列並び，沈線により区切られている。23は大型の破片であり，上方に隆帯による区画があり，無文帯をはさんで，隆帯による不整方形の区画が見られ，区画内には，上下ともに縄文が付されている。24～26は地文に沈線を用いているも



第43図　24号方形周溝墓出土縄文土器拓影図（1）（1/3）



第44図　24号方形周溝墓出土縄文土器拓影図（2）（1/3）

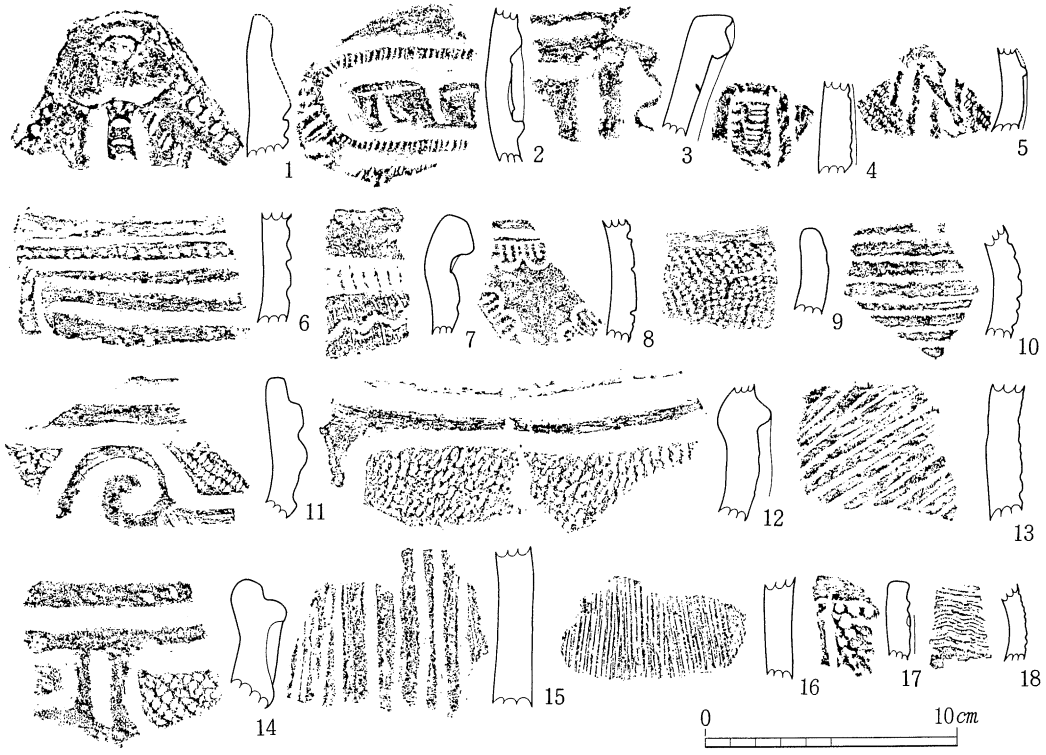
ので，24では横位の突帯と垂下する突帯があり，26では渦巻文が見られる。27は三条の弧状の沈線が見られる。２８～３２はいずれも口縁部であるが，２８は口縁直下は無文で，地文の条線を区画するような装飾は見られない。29はやや外反する口縁を有し，わずかに無文帯が見られ，沈線により地文の条線を区画している。30はやや広い無文帯が沈線により地文の縄文と区画されている。31は無文で，口縁直下に突帯を有する。32は，口縁直下に二条の沈線がひかれ，地文の条線を区画している。33～38はいずれも胴部であるが，33では地文の縄文を垂下する二条の沈線で区画し，沈線間には縄文は見られない。34は，地の縄文を横位の二条の沈線で区画し，沈線間は無文である。35～38は地文は条線であるが，36・37ではわずかに垂下する隆帯を有し，38では隆帯に刻みが入れられている。39は底部付近で２つの穿孔が見られるものである。

１・２・５は阿玉台式，24～26および35～37は加曽利Ｅ式，27，34，39は帰属は不明であり，それ以外は加曽利ＥⅠ式から同Ⅱ式に属するものであろう。

21号住居址出土の縄文土器（第45図，図版31－１～18）

１・７・８は阿玉台式である。１は大きく突出する口縁部の周縁に刻みを入れ，また突出部の中央を通るように隆帯が付され，その上に刻みが入れられている。さらに周縁部と中央部の間にも斜方向の刺突が加えられている。７は口縁下部に縦位の刺突が巡り，その下部には沈線による波状文が描出される。なお，地文には浅い沈線が認められる。８はいわゆる剣頭文が三角形に配置されているが，施文方法は，まず，浅い縦位の連続刺突（刺突という表現は必ずしも適当ではなく，むしろ押圧といった感じである）を行い，その上から半截竹管をあてて剣頭を表現している。２は，やや歪んだ長方形の区画を隆帯により作りその内部は交互の沈線をひ

いている。また隆帯上面には浅い刻みが入れられている。6は沈線による長方形の区画が見られ，その上には刺突を加えた横位の隆帯が巡り，また長方形区画の外郭部には縦方向の刺突がなされている。2・6は共に加曽利ＥⅠ式でも古い部分に属すると思われる。3～5は，若干趣が異なり，3では，太い横位及び縦位の隆帯が見られ，縦位の隆帯の横には波状の隆帯も見られる。4は小さい方形の区画部の内部に横位の刺突を縦に連続させており，あるいは勝坂式かもしれない。5は地文の縄文の上に細い粘土紐を張り付けたものである。9は口縁部であるが，口縁直下まで地文の縄文が及んでおり，また，10は口縁部であるが，口縁直下から横位の沈線が巡っている。11・12・14は，渦巻文あるいはそこから延びる隆帯が認められ，加曽利ＥⅡあるいはⅢ式と思われる。13，15，16は胴部の破片であるが，13は斜方向の沈線が地文であり，曽利式と考えられる。15は粗い縦方向の条線を地文とし，16は細かい縦方向の条線を地文としている。17は地文の縄文に垂下する沈線と横位の上下二段の刺突を特徴とし，加曽利ＥⅡ式と思われ，18は細い波状の沈線が巡っており，加曽利ＥⅢ式と考えられる。

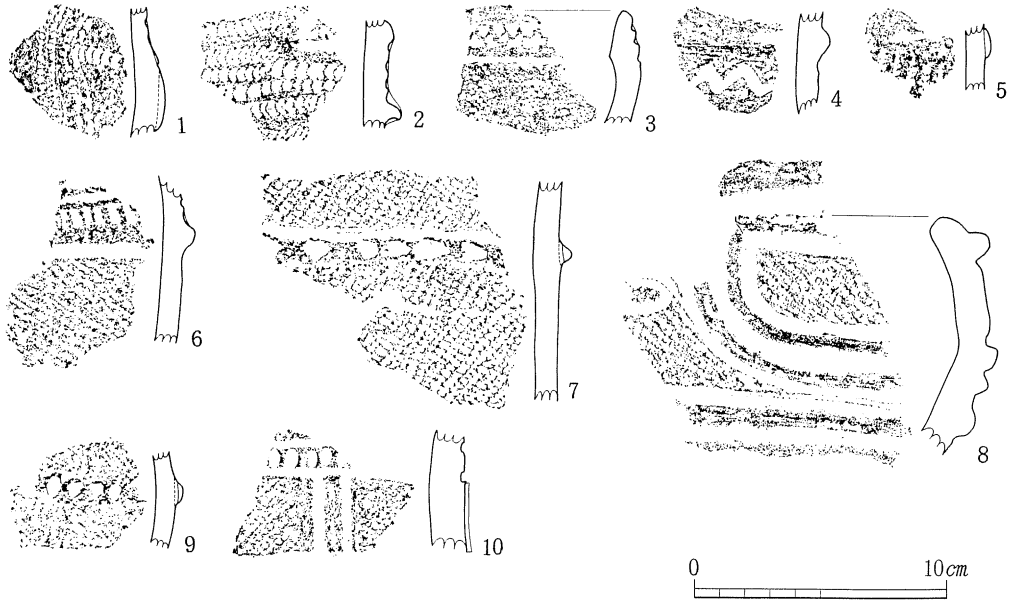


第45図　21号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）

25号方形周溝墓出土の縄文土器（第46図，図版31－19～28）

1～5は，阿玉台式である。1は弧状の隆帯が下方に延び，隆帯の両側にそれぞれ二条ずつの連続刺突文が加えられ，横位の連続刺突文が一条，隆帯の右側から延びている。2は横位の

平行する二条の隆帯をもち，上方の隆帯は瘤状の突起を境にして渦巻を見せ，隆帯側面及び，隆帯間は横位の爪形の連続刺突文で埋められている。3は口縁直下に交互刺突を有し，それと平行する連続刺突文をもつものである。連続刺突文は上下二条あり，そのうち上方刺突は，交互刺突の下方部を切っており，一見，交互刺突と一条の連続刺突文のみのように見える。交互刺突は竹管によっており，上方ではその痕跡を残しているが，下方は連続刺突により消されている。4は，横位の隆帯下方に波状文をもち，5では貝殻腹縁（ハイガイか）による縦位の押圧による文様が横に巡っている。6は，横位の隆帯上方に連続刺突文が巡っており隆帯下方は縄文で埋められている。6・7は，地文の縄文に横位の隆帯を付し，隆帯上に刻みが入れられている。共に加曽利ＥＩ式に属するものであろう。9は横走する二条の沈線間に楕円形の押圧文を巡らせ，その下方から二条の沈線を垂下させており，地文の縄文はこの沈線間では磨り消されている。10では，口縁下部に隆帯による区画がなされ，また頸部との境界にも横位の隆帯による文様区画がなされており，それより下方は無文帯が見られる。加曽利ＥII式と思われる。

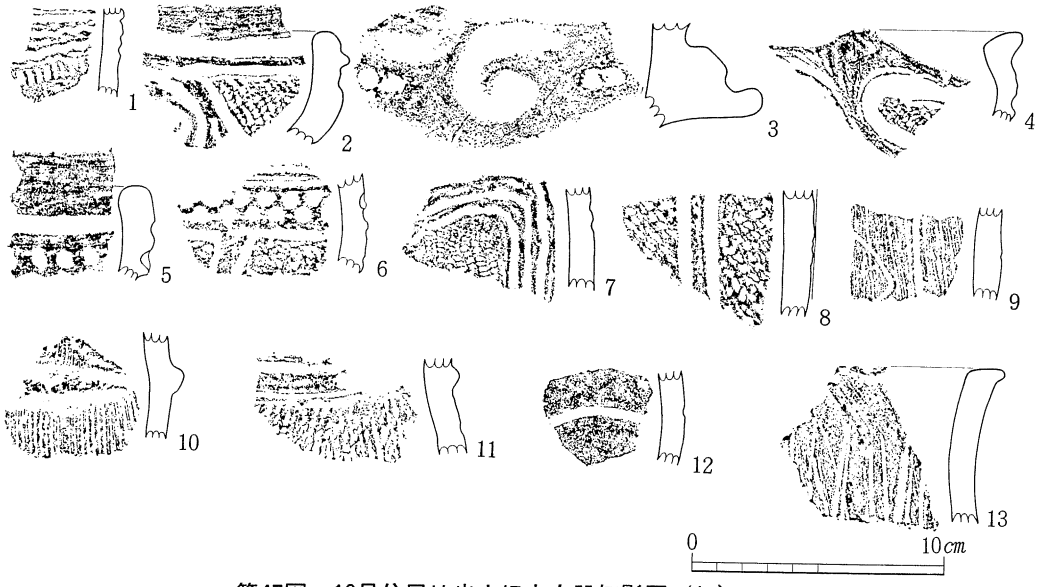


第46図　25号方形周溝墓出土縄文土器拓影図（1/3）

19号住居址出土の縄文土器（第47図，図版32－１～13）

１は阿玉台式である。斜方向の沈線による波状文の下方に横位の連続刺突文が施される。２は隆帯による渦巻文が見られる。３は太い渦巻文の両側に円形刺突が認められる。３は波状を呈する口縁下に沈線による文様区画が見られる。２～４は加曽利ＥＩあるいはII式であろう。

5・6はいずれも円形の交互刺突が見られるが，5では口縁下の無文帯との間に沈線がひかれ6では，刺突部下位に沈線が横走するが全周はせず，屈曲して下方へ延びている。共に加曽利EⅡあるいはⅢ式と思われる。7は沈線による不整形の区画が認められ，区画内は縄文で埋められ，沈線間に縄文は認められない。8は垂下する二本の沈線間の縄文が磨り消されているのが認められる。9は地文の条線上に垂下する沈線と，波状の沈線がひかれたものである。10は横位の突帯の上下に条線がひかれており，11では横位の突帯下方に撚糸文が認められる。12は無文部に弧状の沈線がひかれている。13は，外反する口縁部に刻みが入れられ，胴部は荒いケズリ状の細い条線が縦走している。

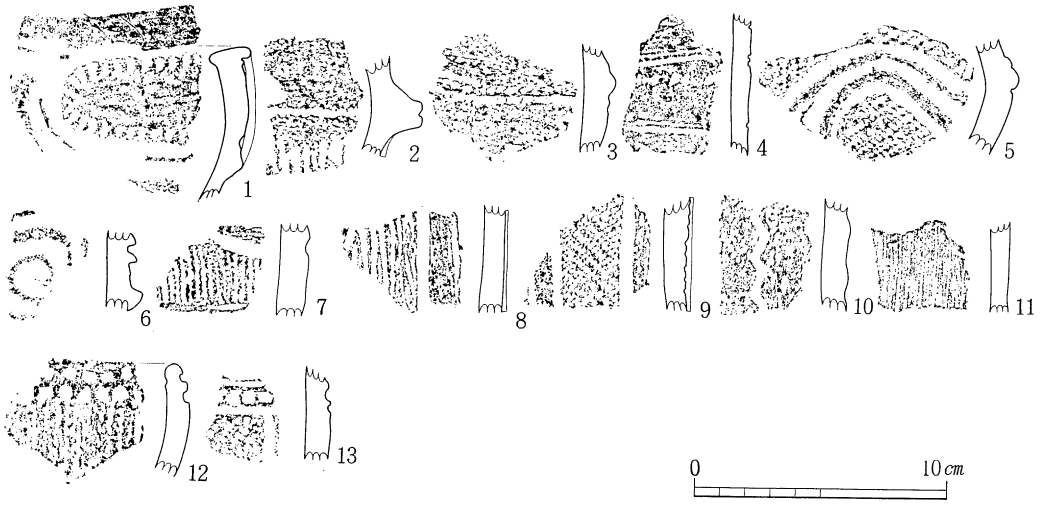


第47図　19号住居址出土縄文土器拓影図（1/3）

20号住居址出土の縄文土器（第48図，図版32－14～26）

1～3は阿玉台式である。1は隆帯による楕円形の区画をもち，区画に沿って内側に連続刺突文が見られる。2は二条一組の平行する沈線間に連続刺突を行っている。3は隆帯側面に二条の連続刺突文が見られ，そこからほぼ垂直方向に二条一組の連続刺突文がのびている。4は高く太い横位の隆帯上に沈線を走らせ，その上から縄文を施しており，隆帯下方には，縦位の刺突を隆帯に平行させて巡らせている。5は太い隆帯二本が並走し楕円形の区画を作っているが，わずかに下方の隆帯からさらに下方へ延びる隆帯が認められる。6は隆帯による渦巻文である。7は沈線により区画された部分が撚糸文により埋められている。12・13は口縁下部に円形刺突を巡らしているもので，12は二段，13は一段である。13では刺突文の上下に沈線が横走しているが，下方の沈線から二条の沈線が垂下している。12は地文は撚糸文で，13は縄文である。共に加曽利EⅡ式であろう。8～11はいずれも胴部の破片であり，7は地文の撚糸文，8

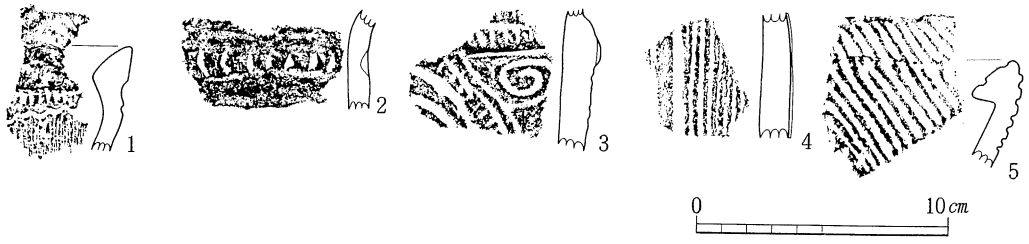
は縄文であるが，共に沈線間には施文は見られない。10は地の縄文に波状の沈線を垂下させている。11は条線を地文とする土器である。



第48図　20号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）

22号住居址出土の縄文土器（第49図，図版32－27～31）

1は，肥厚した口縁下部に横位の爪形の押圧文を施しその下位に波状文を巡らせ，地文の縦位の条線と区画している。2は，胴部に横位の爪形文を巡らしているものである。3は刻みをもつ横位の隆帯と，斜方向にのびる隆帯により区画された部分に沈線による渦巻文が描出されている。4は，撚糸の地文を沈線により区画し，区画部には施文はなされない。5は，口縁部の破片であるが斜方向の沈線が，口縁部の内側にまで及んでいる。1・2は阿玉台式，3は加曽利E式，5は曽利式に属すると思われる。

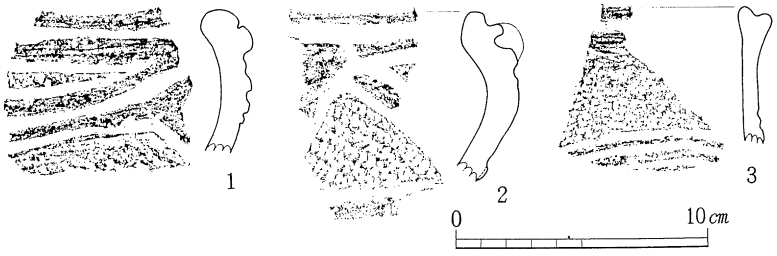


第49図　22号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）

27号住居址出土の縄文土器（第50図，図版32－32～34）

1～3はいずれも，加曽利E式に属すると思われ，1では，渦巻文からのびてきていると見られる斜方向の隆帯がみられる。2は，横位および斜位の隆帯の結合部分に瘤状の突起が見ら

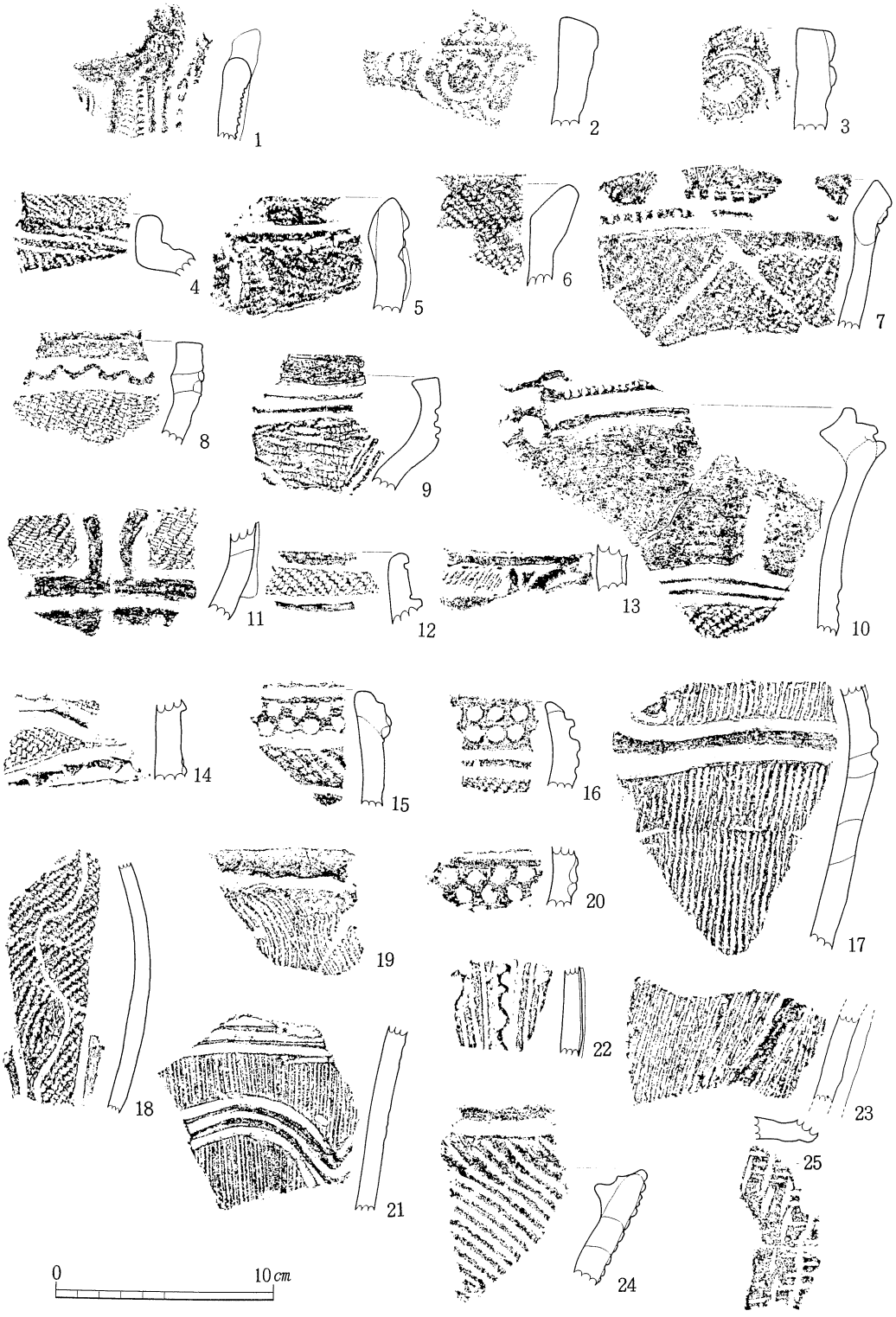
れる。3は，口縁部は外反し，口唇部には浅い沈線が走っている。口縁下は縄文で埋められ三条の横位の沈線による区画が見られる。



第50図　27号住居址出土縄文土器拓影図（⅓）

その他の遺構出土の縄文土器（第51図，図版33）

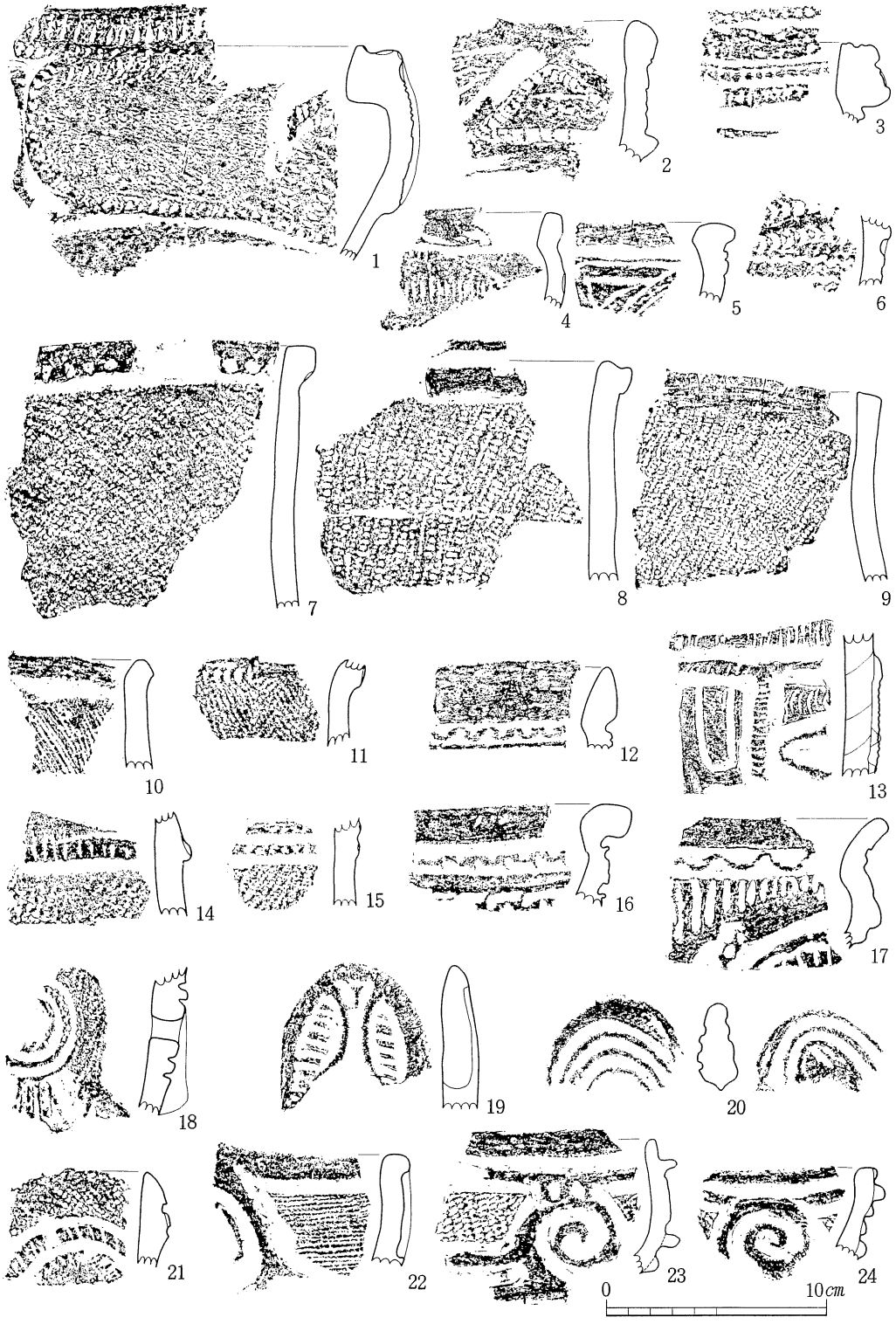
1は方形の区画とそれに沿った連続刺突文及び沈線が見られ，口縁部に指頭大の突起を有する。勝坂式であろう。2は上方に竹管による刺突が見られ，その直下を浅い沈線により区画し区画内に半円状の沈線とその周囲に刺突を有するもので，3は突帯による渦巻文上面に細い刻みを入れている。2・3は阿玉台式と思われる。4はわずかに直立する口縁部をもち，口唇部及び胴部に縄文を付するものである。5は隆帯による文様の区画を有し，隆帯直下には竹管状工具による刺突が並べられる。6は口縁端部まで縄文を施し，頸部はわずかに屈曲している。7は口縁帯を欠くが，おそらく口縁直下は無文であったと思われ，その下方に横位突帯が二条巡りそれぞれの突帯上面には刻みが入れられている。突帯下方は縄文で埋められている。8は口縁直下に無文帯を有し，交互刺突文の下方は縄文で埋められている。4～8はいずれも加曽利ＥⅠ式に属すると思われる。9は口縁下に無文帯を有し，その下に三条の沈線をひき，斜方向の沈線を引いたものである。10は，口縁部に三条の突帯を有し，中央の突帯上に刻みを入れている。胴部文様帯との間に無文帯を有し，三本の沈線により区画されているが，無文帯中位から沈線にかけて太い沈線が延びている。11では隆帯による文様区画があり，隆帯間には縄文は見られず，また隆帯より下位にも縄文はみられない。13は隆帯による区画を斜位の沈線が埋めている。14は隆帯による上下の区画を有するが，下位の隆帯には刻みが入れられている。9・10に関してはやや不明であるが，11～14は加曽利ＥⅠあるいはⅡ式と思われる。15・16・20は口縁下に二列の円形刺突を有するもので，いずれも加曽利ＥⅡあるいはⅢ式であろう。19は櫛状工具による波状文をもち，21は三条の沈線による連弧文が描出されている。21～24はいずれも条線を地文としているが，22,24 は曽利系と思われる。25は底部に網代痕の見られるものである。



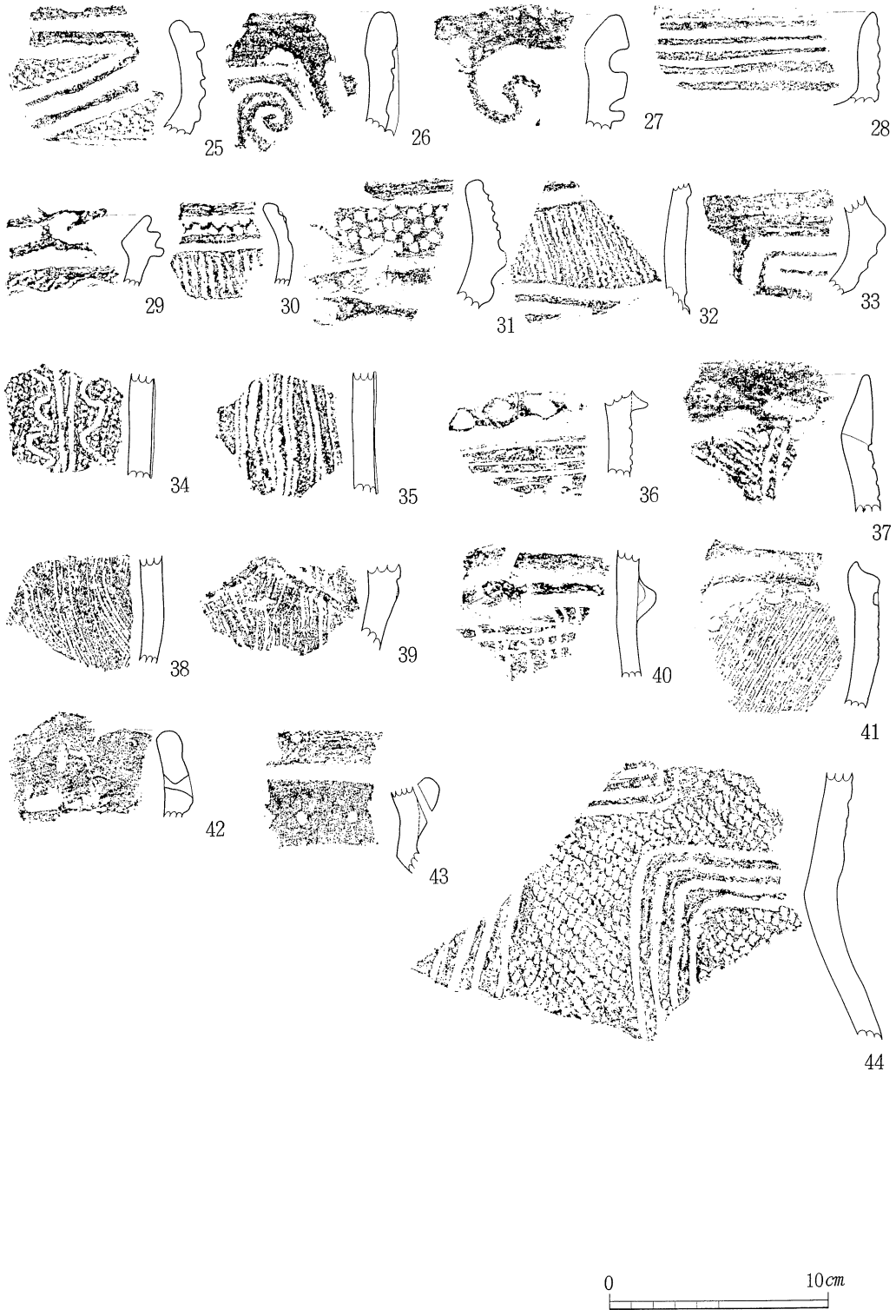
第51図　縄文土器拓影図 (1/3)

遺構外出土の縄文土器（第52・53図，図版34，35－1～19）

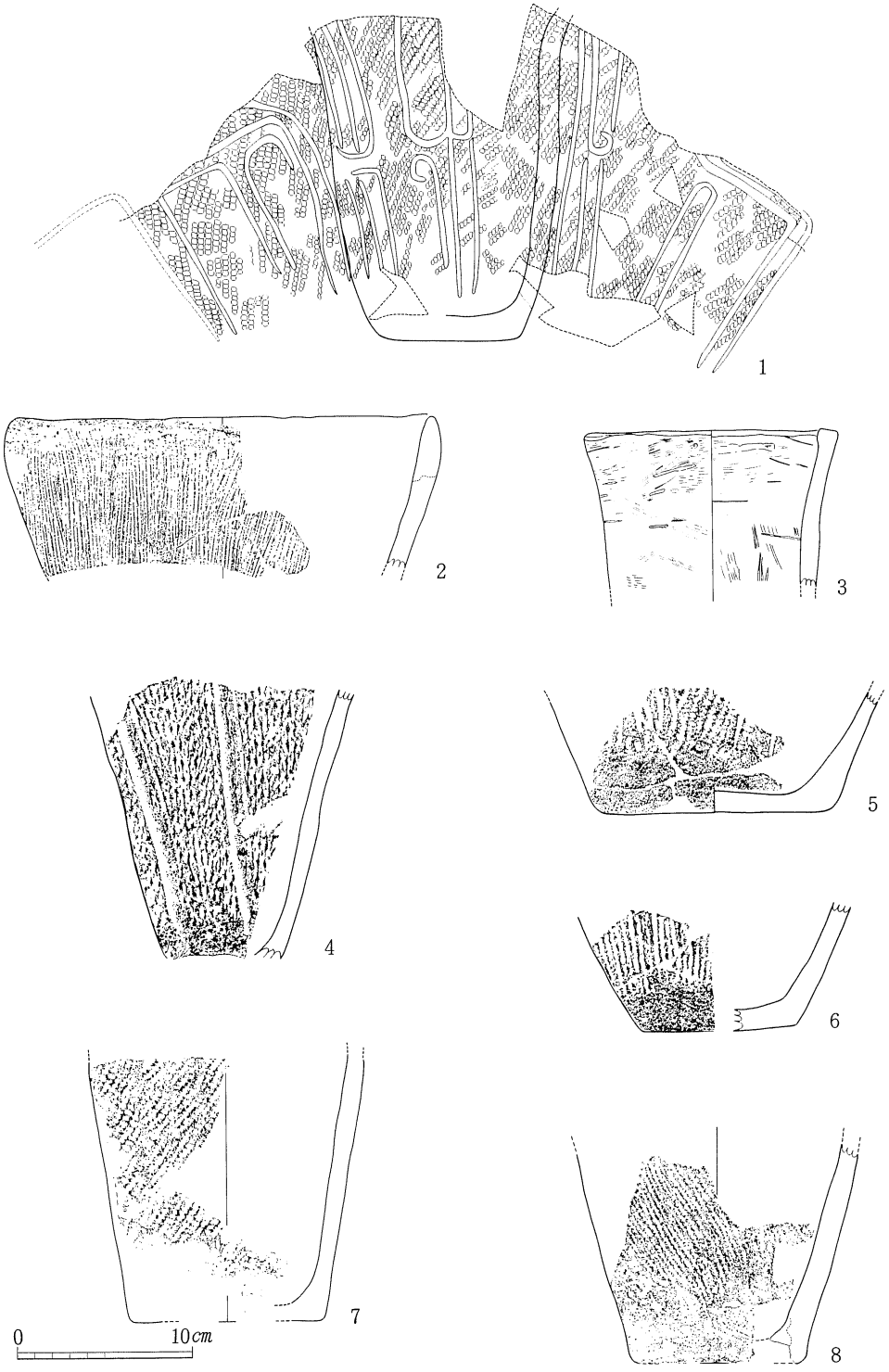
1～6は阿玉台式であろう。1は隆帯による楕円状の区画を有し，区画上面には刻みが入れられており，区画内部には細かい刺突がなされている。さらに右側には別の区画部がありその上面には刻みが入れられていることは同様であるが，区画内の刺突は左側に比べ大きい。また口唇部には爪形の刻みが入れられている。2はやや波状を呈する口縁部で，隆帯による三角形の区画がなされ，区画の側面には両面共に連続刺突文が入れられ，区画内には沈線による直線文あるいは波状文が描出されている。3は肥厚する口縁部に三条の連続刺突文を有し，一条目と二条目の間に沈線がひかれており，また口唇部中央には沈線がひかれ沈線より内側には刻みが入れられている。4では，口縁下に縦位の刺突が巡り，5では口縁下に沈線による三角文が描出されており，6では斜方向の隆帯の両側面に三日月形の連続刺突がなされ，その下部には波状文が見られる。7～9は比較的直立する口縁をもつ深鉢であり，7は肥厚する口縁下端に刻みが入れられ，8は折り返し口縁状を呈し，9は口唇部が面取りされており，体部との境に明瞭に稜を形成している。10・11・14・15も口縁または口縁直下と思われる破片であるが，10は地文は条線であり，11は刻みが連続しない。14は，隆帯に刻みを入れたのち，上方の無文部を整形したもので，一部刻みが深かったため，整形後も刻みが残存している。12・16は共に交互刺突文をもつものであるが，12は刺突のみによる典型的な例と言えるが，16は短い横位の沈線の最先端に刺突をしたもので「L」状の文様が連続している。13は方形の区画とその内部に長楕円形の文様が見られ，区画の上面には刻みが入れられている。勝坂式と思われる。17は口縁下に交互刺突文があり，その下方は縦位の太い沈線及び隆帯による施文が見られる。18～21はいずれも突起部である。18・21では端部にまで縄文が及んでいる。19・20は縄文による施文は見られず，20では内外面共に沈線による文様の描出がなされている。22～27は加曾利E式の渦巻文及びその延長部である。22では横位の撚糸文が充塡され，23では渦巻文上方に2つの円形刺突をもつ。26は沈線による渦巻文が見られる。また29では，口縁上面に隆帯による渦巻文が見られる。30は，口縁直下に交互刺突文をもつもので，加曾利EⅡあるいはEⅢ式である。31は口縁下に無秩序に円形刺突を行っている。37は口縁下は無文で頸部でくびれをもち，そのくびれ部から下の地文は縄文で，二条の沈線を垂下させ，その両脇を竹管により刺突している。なお，沈線間にも縄文が見られる。35・36は沈線を地文とするものであるが，36では波状の隆帯が垂下している。35～37は加曾利式と思われる。38は櫛状工具による縦位の波状文が見られ，加曾利EⅢ式と思われる。39・41・44はやや異質な感があり，39は地の沈線に粘土紐をはりつけており，40は瘤付の突帯下方に格子状の沈線がひかれ，41は地文は沈線で上方に弧を描く，ように刺突が並んでいる。44は沈線により方形の区画がなされ，沈線間には縄文は見えない。43は有孔鍔付土器である。



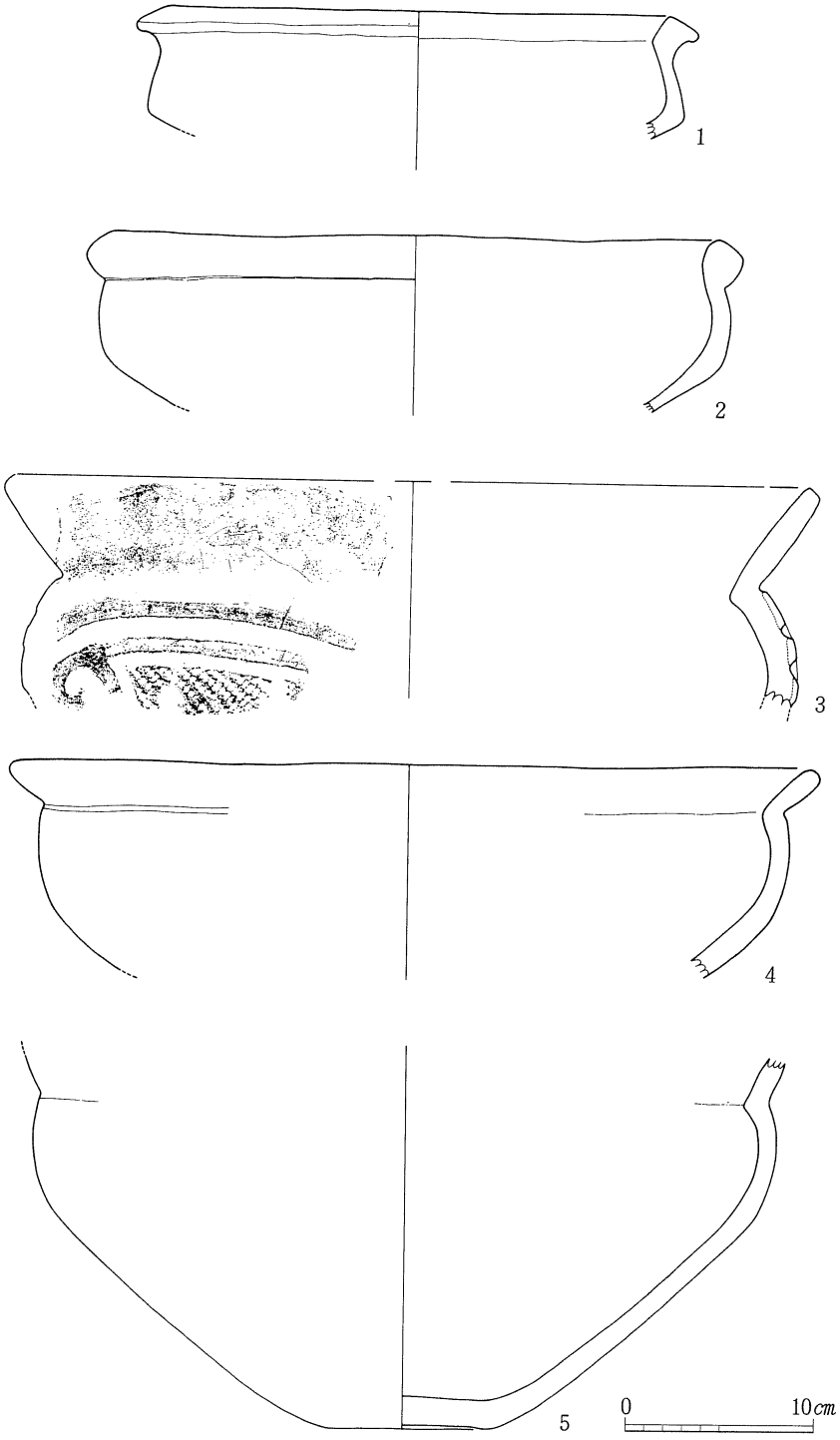
第52図　遺構外出土縄文土器拓影図（１）（1/3）



第53図　遺構外出土縄文土器拓影図（２）（1/3）



第54図　縄文土器実測図（1）（¼）



第55図　縄文土器実測図（２）（¼）

土器片錘（第56図～第63図，図版36～図版40）

今回出土した土器片錘は，完形品，破片を含めて 171点である。いずれも，覆土中あるいは遺構外からの出土であって，遺構に伴うと断定し得る資料はない。ここでは，それらの土器片錘を一括して報告することにする。

形態的には，長方形ないし，楕円形を呈するものがほとんどと言え，長軸方向のみにいわゆる紐掛を有するものが大多数を占め，わずかに短軸方向にも紐掛をもつものも認められる。土器片の使用部位は口縁部，あるいは胴部であり，底部を使用した例は見られない。土器片自体の型式としては加曽利E式に比定し得るものの他に少数ながら阿玉台式に比定し得るものも見られる。技法は2つに大別でき，側面を打ち欠いていて凹凸の激しいA種と，側面を磨っていて凹凸がほとんど見られないB種が認められ，さらに，打ち欠いたのちに磨いたと思われるC種が存在する。重量的には最小3 g，最大 108 gであり，かなりの幅が認められる。

各個体に関しては後掲の一覧表に譲ることとして，ここで全体的な傾向を述べておく。(1)

まず，技法と大きさの関係についてみると，大型品(2)に関しては，A種が多く，B種は少ない。しかし，小型になるにしたがって両者の比率は逆転するようである。ただし，C種に関しては，個体数自体は両者に比べて少ないが，大きさにはあまり関係なく存在すると言えそうである。

重量分布について見ると，5～9 gの範囲と20～24 gの範囲にピークが認められる。また，わずかながら45～49 g範囲にも分布の偏りが見られる。50g 以上のものは少ないが，108 gを最大として点在することがわかる。

ここで重量分布について他遺跡(3)との比較を試みたのが，図　である。(4)時期・遺跡の性格等は考慮せず，比較的まとまった量の土器片錘を出土した遺跡を抽出して，重量分布を見たものである。前述の草刈遺跡出土資料の重量分布における3つのピークは水砂，加曽利の両遺跡においても認められるが，西広例では認められない。また，50 gを越す資料数は極端な減少を示す。さらに，分布の集中箇所から大きくはずれた資料がどの遺跡にも見られる。小型品と大型品の重量比は，加曽利例が最大で1：6 8，西広例が最小で1：8で，今回出土分では1：36で，大小差にかなりのばらつきが見られる。以上の4点には留意したい。

用途に関しては云々することはできないが，上述のように，重量分布にばらつきが認められることから考えても単純に漁網用錘として限定し得るかどうか疑問である。形態の類似性をもって用途の同一性に結びつけることには慎重であるべきだろう。同一の用途を期して製作したものであるならば，大型品の存在は理解し難く，異なった用途を考えるべきである。その大型品も単に草刈遺跡のみに見られるものであるならば，特殊性として処理することも可能であろうが，時期・地域を異にした遺跡でも見られるという事実は，特殊性として片付けられないものを含んでいると考えたい。今後の諸研究に期待することろは大きいが，広く錘具として考えていく方が現時点では妥当ではないかと考える。(5)

(1) 今回検出した土器片錘は総数 171点であるが，そのうち完形品は94点と60%にも満たない。
また，草刈遺跡全域における総数ははるかに膨大となる。したがって，今回報告する資料において見られた傾向が，はたして草刈遺跡全域出土資料の傾向と一致するかどうかは不明である。
さらに，94点という資料数および，5ｇ単位という分け方が，統計学的にどの程度有効なのかどうかという吟味も行なっていないので，恣意的な傾向把握であることをここでつけ加えておく。

(2) ここで言う「大型」「小型」に厳密な規定はない。重量と，紐掛部間の値との相関関係を見てわかるのは，せいぜい，重いものは紐掛間が長いということだけである。たしかに，重量では20ｇ前後，紐掛間では4cm前後に集中することは認められるが，領域として認めていいのかどうか不安である。したがって，ここでは感覚的な表現として「大型品」「小型品」を使っている。一応の目安としては「大型品」は50ｇ以上，「小型品」は10ｇ以下として扱っている。

(3) I 清水潤三・鈴木公雄「第10章　加曾利北貝塚出土の特殊遺物」『貝塚博物館資料№3　加曾利貝塚III　昭和40・41・42年度加曾利北貝塚調査報告』　千葉市加曾利貝塚博物館　1970

II 今井公子「第7章　土製品」『貝塚博物館資料№4　加曾利貝塚IV　昭和43年度加曾利北貝塚調査報告』　千葉市加曾利貝塚博物館　1971

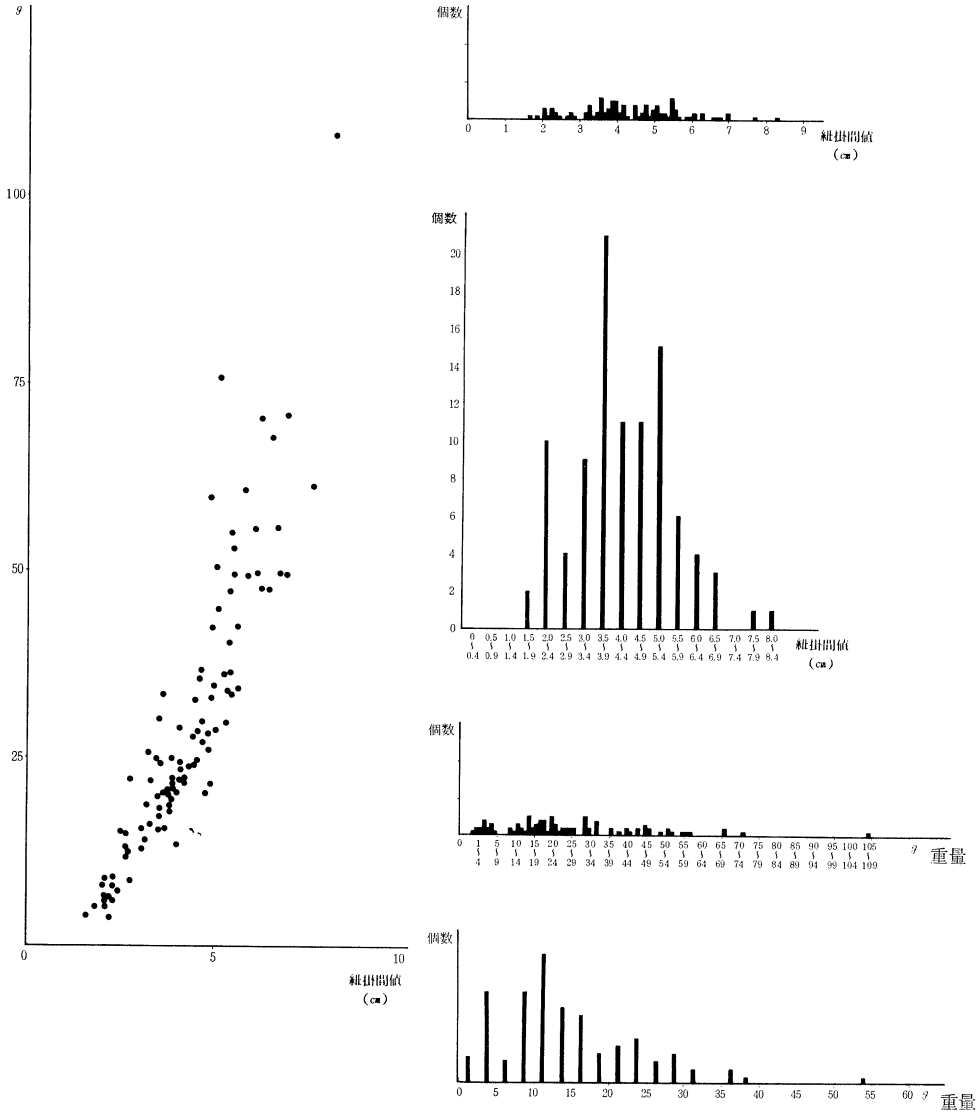
III 鷹野光行「第8章　土製品　第4節　土錘」『西広貝塚－上総国分寺台遺跡調査報告III－』上総国分寺台遺跡調査団　1977

IV 田中　豪「第三編　水砂遺跡　2章　遺構と遺物　2．縄文時代」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書I－館林，水砂，花前II－1』　財団法人　千葉県文化財センター　1982

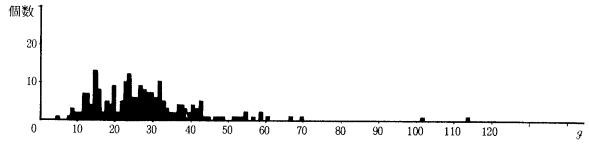
(4) 土器片錘自体のもつ要素としては重量だけでなく，形状，大きさ，紐掛部間の長さ，使用部位，製作技法等考えられ，本来ならばそれら諸要素を綜合的に検討するべきであるが，報告書という限られた二次元の空間において，視覚的に表現するのに有効であり，かつ他遺跡における共通の計測要素として重量計測が用いられているという状況から，重量分布のみをとりあげた次第である。しかし，用途の問題ともかかわってくるが，使用期間の長短，使用状況等による摩耗があるはずであるが，その度合を抽出する方法は不明であり，製作時の重量分布をどの程度反映しているかも不明である。なお，側面の磨り加工を，使用時における摩耗の痕跡と考えることもできようが，表面・裏面に著しい摩耗は認められず，側面のみ摩耗するような使用形態を考えざるを得ず，それに対する有効な解答は得られなかったので，ここでは技法の一種として扱った。なお，県文化財センター調査区域における出土資料に関しては，電算機処理を行うということであり，分析結果が期待される。

(5) たとえば，前掲(3)I文献中の報告者の指摘。また同文献中の後藤和民氏の「編集追記」中のコメントも参照されたい。
ただし，広い意味での「錘具」と言った場合どのような利用形態を想定し得るのか，その点の検討なしに，「漁網錘」であることに対する疑問を投げかけても，批判たり得ないと思われる。
それは今回の報告も含めて反省すべき点である。

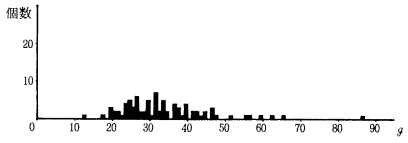
付記：この項をまとめるにあたっては，宇田川恵・米田耕之助両氏には大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。



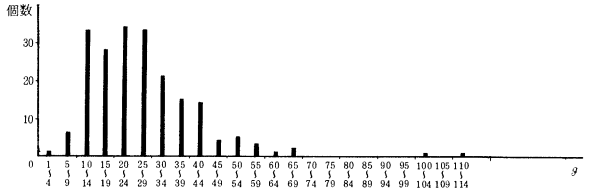
第56図　土器片錘計測値グラフ

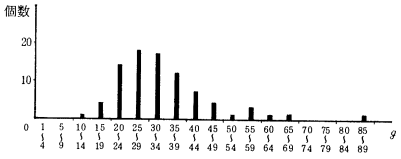


水 砂 遺 跡
（中 期）



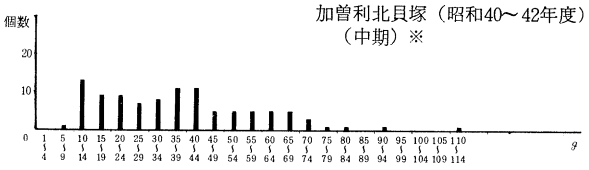
西 広 貝 塚
（後・晩期）



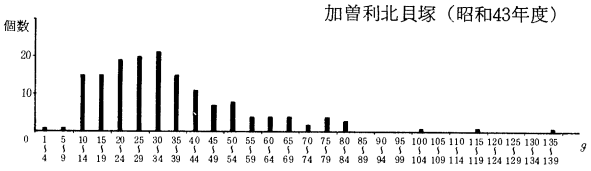


※加曽利北貝塚は中～後期にまたがる貝塚であるが、土器片錘はほとんど加曽利Ｅ式土器の破片を使用している。

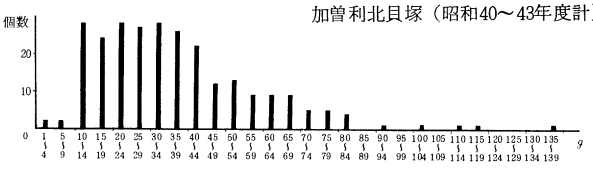
加曽利北貝塚（昭和40～42年度）
（中期）※



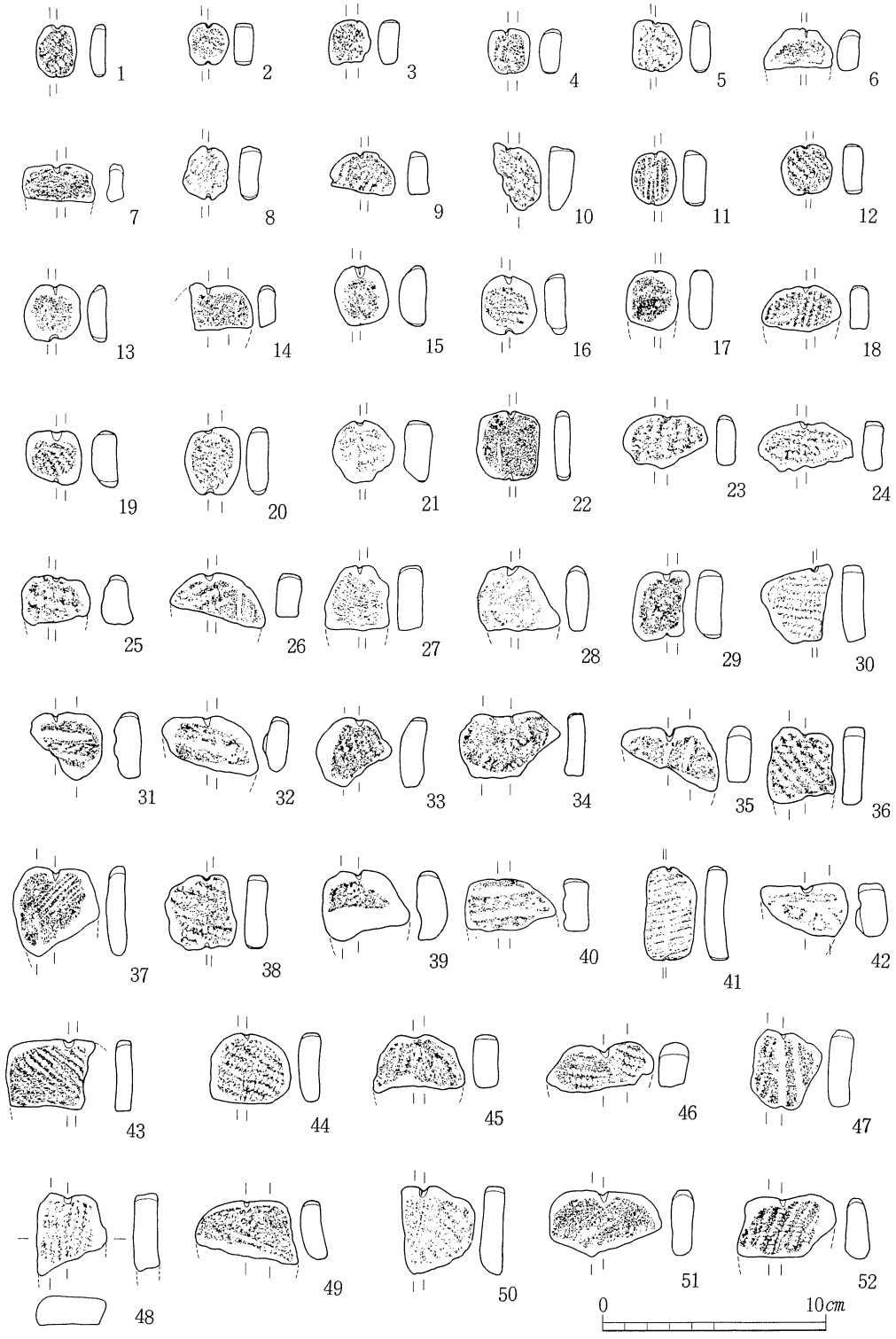
加曽利北貝塚（昭和43年度）



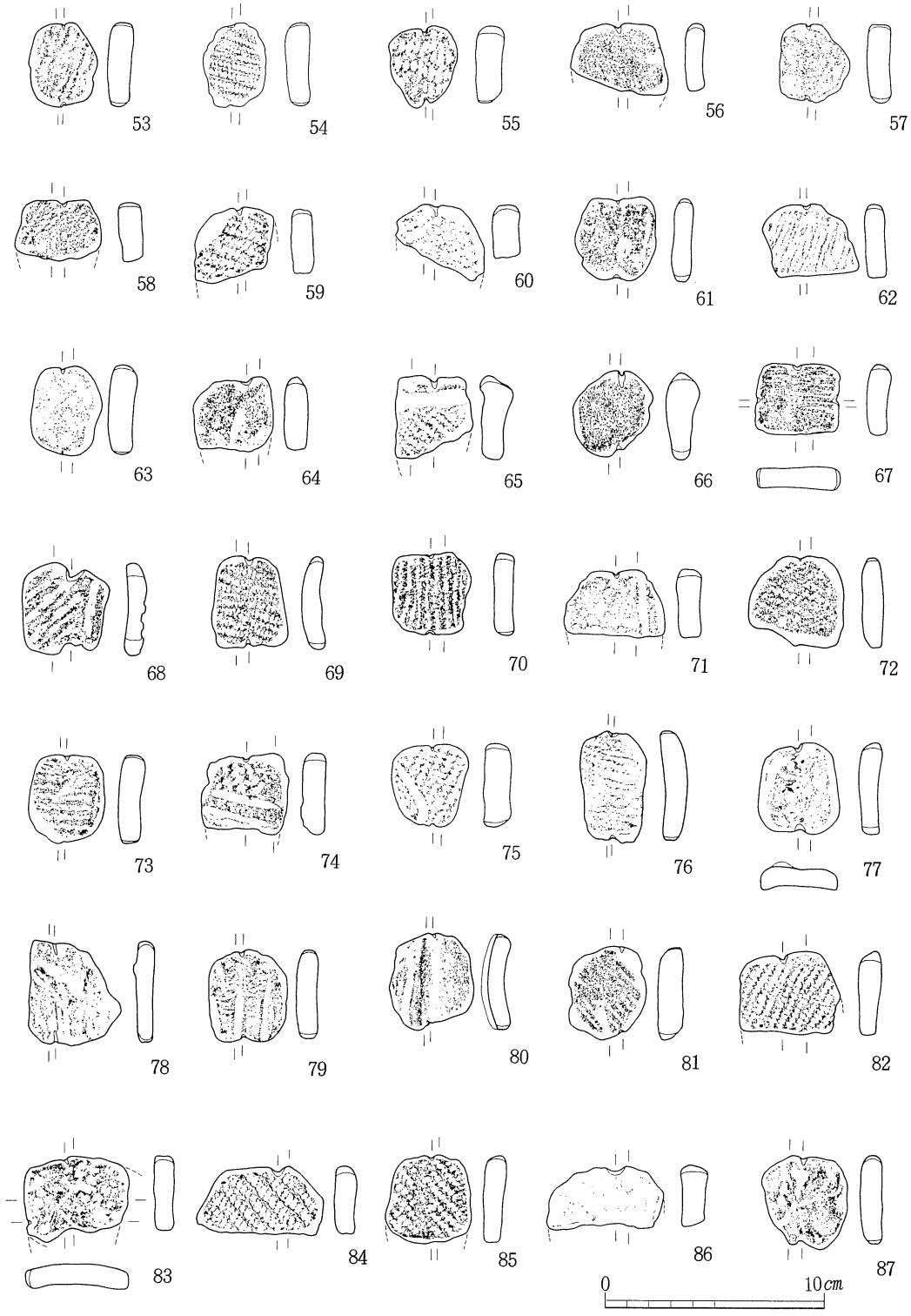
加曽利北貝塚（昭和40～43年度計）



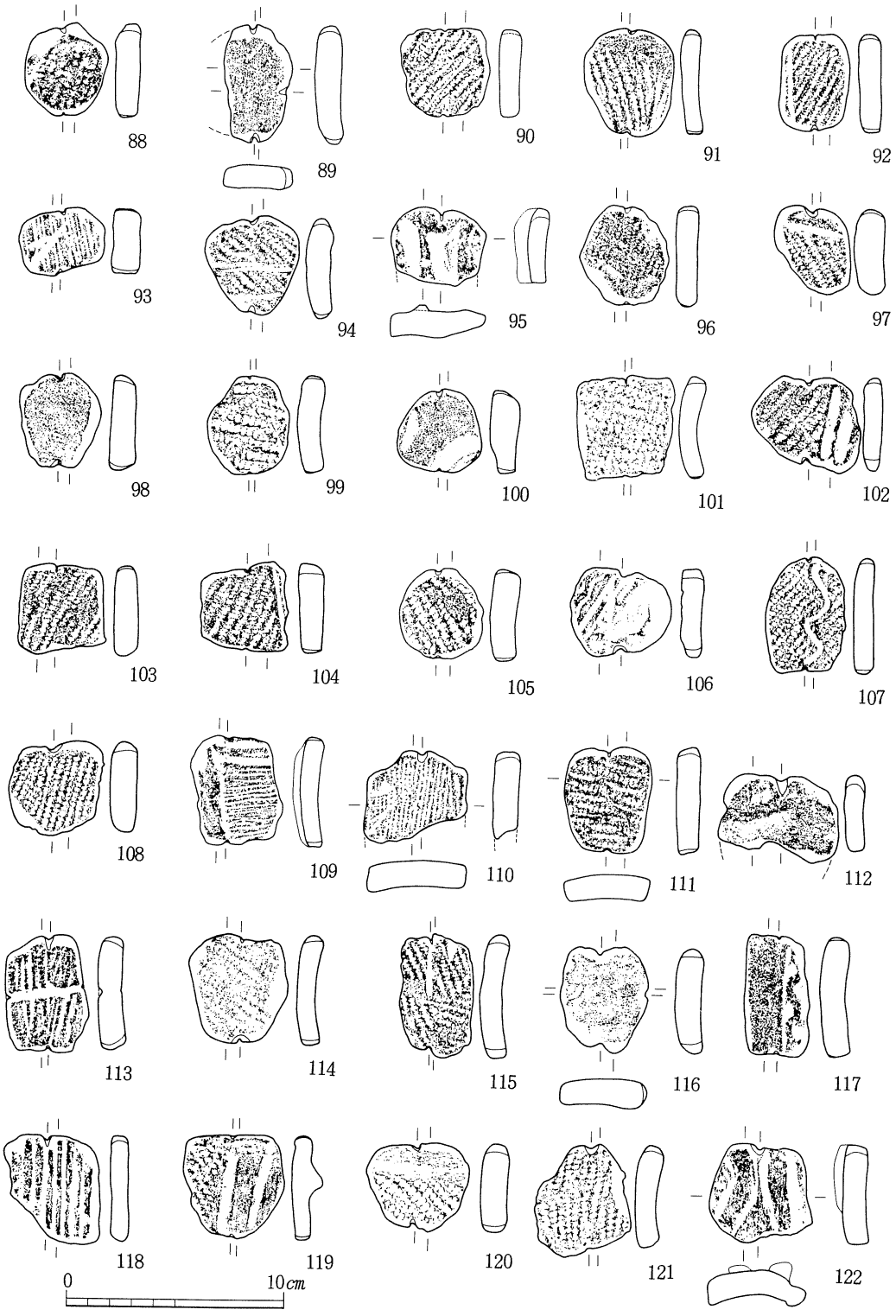
第57図　諸遺跡出土土器片錘重量分布図



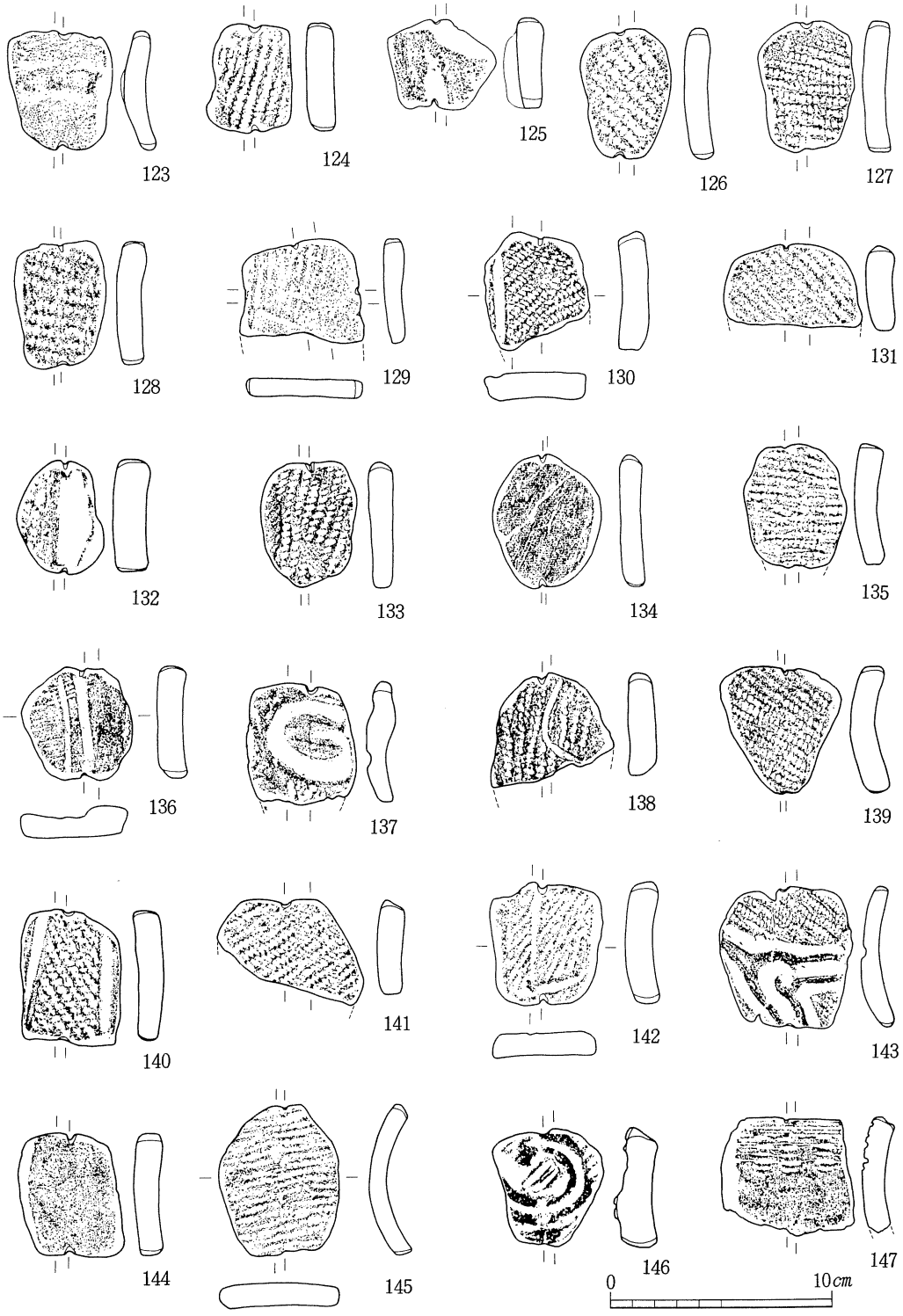
第58図　土器片錘実測図（１）（1/3）



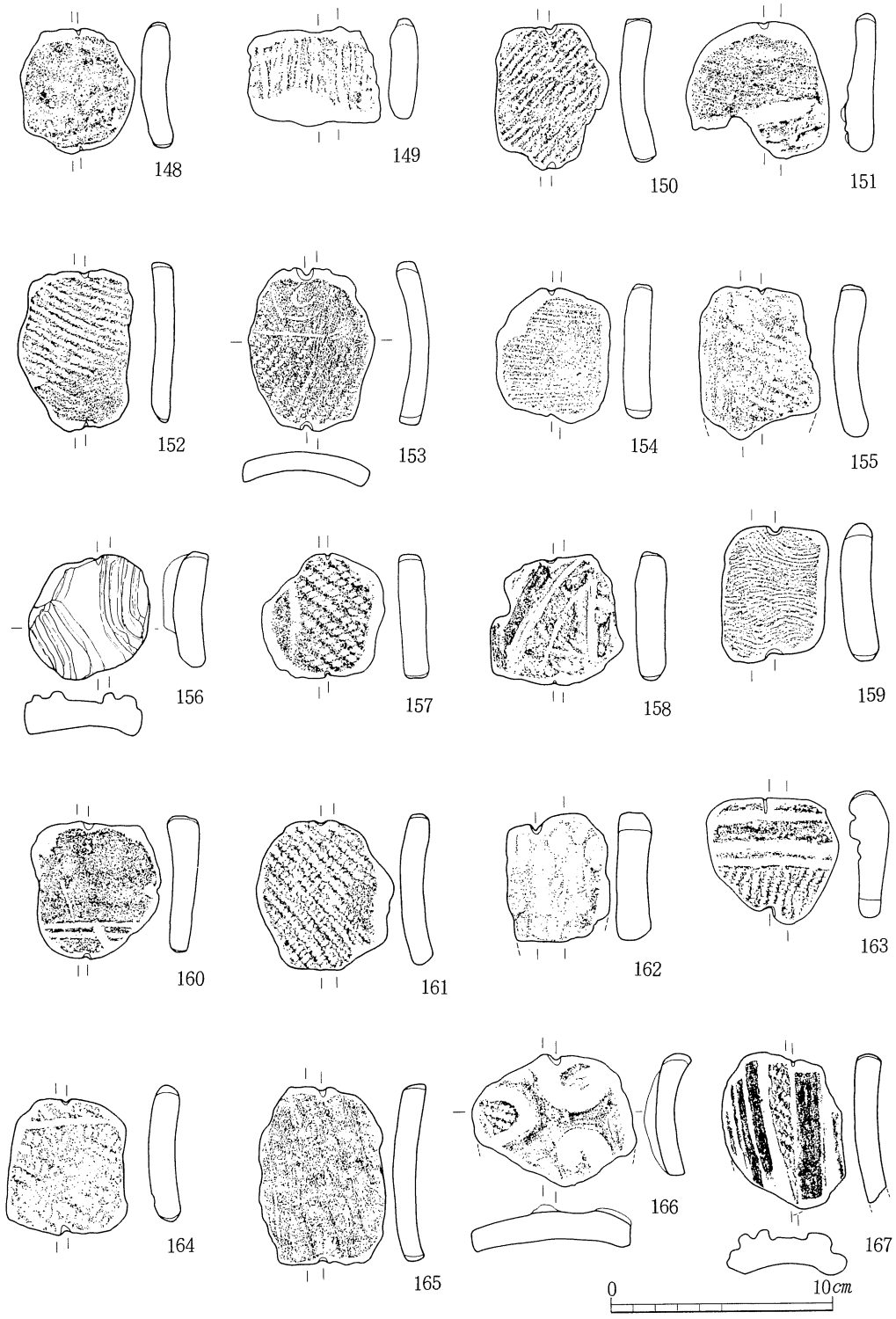
第59図　土器片錘実測図（２）（1/3）



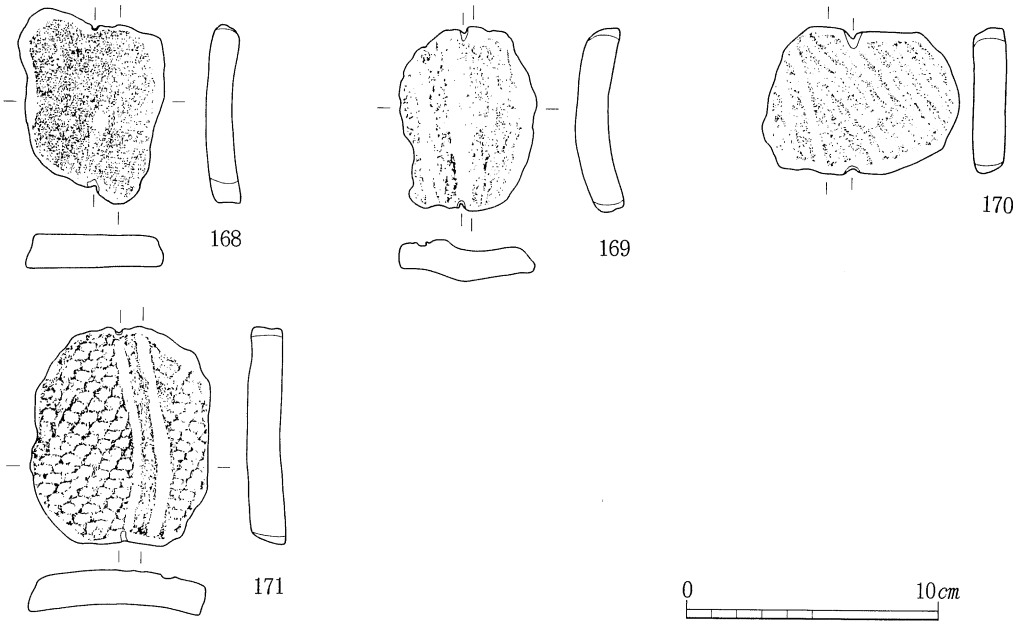
第60図　土器片錘実測図（3）（1/3）



第61図　土器片錘実測図（４）（1/3）



第62図　土器片錘実測図（5）（1/3）



第63図　土器片錘実測図（6）（⅓）

第 1 表　土器片錘計測表

遺物番号	重 量(g)	紐掛間値	側面加工	使用部位	出土地点	備　　考
1	3.8	2.25	B	胴　部	26	紐掛部はしっかりしている
2	4.0	1.6	A	〃	5	紐掛部は深い
3	(4.0)	(1.7)	B	〃	26	
4	5.0	1.8	B	〃	遺 構 外	紐掛部はしっかりしている
5	5.4	2.1	A	〃	26	形状は不整形
6	(5.4)	(1.5)	A	〃	遺 構 外	
7	(5.6)	(1.5)		〃	44	紐掛部は深い
8	(5.8)	(1.8)	A	〃	24	
9	(6.0)	2.1	A	〃	24	紐掛部は深い
10	(6.0)	(1.2)	B	〃	26	
11	6.1	2.25	B	〃	遺 構 外	
12	6.3	2.1	B	〃	26	紐掛部はしっかりしている
13	6.4	2.2	B	〃	遺 構 外	紐掛部は深い
14	(7.1)	(1.9)	B	〃	〃	
15	7.4	2.45	B	〃	26	
16	7.2	2.3	B	〃	遺 構 外	
17	(7.7)	(2.1)	B	〃	〃	
18	(8.4)	(1.9)	B	〃	〃	
19	8.7	2.1	B	〃	45	紐掛部は深い
20	8.7	2.75	B	〃	遺 構 外	
21	9.0	2.3	B	〃	〃	
22	9.4	2.8	B	〃	26	
23	(9.5)	(2.2)	B	〃	26	
24	(9.7)	(1.9)	B	〃	26	側面加工は必ずしも明瞭でない
25	(10.3)	(2.1)	A	〃	遺 構 外	
26	(10.7)	(1.75)	C	〃	24	
27	(10.8)	(2.8)	A	〃	遺 構 外	
28	(11.1)	(2.55)		〃	〃	形状は不整形
29	(11.7)	2.65	B	〃	5	
30	(11.7)	(3.1)	C	〃	21	
31	(11.8)	(1.7)	B	〃	26	
32	(12.1)	(2.15)	A	〃	遺 構 外	
33	(12.2)	(2.5)	B	〃	〃	
34	(12.3)	(2.2)	B	〃	26	
35	(12.3)	(1.4)	B	〃	遺 構 外	紐掛部は深くととのっている
36	(13.0)	(2.65)	B	〃	26	
37	(13.2)	(3.05)	B	〃	遺 構 外	
38	13.3	3.05	A	〃	〃	四角形状
39	(13.3)	2.1	A	〃	〃	
40	(13.4)	(2.2)	B	〃	5	

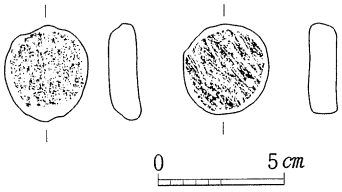
遺物番号	重 量(g)	紐掛間値	側面加工	使用部位	出土地点	備　　考
41	13.3	4.0	B	胴　部	21	Bは部分的に見られる
42	(13.6)	2.1	C	〃	遺 構 外	
43	(14.0)	(3.0)	B	〃	19	形状は四角形になるか
44	(14.1)	(3.0)	C	〃	24	
45	(14.2)	(2.35)	B	〃	45	
46	(14.2)	(1.6)		口縁部	遺 構 外	紐掛部は深い
47	14.3	3.2	B	胴　部	5	Bは部分的に見られる
48	(14.8)	(2.75)	B	〃	26	Bは部分的に見られる
49	(14.8)	(2.05)	C	〃	45	Bは部分的に見られる
50	(14.8)	(3.7)		口縁部	26	
51	(15.0)	2.5	B	胴　部	遺 構 外	紐掛部は深い
52	(15.0)	(2.5)	A	〃	〃	
53	15.4	3.5	B	〃	26	Bは部分的に見られる
54	15.6	3.7	B	〃	5	
55	15.6	3.5	A	〃	26	
56	(15.6)	(2.75)	B	口縁部	遺 構 外	
57	16.0	3.3	C	胴　部	〃	Bは部分的に見られる
58	(16.0)	(2.6)	B	〃	〃	
59	(16.2)	(2.95)	A	〃	〃	
60	(16.8)	(2.6)	A	〃	21	
61	17.0	3.4	B	〃	遺 構 外	
62	(17.4)	3.2	B	〃	26	Bは部分的に見られる
63	17.7	3.8	B	〃	遺 構 外	
64	(17.9)	(3.1)	C	〃	26	
65	(18.0)	(3.05)	A	口縁部	遺 構 外	四角形状
66	(18.2)	3.2	A	胴　部	〃	紐掛部は深い
67	18.2	3.55	B	〃	44	両方向に紐掛部あり
68	18.3	3.15	B	口縁部	26	紐掛部は深い、不整形
69	18.5	3.8	B	胴　部	26	四角形
70	18.6	3.45	C	〃	24	Bは部分的に見られる
71	(18.7)	(2.7)	B	〃	19	Bは部分的。紐掛部は深い
72	(19.0)	(3.9)	B	〃	26	
73	19.2	3.85	B	〃	遺 構 外	
74	(19.3)	(2.9)	A	〃	4	
75	19.9	3.5	A	〃	20	
76	20.3	4.75	C	〃	20	Bは部分的に見られる
77	20.3	3.65	B	〃	遺 構 外	四角形状
78	(20.3)	4.45	A	〃	〃	
79	20.5	3.75	A	〃	〃	
80	20.7	4.0	A	〃	26	
81	20.8	3.8	A	〃	遺 構 外	
82	(20.8)	(3.3)	B	〃	19	Bは部分的に見られる
83	(20.9)	(3.25)(4.2)	A	〃	遺 構 外	両方向に紐掛部

遺物番号	重 量(g)	紐掛間値	側面加工	使用部位	出土地点	備　　考
84	(20.9)	(2.85)	B	胴　部	26	
85	21.0	3.85	B	〃	遺 構 外	
86	21.0	2.35	A	〃	21	
87	(21.4)	3.75	(A)	〃	遺 構 外	
88	21.5	3.85	B	〃	〃	
89	21.6	4.9(2.55)	B	〃	〃	両方向に紐掛部
90	22.1	3.9	C	〃	44	
91	22.1	4.2	B	〃	45	
92	22.2	4.1	B	〃	遺 構 外	
93	22.3	2.75	B	〃	〃	Bは部分的に見られる
94	22.4	4.15	B	〃	〃	三角形状
95	(23.1)	(3.1)	B	口縁部	26	
96	23.5	4.35	A	胴　部	遺 構 外	
97	(23.5)	3.7	B	〃	24	
98	23.7	4.1	A	〃	26	
99	23.9	4.4	B	〃	遺 構 外	
100	24.3	3.55	B	〃	24	
101	24.5	4.1	A	〃	遺 構 外	
102	24.7	3.5	B	〃	〃	
103	(24.7)	(3.75)	B	〃	〃	
104	24.8	3.5	A	〃	24	
105	25.1	3.9	B	〃	遺 構 外	
106	25.8	3.25	B	〃	〃	紐掛部は深い
107	26.0	4.85	B	〃	3	
108	(26.8)	3.95	B	〃	26	Bは部分的に見られる
109	27.3	4.7	A	〃	遺 構 外	
110	27.5	3.5	A	〃	26	
111	27.7	4.4	B	〃	26	
112	(27.8)	(2.9)	C	〃	遺 構 外	Bは部分的に見られる
113	28.1	4.8	C	〃	26	
114	28.5	4.5	B	〃	45	
115	28.8	5.0	C	〃	24	
116	29.0	4.1	A	〃	33	
117	29.2	5.3	A	口縁部	遺 構 外	
118	(29.4)	(4.2)	A	胴　部	〃	
119	30.0	4.7	C	口縁部	〃	
120	30.3	3.5	C	胴　部	7	Bは部分的に見られる
121	(30.3)	(4.45)	A	〃	遺 構 外	
122	(31.4)	(3.95)	B	口縁部	2	Bは部分的，紐掛部は深い
123	33.1	4.95	B	胴　部	遺 構 外	Bは部分的，紐掛部は深い
124	33.1	4.6	B	〃	〃	
125	33.4	3.65	B	口縁部	44	五　角　形
126	33.7	5.45	B	胴　部	19	

遺物番号	重　量(g)	紐掛間値	側面加工	使用部位	出土地点	備　　考
127	34.3	5.6	C	胴　部	2	Bは部分的に見られる
128	34.4	5.35	B	〃	遺構外	
129	34.7	5.4(4.0)	B	〃	〃	Bは部分的，両方向に紐掛部
130	(34.9)	(4.35)	C	〃	26	Bは部分的に見られる
131	(35.9)	(3.4)	B	〃	遺構外	
132	36.2	4.6	B	〃	24	
133	36.2	5.25	B	〃	遺構外	Bは部分的に見られる
134	36.4	5.69	B	〃	〃	
135	36.4	5.4	B	〃	〃	
136	36.7	4.65	C	〃	26	Bは部分的に見られる
137	(38.8)	(5.1)	A	口縁部	9	紐掛部は深い
138	(40.1)	(4.5)	B	胴　部	遺構外	
139	40.3	5.4	B	〃	〃	三角形状
140	40.3	5.65	A	〃	〃	
141	(41.2)	(3.6)	A	〃	〃	
142	42.3	4.95	B	〃	26	
143	44.3	5.95	A	〃	5	
144	44.9	5.1	C	〃	遺構外	Bは部分的に見られる
145	45.5	6.45	C	〃	26	Bは部分的に見られる
146	46.0	4.9	B	〃	遺構外	
147	(46.7)	(5.0)	A	〃	遺構外	
148	46.8	5.4	A	〃	〃	
149	47.1	4.0	A	〃	4	
150	47.5	6.25	A	〃	遺構外	
151	(49.0)	6.0	B	口縁部	26	
152	49.3	6.9	A	胴　部	遺構外	
153	49.5	6.75	A	〃	2	
154	49.5	5.55	B	〃	遺構外	Bは部分的に見られる
155	49.7	6.1	C	口縁部	〃	
156	50.9	5.0	B	胴　部	2	紐掛部は深い，三角形状
157	51.3	5.25	C	〃	5	Bは部分的に見られる
158	52.9	5.5	A	口縁部	遺構外	文様帯磨滅
159	55.0	5.45	B	胴　部	〃	Bは部分的に見られる
160	55.4	6.05	C	〃	〃	Bは部分的に見られる
161	56.5	6.7	B	〃	〃	Bは部分的に見られる
162	(58.1)	(4.9)	A	口縁部	〃	
163	59.0	4.9	B	胴　部	5	紐掛部は深い，三角形状
164	60.7	5.8	A	〃	遺構外	
165	61.1	7.6	A	〃	24	紐掛部は深い
166	62.3	5.6	B	〃	19	
167	67.5	6.5	A	口縁部	24	
168	70.5	6.2	A	胴　部	26	
169	70.7	6.9	A	〃	遺構外	
170	75.9	5.15	B	〃	〃	
171	108.6	8.2	A	〃	26	

土器片利用の円板（第64図，図版40）

土器片を再加工した円板は2点出土している。いずれもほぼ円形を呈し，大きさ，重量ともに近似した値を示している。周縁部の加工土器片錘で見られたC種，すなわち，打ち加工ののち磨り加工を行う技法によっている。土器片の帰属形式は両例とも不明である。



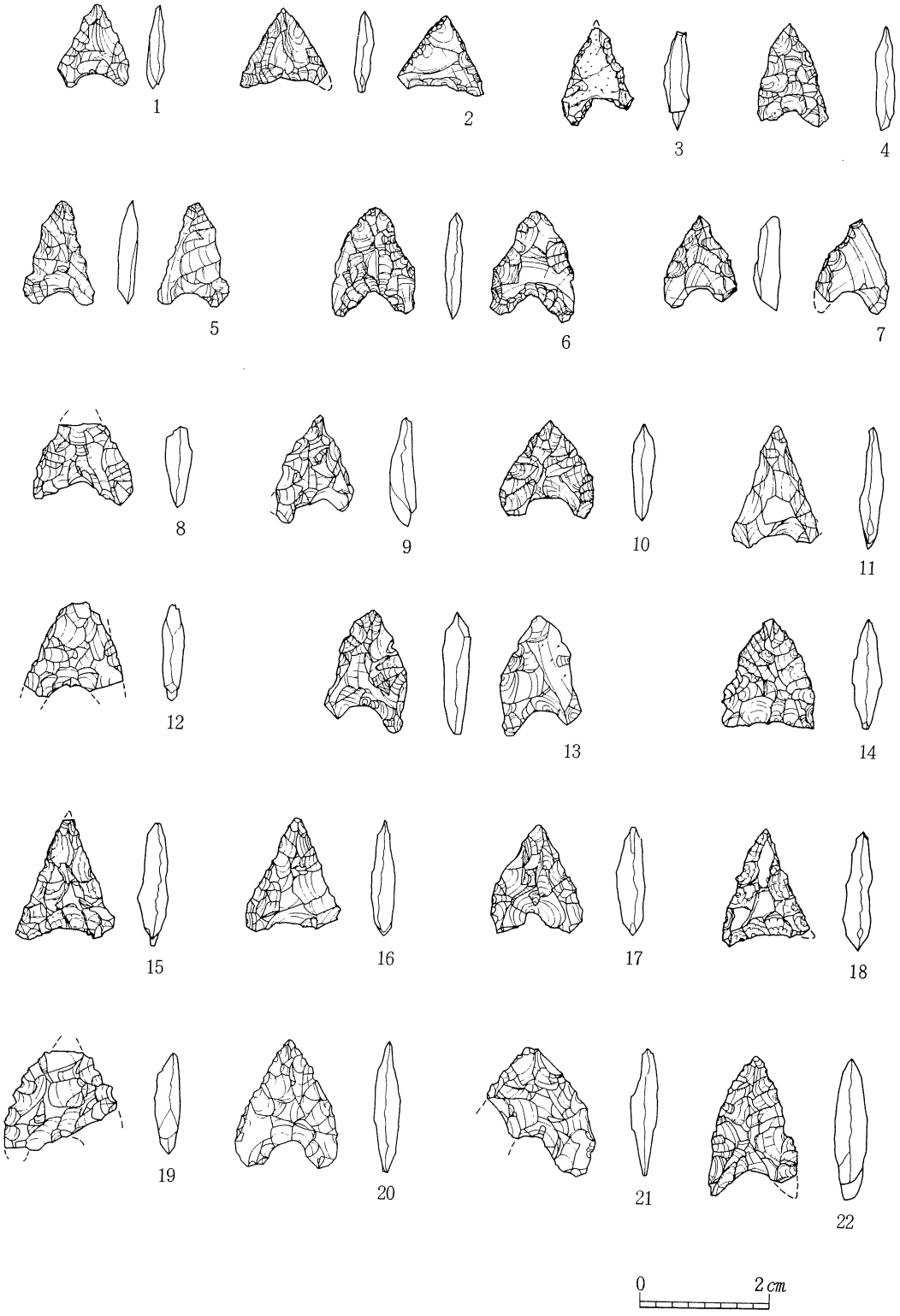
第64図　土器片利用の円盤実測図（1/3）

石器（第65～71図，図版40～41）

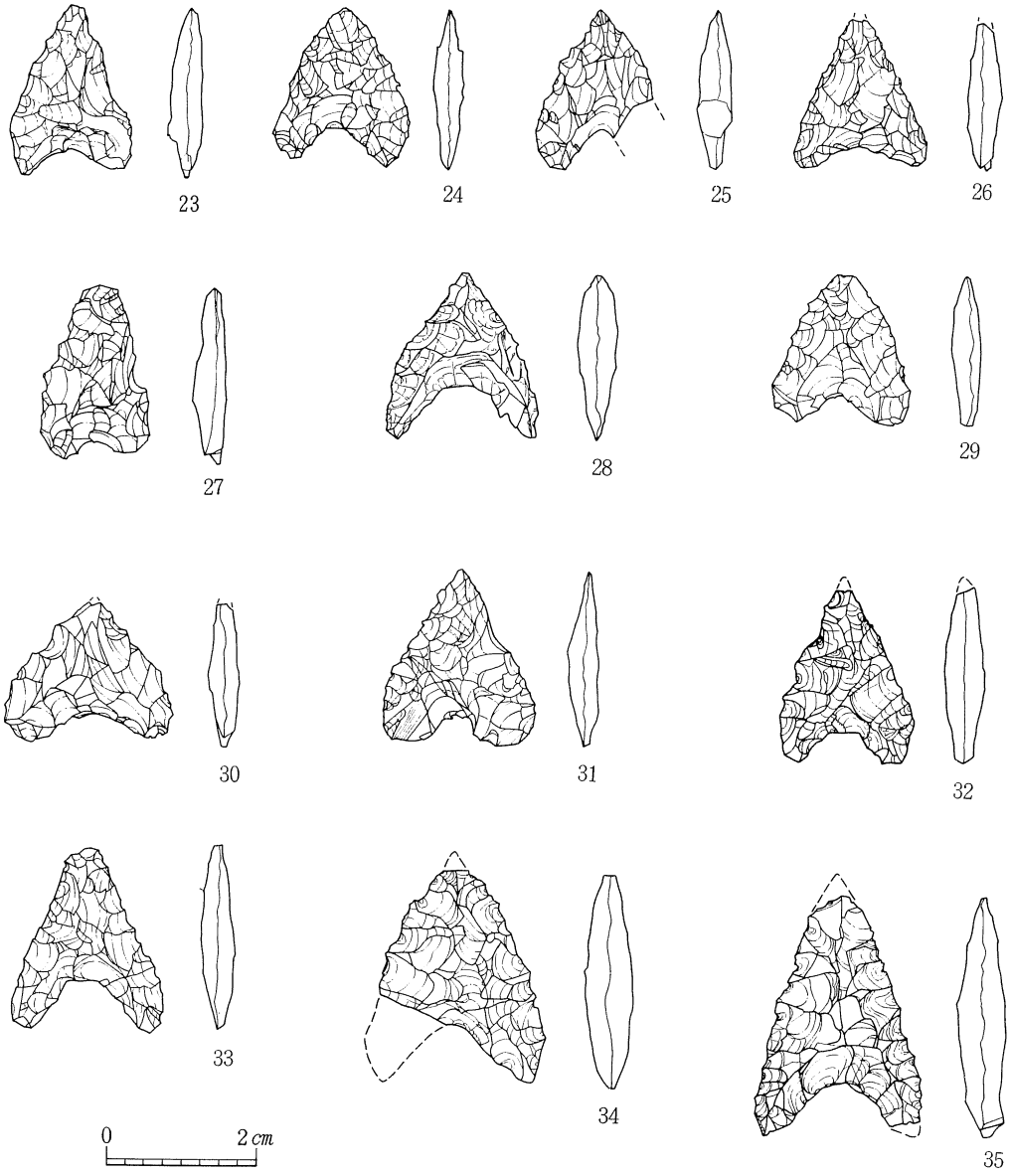
今回の調査で出土した石器は石鏃，剝片，石斧（打製・磨製），敲石，石剣等である。確実に遺構に伴うと言い得る例は皆無に等しいが，4号址の覆土中より200点を越える黒曜石の剝片が集中して出土している。ほとんどが0.1gに満たず，時間的制約もあり図示し得なかったが，一括投棄という感もある。

石鏃は完形・欠損品を含めて約80点出土している。黒曜石製がほとんどであるが，わずかにチャート製の例も見られる。形態的には無茎凹基という点では概ね一致しているが，大きさで見るとバラツキがあると言える。しかし，そのバラツキが使用対象物の相違によるか，偶然性の所産であるのかは判断し難い。また，上述の剝片以外にも多くの黒曜石製の剝片が出土している。

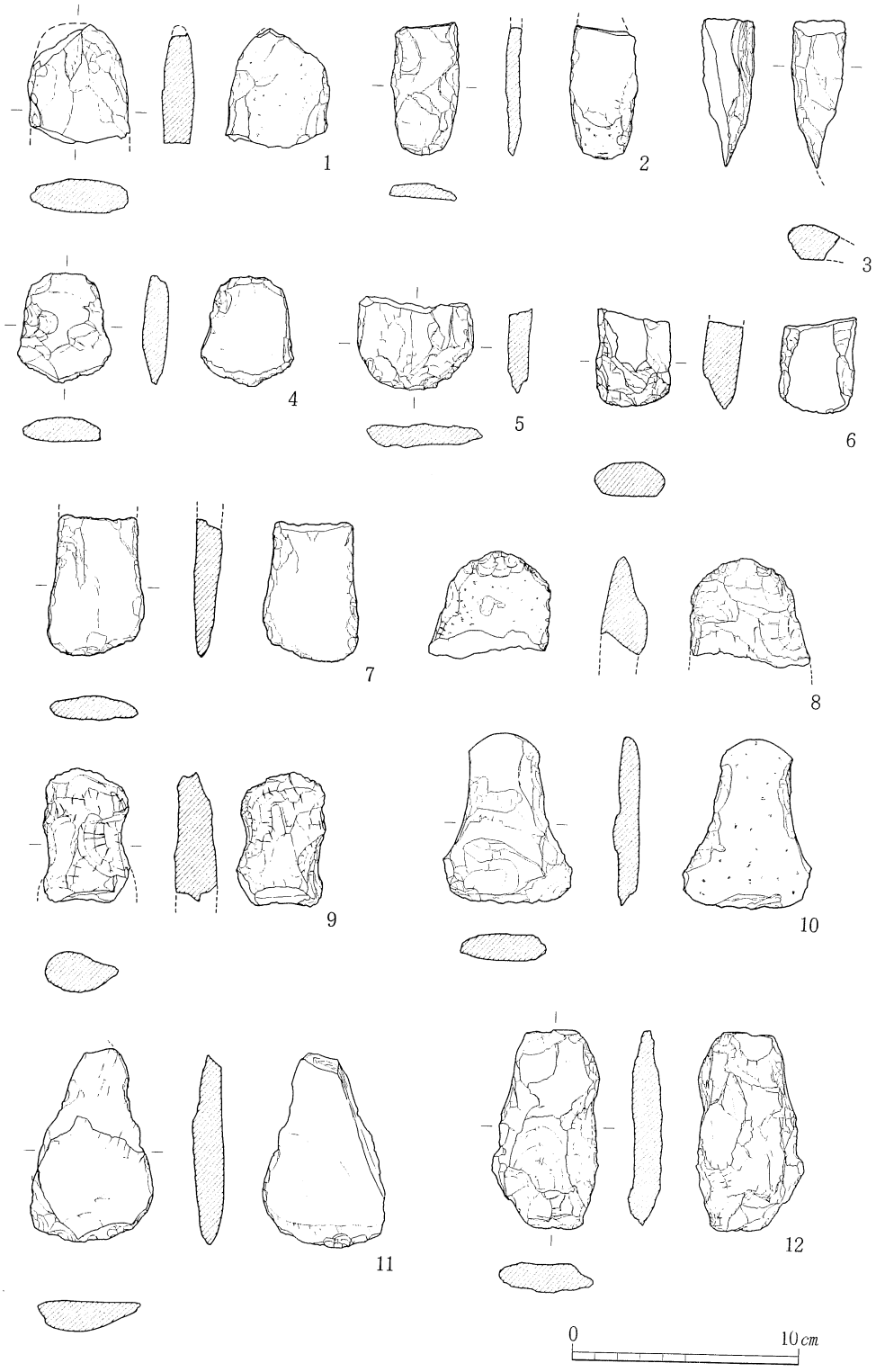
石鏃以外の石器に関しては，実測図，観察表に記載した通りであるが，同一形態に含まれるものでも，その使用形態は同一とは言い難い。たしかに，製品使用開始当初は，使用目的は限定されていたかもしれないが，石という素材のもつ「潜在的使用要素」とでも言うべき多方面の利用の仕方が付加されていたことも考えるべきであろう。当然，限定的使用時点での欠損を境にして別の利用形態がなされた場合も考えなければなるまい。この両者の判別は今回の資料に関してはできなかった。したがって，一つの石器に複数の使用形態が存在しているというのが観察されたという点だけを指摘しておきたい。



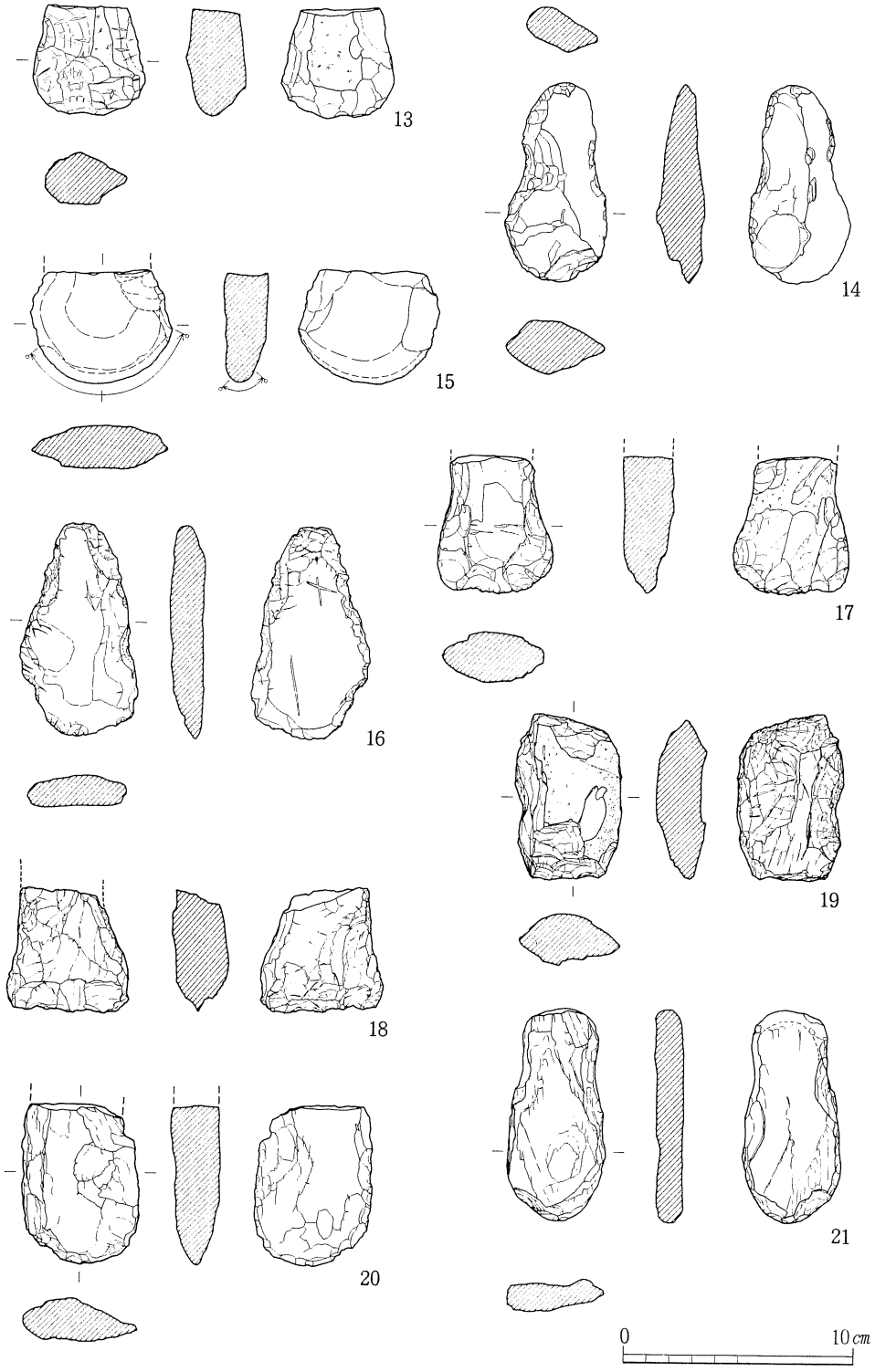
第65図　石鏃実測図(1)



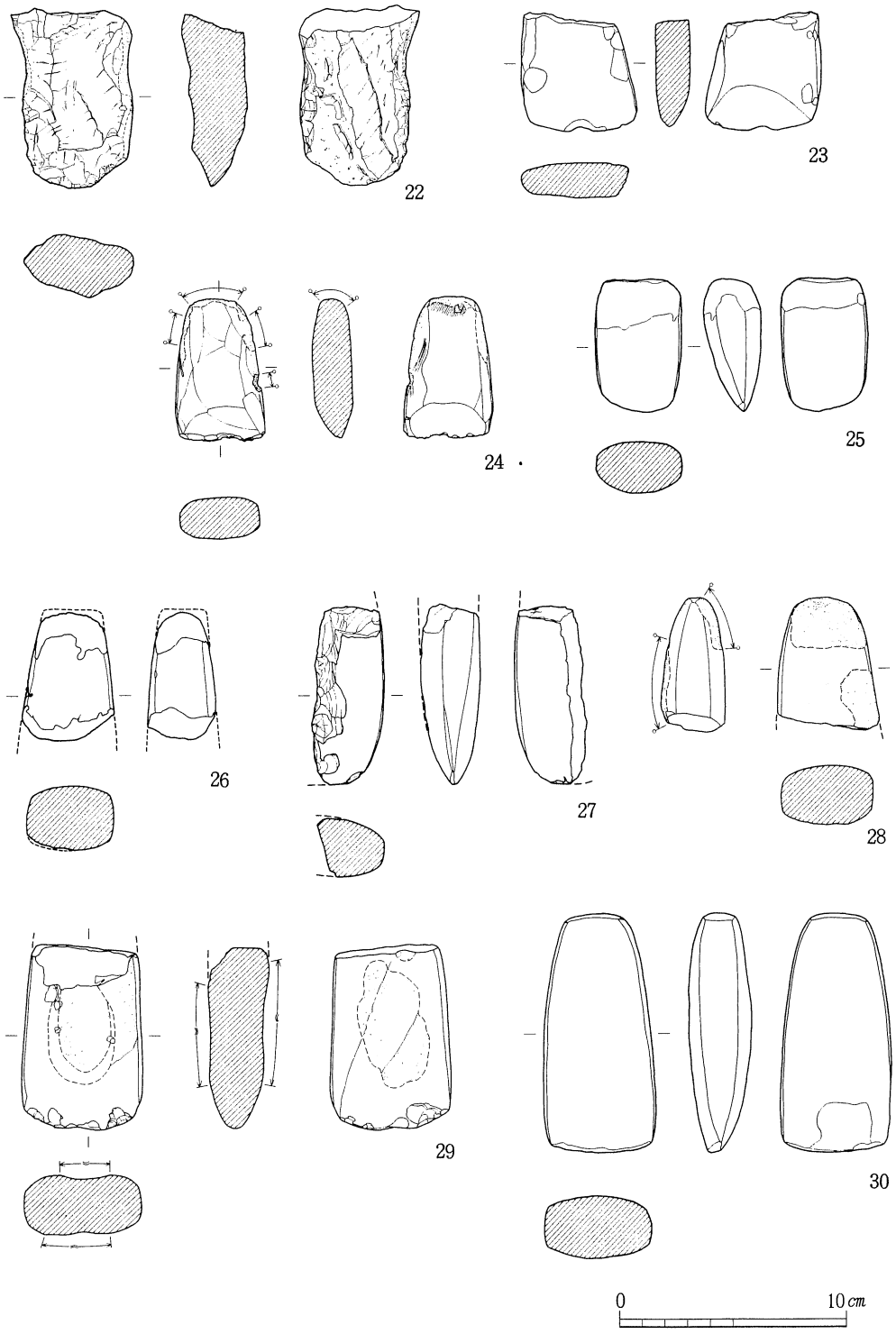
第66図　石鏃実測図(2)



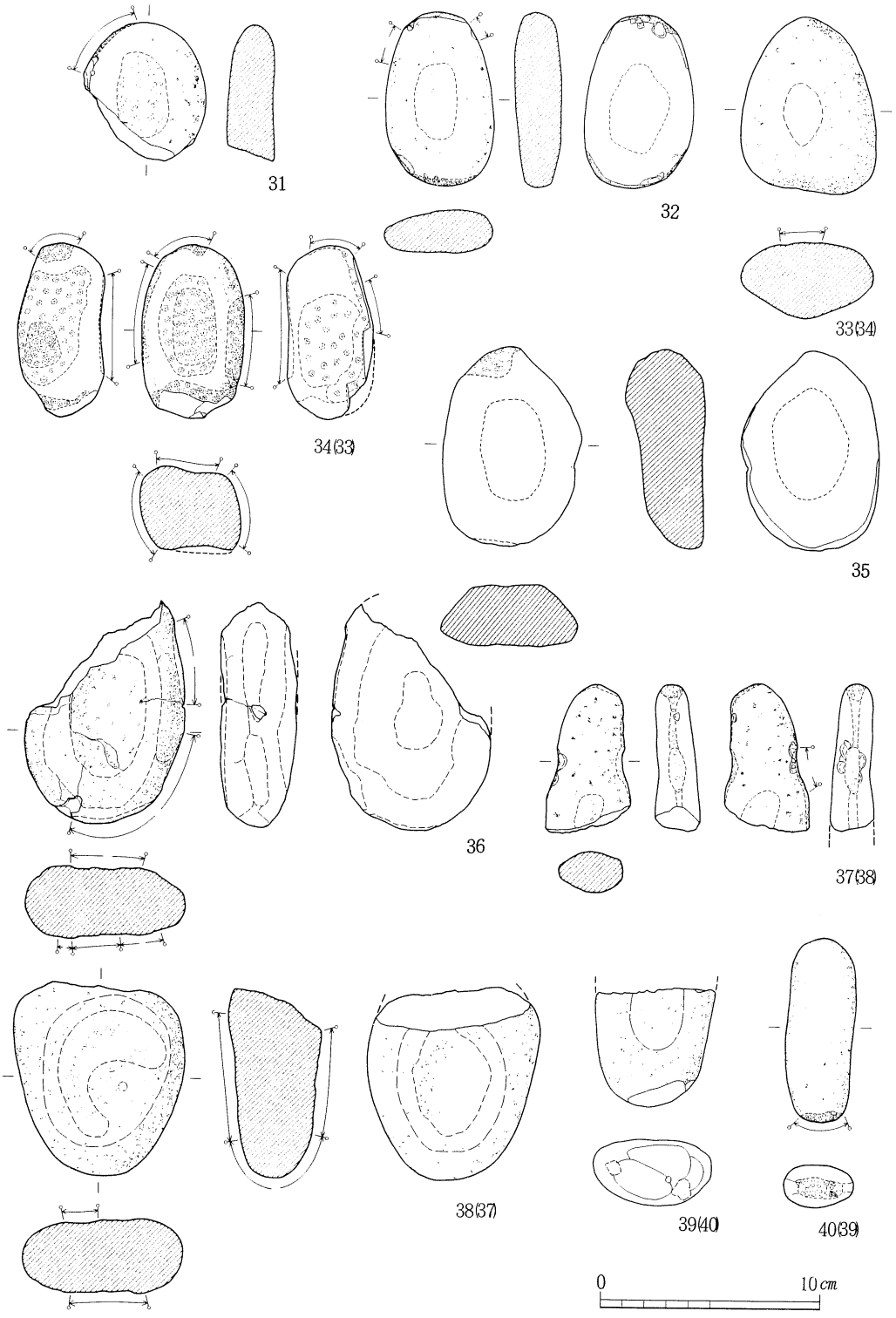
第67図　石器実測図(1)



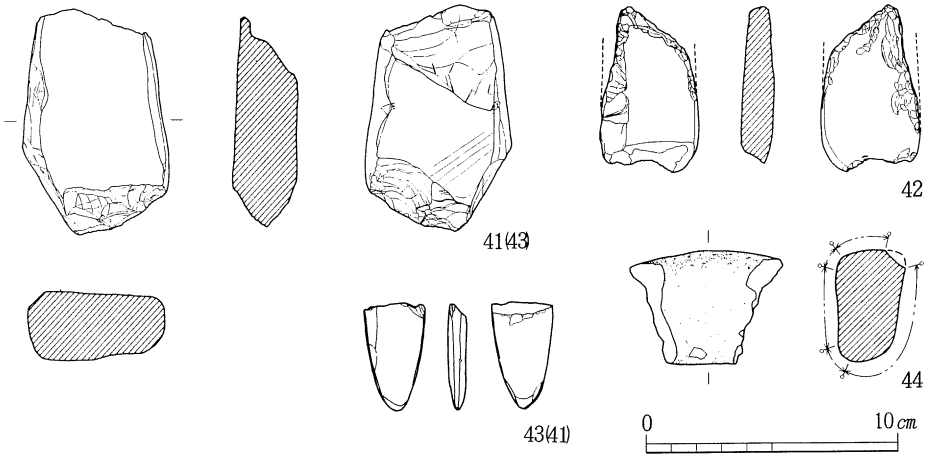
第68図　石器実測図(2)



第69図　石器実測図(3)



第70図　石器実測図(4)（カッコ内は表番号、カッコのないものは表番号に一致）



第71図　石器実測図(5)（カッコ内は表番号、カッコのないものは表番号に一致）

第 2 表　石 器 一 覧 表

図版番号	器種	形態	計測値 最大長	最大巾	最大厚	重量(g)	備考
1	打斧	短冊	5.0	4.3	1.2	46.0	刃部及び基部欠損，側面は刃部近くでは鋭い稜をもつが，中央寄りでは丸味を帯びる。破損部を守り離部の判別困難。原石中に微粒状の凹痕顕著。
2	打製	短冊	(5.9)	3.0	0.7	16.0	基部を欠損する。正面は大胆に剥離され，刃先端は丸身を有し正面側からのみ剥離された片刃である。背面には自然面を残す。
3	打斧	短冊？	6.5	2.2	1.4	26.1	基部欠損，刃部ほぼ全体欠損。側面は全面的に丸味を帯びているが基部寄りの部分で特に著しく，磨光している。
4	打製石斧	短冊	4.7	4.0	0.9	27.9	片刃。刃部先端はわずかに丸味を帯びている。破損部を剥離面の判別が困難であるが，剥離部分が他に比べ少ない感がある。
5	打製石斧	分銅	3.7	5.0	1.0	32.5	基部欠損。刃部先端よりやや右側はやや鈍い。左側はいずれも鋭角的。左右西側縁をも鈍角的。
6	打製	短冊	(4.3)	3.3	1.5	33.6	基部を欠く。両面に自然面を残し，両側面は，剥離後磨滅している。刃部は正面よりも打ち出され片刃を程する。
7	打製	短冊	(6.2)	4.2	1.2	40.3	基部を欠損する。両側面は細い打撃によって作り出され，刃部は正面測からだけの剥離による。
8	打製	短冊	(4.8)	5.1	1.95	48.5	基部を大きく欠損する。全体に雑な剥離で，背面には自然面を残す。両面に面の軟らかな磨耗状の擦痕が多数あり，正面図では左傾斜で右下がりである。
9	打製	分銅	(5.9)	3.5	1.7	52.0	刃部を大きく欠損する。正面左側のくびれは敲打により丁寧に作り出し，右側は剥離のまま。
10	打製	撓	7.5	5.6	1.2	53.8	背面には自然面を残す。
11	打斧	短冊	8.1	5.5	1.3	66.5	右上半及び背面下半欠損。背面下半の欠損は刃部の剥離面を中断させているので，欠損と判断した。色調も若干の相違が見られる刃部先端は丸味を帯び磨光
12	打製石斧	短冊	8.7	4.5	1.0	68.3	刃部左半欠損。刃部右端付近に磨耗痕。ヘラ様の使用によるものか風化により剥離もかかっている箇所が認められる。
13	打製	分銅	(4.8)	4.8	2.5	76.7	基部を欠損する。両側にはそれぞれ自然面を残し加工する。刃部は両面より剥離され作り出され，両刃で刃角は鈍角である。
14	打製	分銅	8.7	4.4	2.3	79.6	両面に自然面を残す剥離は雑である。刃は正面より剥離され，片刃であろうか？
15	打製石斧	分銅	4.6	6.0	1.8	79.7	基部欠損。刃部先端は磨耗により「刃」という状態ではなく，完全に丸味を帯びている。欠損部，破損部を除いてほぼ全面的に表面は細かい凹凸が顕著，敲打による整形を行ったものか。
16	打製	撓	9.3	4.9	1.35	84.7	全体に雑な剥離で背面には自然面を残す。
17	打製	分銅	(5.1)	5.0	2.3	87.5	基部を欠く，くぶれ部は剥離後敲打により作り出され敲打痕は部分的ではあるが全周する。刃先は両面より剥離され，両刃である。石質は粘製が強い。
18	打製	分銅	5.4	6.3	2.3	87.9	基部を欠損する。全体に大胆な剥離痕を残す。正面左側面にわずかに敲打によるくびれ部の作り出しがある。刃部は両面より剥離された両刃である。
19	打製石斧	短冊	6.8	4.5	2.1	90.2	表面に自然面を残す。刃部は両方向からの剥離によっているが先端は刃こぼれによるためか鈍角である。　側面にわずかに択状を呈する部分がある。

図版番号	器種	形態	計測値				備考
			最大長	最大巾	最大厚	重量(g)	
20	打製石斧	短冊	6.8	4.8	2.0	93.3	基部欠損。刃部は両方向からの剥離による。先端は，鋭角気味で刃部両端付近にわずかに，刃こぼれ，右側縁は鋭角であるが，左側縁は鈍角気味。
21	打製	短冊	9.3	4.2	1.3	73.1	両側面のくびれは浅く，敲打後に強いすり削りにより作り出す。刃先は磨滅し丸身を有する。基部は小さく作り出され，端部は強いすり削りで丸身がある。
22	打製	短冊	(7.9)	5.1	2.7	144.1	基部を欠損する。くびれ部は両側面供に敲打により丁寧に作り出し，背面には自然を残す。刃部は正面より剥離して作られる。片刃であろう。
23	磨製	扁平片刃	(5.3)	4.9	1.6	74.1	基部，両側面，刃部中央をそれぞれ欠損する。両側面は再研磨されるが不完全，刃部 片刃であり再研究する。
24	磨製石斧		6.2	3.8	1.8	80.7	刃部欠損。表面，裏面共に擦痕が顕著　頂部及び頂部付近の両側面に敲打痕，側面に択状に欠けている部分があるが意図的なものかどうか不明，全面的に磨光あり。
25	磨製石斧		5.7	3.6	2.4	84.0	わずかに刃こぼれ，刃部に平行する擦痕がわずかに認められる。頂部及びその周縁に敲打痕がある。
26	磨製石斧		(5.4)	(3.9)	2.4	91.5	刃部側半欠 頂部周縁及び表面に敲打痕。背面及び欠損部に亀裂が顕著。風化によるものか。
27	磨製石斧		(7.8)	(2.9)	2.6	99.9	半欠，基部も欠く。表面欠損部側に剥離状痕，器面ほぼ全面に刃部に直行する方向の擦痕が顕著，全面的磨光。
28	磨製石斧		(5.4)	(4.7)	2.8	119.9	刃部側半欠，全面的に磨光し，刃部に直行する形で擦痕が顕著。表面，背面，頂部付近に敲打痕。
29	磨製石斧		(7.8)	5.1	2.7	218.7	基部欠損。刃部は刃こぼれにより，丸味を帯びている。両面，背面に浅く凹面形成。欠損後の再まり用によるものか。
30	磨製石斧		10.5	4.4	2.7	234.2	実形，刃部は刃こぼれにより，全面的に丸味を帯び一部では平面左形成するに近い状態に　っている。頂部以外で磨光が著しい。
31	磨製石斧		5.6	5.8	2.0	99.9	片側平担面にのみ敲打痕，側縁の中央よりやや偏った部分にも敲打痕あり。
32	磨製石斧		7.8	4.9	2.0	138.5	平担面両面中央に敲打痕，上端，下端にも敲打痕あり，平担面よりも顕著。 平担面の敲打部はザラついた感じであるが，両端面はやや光沢がある。
33	磨石		7.5	5.7	3.2	235.6	全面的に表面は滑らかであり，図示部分はややザラついた感じ
34	磨石		7.8	4.5	3.4	213.7	角柱状礫使用，敲打痕が各面（6箇所）に見られる。凹面を形成している面を正面 背面には，横方向からの打撃による剥離面があり設射状の痕跡がわずかに見られる。
35	磨石		8.9	6.2	3.5	248.6	両面に磨耗面，わずかに長軸方向の擦痕が見られる。両端部に敲打痕。上端部の敲打は面的
36	磨石		8.0	7.1	3.3	300.0	平担面両面共に，中央部でやや凹で細かい凸凹が顕著で若干色調を異にする（灰色気味），側面端部に敲打痕あり。全体的亀裂が入っている。
37	打石		6.8	3 8	1.95	60.7	両側面に敲打によって作り出された，くびれのある石製品である。
38	磨石		8.4	7.4	3.4	365.0	平担面両面ともに重味を帯び磨耗している。その外縁には磨耗した暗赤紫色の部分が見られる。破損面にも磨耗あり。擦痕は認められない。
39	磨石		4.7	5.3	2.7	135.0	半欠，端部に磨耗面が2つあり，その面同士の境界に稜を形成，擦痕は見られない。正面及び背面にわずかに使用痕，敲打によるか磨耗によるか不明。背面は黒褐色を量し，石英が溶けている。熱を受けたものと考えられる。
40	敲石		8.2	2.9	1.9	76.8	片側端部のみに敲打痕
41	打製	短冊	(8.9)	5.8	2.25	200.9	肉厚で重量感があり，石質は軟質である。両面・両側面には自然面を残し，刃部のみに剥離痕を残す。剥離は両面よりのもので両刃である。
42	磨製	扁平片刃	(6.6)	3.9	1.25	48.7	基部，両側面，刃部を大きく欠損する。側面と両面は丁寧に研磨されるが，陵線を作ることなく丸身を持って仕上げている。
43	石剣		(4.25)	2.4	0.65	9.7	石剣の刃先片であろう？両側面の刃部は面取りされ平担に仕上げられる。
44	磨石		6.0	4.5	3.1	90.7	両端を欠損する。正面と両側面に磨耗痕を残し，正面は磨耗によりややくぼむ。

弥生時代の概観（第72図）

縄文中期をもって一旦は途絶えたこの草刈台地の利用が再び活発になるのは弥生時代中期に入ってからである。村田川南岸では，菊間，大厩の両集落が出現しており，村田川を挟んで同時期の集落が対峙している。しかし，今回の調査範囲にはこの時期の遺構はまだ及んでおらず後期に至って，住居址が出現し始める。

当該期の遺構は住居址４軒のみである。平面形態としては円形（19,20 ）小判形（21）隅丸方形（22）がある。ただし，この22号址は，出土土器からすると，古墳時代への移行期と言えるかもしれない。いずれの住居址も，半分を欠失していたり，後世に土拡が掘られたりしていて，完全な形態を残していたものは皆無であり，後世におけるこの台地と人間との関わりを示しているとも考えられるが，一部は調査員の責に帰するものである。縄文時代の遺構の配置と比較すると，弥生時代の住居同土の切り合いは見られずやや分散している感がある。これは，この台地が居住地として利用された期間の短かさの証左でもあるが，逆に縄文時代中期における居住期間がはるかに長かったことを示しているとも言えよう。

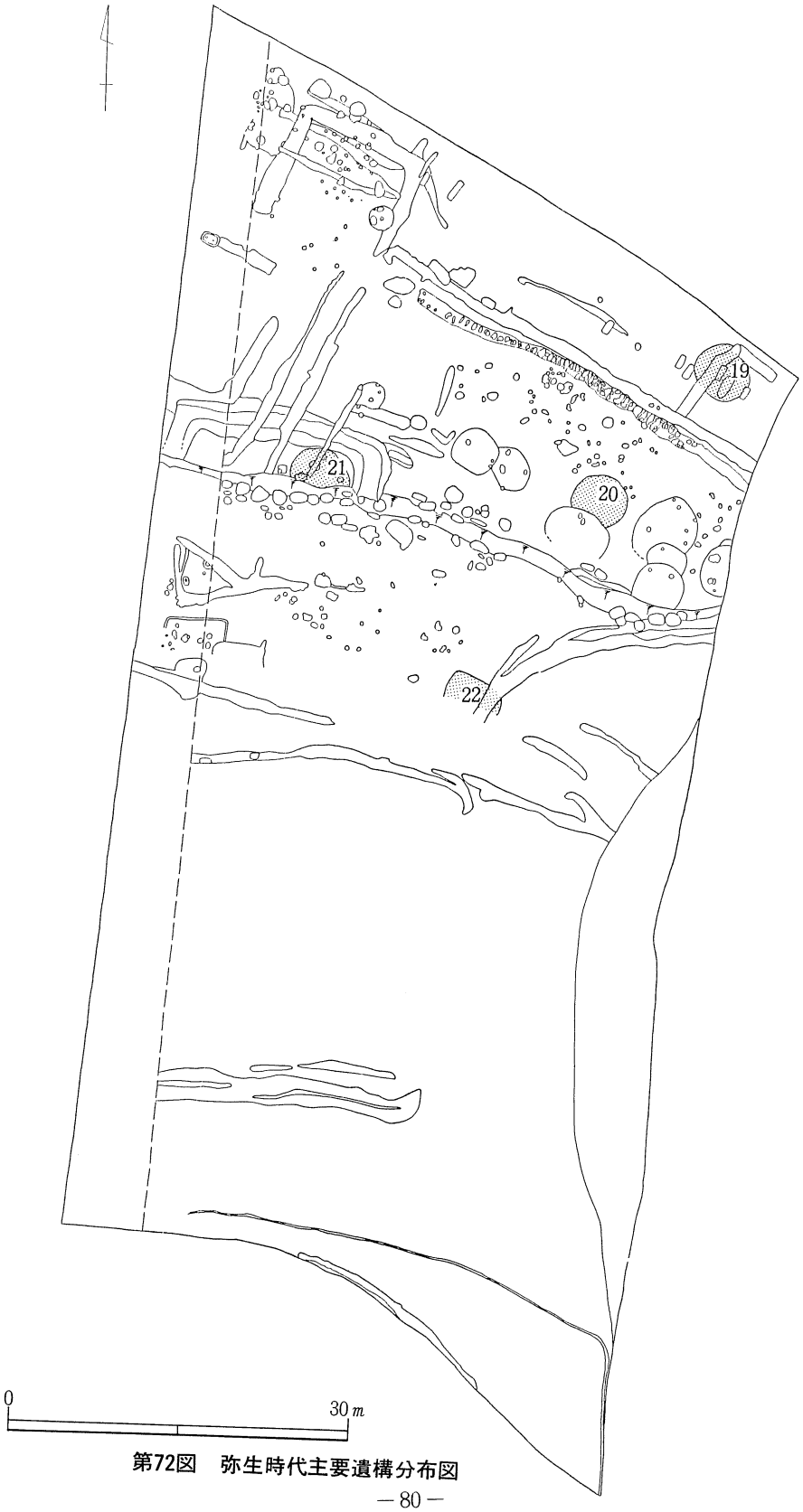
遺物は上述の通りいずれも後期に属するものである。縄文時代の遺構・遺物で見られたような傾向，すなわち，加曽利Ｅ期の住居址の覆土から阿玉台式の土器が出土するというような，ある程度の連続性をもった土器型式の逆転的出土は認められない。ただし，弥生時代の住居址の覆土から縄文土器が出土するという状況は認められる。これらのことは，周辺に縄文時代中期の遺構は存在するが，弥生時代中期の遺構の存在する可能性が薄いことのあらわれとも考えられる。仮にその時期の遺構が存在するならば，縄文時代中期の土器片に混って出土してもおかしくないと考えられるからである。出土遺物は器種では壺・鉢・甕がほとんどであり，19号址からは甕，20号址から壺，21号址からは鉢・高坏・甕，22号址からは壺・甕が出土しているまた，23号址では焼土を伴って甕が単独で出土しており，他地点でも数点の破片が出土している。

古墳時代以降の様相は後述するが，居住地としての利用は，この弥生時代後期をもって再び途絶えたと言ってよく，ほとんど時期を隔てずに墓域としての意味合いを持つようになっていく。

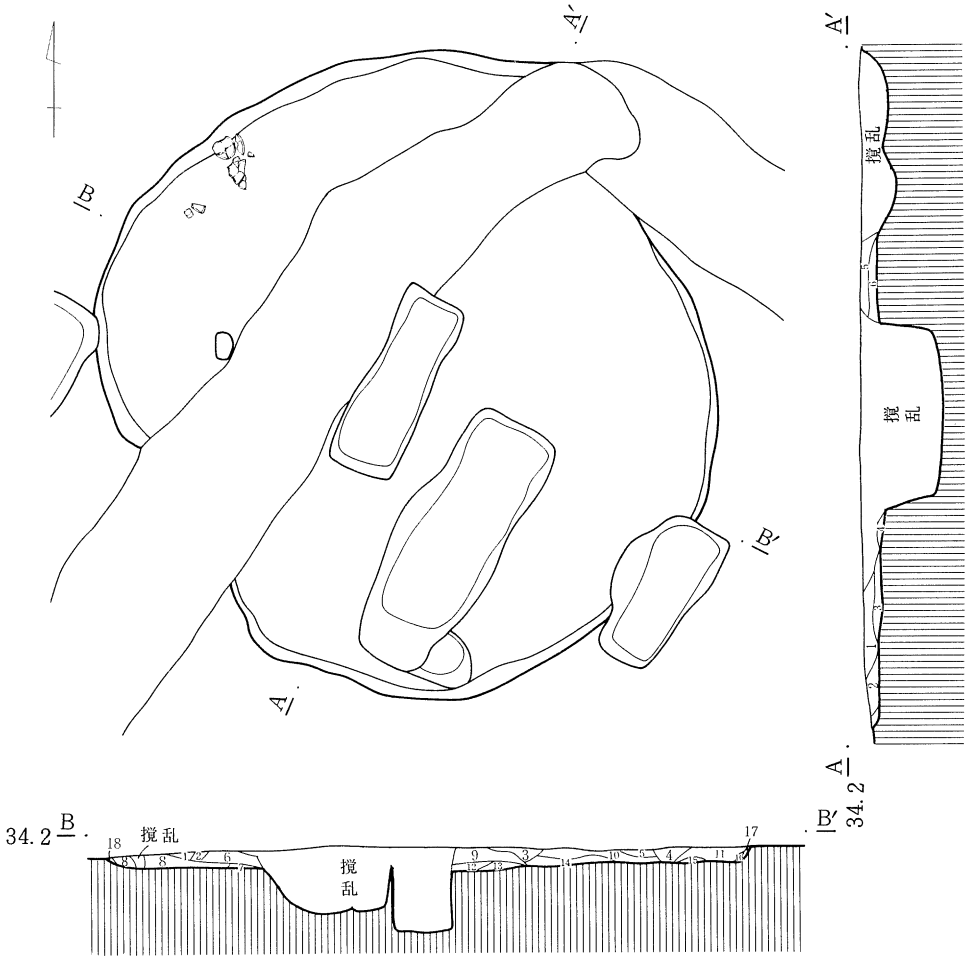
住居址および出土遺物

19号住居址（第73図，図版10－１）

調査区の北東端で検出されたものである。後世の溝や土拡により攪乱を受けており，床面は分断された状態になっている。平面形は，長軸をほぼ北西にもつ楕円形で，長軸５m，短軸4.3mである。柱穴および炉の配置等は不明である。



第72図　弥生時代主要遺構分布図



19号址土層説明

A～A 1. 暗褐色土（黒味が強く，焼土粒をわずかに含むが，概して挟雑物は少ない）
2. 暗褐色土（焼土と暗褐色土の混合土。暗褐色土主体）
3. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，ローム粒を一様に含む）
4. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，ローム粒を顕著に含む）
5. 暗褐色土（焼土粒を顕著に含み，炭化粒をわずかに含む）
6. 暗褐色土（やや赤味を帯び，焼土粒をわずかながら一様に含む）
7. 暗褐色土（黒味が強く，ローム粒をわずかに含み，しまりはよい）
8. 暗褐色土（6よりやや黒味を帯び，わずかに焼土粒，ローム粒を含む）
9. 暗褐色土（3より褐色味を帯び，ローム粒を一様に含み，しまりがある）
10. 暗褐色土（4とほぼ同一，ローム粒をわずかながら一様に含む）
11. 暗褐色土（ローム粒を一様に含み，わずかに焼土粒を含む）
12. 暗褐色土（全体にやや赤味を帯び，焼土粒，焼土ブロック，ローム粒を含む）
13. 暗褐色土（9より黒味が強く，焼土粒，炭化粒，ローム粒を含む）
14. 暗褐色土（10とほぼ同一。焼土粒をわずかながら一様に含み，炭化粒，ロームブロックをわずかに含む）
15. 暗褐色土（11よりやや黄色味を帯び，ローム粒，ロームブロックを含む）
16. 暗黄褐色土（ローム主体でわずかに暗褐色土を含む）
17. 暗褐色土（やや黄色味を帯び，一様にローム粒を含む）

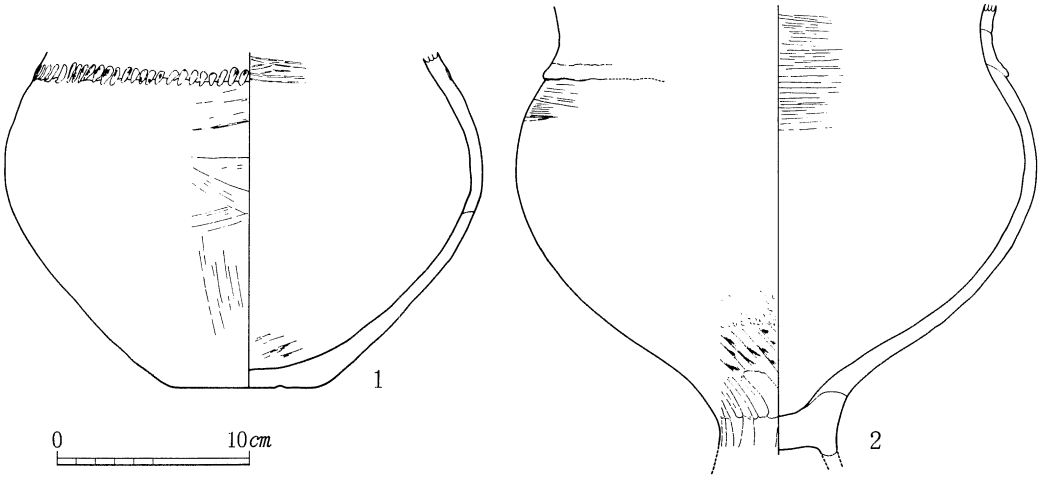
B～B 1. 暗褐色土（ローム粒を一様に含みわずかに焼土粒，炭化粒を含む）
2. 暗褐色土（色調は1とほぼ同一。1ほどローム粒は顕著ではなく，わずかに焼土粒を含む）
3. 暗褐色土（色調は1とほぼ同一。径5cm前後のロームブロック，ローム粒・焼土粒をわずかに含む）
4. 暗褐色土（わずかに焼土粒，炭化粒を含む）
5. 暗褐色土（ローム粒を一様に含み，焼土粒，炭化粒をわずかに含む）
6. 暗褐色土（5より黒味を帯び，ローム粒，炭化粒，焼土粒をわずかに含む）

第73図　19号住居址平面図・土層断面図

出土遺物（第74図）

1は，北西の壁側で出土した甕である。口縁部および頸部上半は残存せず，わずかに胴部の約⅓を残存するのみである。胴部径は24.8cm，底径は 8.0cmである。頸部には輪積みの痕跡を残しており，そこにキザミを巡らしている。器表は内面が特に磨耗が激しく整形は不明瞭である。外面は胴部上半からほぼ中央までは　あるいは斜方向のナデ，下半は縦方向のミガキが施されており，底部内面はあらい横方向のナデがなされており，外面は不明瞭である。

2は，輪積痕を残す台付甕である。口縁部および脚部のほとんどを欠き，約¼残存するのみである。胴部径は27.1cm，甕・脚の接合部径は6cmである。器面はかなり荒れており，整形等不明瞭な部分が多い。頸部外面は荒い横方向のナデ，内面は胴部上半にかけて細かい水平方向のナデがなされ，胴部は外面は不明であるが内面では不定方向のナデがなされている。底部から脚部にかけては外面では縦方向のナデが，内面では横方向のナデがなされている。



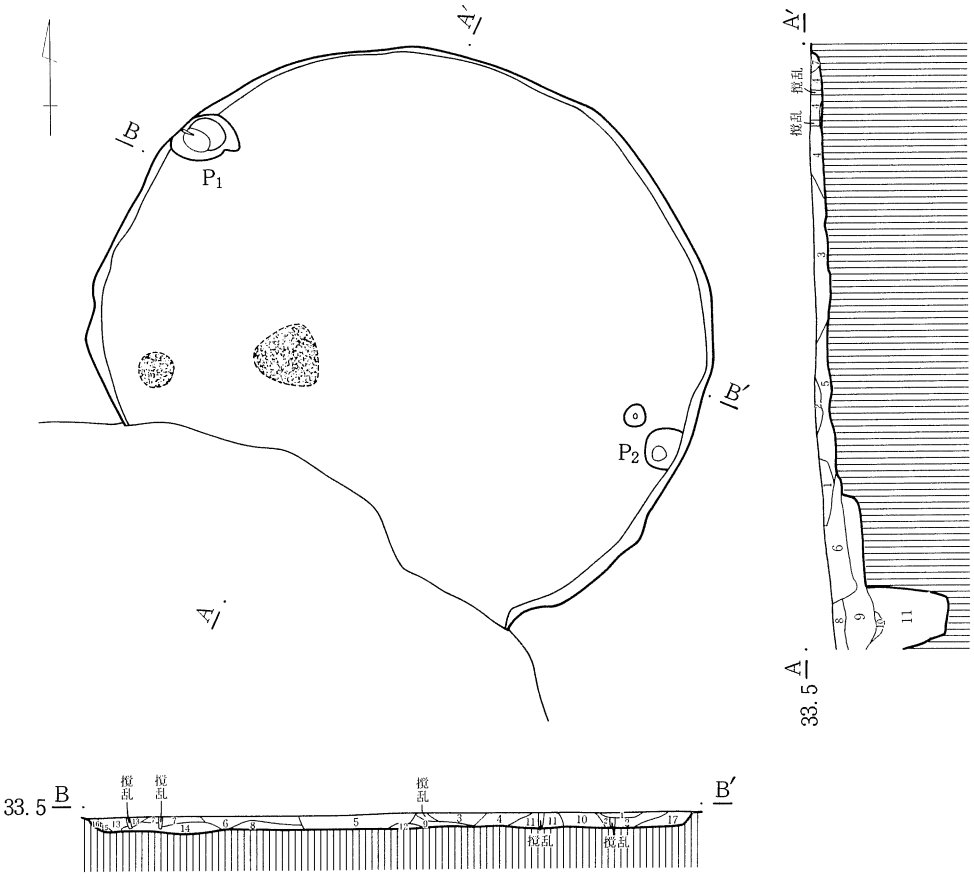
第74図　19号住居址出土遺物実測図（2）（¼）

20号住居址（第75図，図版10－2）

5号址を切っている住居址であるが，調査時に誤って重複部分を掘ってしまったものである。ほぼ径4.7mの円形で，東南と北西の壁際の2箇所で柱穴と思われるピットを検出したが，炉は検出できなかった。5号址で検出されたピット（P_2，P_3）があるいは，本住居址に帰属するかもしれないが，確証を欠く。

出土遺物（第76図，図版44－1）

1は，西寄りの床上から出土した壺である。口径13.6cm，頸部径 7.9cm，胴部径23.0cm，底径 7.5cm，器高29.8cmである。頸部及び胴部上半に文様帯を持つ。頸部文様帯は口縁直下から



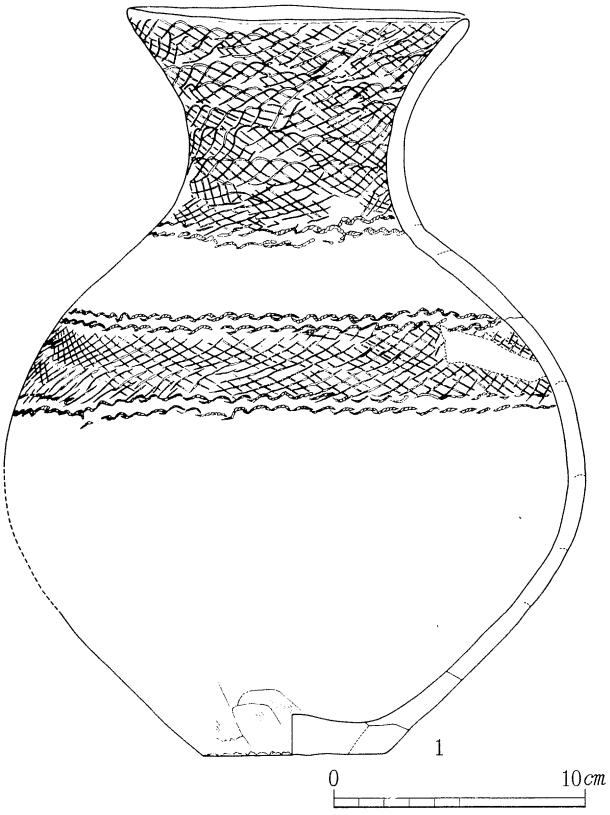
20号住居址土層説明

A～A′ 1. 暗 褐 色 土（やや黄色味を帯び、ローム粒をわずかながら一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（褐色味が強く、ローム粒を一様に含む）
3. 暗 褐 色 土（2より黒味が強く、径1～2cmのローム ブロックを含む、ややしまり悪い）
4. 暗 褐 色 土（2より黄色味が強く、径4～5cmのローム ブロックを含み、ローム粒を一様に含む）
5. 暗 褐 色 土（色調は1とほぼ同一。ローム粒をやや多く含む）
6. 暗 褐 色 土（やや黄色味を帯び、ローム ブロックをわずかに含む）
7. 暗 褐 色 土（黄色味を帯び、わずかにローム ブロックを含む、ややしまり悪い）
8. 暗 褐 色 土（黒味が強くローム ブロックを一様に含む）
9. 暗黄褐色土（ローム ブロック主体で、暗褐色土を含む）

B～B′ 1. 暗 褐 色 土（径1～2mmのローム粒を含む）
2. 暗 褐 色 土（1よりやや黄色味を帯び、ローム ブロックをわずかに含み、ローム粒を含む）
3. 暗 褐 色 土（径2～3cmのローム ブロックをわずかに含む）
4. 暗 褐 色 土（黒味が強く、ローム粒を一様に含む）
5. 暗 褐 色 土（黒味が強く、径1cm前後のローム粒を一様に含む）
6. 暗 褐 色 土（ローム粒を一様に含む）
7. 暗 褐 色 土（わずかに径5mm前後のローム粒を含む）
8. 暗 褐 色 土（6とほぼ同一だがローム粒をやや多く含む）
9. 暗 褐 色 土（一様にローム粒、径1～2cmのローム ブロックを含む）
10. 暗 褐 色 土（色調は2とほぼ同一。径1～2cmのローム ブロックを含む）
11. 暗 褐 色 土（10よりやや黒味を帯び、ローム粒をわずかながら一様に含む）

第75図　20号住居址平面図・土層断面図

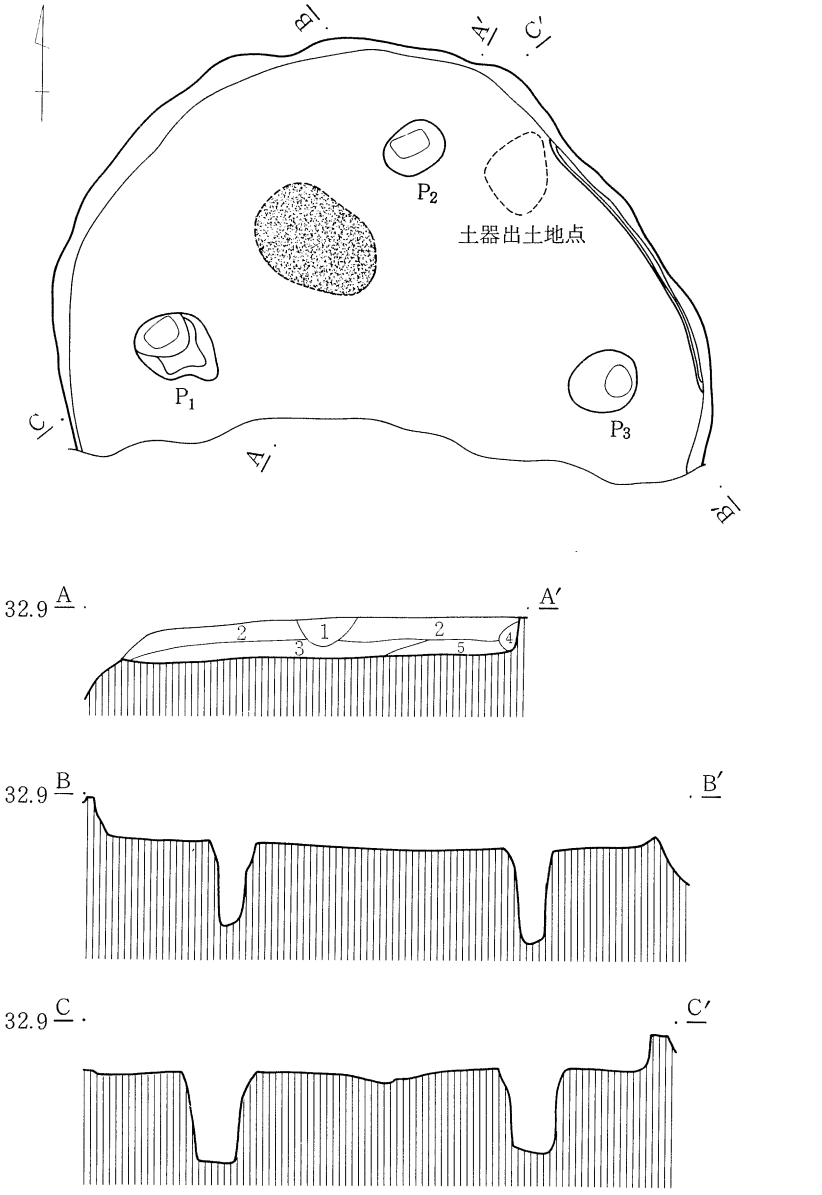
胴部との境界付近まで，網状撚糸文を巡らし，下端を2条のS字状結節文により区画している。胴部文様帯は，上下を二条のS字条結節文で区画し，その間を網状撚糸文が埋めている。整形は外面は特に不明瞭であるが，口縁部内面は横方向のナデののち，ミガキを行ない，頸部内面は斜方向のナデが見られる。胴部外面は上半ではナデののち粗いミガキ，下半では荒いナデを行なっている。底部は内外面とも荒いナデが施されている。また，外面は胴部下半まで，内面は口縁直下まで赤彩が施されている。容量は 5.8 l 。



第76図　20号住居址出土遺物実測図（1/4）

21号住居址（第77図，図版11）

南半は後世の台地整形により欠失している。復原的には長軸5.4m，短軸48m の小判形を呈すると考えられる。北東部分で周溝が検出された。柱穴は3つ残存していたのみであるが，欠失部分にもう1つ存在していたと考えるべきであろう。炉はP_1とP_3の中間よりやや中央寄りで検出された。長軸80cm，短軸60cmで，10cm前後を掘り込んである。その部分は全面的に焼けて赤

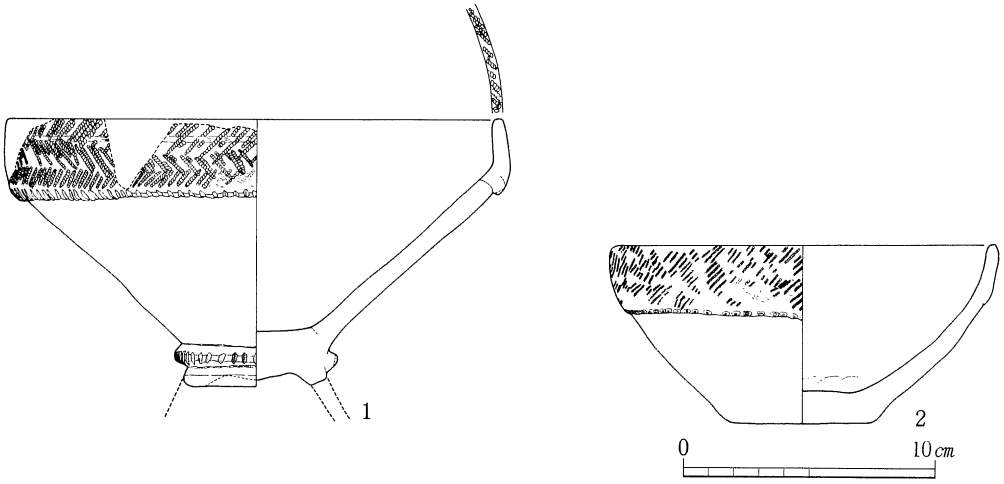


21号址土層説明

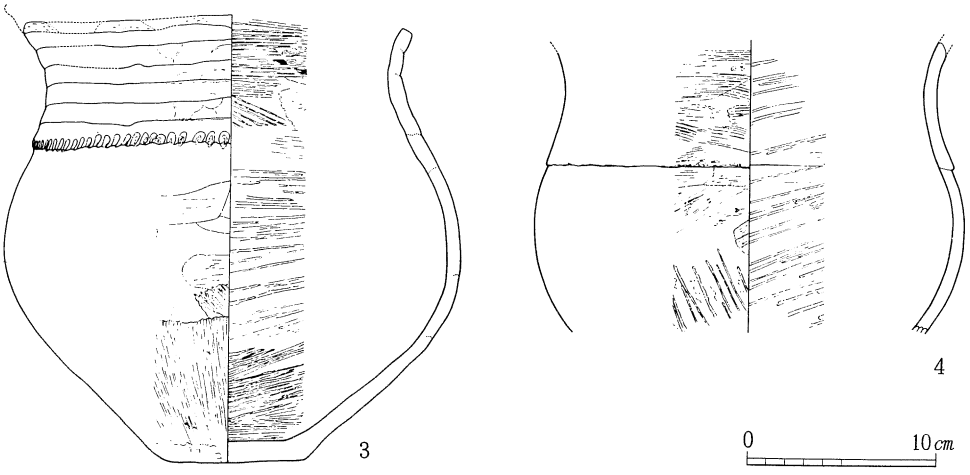
A～A′ 1. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子を含む）
2. 茶 褐 色 土（暗茶褐色に近い。粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む）
3. 暗茶褐色土（小ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒を含む。ややしまりあり）
4. 明茶褐色土（茶褐色土中にロームブロックを多く含む）
5. 暗 褐 色 土（ロームブロック，細かいローム粒子を含む）

0　2m

第77図　21号住居址平面図・土層断面図・エレベーション（1／60）



第78図　21号住居址出土遺物実測図（1）（1/3）



第79図　21号住居址出土土器実測図（1/4）

化していた。また，北東の壁際において，輪積痕を残す甕が出土している。

出土遺物（第78・79図，図版44－2～4）

1は，高坏である。口縁部の⅔を欠き，脚部を完全に欠失している。口径は19.7cm，底径は5.9cm，器高は現状で10.6cmである。口唇部は面取りの後，縄文を施し，口縁部はいわゆる折り返し口縁で全面に羽状縄文を施し下端部にはキザミが見られる。頸部には断面台形の突帯が巡りその頂部にもキザミが見られる。坏部の内面は水平方向のヘラミガキを施し，外面の口縁下部は縦方向のヘラミガキを施す。坏部は内外面ともに赤彩が見られ，脚部はわずかな残存部に赤彩が認められる。なお，底部の裏側の中央部がわずかに隆起しているが，これはヘラによるナデつけによると思われる。容量は 1.4 l。

2は，小型鉢で，口縁部の⅙強を欠くがほぼ完存している。口径は15.3cm，底径は 5.6cm，器高は 7.1cmである。口唇部に装飾はなく，口縁はいわゆる折り返し口縁で，付加条の細縄文を下から上に向って施し，口縁下端には竹管状の円筒による刺突文が巡る。外面は胴部上半はナデを施し，下半はオサエのままで，底部ではナデが施される。内面は，口縁部・胴部ともに横方向のナデを行っているが，底部では雑なオサエのままである。なお，底部にはモミ殻圧痕が認められる。容量は 0.7 l 。

3は，頸部に輪積痕を残す平底の甕である。口縁を欠き，頸部・脚部の一部も欠く。頸部径15.8cm，胴部径24.1cm，底径 7.2cmで，器高は，残存部で23.9cmである。輪積痕は残存部で7段見られ，最下段には米粒状のキザミが見られる。頸部内面は板状工具によるナデが施され，胴部では外面上半は横方向の粗いミガキ，下半は縦方向の丁寧なミガキを施し，内面は上半から中央までは横方向のミガキ，下半は斜方向のミガキを施している。底部外面は無調整で，内面はナデが施されている。容量は 5.5 l ＋α。

4の甕は，口縁部・底部を欠き，胴部のみ⅓の破片である。推定で頸部径19.7cm・胴部径22.7cmで，頸部と胴部の接合部に輪積み痕を残している。頸部外面は板状工具による荒いナデを施し，胴部外面では上半はケズリに近い荒いナデで，下半はそのあと，縦方向のヘラミガキを行なっている。内面はいずれも横方向のナデのあと横方向のヘラミガキを行なっている。

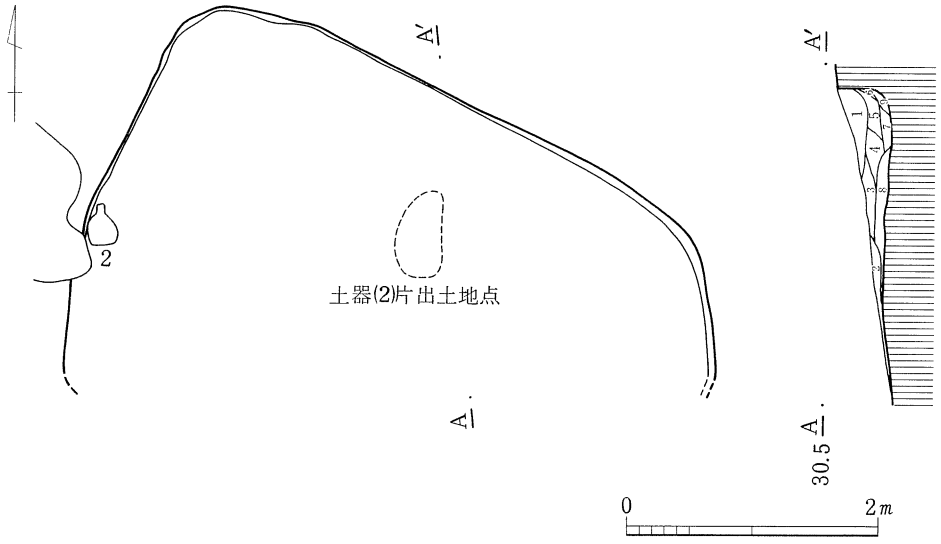
22号住居址（第80図，図版12，13－1）

台地整形により削平を受けた南向きの緩斜面にある。「概要」の章で既に述べたように，地山は粘質土である。

台地整形によるのか，あるいはもともと緩斜面であったことによる土砂の流出の頻度の高さによるのかは不明であるが，南側を半分以上欠いている。一辺5mの隅丸方形になると考えられる。柱穴は検出できなかった。炉は，径約30cmのほぼ円形で，わずかに窪んだ箇所が赤化しているのが見られた。遺物は西側壁際に輪積痕を残す台付甕が，横倒しになった状態で潰れていたのが見られ，また，北側壁の中央から1mほど離れた位置で，有段口縁の壺の破片が集中しているのが見られた。

出土遺物（第81・82図，図版44－5，6）

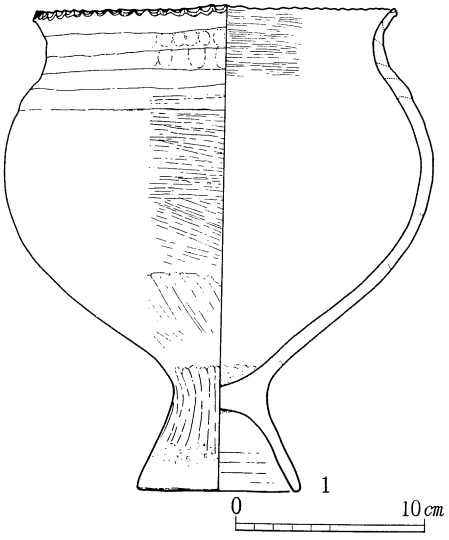
1は西壁側で出土した台付甕である。口縁部をわずかに欠くがほぼ完形である。口径19.0cm頸部径18.0cm，胴部径22.6cm，胴部底径 5.0cm，脚部径 6.0cmである。口縁端は，上方および側方からの工具の押圧によるキザミが施され，頸部には輪積の痕跡を残している。頸部外面はナデがなされ，内面は横方向のヘラミガキがなされる。胴部は外面上半は，ほぼ横方向のヘラミガキ，中央より下方ではやや不整方向のヘラミガキがなされ，内面は上半では横方向，下半



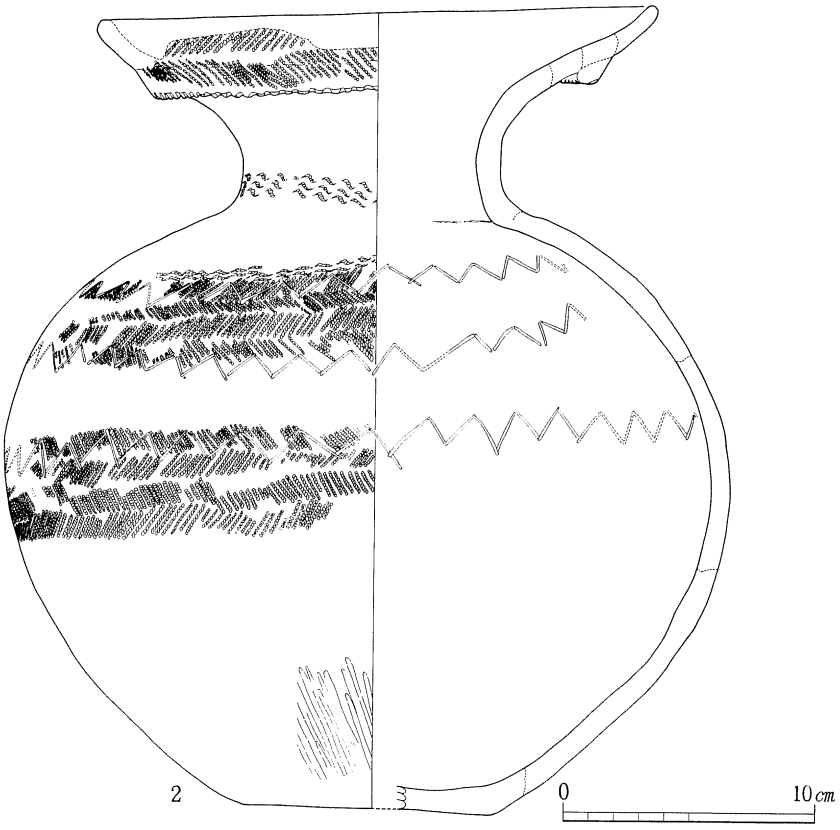
22号址土層説明

A～A′ 1. 暗褐色土（ローム粒，灰褐色砂粒をわずかに含む）
2. 暗褐色土（やや褐色味を帯び，ローム粒，炭化粒，焼土粒をわずかに含む）
3. 暗褐色土（ローム粒をわずかながら一様に含む）
4. 暗褐色土（ローム粒をわずかに含む。しまりやや悪い）
5. 暗褐色土（1より黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
6. 暗褐色土（やや灰褐色気味。焼土粒を含む。粘性強い）
7. 暗褐色土（5より褐色味を帯び，わずかにローム粒を含む）
8. 暗褐色土（色調は7とほぼ同一。一様にローム粒子含み，全体にややしまった感じ）
9. 暗灰褐色土（暗褐色土をマダラ状に含み，わずかに焼土粒を含む）

第80図　22号住居址平面図・土層断面図



第81図　22号住居址出土台付甕実測図（1/4）



第82図　22号住居址出土壺実測図（⅓）

では不整方向の丁寧なナデがなされる。脚は内外面ともナデがなされている。なお，胴部・脚部の接合部のあたりにきわめて赤い部分があり，赤彩の可能性がある。容量は 4.9 l。

2は，北側中央で破片が集中的に出土した有段口縁の壺である。口縁部のほとんどを欠くがほぼ完形である。口径22.0cm，頸部径10.7cm，胴部径28.8cm，底径10.1cm，器高31.6cmである。器形としては，ほぼ球形の胴部をもち，頸部での屈曲は強い。口縁は有段口縁であるが，段部は，断面ほぼ三角形の粘土紐を帖り付けて成形している。文様は，口縁部，頸部，胴部上半，同じく中央に見られる。口縁は二段の斜縄文を巡らし，下段にキザミを入れている。頸部は三条のS字状結節文が巡るのみである。胴部上半の文様は，上端を二条のS字状結節文により区画し，その下方に四段の斜縄文を巡らし，その上から，二本の山形文を描いている。胴部中央では，四条の斜縄文を巡らし，その上方部分に，山形文を巡らしており，特に区画的文様部分は見られない。器表は内外面共に磨耗が激しく，整形は不明瞭であるが，頸部外面では縦方向のミガキ，胴部上半外面は横方向のミガキ，下半外面は，丁寧なナデまたは部分的に縦方向のミガキ，内面はナデ，底部内面には荒いナデがわずかに認められる。容量は10.8 l。

非遺構伴出の弥生土器（第83図，図版44－7，8）

1は，底部は残存しておらず，全体の器形は不明であるが，脚がつくものと考えられ，ここでは台付鉢と考えたい。口径，胴部径はそれぞれ推定で15.6cm，13.9cmである。胴部は内外面ともに粗い横方向のミガキを行ない，底部外面は，斜方向のナデ，内面は粗い横方向のミガキを行なっている。

2は，底部まで残存していないので，全体の器形はつかめないが，台付鉢になると思われるものである。½弱の破片で，底部と体部の接合部には意識的な稜をもたせ，口縁端は大きく外反する。口径は推定で23.6cmである。口唇部は横方向のナデにより面取りし，口縁端部付近の外面がナデによっているほかは，いずれも横方向のヘラミガキであるが，底部外面はやや粗い。

1．2共に外反する口縁と，体部，底部の接合部の折り返し状を呈するのを特徴とする。いずれも底部中央を欠いているが，これは脚を持つ器形の割れ方と考えるべきであろう。したがって，器形としては台付鉢とするのが妥当であると考えたい。

上述の2点を特徴とする台付鉢の報告例は少なく，管見に触れただけで今回の出土例を除くと，県内1例，東京都3例，神奈川県4例であり，各個体間にも全体のプロポーション，装飾の有無等にバラつきが多いが，いずれも弥生後期ということでは一致している。本報告例は，遺構に伴っての出土ではなく，時期の決定は困難であるが，これらと同一の範疇として考え，弥生時代後期の所産と考えたい。小数の類例からの類推は危険であるが，特異な形態であるだけに，自生してくる形態とは考え難く，またそれだけに変差を生じているとも考えられる。

・類例の出土地

1　千葉県八千代市権現後遺跡　D 027号址　「八千代市権現後遺跡　一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」（財）千葉県文化財センター

2　東京都久ケ原遺跡

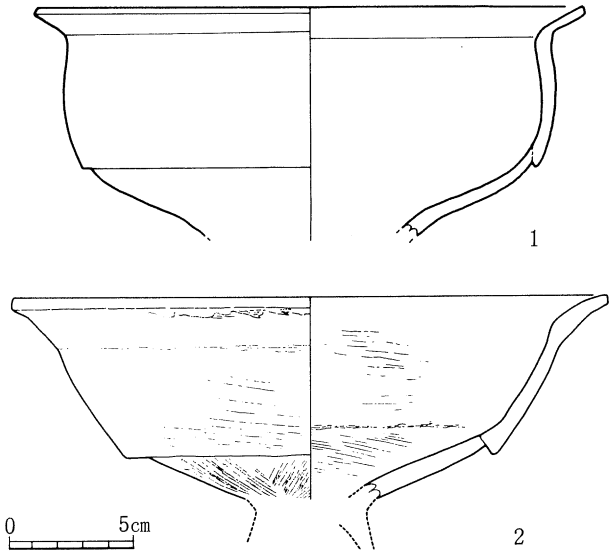
3　〃　西ケ原

4　〃　八王子市御所水遺跡　「三～四世紀の東国―揺れ動く謎の時代」八王子市郷土資料館

5　神奈川県川崎市井田伊勢台遺跡　第4号住居址　「川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書」　川崎市文化財調査報告書第Ⅴ冊川崎市教委（1977）

6　神奈川県鎌倉市粟船山遺跡　「鎌倉市史」

7　〃　藤沢市大庭城山遺跡

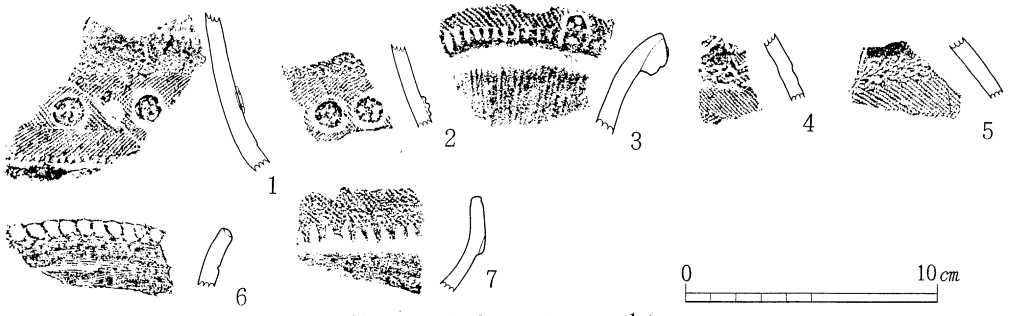


第83図　弥生土器実測図（1/3）

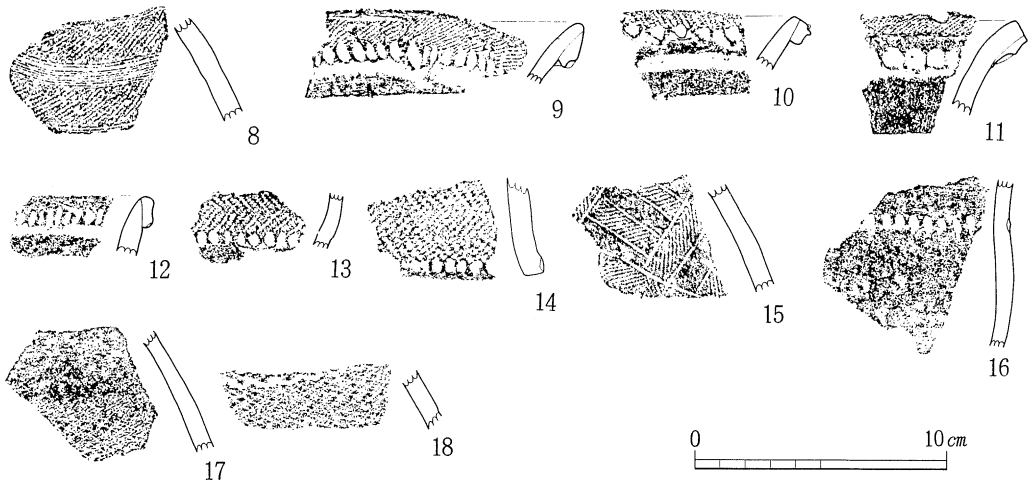
その他の非遺構伴土の弥生土器（第84・85図，図版43－1～18）

図示したのは，今回の調査において，遺構に伴わないか，または遺構外から出土した弥生土器の主なものである。なお，文様等を残している物のみを抽出したため，壺，甕などの無文部の破片は抽出していない。

いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。それぞれの特徴については表3に示した通りであるが，横位の櫛描文を施した胴部の破片が一点見られるが，この例に関しては搬入品ではないかと思われる。また，9 は複合口縁の壺の口縁部で，口縁下端に刻みが入れられているが，残存部の左半は刻み部に縄目が見られるが，右半には見られず，先端または側縁の鋭い工具の使用を思わせるものである。二種の工具を土器整形の途中で使い分けたと考えられる。



第84図　弥生土器拓影図（1/3）



第85図　遺構外出土弥生土器拓影図（1/3）

第3表　非遺構伴出弥生土器観察表

番号	器形	部位	文様構成，彩色等	出土地点
1	壺	頸	三段の羽状縄文。中位に円形浮文（4個の管状工具による刺突あり）文様帯上端はS字状結節文，下端は浅い刺突により区画。 赤彩あり。 胴部との接合部分は擬口縁状	44
2	壺	頸	三段の羽状縄文。中位に円形浮文（管状工具による刺突あり。右側は5箇所，左側は4箇所）。 上端はS字状結節文。 1と同一個体か	45
3	壺	口縁	折り返し口縁。 外面，口縁端直下から折り返し部分の中位まで縄文。その上に円形浮文（管状工具による3個の刺突）。縄文部下端に刻み。 頸部外面に縦位のミガキ 内面は顕著に赤彩を残す。	44
4	壺	胴	羽状縄文をS字結節文で区画し，その下方に山形文（縄文により充塡） 山形文の単位間（縄文が充塡されていない部分）に赤彩	44
5	壺	胴	S字結節文下に羽状縄文。左上方に縦位の沈線（山形文か） 外面，無文部に赤彩	44
6	甕	口縁	口唇部に刻み。輪積痕をわずかに残す。内面に横方向のナデ	45
7	鉢	口縁	折り返し口縁風。口縁下に縄文。施交部下端に刻みを入れている。 刻みによる凹部にも縄文が見られる。同一の施交目を押圧したものか	44
8	壺	胴	地の縄文に三条の平行櫛描文。搬入品か 胎土中に砂粒顕著	遺構外
9	壺	口縁	複合口縁。口縁直下に斜行縄文。複合部下端に刻み。左半の刻みの凹部は，曲線的で縄文を伴っているが，右半では直線的で稜が見られる。工具の相違か。 内外面に赤彩（折り返し部を除く）。	〃
10	壺	口縁	複合口縁。口唇部は平坦で縄文を施す。口唇部直下に上方および側方からの刻みを交互に入れる。 複合部は，粘土紐はりつけによる。 内面及び外面折り返し部以下に赤彩	〃
11	壺	口縁	複合口縁。口唇部は外傾し，縄文を施す。複合部下端に曲線的押圧文（指頭によるか）が巡る。 内面及び複合部以下に赤彩	〃
12	壺	口縁	複合口縁。複合部下端に刻み。	〃
13	鉢	口縁	端部は残存しない。 二段の羽状縄文を施し，下端は凹部にまで縄文の及ぶ刻みが入れられる。 内面に赤彩	〃
14	壺	頸	三段の羽状縄文。下端に浅い刺突。 内面にわずかに赤彩残存。 文様構成等1に類似するが大雑把な印象を受ける。 胴部との接合部は擬口縁状	〃
15	壺	胴	亀山形文により区画された部分をさらに沈線により区画して，四角文を描出。四角文は赤彩が施される部分と施されない部分が交互に並ぶ。施されない部分には縄文が充塡される。	〃
16	甕	頸	胴部との境界に凹部が曲線的な刻み。	〃
17	壺	胴	網状撚糸のみ	〃
18	壺	胴	上方にS字状結節文。以下は網状撚糸。 焼成悪く，砂粒が顕著	〃

古墳時代前期の概観（第86図）

この時期の遺構は方形周溝墓３基で，そのうち２基（25・26号址）は既に57年度に県文化財センター・千葉急行事務所において調査されたものの延長部分である。規模としては，26号址が最大で，一辺が20mを越え，周溝も幅が２m近く，深さは１mに近い。これに対し他の２基（24・25号址）は，周溝の幅も 1.4～1.5mで，深さは深くても50cm前後である。この２基は，調査時点では周溝が全周せず，特に，14号址では南辺は検出できなかったが，本来は全周していたものが，後世の開墾等により削平されたものではないかと思われる。24・26号址では主体部は検出できなかったが，25号址では57年度調査の際に西辺の土拡から，人骨と壺が出土している。遺物についても26号址からの出土量が最も多く，他の２基からは，わずかであった。

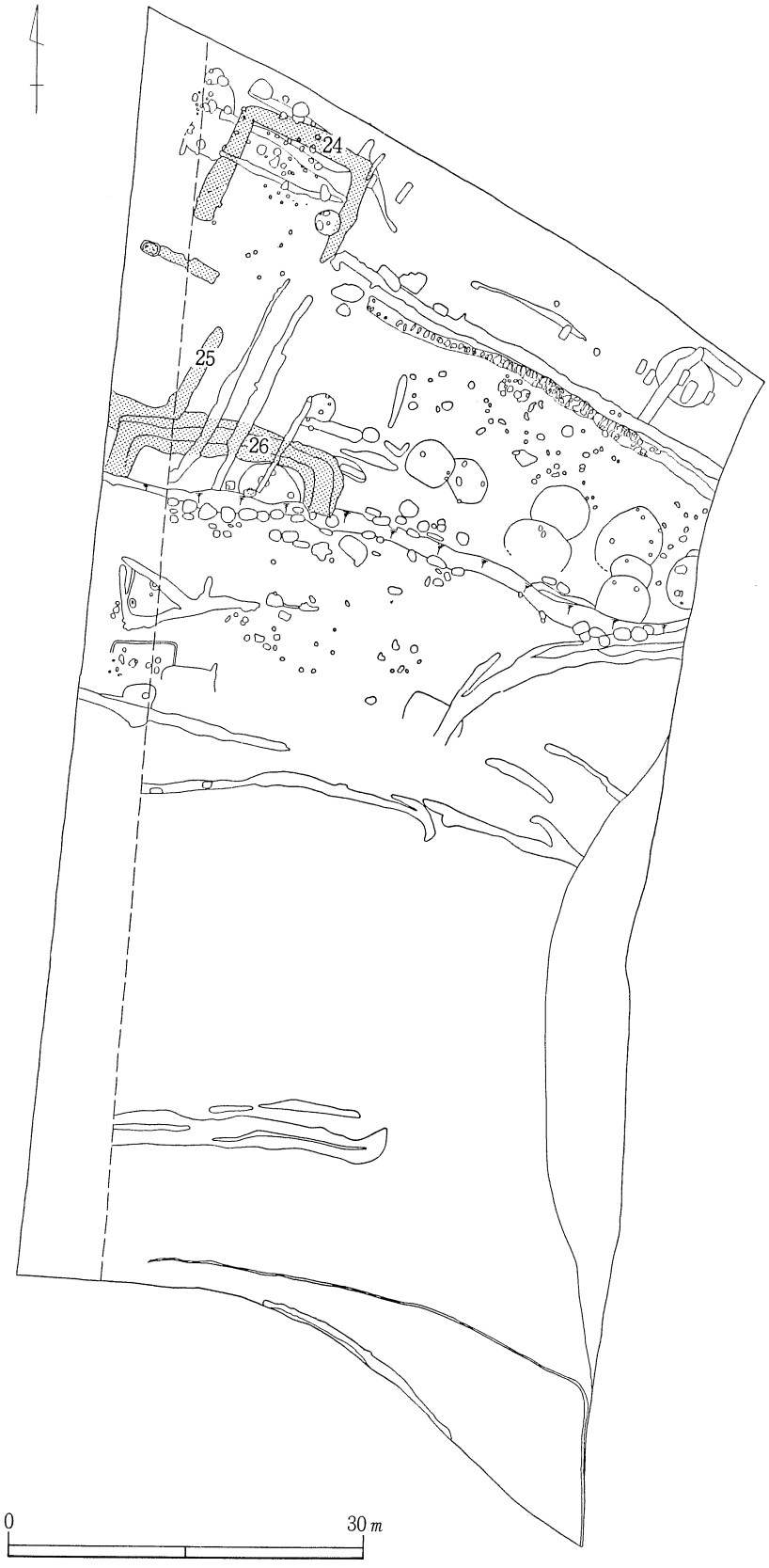
時期的にはいずれも五領期であると思われるが，26号址と他の２基と比較した場合，周溝の規模だけ見ると，その掘さくに必要な労働量は格段の差があると考えられる。そこにある種の労働編成の変化を見ることもできる。つまり，仮に労働に向かわし得る人数が，それ以前と同じであるなら，それまで以下の労働日数で事足りたであろうし，日数的に変わらなければ，数分の一の人間が必要であるに過ぎない。要するに，延べ労働力が減少しなければ，このような現象は生じ得ないと考えられる。(1) しかし，草刈遺跡全体さらには千原台地区全体の流れの中で，捉えることが必要であるのは言うまでもない。

主な遺物としては，方形周溝墓出土の壺・坩・管玉がある。上述のように26号址からの出土遺物が最も多く，壺・坩・管玉等10点近くを出土している。他の方形周溝墓からは，せいぜい 1.2 点であるのに比べれば，ここにも格段の差があると言えよう。調査範囲内における３基の比較に過ぎないが，規模の相異となって現れた社会的背景が，遺物の量という形でも現れたものとも考えられる。

弥生時代後期との台地利用の様相の変化としては，居住地から墓域へと変ったことは明瞭である。しかし，24・25号址形成以後方形周溝墓の拡散も見られなくなる。

草刈台地全体では，連綿と人々の生活は続けられ，集落は不断に存在し続けているわけであるが，この部分にはその反映は見出すことはできない。墓域として確立以後は，生活域とは隔絶されていたことがうかがえる。その隔絶の期間は縄文中期から弥生後期までのいわば空白期間に比べればわずかな期間ではあるが，決して短いものではないと言える。しかし，それは墓域として厳然として存在し続け，侵さざるべき領域として残された結果によるのか，仮にそのような一時期があったにせよ，それはわずかな期間で，単に集落の拡散が及ばなかったことによるのかは，今後の検討課題である。

(1)25号址と26号址の新旧関係は，土層観察によると，25号址が26号址を切っており，労働量



第86図　古墳時代前期主要遺構分布図

から見れば，大から小への変化となる。24号址との関係は明確にし得ないが，規模・副葬品の多寡から見ると，24号址と25号址が様相としては近似していると言え，26号址が先行していると考えられる。その場合，26号址出現前の方形周溝墓の様相（規模・副葬品・群構成）を把握する必要があるが，この点に関しても，草刈遺跡全体の様相が明らかでない現段階においては，困難であり，今後の調査・研究の進展に期待したい。

遺構と出土遺物

24号方形周溝墓（第87図，図版14－２）

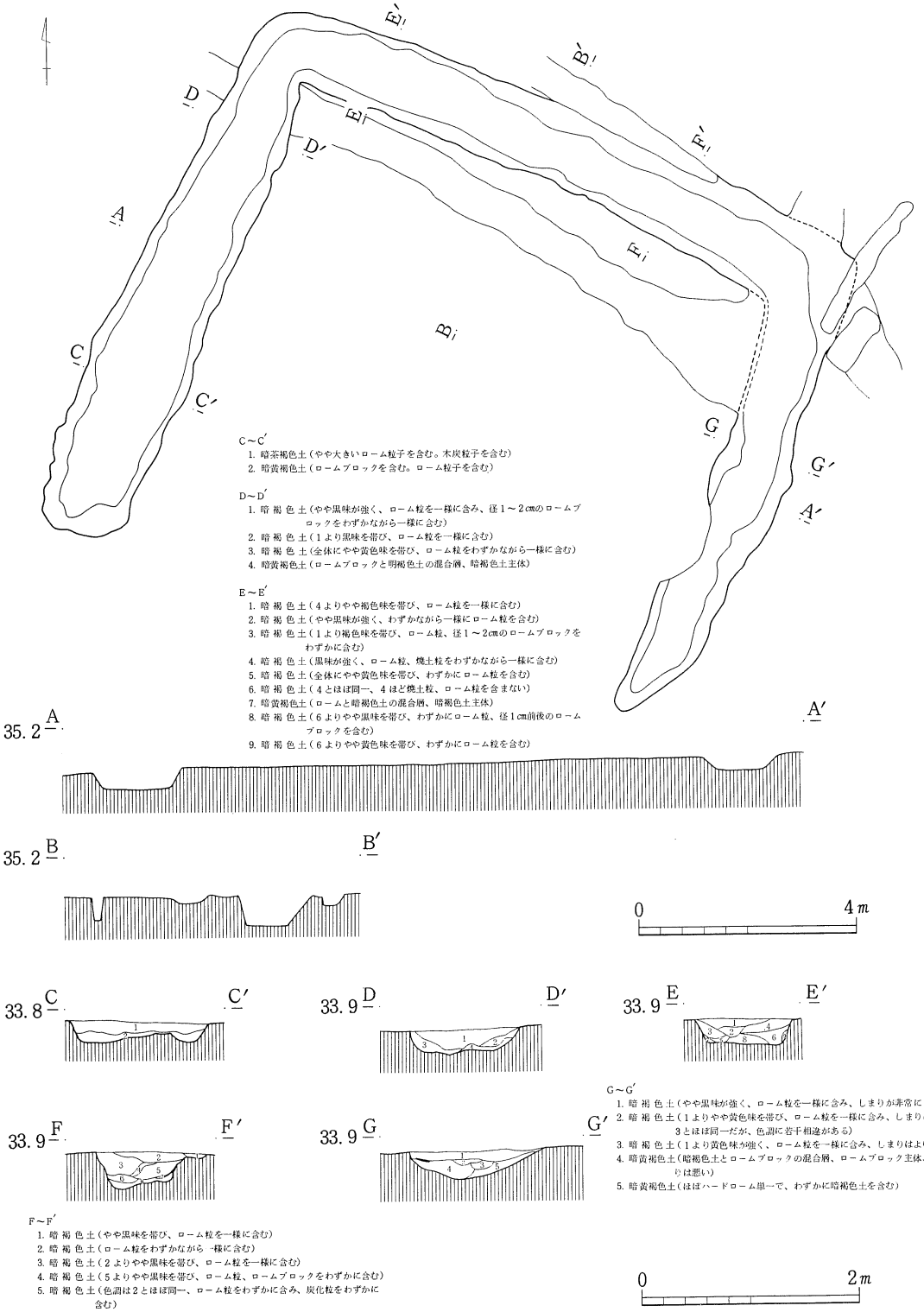
南辺は検出できなかったが，他の３辺は残存していた。東辺，西辺ともに南に向かって浅くなっていく傾向が見られ，本来はさらに長かった可能性もあり，さらに南辺も存在していた可能性もある。西隅付近で1.2m，中央部分で1.6m，北東隅付近で1.4mで，若干外辺がふくらむ感がある。

東辺は９ｍで，幅は１ｍ前後である。深さは北東隅で20cm，南端で２cmとなり，漸次的に浅くなって行く傾向がうかがえる。また，西辺は10.5m で，幅は南の方ほど広くなっていくのがわずかに認められ，北西隅付近では1.2m，南端では1.6mとなっている。深さは，東辺で見られたのと同様の傾向が見られ，北西隅では50cm，南端では20cmである。北辺は長さ12m で幅は北西隅付近で1.2m，中央部分で1.6m，北東隅付近で1.4mで，若干外辺がふくらむ感がある。

出土遺物（第94－１，２図，図版46－２，３）

１は，北辺ほぼ中央で出土した坩である。口縁部の½，底部中心付近を欠く。口径は12.1cm，頸部径は8.0 cm，器高は7.7 cmである。口縁端部は内外面とも横方向のナデを施し，頸部は，内外面とも細かな縦方向のヘラミガキを行っているが，外面の胴部との接合部近くではナデが見られる。胴部は外面は荒い横方向のナデだが，内面は，丁寧な横方向のナデである。底部中心付近は残存しないが，凹底になるかもしれない。容量は0.5 l。

２は，西辺中央部で出土した壺である。口縁部は全く欠き，頸部の¼弱を残存し，また胴部中央の½を欠く。頸部径・胴部径はそれぞれ推定で11.4cm，20.9cmで，底径は５cm，器高は胴部のみで15.3cmである。頸部内面および，胴部外面の上半および中央部まで赤彩を施している。頸部は，内面をヨコハケ，外面をタテハケののち縦方向のヘラミガキにより整形し，胴部は外面の上半をナデののち一部ハケメを残すが，大半は左上りのヘラミガキを施し，中央下半では横方向ヘラケズリ，下半では，オサエののち粗いナデを施す。内面は，ナデにより整形し，粘土紐の接合痕を残している。底部外面はヘラケズリし，内面は，不整方向のハケを施している。なお，底部と胴部の境界部では，底部のヨコハケの上に，胴部下半からのナデがかぶっており，一旦別個に成形し，のち接合したことが見てとれる。また，頸部の残存部上端にはヨコナデが見えず縦方向のヘラミガキの下端が残っているが，これは恐らく口縁まで遠いことを示してお



C～C′
1. 暗茶褐色土（やや大きいローム粒子を含む。木炭粒子を含む）
2. 暗黄褐色土（ロームブロックを含む。ローム粒子を含む）

D～D′
1. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く、ローム粒を一様に含み、径1～2cmのロームブロックをわずかながら一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（1より黒味を帯び、ローム粒を一様に含む）
3. 暗 褐 色 土（全体にやや黄色味を帯び、ローム粒をわずかながら一様に含む）
4. 暗黄褐色土（ロームブロックと明褐色土の混合層、暗褐色土主体）

E～E′
1. 暗 褐 色 土（4よりやや褐色味を帯び、ローム粒を一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く、わずかながら一様にローム粒を含む）
3. 暗 褐 色 土（1より褐色味を帯び、ローム粒、径1～2cmのロームブロックをわずかに含む）
4. 暗 褐 色 土（黒味が強く、ローム粒、焼土粒をわずかながら一様に含む）
5. 暗 褐 色 土（全体にやや黄色味を帯び、わずかにローム粒を含む）
6. 暗 褐 色 土（4とほぼ同一、4ほど焼土粒、ローム粒を含まない）
7. 暗黄褐色土（ロームと暗褐色土の混合層、暗褐色土主体）
8. 暗 褐 色 土（6よりやや黒味を帯び、わずかにローム粒、径1cm前後のロームブロックを含む）
9. 暗 褐 色 土（6よりやや黄色味を帯び、わずかにローム粒を含む）

G～G′
1. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く、ローム粒を一様に含み、しまりが非常によい）
2. 暗 褐 色 土（1よりやや黄色味を帯び、ローム粒を一様に含み、しまりはよい 3とほぼ同一だが、色調に若干相違がある）
3. 暗 褐 色 土（1より黄色味が強く、ローム粒を一様に含み、しまりはよい）
4. 暗黄褐色土（暗褐色土とロームブロックの混合層、ロームブロック主体、しまりは悪い）
5. 暗黄褐色土（ほぼハードローム層一で、わずかに暗褐色土を含む）

F～F′
1. 暗 褐 色 土（やや黒味を帯び、ローム粒を一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（ローム粒をわずかながら一様に含む）
3. 暗 褐 色 土（2よりやや黒味を帯び、ローム粒を一様に含む）
4. 暗 褐 色 土（5よりやや黒味を帯び、ローム粒、ロームブロックをわずかに含む）
5. 暗 褐 色 土（色調は2とほぼ同一、ローム粒をわずかに含み、炭化粒をわずかに含む）
6. 暗 褐 色 土（3より黒味が強く、径1cm前後のロームブロックをわずかながら一様に含む）
7. 暗 褐 色 土（5より褐色味を帯び、ローム粒を一様に含む）
8. 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合層、ロームブロック主体）

第87図　24号方形周溝墓実測図

り，二重口縁の壺となる可能性が強い。容量は，3.8 l＋α。
また土製勾玉が北辺から出土している。（図93，図版46－19）

25号方形周溝墓（第88図，図版14－1）

西側の大半は既に，57年度に県文化財センターにより調査済みであり，その際には，土器とともに埋葬されたと思われる状態で人骨が出土している。今回の調査では，北辺の一部および東辺を検出したが，どちらからも良好な遺物の出土はなかった。

北辺は，今回調査した2.8mを加えると全体で6mとなり，幅は広狭の差があり，広いところで1.2m，狭いところで0.7mである。深さは6cm～20cmとかなり浅く，西から東に向かって深くなっていく傾向がある。東辺は南端が26号址により切られているため明確ではないが，残存部で10mあり，切られている部分を加味すると約11mになると考えられる。深さは北から南にむかって増し，北端では2cm，南端では20cmとなる。（なお，南辺および，西辺に関しては，まだ整理途中とのことであり，詳細についてはそれをまたなければならないが，大略，南辺は約17m，西辺は約9mである。北東隅，北西隅が切れることにはなるが，後世の開墾等により削平されたためであって，長辺17m，短辺15mの東西方向がやや長い方形であったと考えられる）。内辺，外辺とも比較的直線的である。

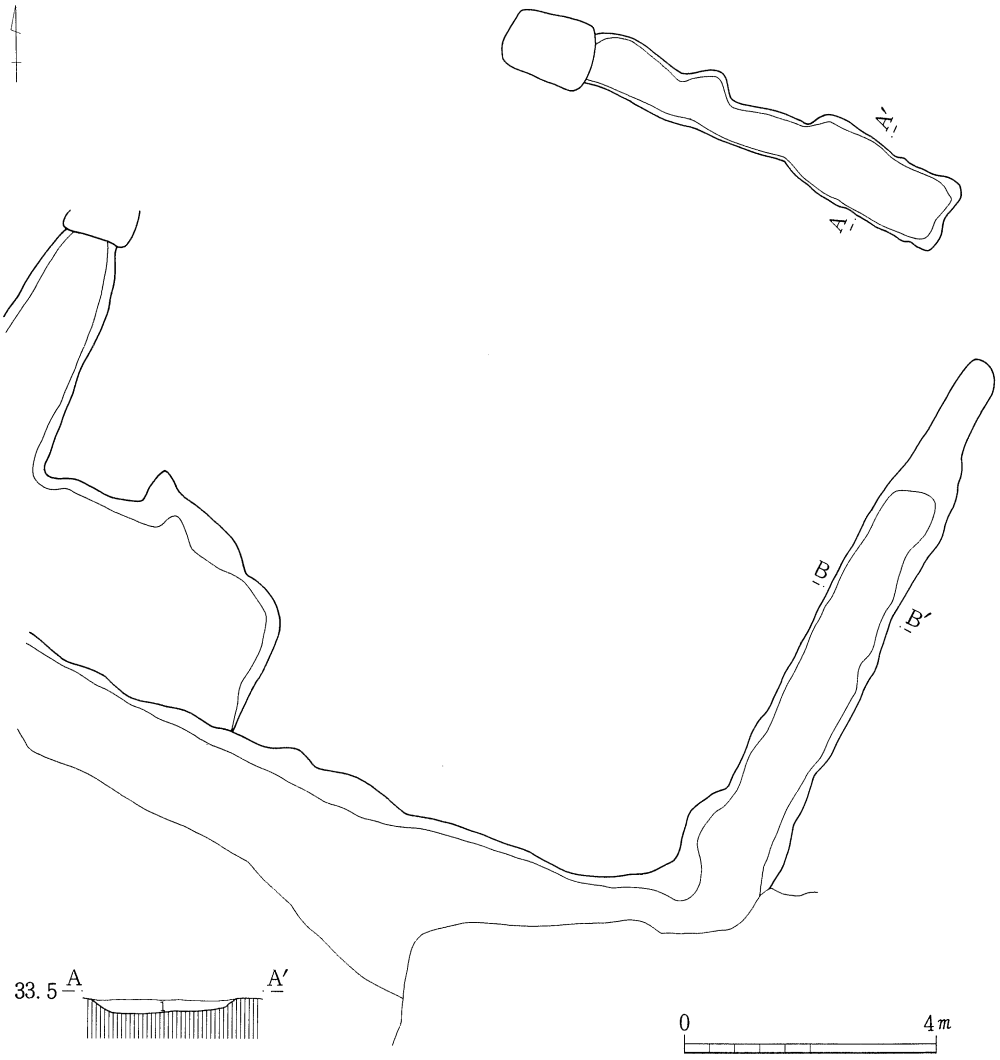
26号方形周溝墓（第89図，図版15～17）

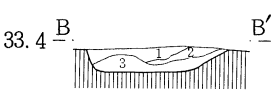
南側は，後世に削り取られており半分以上欠失している。また西側のコーナー付近は，県文化財センターにより調査済みである。既述の2基に比べ，周溝は幅も広くまた，深い。周溝からは多くの遺物を出土している。主体部は検出できなかった。

北辺のみが，ほぼ完存状態であった。長さ20m，幅は北西隅付近で 2.4m，中央で 3.3m，北東隅付近で 2.5mで，外辺が若干ふくらむ感があり，内辺もやや曲線的である。周溝の底面にわずかな段が数箇所で見られ，北外辺の上方でも一部，平坦な段を形成している。この段は周溝の掘削の際に生じたもので，何ら意図的なものではないと思われるが，北辺の段に関しては不明である。なお，東辺，西辺に関してはそれぞれ 6.4m， 6.0m残存していたのみであった。

出土遺物（第90～93図，図版45，46－12，13）

1は有段口縁の壺である。底部を欠いているが，これは焼成後の穿孔によると思われる。口径20.7cm，頸部径10.0cm，胴部径28.5cmで，現存高は28.5cmである。頸部は内外面共に丁寧なヘラミガキで仕上げられているが，外面下半では，ミガキの下にハケメがわずかに残っている。胴部外面は，斜め，および縦方向のヘラケズリの後，部分的にナデを行ない，さらに丁寧なヘ



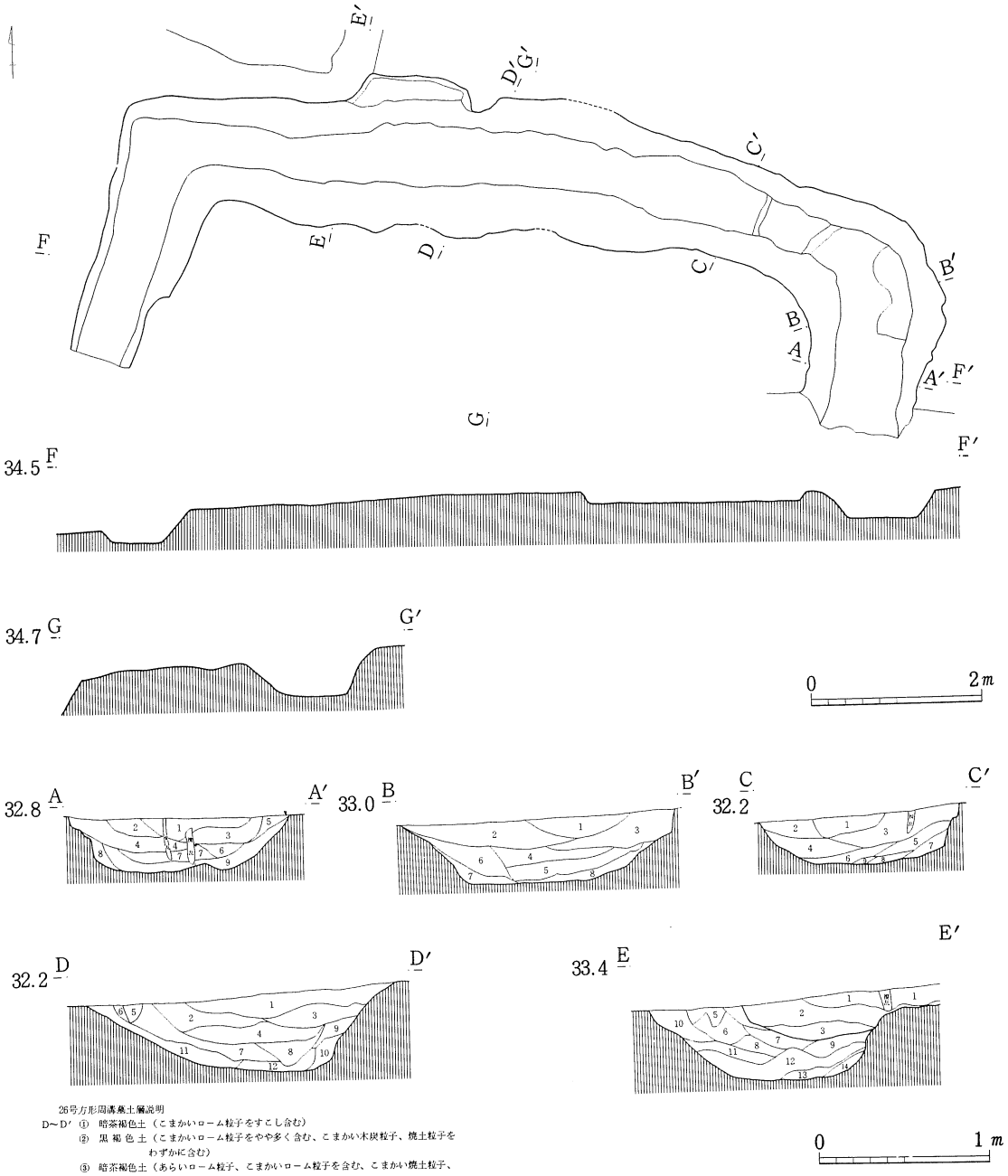


A～A′　1.　暗茶褐色土（ローム粒子を含む）

B～B′　1.　黒灰褐色土（しまりなく軟かい土層、黒褐色土中に貝層を多く含む）
2.　暗 褐 色 土（暗褐色土中に貝層を少し含む。ローム粒子を含む）
3.　明茶褐色土（ロームブロック、ローム粒子を多く含む）

0　1 m

第88図　25号方形周溝墓実測図



26号方形周溝墓土層説明

D～D′ ① 暗茶褐色土（こまかいローム粒子をすこし含む）
② 黒 褐 色 土（こまかいローム粒子をやや多く含む、こまかい木炭粒子、焼土粒子をわずかに含む）
③ 暗茶褐色土（あらいローム粒子、こまかいローム粒子を含む、こまかい焼土粒子、木炭粒子をわずかに含む）
④ 黒 褐 色 土（こまかいローム粒子をわずかに含む）
⑤ 黒 褐 色 土（こまかいローム粒子を少し含む）
⑥ 暗茶褐色土（こまかいローム粒子をわずかに含む）
⑦ 暗茶褐色土（小ロームブロック、あらい粒子、こまかいローム粒子を含む）
⑧ 暗 褐 色 土（暗茶褐色にちかいローム粒子をすこし含む）
⑨ 黒 褐 色 土（こまかいローム粒子を少し含む）
⑩ 茶 褐 色 土（ローム粒子を多く含む）
⑪ 暗 褐 色 土（暗茶褐色にちかい小ロームブロック、あらいローム粒子を含む）
⑫ 暗茶褐色土（こまかいローム粒子を少量含む）

第89図　26号方形周溝墓実測図

25号址土層説明

D～D′

1. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子を少し含む）
2. 暗茶褐色土（細かいローム粒子を少し含む）
3. 暗茶褐色土（粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む。細かい焼土粒子，木炭粒子をわずかに含む）
4. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子をやや多く含む。細かい木炭粒子，焼土粒子をわずかに含む）
5. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子をわずかに含む）
6. 暗 褐 色 土（暗茶褐色に近い。ローム粒子を少し含む）
7. 暗茶褐色土（細かいローム粒子をわずかに含む）
8. 暗茶褐色土（小ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む）
9. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子を少し含む）
10. 暗 褐 色 土（暗茶褐色に近い，小ロームブロック，粗いローム粒子を含む）
11. 暗茶褐色土（細かいローム粒子を少量含む）
12. 茶 褐 色 土（ローム粒子を多く含む）

E～E′

1. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を少量含む）
2. 黒灰褐色土（黒褐色土中にかなり貝殻を含む。しまりなし）
3. 暗 褐 色 土（貝殻をかなり含む。しまりなし）
4. 暗茶褐色土（貝殻・小ロームブロックを含む）
5. 黒 褐 色 土（小ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む）
6. 暗 褐 色 土（非常に細かいローム粒子，細かい焼土粒子を含む）
7. 黒 褐 色 土（粗いローム粒子，非常に細かいローム粒子を含み，非常に細かい焼土粒子をわずかに含む）
8. 黒 褐 色 土（色調は7に比べ暗い。粗いローム粒子，こまかいローム粒子，非常に細かい焼土粒子を含む）
9. 明茶褐色土（ロームブロック，粗いローム粒子を多く含む）
10. 暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む）
11. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を含む）
12. 黒 褐 色 土（細かいローム粒子を含む）
13. 暗茶褐色土（粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む）
14. 茶 褐 色 土（粗いローム粒子，細かいローム粒子を多く含む）
15. 明茶褐色土（ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒子を多く含む）
16. 暗 褐 色 土（小ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒子を含む）
17. 暗茶褐色土（粗いローム粒子，細かいローム粒子を多く含む）
18. 暗茶褐色土（小ロームブロック，粗いローム粒子，細かいローム粒子を多く含む。ややしまりあり）
19. 暗 褐 色 土（細かいローム粒子を含む）
20. 暗茶褐色土（細かいローム粒子を含む）

31号址土層説明

A～A′

1. 暗 褐 色 土（やや黄色味を帯び，ローム粒をわずかながら一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く，わずかながら一様にローム粒を含み，径1㎝前後のロームブロックをわずかに含む）
3. 暗 褐 色 土（1よりやや黄色味が強く，径1～2㎝のロームブロックを含む）
4. 暗 褐 色 土（径2～3㎝のロームブロックをわずかに含む）
5. 暗 褐 色 土（1に比べやや黒味が強くローム粒を一様に含み，径1㎝前後のロームブロックをわずかに含む）
6. 暗 褐 色 土（全体にやや黄色味を帯び，一様にローム粒を含む）

B～B′

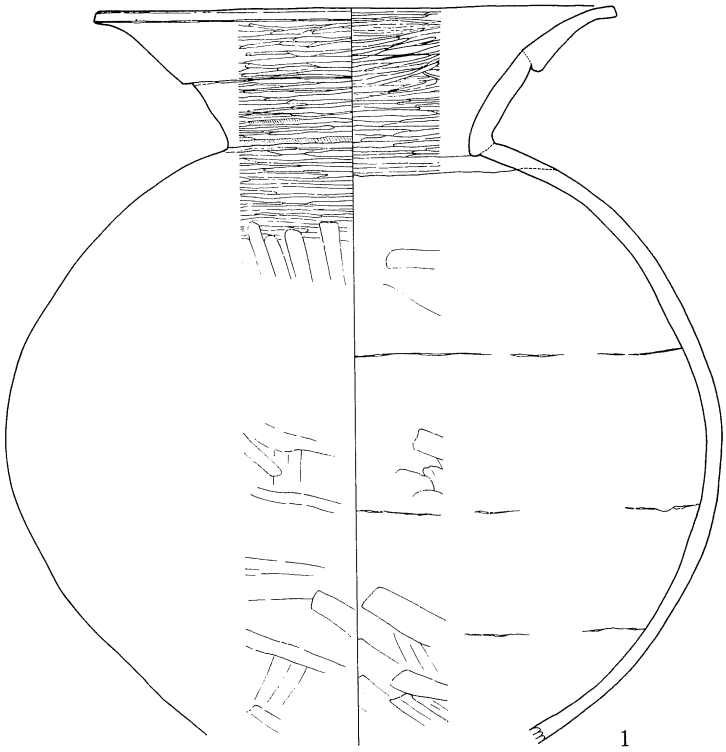
1. 暗 褐 色 土（ローム粒をわずかに含み，全体にしまっている。道路状遺構の硬化面）
2. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く，ローム粒を一様に含む）
3. 暗 褐 色 土（2よりやや黄色味を帯び，ローム粒をわずかな？一様に含む）
4. 暗 褐 色 土（黒味が強く，ローム粒を一様に含む）
5. 暗 褐 色 土（全体に黄色味を帯び，径1㎝前後のロームブロックを一様に含む）
6. 暗 褐 色 土（黒味が強く，径1～2㎝のロームブロックをわずかに含む）
7. 暗 褐 色 土（やや黄色味を帯び，ローム粒を一様に含む）
8. 暗 褐 色 土（色調は7とほぼ同一。径4～5㎝のロームブロックを含む）
9. 暗 褐 色 土（2よりやや黄色味を帯び，径4～5㎝のロームブロックを含む）
10. 暗 褐 色 土（ロームブロック主体で暗褐色土を含む）
11. 暗 褐 色 土（黄色味が強く，ローム粒を一様に含み，わずかにロームブロックを含む）
12. 暗 褐 色 土（黄色味が強く，径2～3㎝のロームブロックを含む）

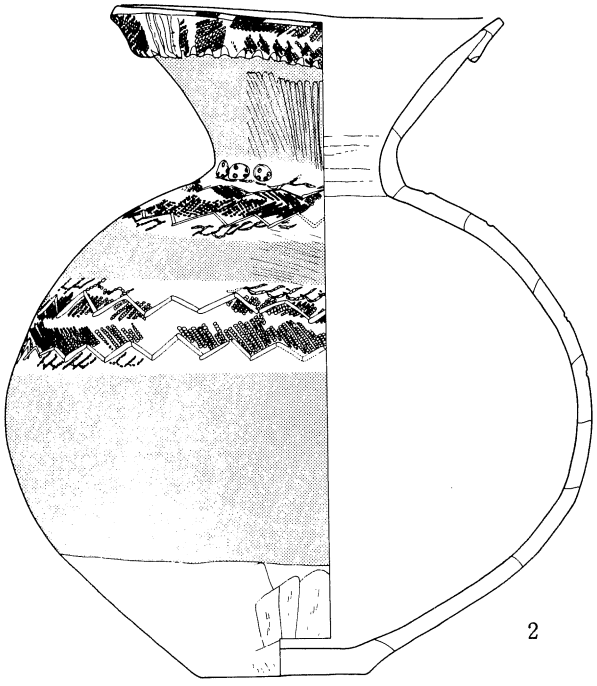
C～C′

1. 暗 褐 色 土（ローム粒を一様に含む）
2. 暗 褐 色 土（1より褐色味が強く，ローム粒を一様に含む）
3. 暗 褐 色 土（やや黒味が強く，径1㎝前後のロームブロックを一様に含む）
4. 暗黄褐色土（ソフトロームとロームブロックの混合土。わずかに暗褐色土を含む）
5. 暗黄褐色土（やや褐色味の強いローム，ほぼ単一。）
6. 暗 褐 色 土（やや黒味を帯び，径2～3㎝のロームブロックを一様に含む）
7. 暗 褐 色 土（全体に黄色味を帯び，径2～3㎝のロームブロックを一様に含む）
8. 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合土。ロームブロック主体）
9. 暗 褐 色 土（灰白色粘土ブロック，ロームブロックを多く含み，粘性がある）
10. 暗黄褐色土（ほぼローム単でわずかに暗褐色土を含む）
11. 暗黄褐色土（ロームブロックと暗褐色土の混合土。ロームブロック主体）
12. 暗黄褐色土（ロームブロック主体。灰白色粘土ブロックをわずかながら一様に含み，わずかに暗褐色土を含む）
13. 暗黄褐色土（ロームブロック主体。灰白色粘土ブロックをわずかながら一様に含む。粘性あり）
14. 暗 褐 色 土（褐色味の強いローム主体。やや粘性あり）
15. 暗 褐 色 土（灰白色粘土をマダラ状に含み，全体に汚れた感じ。粘性強い）

D～D′

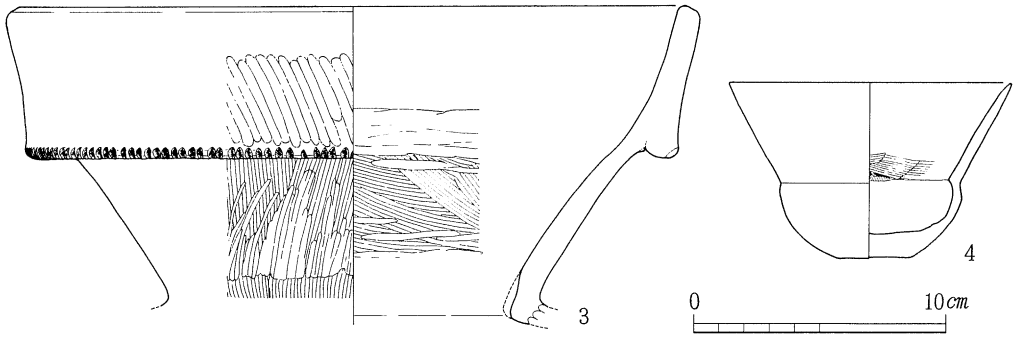
1. 暗 褐 色 土（やや黄色味を帯び，わずかにローム，ロームブロックを含む）
2. 暗 褐 色 土（やや黒味を帯び，ローム粒を顕著に含む）
3. 暗 褐 色 土（2に比べ黒味が強く，わずかにローム粒を含むが，概して挟雑物は少ない）
4. 暗 褐 色 土（3よりやや黒味が強く，わずかにローム粒を含む）
5. 暗 褐 色 土（4よりやや黄色味を帯び，ローム粒を一様に含み，径1～2㎝のロームブロックをわずかに含む）
6. 暗 褐 色 土（2よりやや黄色味を帯び，径1㎝前後のロームブロックをわずかながら一様に含む）
7. 暗 褐 色 土（やや黒味を帯び，ローム粒を顕著に含む）
8. 暗 褐 色 土（全体に黄色味を帯び，ローム粒，径1～2㎝のロームブロックを一様に含む）
9. 暗 褐 色 土（やや黒味を帯びローム粒を一様に含む）
10. 暗 褐 色 土（径5㎜前後のローム粒を一様に含む）
11. 暗黄褐色土（ロームブロック，ローム粒と暗褐色土の混合土。ローム主体）
12. 暗黄褐色土（11よりも褐色味を帯びた，ロームとロームブロックの混合土。全体にややしまりが悪い）
13. 暗 褐 色 土（全体に黄色味が強く，径1～2㎝のロームブロックを一様に含む。やや汚れた感じ）
14. 暗 褐 色 土（黄色味を帯び，やや粘性あり，わずかに灰白色粘土粒を含む）
15. 暗黄褐色土（ロームブロック主体で，わずかに灰白色粘土ブロック・暗褐色土を含む）





0　10cm

第90図　26号方形周溝墓出土遺物実測図 (1)　(1/3)



第91図　26号方形周溝墓出土遺物実測図 (2)　(⅓)

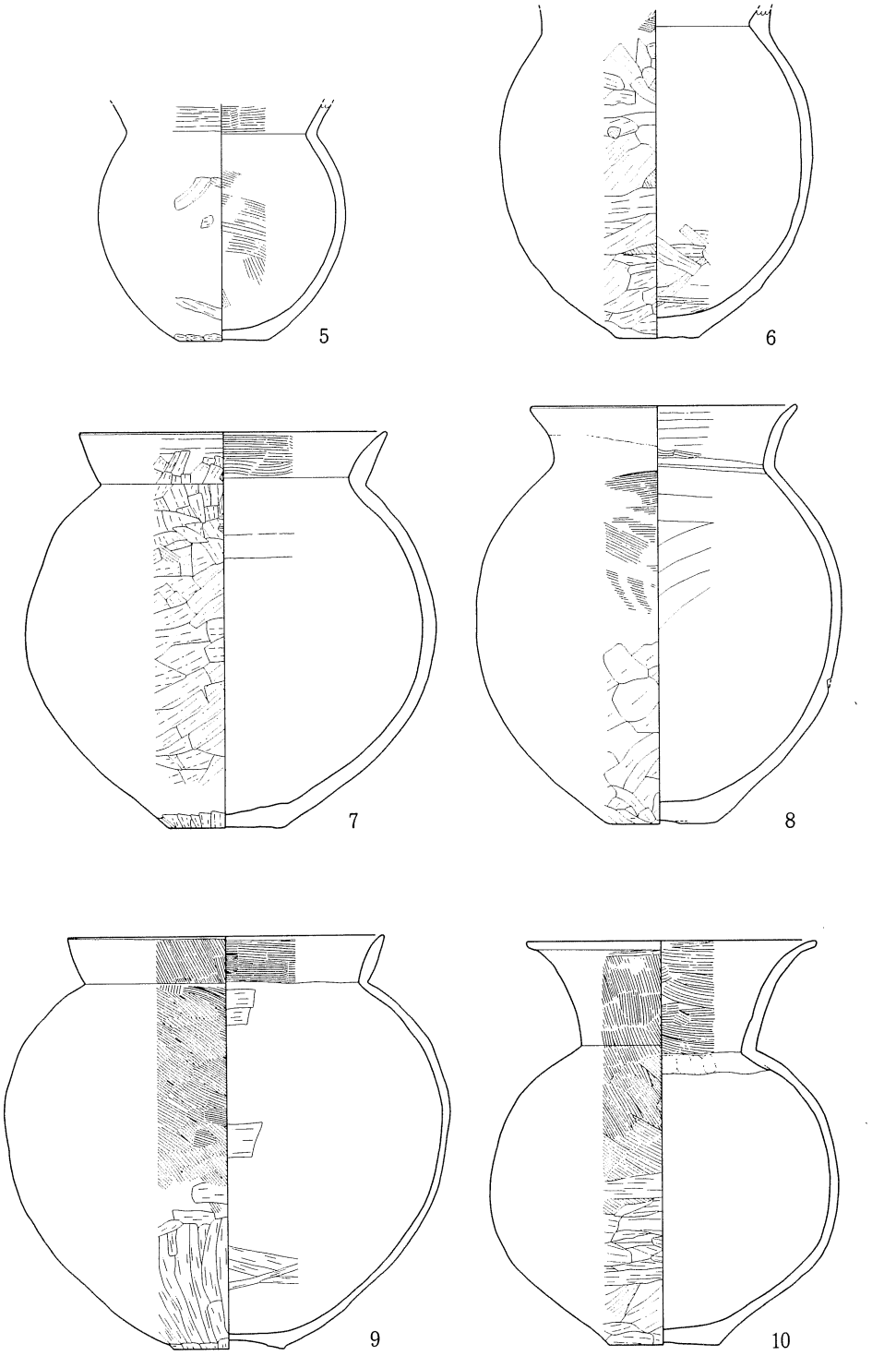
ラミガキを行なっているが，下方ほど荒くなっている。内面は丁寧なナデにより仕上げられているが，底部付近ではヘラケズリが見られる。なお，胴部上半には黒斑が見られる。容量は，10.5 l ＋α。

2は，赤彩の有段口縁壺である。胴部の約¼を欠き，口径15.2cm，頸部径 8.6cm，底部 6.5 m，器高は26.2cmである。胴部は球形に近く，最大径はほぼ中央にある。胴部と頸部との境界の屈曲は強く「く」の字状を呈しており，頸部はほぼ直線的に開いている。有段部の成形は断面長方形の粘土板を付すことによっている。装飾は，口唇部，口縁部，頸部，胴部になされている。口唇部には斜向縄文が巡り，口縁部には三段の羽状縄文が施され，有段部には刻みが入れられており，さらに三本一単位の棒状付文が4 箇所に付されている。胴部の装飾は，上半を中央よりやや上の部分になされているが，共にS字状結節文により上下を区画し，その間を羽状縄文で充たし，さらにその上からヘラ状工具により山形文を描出している。容量は 5.2 l。

3は，頸部のみ出土した複合口縁の壺である。頸部はほぼ全周し，口縁部の½を欠く。口径は27.4cm，頸部径は14.7cmである。口縁部内面は横方向のナデ，外面は横方向おナデののち，縦方向のヘラミガキを行なっており，複合口縁部の下端部にはキザミを入れている。頸部内面は斜方向のハケののち，粗い横方向のミガキもしくは，軽いナデを施している。なお，胎土中に黒色に光る微粒を顕著に含んでいる。器形は異質な感があり，搬入品の可能性もある。

4は，小型丸底坩である。口縁部の⅓を欠くがほぼ完形である。口径11.2cm，頸部径 7.0cm 胴部径 7.2cm，底径 2.9cm，器高 7.0cmである。頸部外面は，横方向のナデののち，横方向のハケを施し，内面は，同じく横方向のナデののち，粗い縦方向のヘラミガキを施す。胴部は，外面は縦方向のナデののち横方向のヘラミガキが見られ，内面は横方向のナデが認められる。また，外面の¼弱の部分に黒斑が見られる。容量は 0.3 l。

5の甕は口縁端は遺存せず，頸部のわずかな部分，胴部の⅓および，底部のみを残している。頸部径，胴部径はいずれも推定で，それぞれ10.9cm，14.2cmで，底径は 5.1cmである。頸部外



第92図　26号方形周溝墓出土遺物実測図 (3)　(1/4)

面は横方向のナデ，内面は横方向のハケメが見られる。胴部外面はハケののち荒いナデを行ない，内面上半はハケが残り，下半ではハケののちナデを行なっている。底部外面は主として円方向のケズリがなされ，内面ナデがなされている。容量は 1.3 l ＋α。

6の甕は，口縁は残存せず，わずかに頸部を残し，胴部の⅔を欠く。いずれも推定で，頸部径13cm，胴部径18cm，底径 4.8cm，器高は現高で18.9cmである。頸部外面はわずかに斜方向のハケののち，斜方向のナデを行なっているのがわずかに認められ，内面ではわずかにナデが見られる。胴部外面は斜方向のハケののち，斜めあるいは横方向のケズリを行ない，内面は主として横方向のナデであるが，下半では斜方向のケズリが見られる。底部は内外面ともケズリがなされているが，外面では，わずかに無調整の部分が残っている。なお，底部から胴部下半にかけて，径10cm前後の黒斑が認められる。

7は，口縁部，胴部をわずかに欠くがほぼ完形の甕である。口径17.5cm，頸部径15.2cm，胴部径23.6cm，底部径 6.4cm，器高22.8cmである。頸部外面は，上半では横方向のナデが，下半では縦方向のケズリがなされ，内面では，横方向のハケメが認められる。胴部外面は斜めまたは横方向のハケののち，主として斜方向のケズリがなされており，内面は横方向のナデがなされている。底部外面は，円方向のケズリが見られるが，内面は凹凸が顕著で，無調整と思われる。容量は6.0 ℓ。

8は，完形で出土した甕である。口径15.2cm，頸部形12.7cm，胴部形21.0cm，底径 6.3cm，器高は23.9cmである。頸部外面は横方向のなでがなされ，内面は，上位では横方向のナデが，中位では横方向のハケののち横方向のナデが，下位では横方向のハケがなされている。胴部外面は，上半は横方向または斜方向のハケののち，部分的にナデが，下半では横方向のハケののちほぼ全面をナデており，内面は上半では水平方向の，中央では斜方向のナデがなされているが，下半から底部にかけては不明瞭である。底部外面は不整方向のケズリがなされており，中央付近で凹状を呈している。容量は 4.9 l。

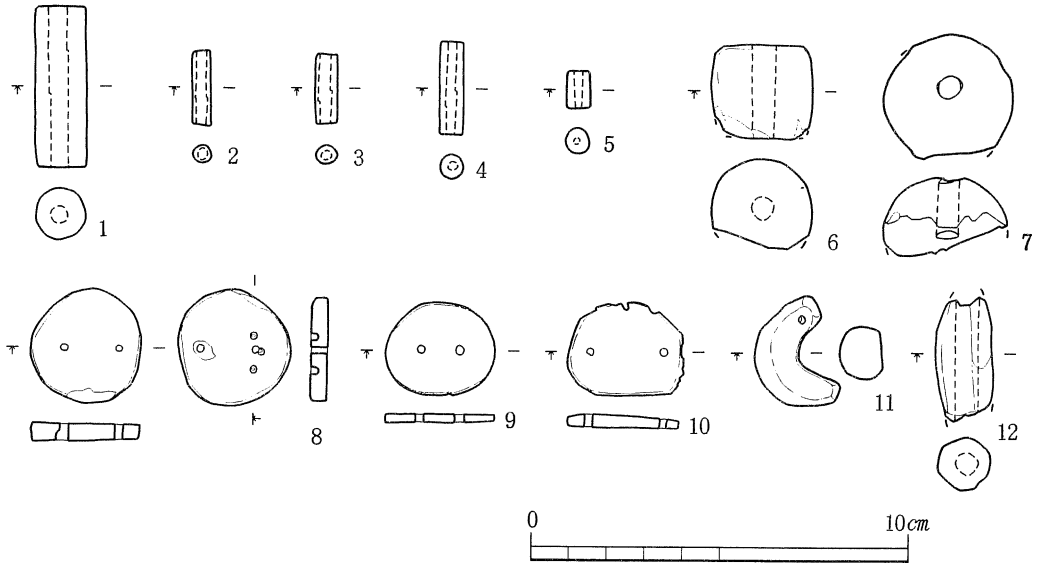
9の甕は，口縁の¾および胴部上半の⅓等を欠く。いずれも推定で，口縁径18cm，頸部径16.2cm，胴部径25.6cm，底径 6.3cm，器高32.8cmである。頸部外面は斜方向のハケが，内面は縦方向のハケが施される。胴部外面は，上半では斜方向のハケ，下半では縦方向のケズリがなされ，内面は全面的に横方向のナデがなされる。底部外面は，中心付近では一定方向の，外縁では円方向のケズリがなされている。内面では不整方向のケズリが見られる。底部外面は凹状を呈している。

10は単口縁の壺で，頸部の⅘を欠損するが，ほぼ完形である。口径は推定で16.5cm，頸部径10cm，胴部径20cm，底径 6.3cm，器高23.3cm，口縁端は内外面とも横方向のナデ，頸部外面は縦方向のハケ，内面は横方向のハケが施される。胴部外面は，上半は斜方向のハケで，下半は

斜方向のハケののち横または斜方向のケズリがなされ，内面は底部に至るまで丁寧なナデが行なわれている。底部外面は，中心付近では一定方向の，外縁では円方向のケズリがなされている。なお，頸部から胴部にかけてのハケは，接合部分を通過している部分と，一旦工具を離している部分とが見られる。また，外面の一部に黒斑を有する。容量は 3.9 l 。

また，管玉が 2 点出土している（第93－1, 2図, 図版46－12,13)。 1 は長さ 4.3cm，太さ 1.4cm と大型で，孔径は 4.8mmである。穿孔は両端から行なわれており，1 mm弱のズレを生じており，約 1 cmダブっているのが認められる。 2 は長さ 2 cm，太さ 5 mm，孔径 3 mmで，穿孔は両端から行なわれ， 0.5mmほどのズレが生じているが，ダブっている部分は少ない。

これらの遺物の出土状況については図版16, 17 を参照されたいが， 1， 4，および管玉 1 が周溝直上から出土しており，他の遺物については，覆土中からの出土である。



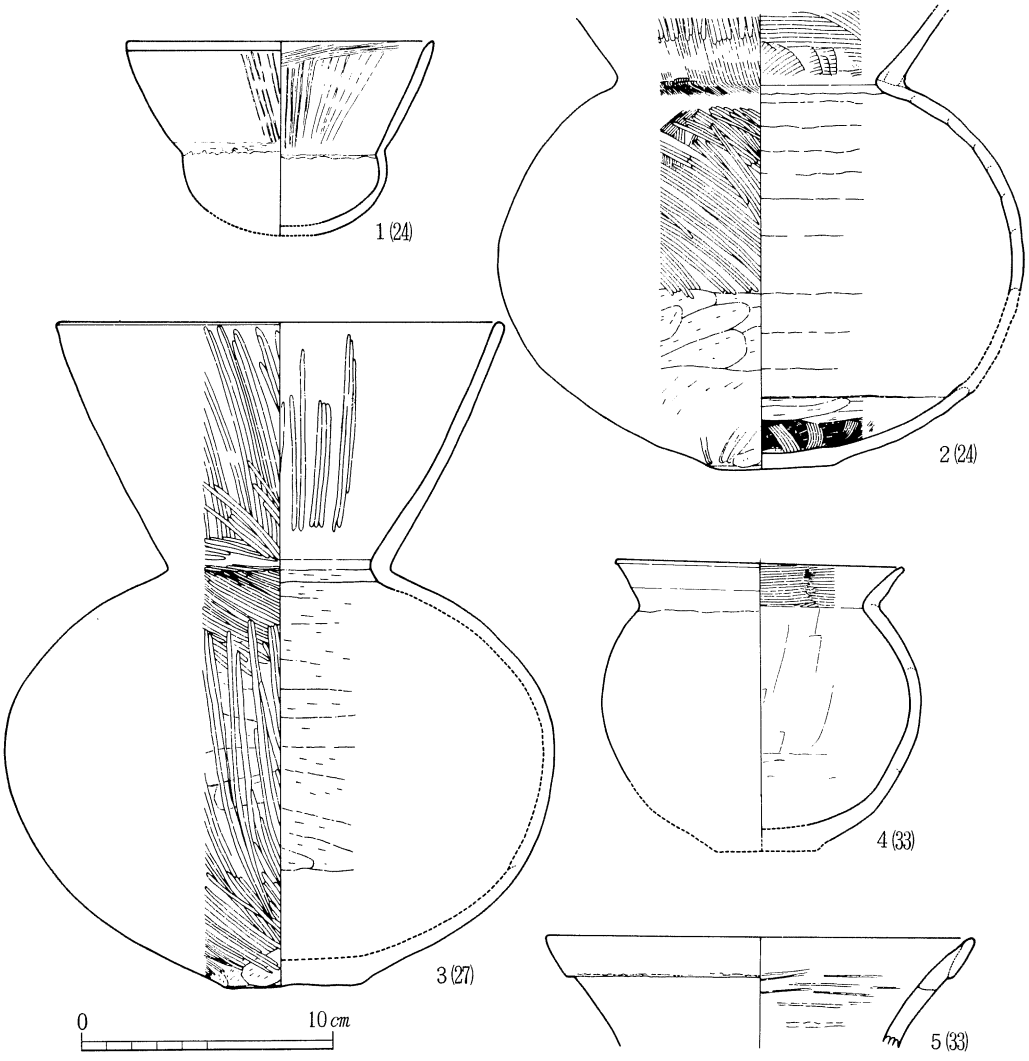
第93図　玉類実測図 (1/2)

参考資料（第93－ 3 ～ 5 図，図版46－14～16）

3 ～ 5 は，いずれも26号方形周溝墓の南側の削平面から出土した管玉である。本来の帰属遺構は不明であるが，削平前の方形周溝墓に副葬されていたとも考えられるので，ここで報告しておく。 3 ～ 5 おもに滑石製である。形態的には 3 ・ 4 は類似しているが， 5 は太さでは大差はないが，長さが短かく，穿孔も片面のみからであり， 3 ・ 4 が両端から穿孔されていることと対照的である。もっともこの相違は単に長さの差に起因しているものとも考えられる。

その他の古墳時代前期の遺物（第94－3～5図，図版46）

3は，27号址出土の大型坩である。この遺構は8号住居址の南側を切っている溝状遺構である。遺物はこの遺構のほぼ中央から出土した。口縁部および胴部の一部を欠くがほぼ完形で，口縁径 7.8cm，頸部径 8.9cm，胴部径21.9cm（推定），底径 5.5cm，器高26.5cmである。頸部外面は横方向のナデののち，粗い縦方向のヘラミガキを行ない，内面は同じく横方向のナデののち，外面より粗い縦方向のヘラミガキを施している。なお，外面の胴部との接合部付近では，横方向ヘラミガキが見られる。胴部は外面は横方向のヘラケズリののち縦方向のヘラミガキを施しており，内面は上半では横方向のヘラケズリ，下半ではナデが見られる。底部は外面は荒れていて不明瞭であるが，内面はナデを行なっている。外面は全体に暗赤褐色を呈するが，赤



第94図　古墳時代前期遺物実測図（1/3）（カッコ内は遺構番号）

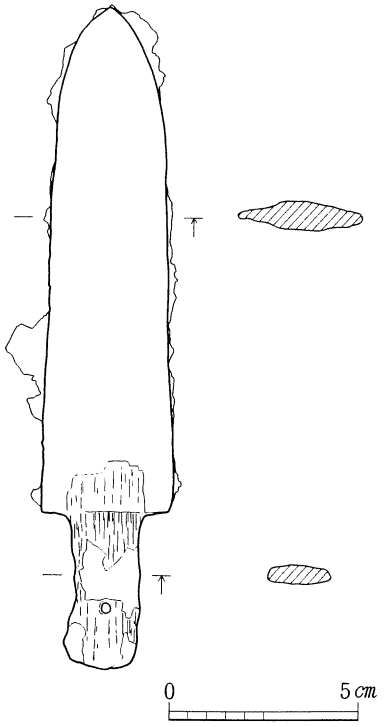
彩によるものかどうかは即断し難い。また，黒斑が頸部・胴部接合部および口縁端付近の，いずれも内面に見られる。容量は 5.2 l。

4は，後述する33号台地整形部の覆土除去中に出土した甕である。底部を完全に欠き，口縁端部の½を欠く。口縁径11.5cm，頸部径 9.5cm，胴部径12.7cm，器高11.5cmである。口縁部および頸部は外面では横方向のナデが見られ，内面では，オサエののち主として横方向のナデを行なっている。なお，外面は，赤褐色の部分と黒褐色の部分とがマダラ状を呈しているが，黒斑が二次的火化によるかは不明である。

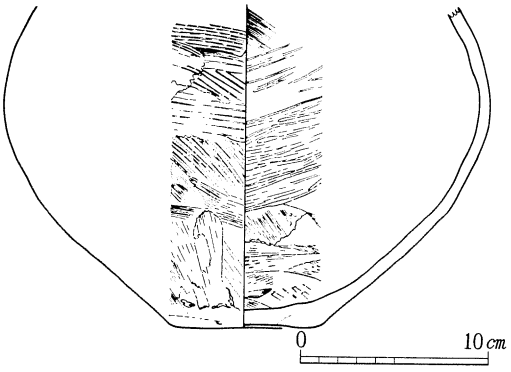
5は，複合口縁の壺の口縁部である。約⅓の破片で，口径は推定で16.9cmである。外面は磨耗が著しく，整形技法等は不明瞭である。内面では口縁端で横方向のナデが，それより下位ではナデののち粗い横方向のヘラミガキを行なっているのが認められる。

遺構外出土の古墳時代前期遺物（第95・96図，図版46－5，24）

1・2は共に26号方形周溝墓の東側のやや離れた地点で出土した甕と鉄剣である。甕は口縁部を欠き，胴部の約½，底部全面のみ残存している。同一固体と思われる頸部破片も出土したが接合はできなかった。胴部径は推定で25.7cm，底径は 7.8cmである。胴部外面は，上半は板



第95図　遺構外出土鉄剣実測図



第96図　遺溝外出土甕実測図（¼）

状工具による横または斜方向の荒いナデがなされ，下半では縦方向のナデがなされている。内面は，上半はナデののち粗い斜方向のヘラミガキが見られ，中位では横方向のヘラミガキ，下半から底部にかけては板状工具によるナデがなされている。底部外面はごく荒いナデがなされている。鉄剣は，この甕のすぐ脇で出土したものである。茎にはわずかに木質を残し，目釘も遺存していた。

この2点は，本来何らかの遺構に伴っていたものが，後世の開墾等の際に出土し，それを改めて，埋め直したといったものではないかと考えられる。

弥生土器・土師器の容量について

従来，土器諸数値の計測に関しては，器高・口径・底径等，外観から抽出されている傾向があると思われる。そもそも，土器製作者の意識下には，外観の体裁が大きな位置を占めていたことは確かなことであろう。また，土器製作には多分に経験的要素を必要とするものとも考えられる。この経験的要素というものが，具体的にどのような形で，土器に現れてくるかは，充分な検討が加えられなければいけないが，1つの要素として，土器容量を考えるべきではないかと考える。今回の資料中，完形に復原し得る土器は弥生時代後期から古墳時代前期に比較的多く見られ，特にそれらの遺物を中心に容量の計測を行った。

容量の計測には，砂を用いたが，それは以下の理由による。まず，土器容量の計測には大別して2つの方法があると考えられ，1つは，図から数学的計算によって求める方法であり，1つは，実際に土器の何らかの物質を入れ，その量を計る方法である。前者に関しては，実際に遺物が眼前にない場合には有効であると思うが，今回のように整理進行中であれば，数式の操作よりも，実際に計る方が，誤差も少なく，時間的にもロスが少ないのではないかと判断し，後者を採用することとした。その場合，液体を用いるか固体を用いるかという問題が生じるが，液体は，土器そのものに含浸しまた多少のヒビにより流れ出，目一坏の状態で固定することは不可能であると考えられ，したがって何らかの固体を注入することがより有効な手段であると判断した。何らかの固体ということになると，なるべく，細かい粒子であり，扱い易く手近に存在するものが必要である。ここに至って，砂の利用を採用したわけである。実際の計量に際しては，あらかじめ使用する砂の単位容量当りの重量を測っておき（今回の場合100m l 当り138gであった），以下実際土器に入れ，重量を測って容量を復原した。[(1)]

各土器の容量は個別の報告中にも記載したが，ここで改めて器種ごとにまとめたのが，第表である。出土資料数自体，多くなく，何らかの傾向を把握するには至らないが，甕類に関しては5～6 l 前後の物が多く，大型壺は，わずか2個体ではあるが，共に10 l を越えているこ

第4表　土器容量計測値一覧表

器　種	形　態	出土遺構	容 量(ℓ)	描図番号	器　種	形　態	出土遺構	容 量(ℓ)	描図番号
壺	単口縁・装飾	20	5.8	76－1	甕	平　底	26	6.0	
	大型・装飾	22	10.8	82－2		長　胴	〃	4.9	92－8
	赤　彩	24	3.8＋α	94－2		小型平底	26	1.3＋α	92－5
	装　飾	26	5.2	90－2	坩	小型丸底	24	0.5	94－1
	大型複合口縁	26	10.5＋α	90－1		〃	26	0.3	91－4
	単口縁・ハケメ	26	3.9	92－10		大　型	27	5.2	94－3
					鉢		21	0.7	78－2
甕	平　底	21	5.5＋α	79－3	高　坏		21	1.4	78－1
	台　付	22	4.9	81－1					

とが見てとれる。もっともこの2個体に関しては，他の計測値でも大きな開きはなく当然のこととも言えるが，容量においても近似していることが明らかになったことは，また1つの成果であると言えよう。

上に述べたように容量には，土器製作者の多分に経験的な要素が反映されていると考えられるが，むしろ，考えなければならないのは，その容量がいかなる経験的要素を反映しているかということである。用途論との関連も出てくるが，仮に甕を煮沸に供されたものとした場合，土器製作者の意識下にあるのは，どのような物質を1人につきどれだけ何人分煮沸するかというようなことではないかと思う。(2) 今挙げただけで，3つの要素があり，それぞれの要素を抽出するのは現段階では不可能であろう。しかし，この3つの要素の総体として，容量を促えた場合，容量が変化することは（増大にしろ減少にしろ），ある要素の変化のあらわれとして促えられよう。結局，ある要素の変化により，総体が変化したことの反映でしかないわけであるが，それをどのように解釈するかが，問題となり，新たな問題提起が可能になってくる。(3)

しかし，今までのところ，土器容量の計測はまだ一般化しているとはいい難い状況にあり，(4) 現時点では，容量がいかような変化を示しているかも明確には把握し得ない。今後の新たな研究の展開のためにも，土器容量の計測を行う必要があろう。(5)

(1)壺など，胴部と頸部が明瞭に分けられる器に関しては，胴部のみの容量を計測すべきであったかもしれないが，今回は，全体の容量の計測にとどめた。

(2)物を通してある人間の意識を抽出し得るかどうかは重要な問題である。どうしても観念論的にならざるを得ず，また，資料操作者の意識の枠組を出ることはない。ここに列挙した三点も単なる思いつきにすぎず，その他の要素も考えなければならない。

(3)土器に何らかの変化が見られた場合，それをどう解釈するかは，各個人レベルの解釈に委ねなければならない。容量の増大から，煮沸量の増加，さらにはその裏返しとしての生産

力の増大を見ることも，ある程度の蓋然性を持ち得るし，さらに想念を巡らせば，必要熱摂取量の増加すなわち労働量の増加も考えられる。労働量の増加まで考え出すと，強制労働，搾取といったマイナスのイメージが強くなり，単純に生産力の増加といったプラスのイメージと正反対の方に向いてしまう。もっとも，これは，仮に甕の容量が増大の傾向を示した場合，それだけから何を考えるかという１つの例を示しただけで，１つ１つ傍証を加えて，いずれの解釈がより蓋然性をもち確実性に近いかを検討して行くべきであろう。

(4)土器の容量計測を行なっている例として，

（ｉ）佐原　真編　『弥生土器』（日本の美術　№125 ）至文堂　1976

（ii）藤村東男編　『九年橋遺跡第三次調査報告』 1977

（iii）都出比呂志　「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』1982

などがあげられる。

(5)当然，技法・文様・形態等を無視することはできず，各観点を総合して，その土器の歴史的位置づけを行なうべきであることは，いまさら言うまでもない。

付記：土器の容量の計測に関しては，石坂俊郎氏の多大な協力を得た。容量を計測することも，そもそも氏の提案によるものである。ここで記して感謝の意を表するものである。

古墳時代後期の概観（第97図）

この時期の遺構は，わずかに住居址１軒（28）と性格不明の落ち込み（29）があるだけである。住居址は西半が既に調査されており，また南半は欠失している。遺物はわずかに鬼高期の坏を出土したのみである。性格不明の落ち込みは，谷の南側の台地上に検出されたもので小型の手捏ね土器・石製模造品・土玉等が比較的まとまった形で出土した。

遺物としては，上述以外にも多くの土師器が出土しているが，ほとんどが，歴史時代以降の項で触れる，33号址の覆土中からの出土であるが，北側台地上からも若干の遺物が出土している。特に，須恵器と土師器の中間に属するような一群の土器が出土していることは注目に値する。「草刈型土器」（仮称）として後でまとめて報告するが器種構成・整形法は須恵器のそれであるが，赤彩を施し酸化炎焼成されたものであり，「須恵器を模倣した土師器」とは異質なものである。

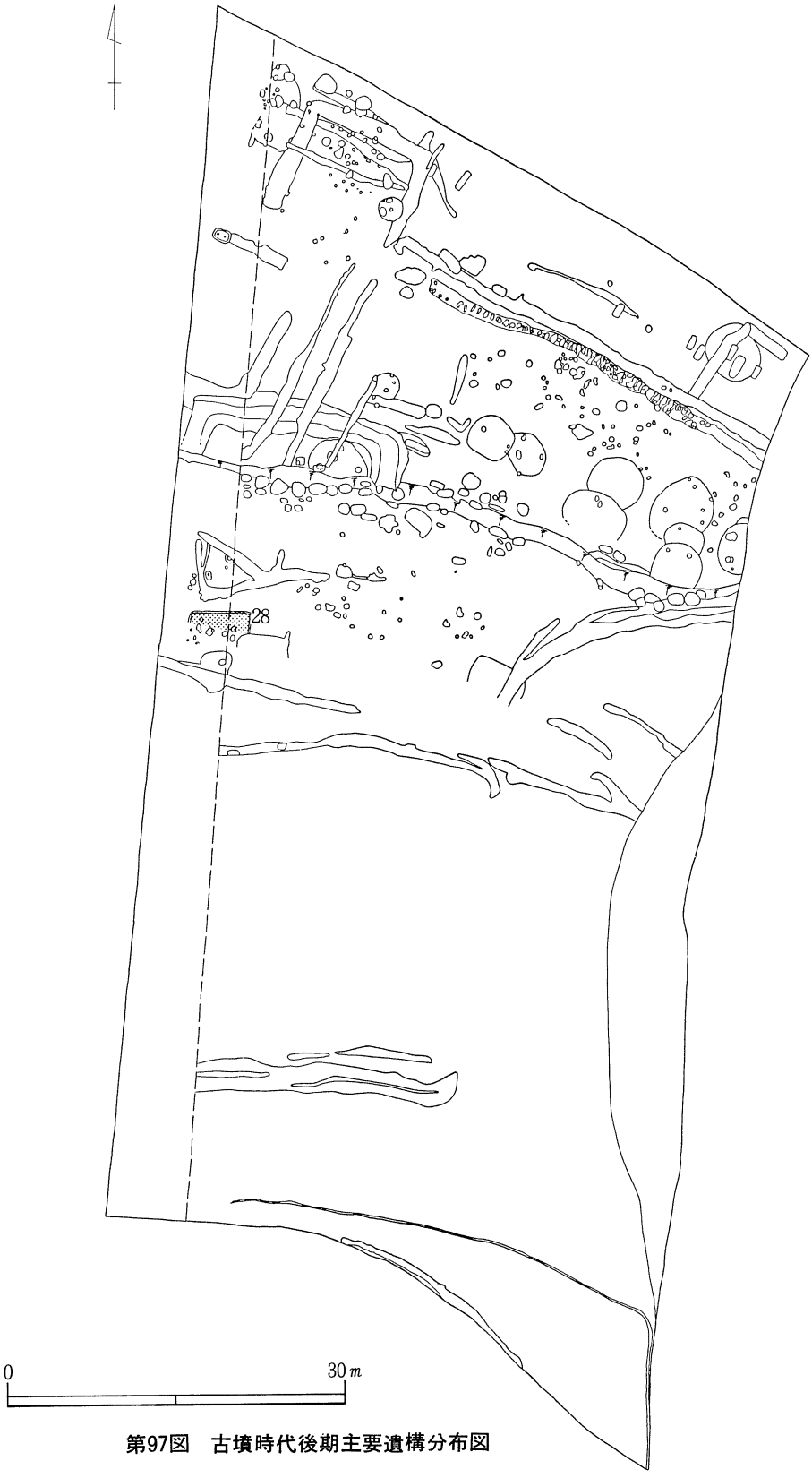
調査範囲内では，わずかな遺構が存在するだけであるが，既に一部が公表されているようにこの時期はかなり活発な集落の営みがなされており，「草刈型土器」もその一端を示しているとも言える。集落の広がりの中で考えれば，周縁に位置していると考えられ，非常に断片的な様相しか見出し得ないが，かつての墓域に住居址が存在することは，墓域としての意識の喪失，もしくは，居住領域の拡大に伴うものとも言え，そこには時代の変化，活発な人間活動がうかがわれる。墓域としての意識が喪失したことにより，再び，人間の手を加え得る土地であるという認識が生じていたかもしれない。ただし，それはその後の大規模な土の移動を思わせる状況を目の前にしていることにより考え得ることであり，当時の意識下については推測の域を出ない。

住居址

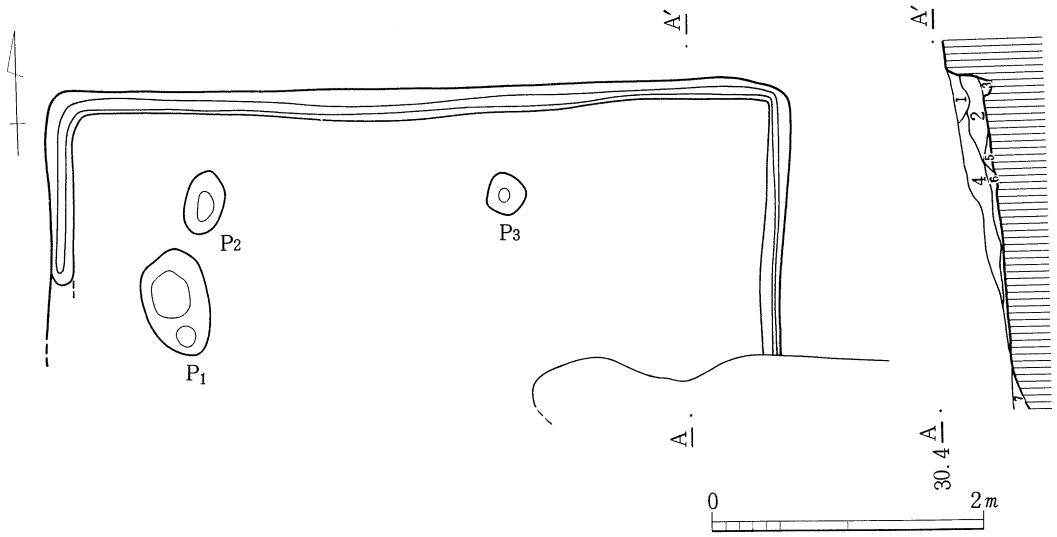
28号住居址（第98図，図版21－１）

今回調査した古墳時代の住居は本址のみである。下段の緩斜面において検出されたものであるが，西半の大部分は既に57年度に調査済みである。また，南側の半分以上も，前述の22号址同様，残存していない。遺物は覆土中から坏が一点出土したのみであるが，周辺に当刻期の遺構がないため，本址に伴うものとした。

平面形は方形で，北辺は長さ7.2mで，東辺，西辺はそれぞれ，2m, 1.4mしか残存していない。すべての壁際で周溝が検出されたが，深さはいずれも床面から３cm前後である。ピットは数箇所で検出されたが，深さは10cm前後であり，並び方にも不規則な感もあり，柱穴としていいのか不明である。



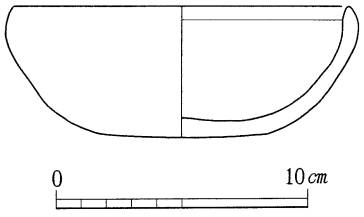
第97図　古墳時代後期主要遺構分布図



第98図　28号住居址平面図・土層断面図

出土遺物（第99図，図版46－11）

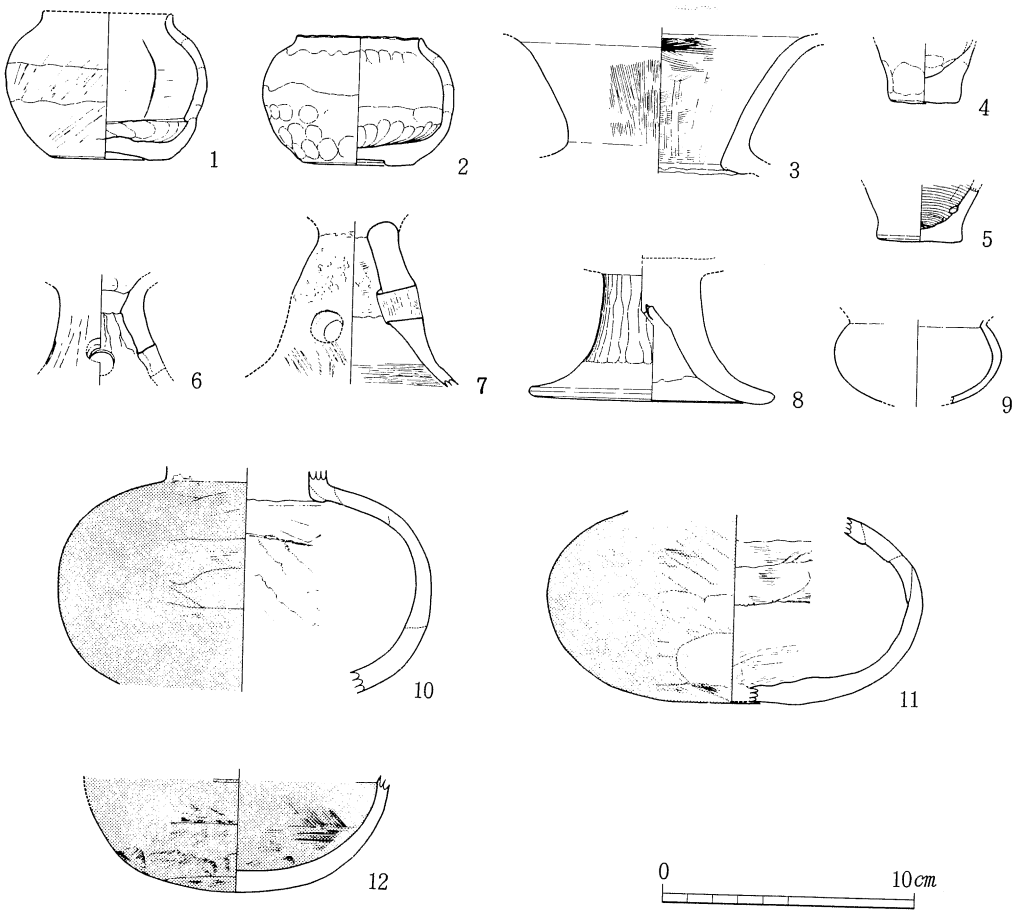
1は北東隅から出土した土師器坏である。約¼の破片で，推定で口径13.4cm，底部径6.7 cm器高 5.2cmである。内外面ともに磨耗が激しく整形は不明瞭であるが，体部・底部の内外面ともにヘラケズリが施されている。色調は全体に赤褐色であるが，外面にわずかに黒斑が見られる。



第99図　28号住居址出土遺物実測図（⅓）

29号址（第106図）

谷の南側の，後述する33号台地整形部の覆土除去後，長方形の落ち込みが確認され，その面を堀り下げたところ，手捏ね土器・土玉・有孔円盤などが出土した。性格，時期共に不明瞭である。底面には，ピット・焼土等は検出されなかった。遺物はいずれも底面近くで検出され，特に2つの手捏ね土器は，そのまま置かれていたような感もあった。他に覆土中からも若干の遺物が出土している。



第100図　29号址・33号台地整形部出土遺物実測図（⅓）
（1～4：29号址，5～12：33号址覆土）

出土土器（第100図）

1・2はいずれも小型の短頸壺とでも呼ぶべき手捏ね土器である。1は，口縁部全てと，胴部の½を欠き，口縁径・胴部径はいずれも推定で，5.1cm，8.0cm，底部径は4.8cm，器高は推定で5.8cmである。口縁部は内外面とも横方向のナデがなされ，外面ではケズリに近いナデ，内面ではオサエののちナデがなされている。底部外面は，中央の凹部に不整方向の細いスジが認められるが，ハケメとは異なるように見える。また，この凹部は外面の他の部分に比べ特に平滑な感がある。内面には，螺線状の強いナデが見られる。なお，内面の胴部と底部の境界には，粘土の接合痕が残っており，底部と胴部が別造りであったと思われる。胴部中位から底部にかけて黒斑が見られ，底部外面の凹部にもやや薄い黒斑が見られる。2は口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。口縁径4.9cm，胴部径7.6cm，底径4.4cm，器高5.1cmである。口縁部から，胴部上半までは内外面ともにオサエののちナデがなされている。胴部下半は外面ではオ

サエののちナデを行なっており，皺が顕著に見られる。内面は底部まで，強いオサエの凹凸が螺線状に見られる。底部外面は1同様，中央が凹状を呈し，平滑で，不整方向の細い筋が見られる。また底部の外縁部は押圧により平坦になっている。なお，底部から胴部下半にかけては小さい黒斑が見られる。

3は壺の頸部で，頸部径は 7.2cmである。口縁部はわずかに残存しており，外面では横方向のナデが，内面では横方向のミガキもしくは，ナデがなされている。頸部外面は細い縦方向のハケののち，粗いミガキもしくはナデを施し，内面は横方向のハケののち粗い縦方向のミガキを行なっている。外面全体およひ，内面の頸部以上に赤彩を施している。大きさのわりに器壁が厚く，あるいは二重口縁になるかもしれない。

4は手捏ねの小型品である。口縁径等推定が困難であるが，底径は 2.7cmである。全面的にオサエののちナデを行なっている。

なお5～12は，33号台地整形部の覆土中から出土した土器である。この29号址同様，南側の六之台遺跡の時期的様相をある程度反映していると考えられるので，この項でまとめて報告しておく。

5は，4同様手捏ねの小型品で，形態等は4に類似しているが，内面には螺線状のハケメが顕著に認められる。

6・7は小型器台の脚柱部である。6は透し穴中位以上の脚柱部のみの残存であって，器受部および脚端部は不明であり，脚部基部径は 3.3cmである。わずかに残存する器受部下半外面は，オサエののちナデがかすかに見られ，内面には横方向のケズリもしくはナデがなされ，脚柱部外面はオサエまたはナデののち，ヘラ状工具により縦方向の粗いナデがなされており，内面はシボリの痕跡が認められる以外は無調整である。

8は高杯の脚部である。坏部は残存していない。脚径 3.8cm，裾部径 9.8cm，脚高 5.0cmである。脚柱部外面はヘラ状工具によるナデを施し，内面は横方向のケズリを行なっている。裾部は内外面ともに横方向のナデが認められる。なお，裾端部の接地面には押圧による平坦な面が認められるが，その面にはヘラケズリがなされ，また木口状の擦痕も認められる。外面全面には赤彩が施されている。

9は小型の手捏ね土器である。約⅕の破片で，口縁部は残存していない。頸部径 5.4cm，胴部径 6.6cmである。焼成があまいためか，内外面とも磨耗が激しく整形は必ずしも明瞭ではないが，内外面ともナデがなされていると思われる。器壁は厚いところでも3㎜前後でかなり薄いと言える。

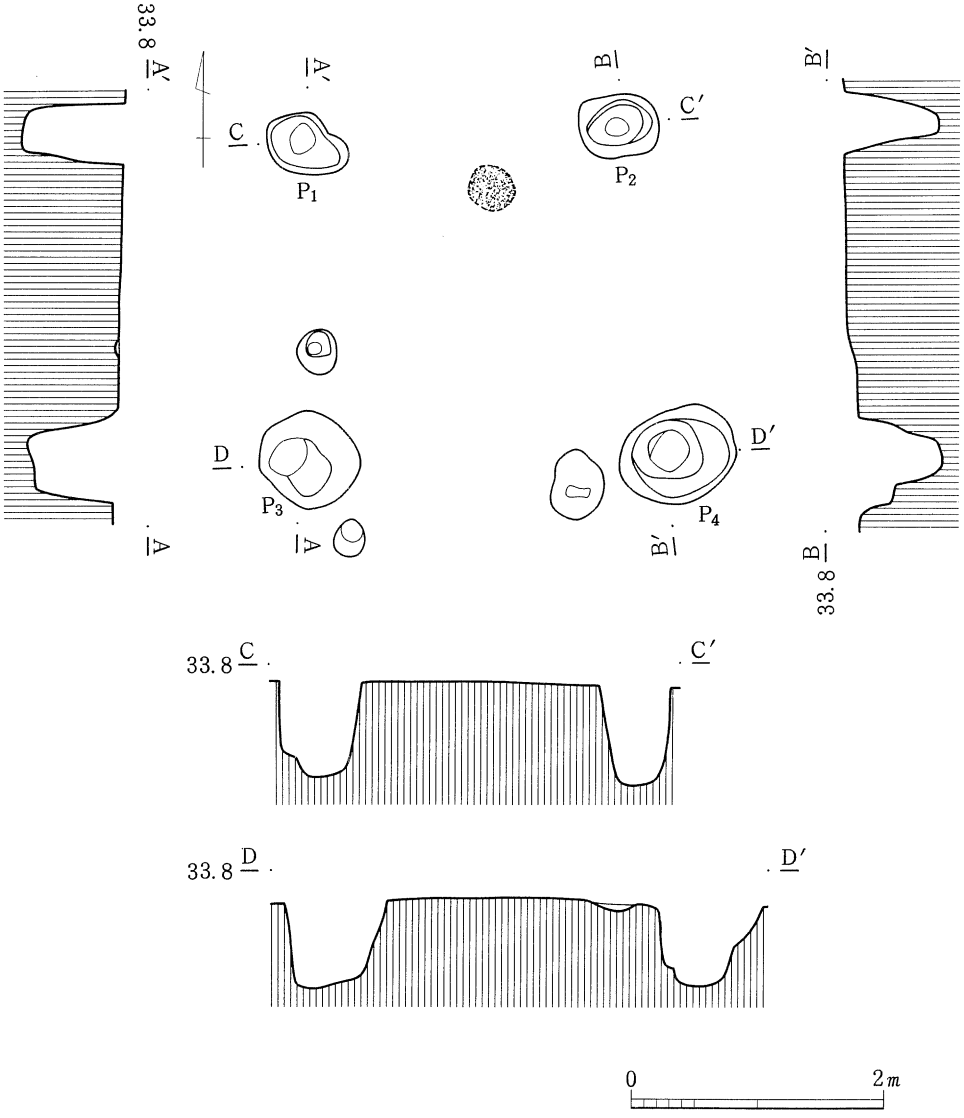
10は頸部との接合部をわずかに残すものである。約¼の破片で底部は残存していない。頸部径，胴部径はそれぞれ推定で 6.3cm，14.8cmである。頸部・胴部ともに内外面でナデがなされ

内面では頸の接合部，および胴の上半部に輪積みの痕跡があり，それぞれ指頭により押圧しているのが認められる。なお，外面全面に赤彩を施している。同様の遺物に11がある。

12は，口縁部を欠く丸底の坏である。胴部・底部共に内外面にナデを行なっているが，外面はやや荒く，内面はやや平滑な感がある。全面に赤彩を施している。

石製品・玉類（第93図，図版46－12～23）

8・9は輝緑片岩製の有孔円板である。8は横 2.9cm，縦 3.0cmの不整な円形を呈し，厚さ 4.5 m，孔径2㎜，孔間 1.5cmである。9は横 2.9cm，縦 2.5cmの楕円形を呈し，厚さ 2.5㎜ 孔径は共に2㎜，孔間は1cmである。8では，貫通している2孔の他に，穿孔を途中で中断したと思われる箇所が3箇所ある。孔径は3つとも2㎜で，相対する孔との間隔は上下の2つは



第101図　30号住居址エレベーション（1／60）

1.5cmであるのに対し，中のものは 1.6cmとやや遠い箇所にある。

6は土玉である。長さ 2.5cm，径 2.7cm，口径6㎜で½弱欠損している。焼成は良好で，堅くしまいっているが，整形等は不明瞭である。

なお，7・10は谷南側の遺構外から出土したものである。7は土玉で半分以上欠損している。径 3.3～ 3.5cmの歪んだ球形を呈し，中心からややずれて，径6㎜の穿孔がなされている。焼成は良好で，胎土中にはわずかに砂粒を含むが全体にキメ細かい。10は，8・9同様輝緑片岩製の有孔円板で，横 3.1㎜，縦 2.4cm，厚さ3㎜である。孔径は共に2㎜で，孔間は2cmである。ほぼカマボコ型を呈するが，上辺および右辺は欠損が著しい。

30号住居址（第101図，図版21－2）

壁および床が削平されて残存せず，ピットの配置と焼土，赤化したロームの存在等を考えて住居址と判断した。4つの柱穴と，炉が柱穴の間よりやや中央寄りにあるという特徴は有しているが，時期的には不明である。

「草刈型土器」（仮称）（第102図，図版47－1～5）

今回の調査において，形態・成形技法に須恵器的要素が見られ，焼成・彩色に土師器的要素の見られる一群の土器が出土した。詳細については個別の記述を参照されたいが，これらの土器の特徴および，名称の設定について述べておく。

1．成形の特徴

基本的な成形にはロクロを使用したと思われる。蓋や杯身に見られるように，須恵器で言う回転ヘラケズリ，ヨコナデの痕跡が明瞭に残っており，さらに広口壺では口縁下に二単位の波状口縁が巡っていること，また端部の仕上げに鋭さが感じられることからも，ロクロの使用と見て良いであろう。ここに須恵器的要素が認められる。

しかし，成形後の工程を見ると，まず赤彩がなされ，ついで，酸化炎により焼成される。単に赤彩のみ，または，酸化炎焼成のみを取り出して考えると，赤彩については，8世紀前半代の須恵器に見ることができるし，酸化炎焼成については，ロクロ土師器として平安時代以降広範囲に見られる。この一群の土器では，両者が併存している点が特に土師器的として促えるべき特徴であろう。

2．器種構成

今回の調査では，有蓋高坏・広口壺が出土している。有蓋高坏については，蓋・身・脚部があるが，脚部には方形の透し孔が認められる。また，六之台遺跡からは　が出土しているとのことである。これが器種構成の全てではないと思われるが，須恵器に見られる器種構成との相

違は認め難い。形態的には5世紀末ないし，6C期初頭の様相を示しており，日常雑器的要素も見られないことは，この一群の土器の性格を暗示しているのではないかと考えられる。ただし，今回の出土品はいずれも遺構に伴ったものではない点で，性格はややあいまいにならざるを得ないが，器種構成からは，須恵器的要素がうかがえる点を指摘しておきたい。

3. 名称について

上に述べてきたように，今回出土したこの一群の土器は，須恵器的要素と土師器的要素を取り込んでいることは明瞭である。したがって，これらの土器に何らかの名称を与えるとなると慎重にならざるを得ない。個人的には，須恵器に対する理解としては，ロクロによる整形と還元炎焼成のセットとして考えているわけであるし，また土師器に関しては非ロクロ整形と酸化炎焼成のセットが切り離せないものと考えている。単に論理的な組み合せであるなら，ロクロ＋酸化炎，または，非ロクロ＋還元炎という組み合せは考えられるが，これまでそのような組み合せの例の出土に触れたことはなく，今述べた2つのセットで理解していたと思う。今回の一群の土器はまさしく，ロクロ＋酸化炎の組み合せであり，どちらの範疇にも属さないと考えるべきであろう。

ロクロ技術のみ遊離して土師器製作工程に加わったということも考えられるが，この時期にロクロ技術のみ遊離するという現象がいかなる背景で生じたかの吟味が不可欠であるし，ロクロ技術と還元炎焼成つまり構造窯構築が簡単に切り離せないものであることは，この一群の土器の出土例がこれまで認められていないことが逆に証明していると言えよう。仮にそのような現象の結果であるとしても，それは特殊性として理解するべきであって，単にロクロ技術のみを用いただけであるという理解の仕方は，問題をボカしはするが，深めることにはならない。これは，需給関係を考えても言えることで，たとえば，須恵器の器形＋赤彩という形での要請が需要側からあったとする。その要請をどのような集団に対して行なったかという問題もさることながら，どのようにしてその要請に応え得たかという疑問も生じる。結局は，須恵器工人と土師器工人の上に立つか，または間に入る人間もしくは集団の存在を考えざるを得ない。その点を明らかにするには今後多くの過程をふまなければならず，とてもこの報告の中では明らかにできない。その点が明らかになったとしても，この一群の土器を「～須恵器」「～土師器」という呼称をつけることはそうたやすいことではないであろう。

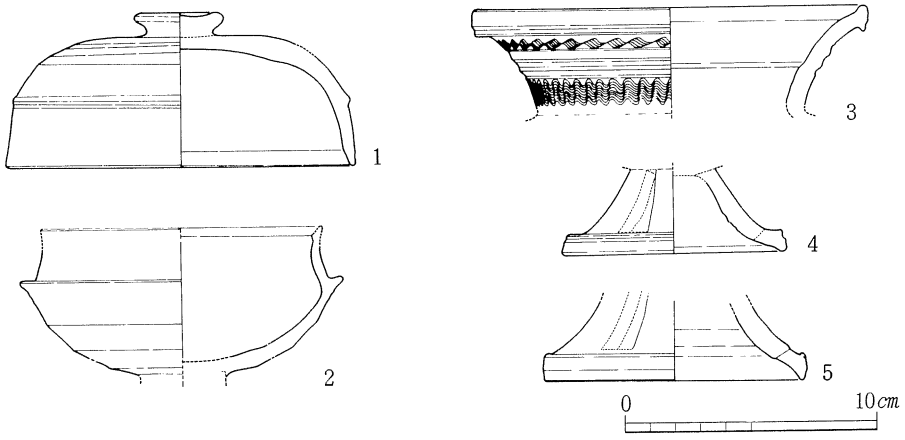
以上のようなことを考慮した結果ここではあえて，土師器・須恵器という範疇は用いないという結論に達したのであり，この一群の土器の類例に関しては，隣接する遺跡（草刈遺跡，六之台遺跡）の出土例を知るのみであり，いずれも市原市草刈に所在するものであって「草刈」という名を冠したものである。また「草刈式」とせず「草刈型」としたのは「式」という呼称を使うことは，時間的・空間的な意味合いを含みかねないからであり，現在までのところ，時

間的・空間的拡がりを把握し得ていないので「型」とすることにしたものである。当然，今後の類例の増加により，時間的・空間的拡がりがある程度明瞭になれば「草刈」という地名も改めるべきであるし「式」にまで概念を高めることもあり得よう。しかし現段階においては「草刈型土器」とするのが妥当であると考える。

4．今後の検討課題

以上のように，この一群を「草刈型土器」としたわけであるが，生産体制等が不明なことは既に述べたところであり，慎重を期さなければならないのは言うまでもない。また胎土分析を経ていないので，胎土採集地や，還元炎焼成に耐え得る胎土かどうかも不明である。製作者を考えるには不可欠な点が未解決なままであると言えるが，最後に私見を述べておきたい。

ロクロ技術のみの遊離があるかどうかという点に関しては，否定的にならざるを得ない。ロクロ技術を有することと，築窯技術すなわち還元炎焼成技術を有することは，不可欠と見るべきであって，この「草刈型土器」に関して須恵器工人（ロクロ＋窯）が介在していたと考えたい。そこに需要者の要請が加わって「草刈型土器」が成立したのではないかと思われる。さらに，胎土分析の結果如何にもよるが，類例が現在までのところ狭い範囲に限定されていることから，工人と需要者との隔たりも大きいものではなかったとも考えられる。それからただちに地方窯の存在を想起するのはやや早急に過ぎるであろうが，その可能性は指摘できるのではないかと考える。これまで，古墳時代の須恵器に関しては搬入品として理解してきたが，今後は「草刈型土器」は当然のこと，須恵器についても胎土分析，技法等細かい分析を進める必要があると言えよう。



第102図　草刈型土器（仮称）実測図（1/3）

1は有蓋高坏の蓋である。約½の破片で，推定で口径13.9cm，器高は紐を含めて 6.1cm，体部のみでは 5.2cmである。つまみ口径 3.5cmで凹型で中央でや盛り上がる。天井部と口縁部の境界に稜をもつ。口縁端は丸く細く仕上げられている。天井部外面は，回転ヘラケズリを施し他の部分はヨコナデのままである。ただし，天井部内面にはさらに丁寧なナデが施されている他の四例に比べると，胎土中に砂粒を多く含む点では，類似するが，赤彩が認められないという点でやや趣を異にしている。また端部の整形に若干甘さが見られる。

2は，有蓋高坏の身である。脚部および，口縁端を欠く約⅕の破片である。推定で口径11.2cm，胴部径12.8cm，器高は体部のみで 5.9cmである。端部は欠くが，立ち上りはほぼ直立し，蓋受けもしっかり作られている。内面は，体部はロクロによらないナデが施され，立ち上がりの両面，及び蓋受け部，さらにそこから約2cm下方まではヨコナデがなされ，それより下方は回転ヘラケズリが施されており，明瞭な稜線が認められる。内外面とも全面に赤彩がなされ，胎土中には砂粒を多く含んでいる。

3．4は共に，有蓋高坏の脚になると思われる。共に三方に方形の透しをもつ。3は4よりも若干大き目である。双方とも両面にヨコナデが見られ，外面は赤彩しているが，3の方は赤色というよりも褐色味が強い。また，胎土中には砂粒を多く含んでいる。

5は広口壺の口縁部である。口縁部は短く，甕を思わせるが，口縁下にロクロにより引き出した2条の突帯をもちそれをはさんで上下に櫛描き波状文をもつことから，広口壺と判断した内外面ともヨコナデを施し，赤彩している。なお，波状文の施文具に関しては，条線の本数・間隔に相異が見られ，異なった施文具を使用した可能性がある。胎土中に砂粒が多いことは他の4例と同様である。

これらのうち2．3．5は，赤彩の感じ，胎土が極めて類似しているように思われる。

なお，いずれも遺構に伴っての出土ではなく，2～5は後述する33号址の覆土中からの，1は谷北側の遺構外からの出土である。

歴史時代以後の概観（第103図）

この時期以後は，住居址はなく，土拡，台地整形部及び道路状遺構が検出された。台地整形部は，谷の南側台地上で検出され，今回の調査範囲内では完結していない。最も多いのは道路状遺構である。34号址は硬化面の下から，円形・楕円形のピットが連続している状態が検出された。35・36・37号址の堆積土を除去した結果確認できたものであるが，35・36の2遺構谷をはさんで向かい合う形になっており，かつては連続していたことを想起させる。調査前の道と重なり合うような形で多くのこれら遺構が検出されたことは，道の不変性というようなものを表しているようである。

遺物としては，土師器の椀や中世陶器の破片が出土しているが，量的には少なかった。

これらのことは，この時期以降この地が居住領域として意識されていないことを示している時期的には不明であるが，26号址の南半を欠失させる程の大量の土の移動があったことにも示される如く，何らかの形で台地の利用が再びなされ始めたことが見てとれるが，具体的にどのようなものであったかは不明である。しかし少くとも生活の拠点の存在は，この調査範囲内には見出せず，数条の道路状遺構に見られるように，単なる通過点としての存在で終っていると言えよう。しかし，単なる通り道ではあるが，それは低地と台地上を結ぶ経路であり，おそらく現在の草刈の部落と，台地上の耕作地を結ぶ不可欠のものとなっていたと思われ，決して存在価値は低くなかったと言えよう。

遺構と遺物

土壙

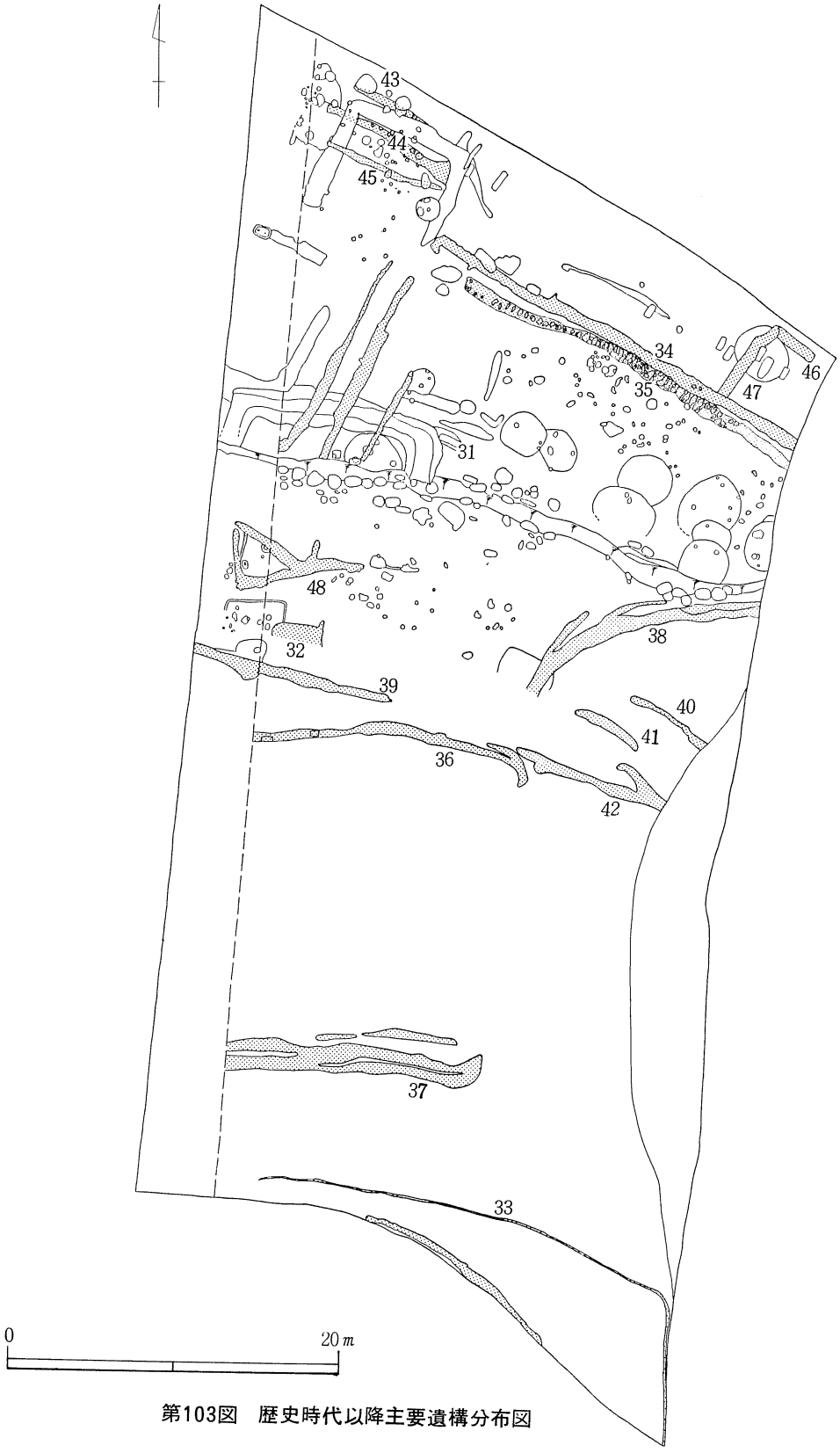
31号土壙（第104図，図版22－1）

26号址の北東隅をわずかに切って掘られている。この種の遺構は今回の調査においては本例だけである。良好な資料の出土はなく，性格・時期ともに不明である。性格としては埋葬施設とも考えられるが，確証を欠く。時期的にも確証はないが，古墳時代以前ではないであろうという理由をもって，歴史時代以後とした。

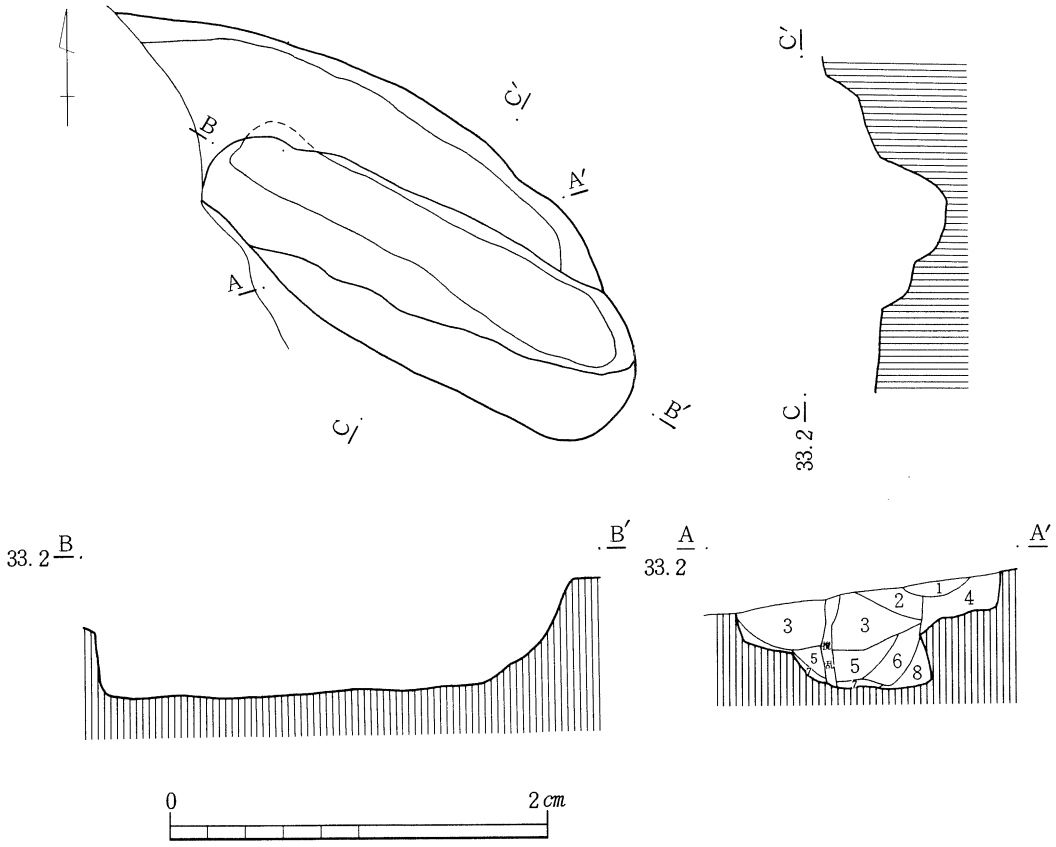
開口部は長軸 2.6m，短軸 0.4mの東西に長い楕円形で，南側壁に幅 40cm，高さ40cmの段を有し北側壁は，底面からほぼ垂直に立ち上がり開口部に至る。覆土上方から土器片が出土したが，底面付近からは遺物の出土はなかった。

32号土壙

28号址の南を切っている。完存していたのは北辺のみで，東辺，西辺は，22号址や28号址と同様に欠失している。東辺は4mで，北東端は，北方に40cm張り出しており，北西の端は，曲線を描いている。性格は不明である。北東端の張り出し部分から椀を2個出土している。



第103図　歴史時代以降主要遺構分布図



31号土壙土層説明

A－A′ ① 黒 褐 色 土
② 暗 褐 色 土（ローム粒子をすこし含む）
③ 黒 褐 色 土（ローム粒子をすこし含む）
④ 暗茶褐色土（小ロームブロック、ローム粒子を少し含む）
⑤ 黒 褐 色 土（上層よりも明るい色調、ローム粒子を少し含む）
⑥ 暗 褐 色 土（こまかいローム粒子を多く含む）
⑦ 暗茶褐色土（ロームブロック、ローム粒子を少し含む）
⑧ 茶 褐 色 土（ローム粒子を多く含む）

第104図　31号土壙実測図（1/20）

出土遺物（第105－1，4図，図版47－6，7）

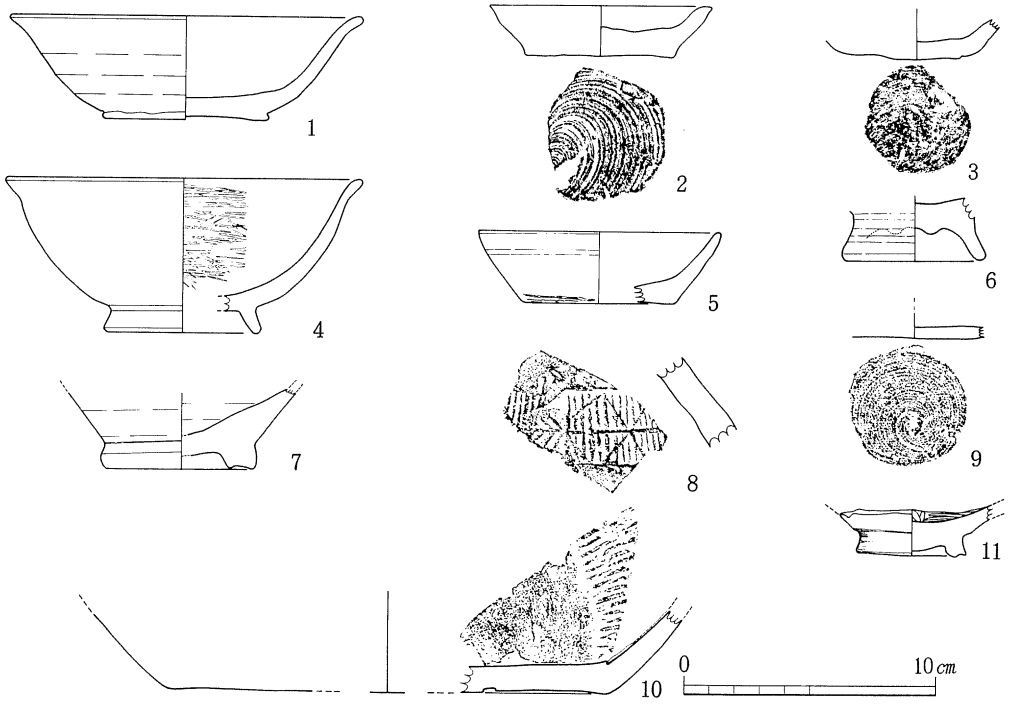
1の土師器椀は，約½の破片で，推定で口径13.8cm，器高4cmである。底部径 6.4cm，体部はやや内彎しながら外方へ開き，口縁部付近でやや外反してそのまま終っている。体部内外面及び底部内面はヨコナデで仕上げられており，底部外面は，回転糸切りっ放し無調整である。なお底部は，わずかに擬似高台を思わせるが，これはロクロからの切り離しの際に粘土がはみ出したもので，高台を意識したものではないと思われ，平底の椀としてよいであろう。焼成はやや甘く，胎土は全体に砂っぽい。

4は，内黒の高台付椀で，約　の破片である。推定で口径14.2cm，高台径6cm，器高 6.2cmである。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部で外反する。高台は高さ8mmで外方へ開き，端部は丸味を帯びる。内面は主として丁寧な横方向のミガキが施される。底部はほとんど残存しておらず，調整は不明である。

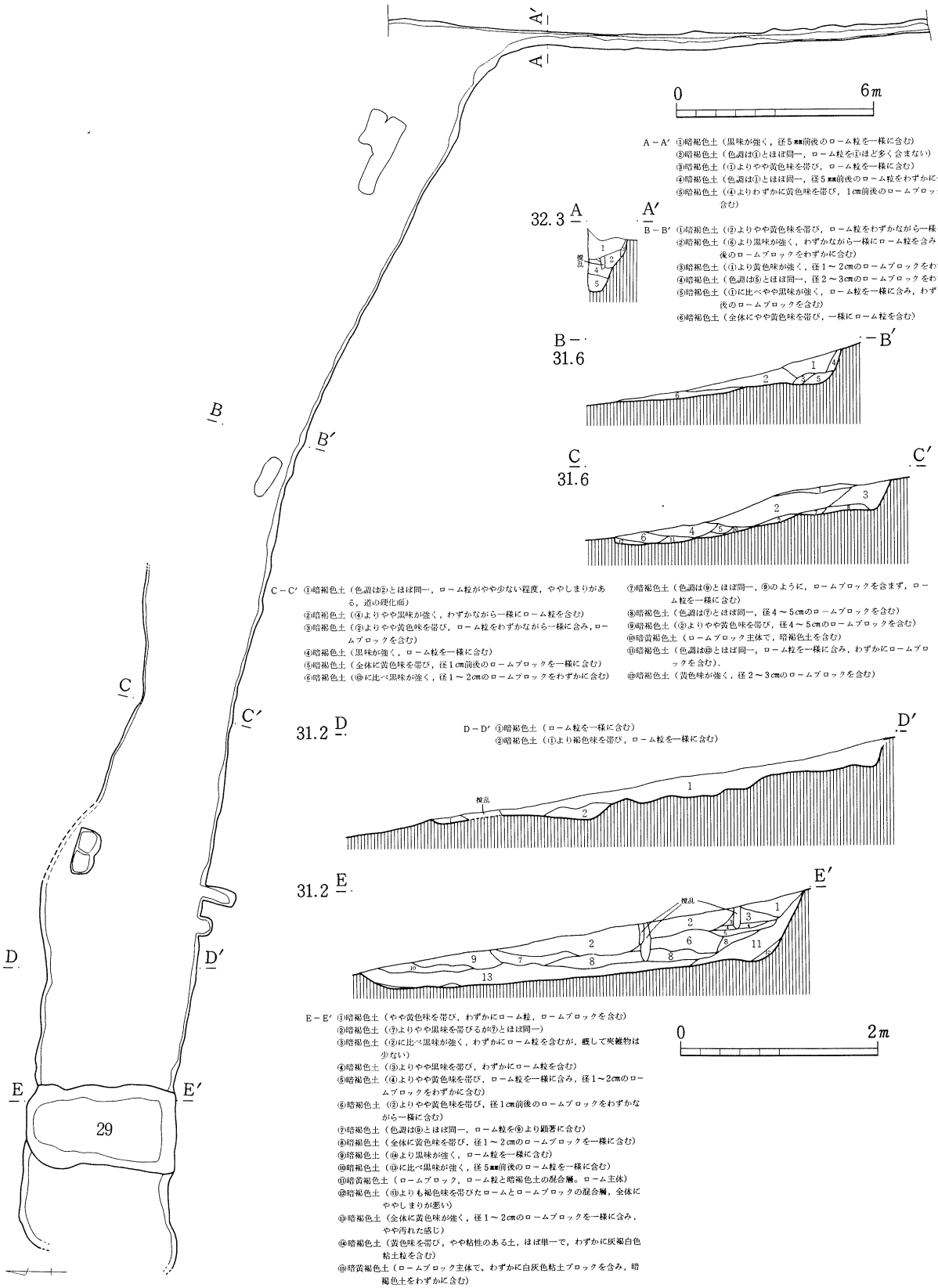
台地整形部

33号台地整形部（第106図，図版22－2）

谷南側に検出された，台地整形痕である。調査区西南端付近から，ゆるい曲線を描きながら東方へ延び，調査範囲の境界線の手前からほぼ真南へ向きを変えそのまま，南方へと続いている。西端に近づくにつれ，整形はあいまいになってくるが，中央部や東寄りの部分では，高さ20cm前後の段を形成するように台地面が削り取られている。東の境界部分では，高さが増すが完全には掘り切れておらず，どの程度の比高差を持つ段が形成されていたかは，確定し得ない また，覆土からは，既述の通り，土師器片が多く出土しているが，いずれも流れ込んだ物と考えられ，この整形の時期は明確にはおさえられない。したがって，この段形成の目的としては台地上の何らかの施設を含む一領域の区画ということが考えられるが，その施設自体の存在もさることながら，仮に存在したとしても時期が不明確であって，それ以上の推察は行ない難い。



第105図　歴史時代土器実測図（1/3）



第106図　29号址・33号台地整形部実測図（平面：1/180，土層断面：1/60）

道路状遺構

検出された道路状遺構は10条である。現道部分と平行するかもしくは重複している例がほとんどである。36・37両址のようにかなり堆積が進んだ状態で検出された例もあるが，他は全て表土直下で検出されている。いずれにせよ，一度確立した道は，多少の移動はあるものの，大きくは動かないことを示していると言えよう。これら道路状遺構の形成時期は不明であるが方向等を考えるとそれぞれ単独に存在していたと考えるよりも，分岐・結合されていたと考えるべきであろう。したがって，多少の時間差は生じていたとしても，短い期間のうちには基本的景観は整っていたと考えられる。このことは，これらの遺構と同時期と思われる遺構が検出されなかったことを考え合わせると，その時点で，この部分一帯が，生活の営みを行う場所ではなくなっていたことを示していると言える。

34・35号道路状遺構（第107図）

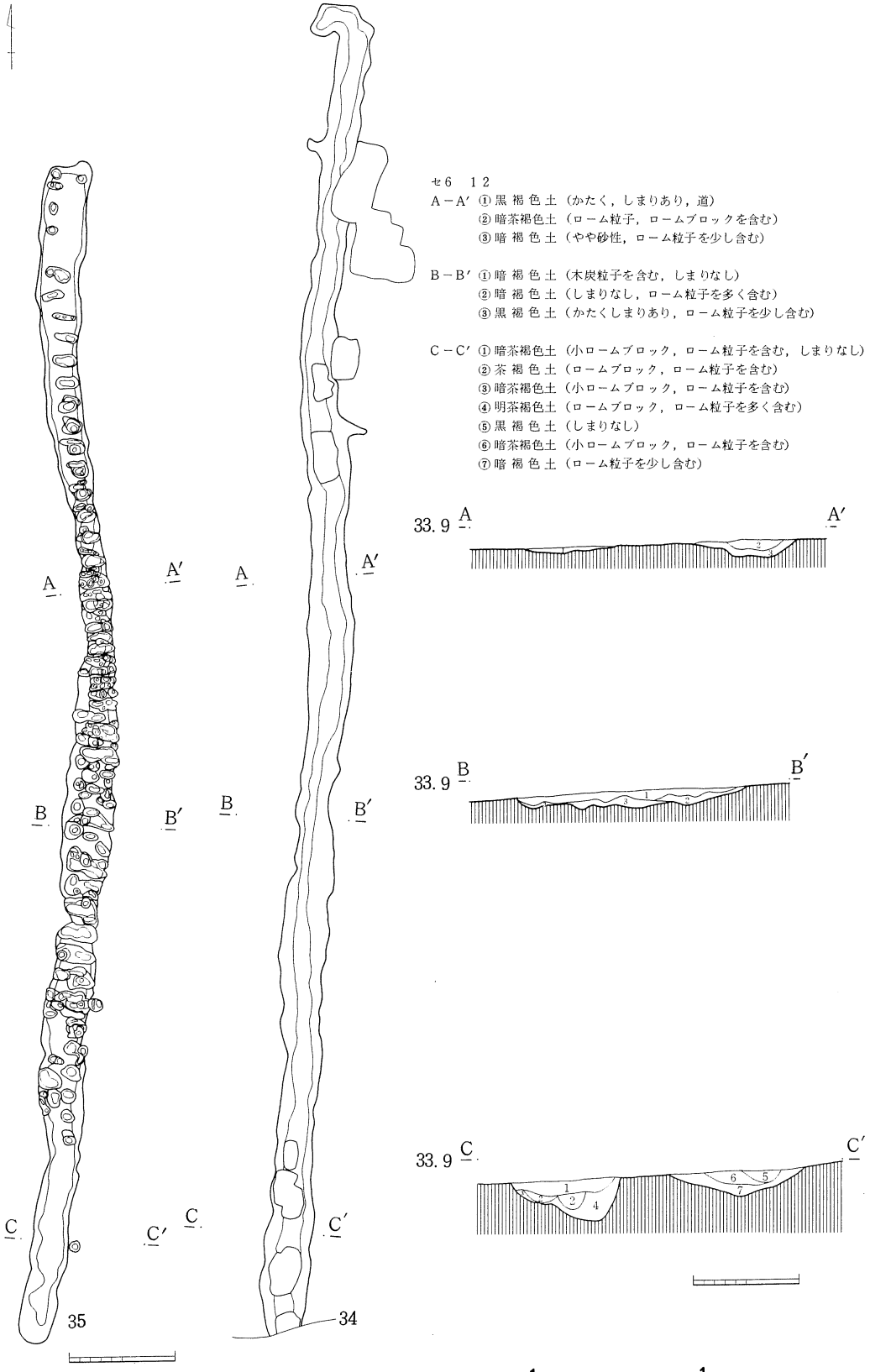
ほぼ平行する状態で検出されたものである。双方とも，硬化面が数層にわたって見られた。33号址の方は，硬化面下からは何も検出されなかったが，34号址ではその下から，楕円形および円形の浅い堀り込みが連続しているのが見出された。それらの性格については，不明であるが，たとえば柵列のような，何らかの区画を意図したものであろう。それに沿う形で人間の通った結果として33号址が形成され，その区画がなくなったのちに，その上面も人の通過の場所となり，以後双方合わさった形の道として機能し続けたのではないかとも思われるが，推測の域を出ない。

36・37号道路状遺構（第108図）

谷の堆積土を除去して検出したものである。砂層上面に形成されたもので，ほぼ東西方向に延び，東端部では谷の内側を向いて終っている。双方が谷内で結びついていたという確証はないが，双方向き合った形であり，蓋然性は必ずしも低くないと言えよう。双方を比較すると，35号址は幅が約　cmであり，東端でわずかに分岐が見られるものの，ほぼ一本であるのに対し36号址は，やや幅も広く，何度か通過点が移動しているように見れる。これは，もともと利用し得た砂層の平坦面の広狭により生じたものかもしれない。

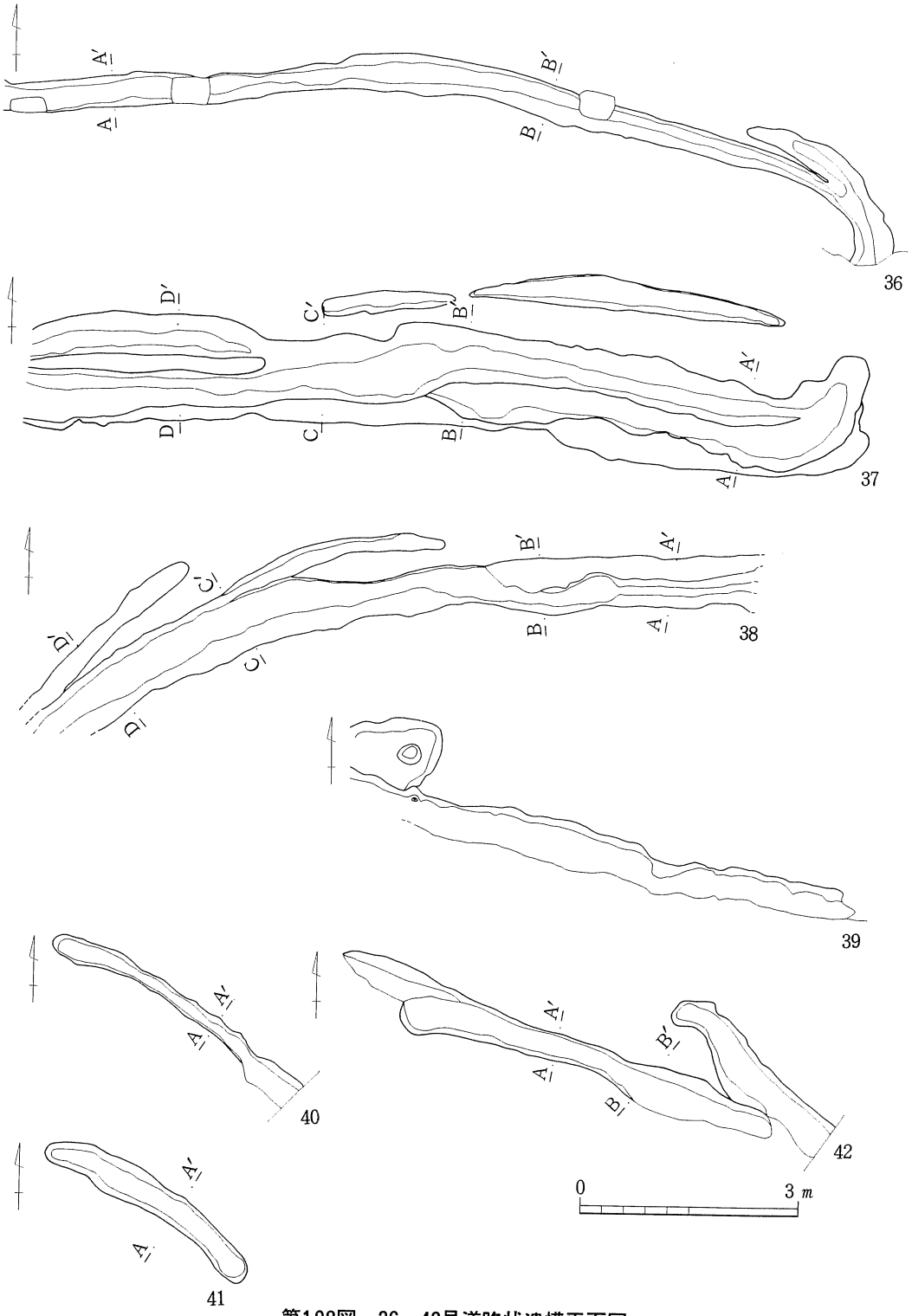
38・39・40・41号道路状遺構（第108図）

いずれも，末端が他の道路状遺構に接続してはいないが，途絶えている方向から考えると，37号址との接続がうかがわれるものである。38・39・40の3者は，高低差もあり，隔たりも明らかであるが，ほぼ平行しており，まったくの無関係ではないと思われる。また41号址も両端



第107図　34・35号道路状遺構実測図（平面：1/180，土層断面：1/60）

※一部重複部分があるため、分離して掲載。土層断面の実測点は、本来同一である。

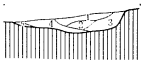


第108図　36～42号道路状遺構平面図

A～A′ ① 暗褐色土（酸化鉄粒をわずかに含み、しまりはやや悪い）
② 暗褐色土（①よりやや褐色味が強く、ローム粒、酸化鉄をわずかに含む）
③ 暗褐色土（色調は①とほぼ同一、酸化鉄のブロックをわずかに含む）
④ 暗褐色土（全体にやや明るい感じで、全体にやや砂質、酸化鉄粒をわずかに含む）

B～B′ ① 暗褐色土（全体に砂質で一様に白色粘土粒を含む）
② 暗褐色土（色調は①とほぼ同一、全体にしまりが悪く、灰褐色砂を一様に含む）
③ 暗褐色土（①とほぼ同一、灰褐色砂、酸化鉄粒をわずかに含む）
④ 暗褐色土（③よりやや黒味が強く、わずかに灰褐色砂粒を含む）
⑤ 暗褐色土（色調は③とほぼ同一、灰褐色砂、酸化鉄粒を一様に含む）
⑥ 灰褐色土（暗褐色土をわずかに含む）

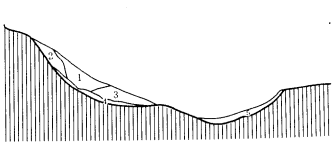
27.3 A A′



27.7 B B′

A～A′ ① 暗褐色土（色調は⑤とほぼ同一、酸化鉄粒をわずかに含み、灰褐色砂を斑状に含む）
② 暗灰褐色土（暗褐色土と灰褐色砂の混合層、暗褐色土主体で、わずかに酸化鉄粒径1～2㎝の円礫を含む）
③ 暗褐色土（色調は⑤とほぼ同一、酸化鉄粒、砂粒ともに少ない）
④ 灰褐色砂（ほぼ単一で、わずかに酸化鉄粒を含む）
⑤ 暗褐色土（酸化鉄粒、灰褐色砂粒をわずかに含む）

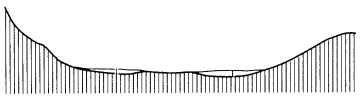
28.06 A A′



27.66 C C′

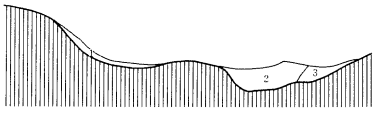
C～C′ ① 暗褐色土（灰褐色砂ブロックを一様に含み、酸化鉄粒をわずかに含む）

27.66 B B′



B～B′ ① 暗褐色土（酸化鉄粒、灰褐色砂粒をわずかに含む）

27.36 D D′

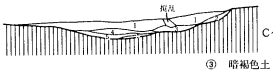


D～D′ ① 暗赤褐色砂（酸化した灰褐色砂の層、わずかに暗褐色土を含む）
② 暗褐色土（灰褐色砂粒をわずかに含み、円礫をわずかに含む）
③ 暗褐色土（酸化鉄粒、灰褐色砂ブロックをわずかに含む）

32.15 A A′

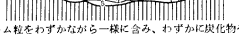
A～A′ ① 暗褐色土（わずかにローム粒を含み、しまりはよくない）
② 暗褐色土（①よりやや褐色味が強く、わずかにローム粒を含む、しまりはよくない）

31.05 C C′



C～C′ ① 暗褐色土（ローム粒を一様に含み、全体にサラサラした感じ）
② 暗黄褐色土（ほぼローム単一、白っぽく、やや粘性がある）
③ 暗褐色土（色調は①とほぼ同一、ローム粒を一様に含み、わずかに炭化物を含む、しまりはよい）
④ 暗褐色土（①より黒味が強く、ローム粒を一様に含む、きわめてしまりがよい）
⑤ 暗褐色土（色調は④とほぼ同一、ローム粒を一様に含む、④よりしまりがやや悪い）

31.75 B B′



① 暗褐色土（ローム粒をわずかながら一様に含み、わずかに炭化物を含む）
② 暗褐色土（①よりやや黄色味が強く、ローム粒を一様に含み、わずかに炭化物を含む、きわめてしまりがよい）
③ 暗褐色土（②より黒味が強く、わずかにローム粒、炭化物を含む、しまりはやや悪い）
④ 暗褐色土（③より黄色味が強く、ローム粒を一様に含み、わずかに炭化物を含む、きわめてしまっている）
⑤ 暗褐色土（粘性があり、やや白っぽい、地山の掘り過ぎ）

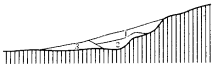
30.59 D D′

A－ －A′
30.57

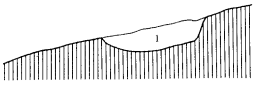
A～A′ ① 暗茶褐色土（ローム粒子を若干含む）

A－ －A′
28.19

B－ －B′
28.59



29.7 A A′



A～A′ ① 暗褐色土（ローム粒をわずかに含み、しまりはよい）

A～A′ ① 暗褐色土（黒味が強く、夾雑物ほとんどなし、しまりは悪い）
② 暗褐色土（色調は①とほぼ同一、わずかながら一様にローム粒を含む）
③ 暗褐色土（粘性の強いローム単一、地山）
④ 暗褐色土（③と②の混合層、わずかに白色粘土粒を含む）

B～B′ ① 暗褐色土（酸化鉄のブロック、白色粘土粒をわずかに含む）
② 暗褐色土（①より褐色味が強く、酸化鉄粒、白色粘土粒をわずかながら一様に含む）
③ 暗褐色土（色調は①とほぼ同一、しまりがやや悪く、白色粘土粒を一様に含む）

0 1 m

D～D′ ① 暗褐色土（ローム粒をわずかに含む）
② 暗褐色土（ローム粒、炭化物をわずかに含み、ややしまりは悪い）
③ 暗褐色土（②よりやや黄色味を帯び、ローム粒を一様に含み、しまりはきわめてよい）
④ 暗褐色土（②とほぼ同一、ローム粒を②ほど多く含まない）
⑤ 暗褐色土（②より黄色味が強く、ローム粒を一様に含み、しまりはきわめてよい）
⑥ 暗褐色土（色調は③とほぼ同一、③ほどローム粒は顕著ではないが、しまりは③同様良い）
⑦ 暗褐色土（④より黄色味が強く、一様にローム粒を含み、きわめてしまりがよい）
⑧ 暗褐色土（⑥より黄色味が強く、ローム粒を一様に含む、しまりはきわめてよい）
⑨ 暗褐色土（⑦に比べ黄色味が強く、ローム粒を一様に含み、きわめてしまりがよい）

第109図　36～42号道路状遺構土層断面図

は切れているが本来はこのまま延びていたのではないかと思われる。推測の域は出ないが，この道路状遺構は，36号址の埋没後に機能し始めたものではないかとも思われる。

溝状遺構

道路状遺構よりも深く堀り込まれたものをここでは溝状遺構としてまとめて扱う。いずれも時期・機能等不明瞭なものが多い。44号址は24号址の北東隅から同址の西辺を切ったのちさらに西へ延びて終っている。この遺構の覆土からは多くの遺物が出土したが，いずれもこの溝に伴うものとは考え難い。46・47の両址は，19号址を切っており，前者の西端・後者の北端がわずかにつながっている。どちらからも良好な遺物の出土はなかった。27号址については既述の通り（P.106 参照）なのでここでは省略する。48号址は，56年度の調査において西半が調査済みであったが，図示したような形態となり，性格等不明であり，良好な遺物の出土はなかった。

遺構外出土の歴史時代遺物（第105図）

2は，かわらけの小皿である。約¼を残存している。口径，底径は，推定でそれぞれ 9.6cm 6.0cmで器高は 2.9cmである。底部は内外面ともにヨコナデにより整形されており，底部は内面はナデつけたような痕跡があり，外面は回転糸切り無調整である。胎土は混入物も少なく精良である。

5は，かわらけの小皿である。約⅓の破片で，推定で口径 9.6cm，底径 7 cm，器高 1.9cmで基本的整形は 1 と同様で，底部は回転糸切り無調整である。

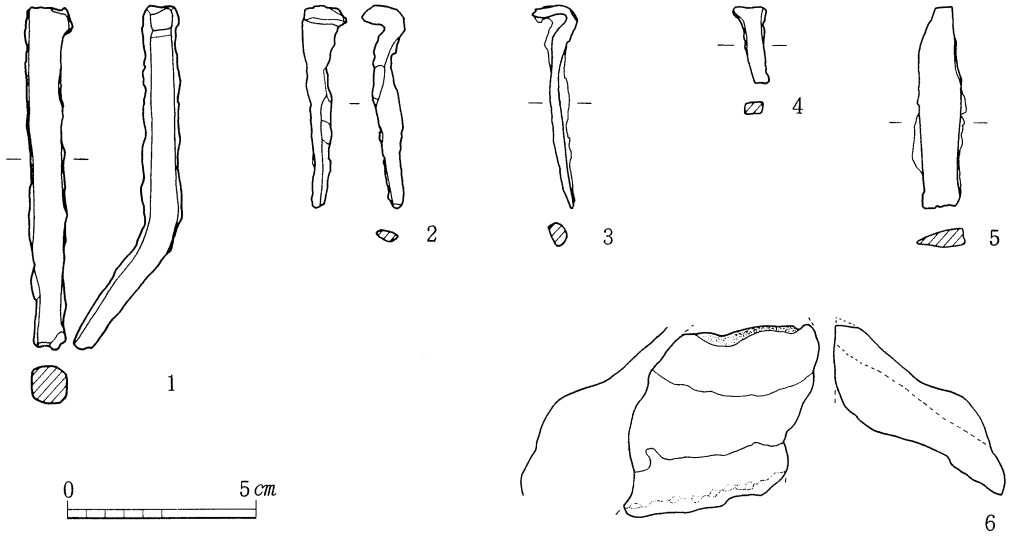
6は高台付椀の高台の部分と思われる。高台の接地面の径は， 5.5cmである。内外面ともにヨコナデがなされているが，底部外面では，中心から 7 mm程のところでリング状の盛り上がりを残しており，その内側は無調整である。1と同様，胎土中に混入物は少なく微密である。

7は，須恵器の長頸壺の底部である。底径は推定で 6 cm，断面台形の高台を有し，胴部外面には回転ヘラケズリ，内面にはヨコナデが認められる。高台には自然釉が見られ，胎土は精良である。高台の最も内側の部分が，わずかに凸状を呈するのが特徴的である。

他に，内黒土器や，すり鉢・甕などの陶器片が出土している。

鉄製品（第100図，図版47－8～12）

出土した鉄製品は，前出の剣釧の他に，図示した釘・刀子がある。いずれも遺構外からの出土であって時期の限定はできない。また，関連資料として鞴の羽口が出土している。なお，時間的制約もあって図示し得なかったが，鉄滓が数点出土しており，この近隣に製鉄に関連する遺構の存在する可能性を示している。この点に関しては，周辺の調査及び，整理の進行を期待したい。



第110図　鉄製品実測図

小結　（草刈台地の断片史の素描）

1．はじめに

再三，述べてきたように，今回の調査部分は草刈遺跡全体の中で見れば，ごくわずかな部分を占めるに過ぎない。既に調査を終え，整理中の部分，現在調査中の部分，さらに未調査の部分もあり，全体像がはっきりしてくるのにはまだ相当な時間を要するであろう。したがって，今回の調査のみで明らかになった部分は，そのいずれ明らかになるであろう成果に比べれば，とても比べものにはならない。であるからと言って，何も語れないかというと，一概にそうとは言い切れないと思われる。たとえわずかな部分であるにしろ，全体の歴史的流れの何らかの反映はしているはずである。そのわずかな部分に見え隠れする，歴史的断片をできる限り汲み取ることによって，全体像に近づこうとする試みもなされるべきであろう。幸い，周辺の様相はある程度うかがえ，それをこの部分の断片的解釈に取り入れることが可能である。結局は，中心から離れた，周縁としてしか位置づけはできないのは明らかであるが，周縁でも周縁なりの歴史を刻んでいるわけである。道路の通過部分という，いわば偶然的な部分ではあるが，その恣意的に切り取られた部分の歴史の復原を試みるものである。所詮，断片史であって，全体史が構築されてしまえば，かえり見られることのないものになるとは思うが，全体史の構築はまだ相当先の事になると思われるので，この報告書刊行を機に断片的な素描を行う必要はあると思われるのである。特に，土地利用とそこに垣間見られる人間活動を中心にして，以下叙述を試みたい。

2．素描

この地に，初めて人の手が加えられたのは，縄文時代中期である。阿玉台式期に既に集落の形成は始まっていたかも知れないが，まだここには及んでおらず，加曽利E式期に入って，居住地として，人々の生活の営みが開始された。この時期台地の下は，海が入り込んでおり，そこは，豊かな資源を提供したであろう。しかし，海とこの地を行き来していただけではなく，活発な人間の往来や，文化的接触が行われていたであろう。顔面把手という中部山岳地方特有の土器の存在からも，その様相はうかがえる。単なる生活の拠点としてでなく，様々な交流の起点としての意味さえ，これらの住居址は持っていたとも言えるであろう。しかし，その活発な動きが見てとれる期間は決して長くはなく，縄文中期のうちに，この地は人々の影が薄くなっていく。後期・晩期の遺構も遺物も見られない。これは人が離れてしまったことを意味するであろう。人々の存在も垣間見られず，大地もなりをひそめている。そのような状態がしばらく続き，弥生時代後期に至り，また人間の活動が見えてくるのである。

弥生時代後期に入り，再びこの地が居住地として復活する。新しい文化の波は，すでに周辺には到達しているのだか，この地には及んでいない。弥生時代中期はこの地はまだ，縄文時代後期以降の沈黙のままである。ようやく後期に至り再び人々が姿をあらわす。生活の痕跡は必ずしも多くはない。しかし，かつては海が入り込んでいた低地は，村田川により，可耕地が与えられていたであろう。その可耕地を目ざして，低地へと降りていく人々の姿を思い浮かべることは可能である。新たにもたらされた稲作文化は，それに携る人々の居住領域をこの地に及ばせたのである。長い沈黙の時間を終え，また，生活の拠点としてこの地は蘇ったと言える。

一旦は，生活の地として蘇ったこの地は，程なくして，埋葬の地へと変貌する。もとより周縁の位置していたためであろうか，方形周溝墓群の形成が始まる。最初に現れたものよりも，後に現れたものは，規模も大きく，より多量の労働力を必要とする。そこには，それだけ労働力を集中し得る者の存在が見てとれ，それは，前代より始められた水田経営の展開と密接な関係があったにちがいない。その具体的様相は，わずかに方形周溝墓として見られるだけであるが，台地全体を見渡したならば，より複雑な展開が見てとれるであろう。しかし，墓域として確立した以後，またも，沈黙の期間が訪れる。

方形周溝墓の形成以後も大規模な集落の展開がこの台地上では起こっている。また，古墳群の形成も始まっている。表面的には，カヤの外にいるかのようなこの土地ではあるが，わずかな遺構と遺物から，全体の動きの一部はうかがえる。わずか一軒の住居址ではあっても，もしかすると，大規模な集落の展開の中で，はみ出してきた結果によるものとも考えられるし，石製模造品は，古墳群形成の過程における「落し物」とも見ることができよう。さらに「草刈型土器」は，工人間のある種の交流さえ連想させるものである。一見カヤの外とも見えるこの地ではあるが，そこには，中心で起こっているであろうことが，決して充分とは言えないまでも反映している。とは言っても，次第に中心から取り残されていった地であることに変りはない。ただし，一軒の住居址が，方形周溝墓に近接した場所に存在していることは，墓域としての意味を失っていたことを示しているようでもあり，不可侵の地ではないことを物語っていると言れよう。なお，居住の地としては，この住居址を最後として，二度とこの地に生活の拠点が存在することはない。そして再び沈黙の時間が訪れる。

いわゆる歴史時代から現代に至るまで，この地は幾度か様相を変える。変化の順序はわからないが，ある時には台地を削って段を作り，またある時には，方形周溝墓の半分を削り，また柵列が並んだ時期があったかもしれない。しかし，それらも時とともに地中の埋設物と化し，最後に残ったのは道である。数条の道も刻々と姿を変え，また道を取り巻く環境も徐々に変っていった筈である。たかが道ではある。しかし，草刈部落から台地上の耕地を結ぶ，不可欠な道である。皮肉なことに，これらの道が機能を失うこうになったのは，新たな道を建設するこ

とによってであった。さらに，今回の調査によって，この地の歴史の流れが姿を現した時に，この地の歴史的到達点である道は姿を消しているのである。

この地に新しい道が建設されるのも歴史的な到達点であることには変りはない。かつて，この地に住み，ここを通り過ぎた人間の数は計り知れない。しかし，この新たな道は，いずれはその数をもしのぐ多くの人々の通過点となるであろう。

3．遺跡を「スクリーン」として

上に述べてきたことは，断片史に過ぎず，いずれ全体史が明らかになった時点で，その中に埋没していくことになる。単に事実の列挙であり，歴史叙述にも至っているとも思えない。しかし，可能な限り，全体史との関係を念頭に置いてきたつもりである。さらに，現代・未来まで見据えたのは，周縁とは言え，歴史を常に刻んできたし，今後も新たな歴史を刻んでいくと考えたからである。考古学的分野からはたしかに離れているかも知れないが，この地の歴史を語るとすれば，このような形になるのは当然のことではないかと思う。

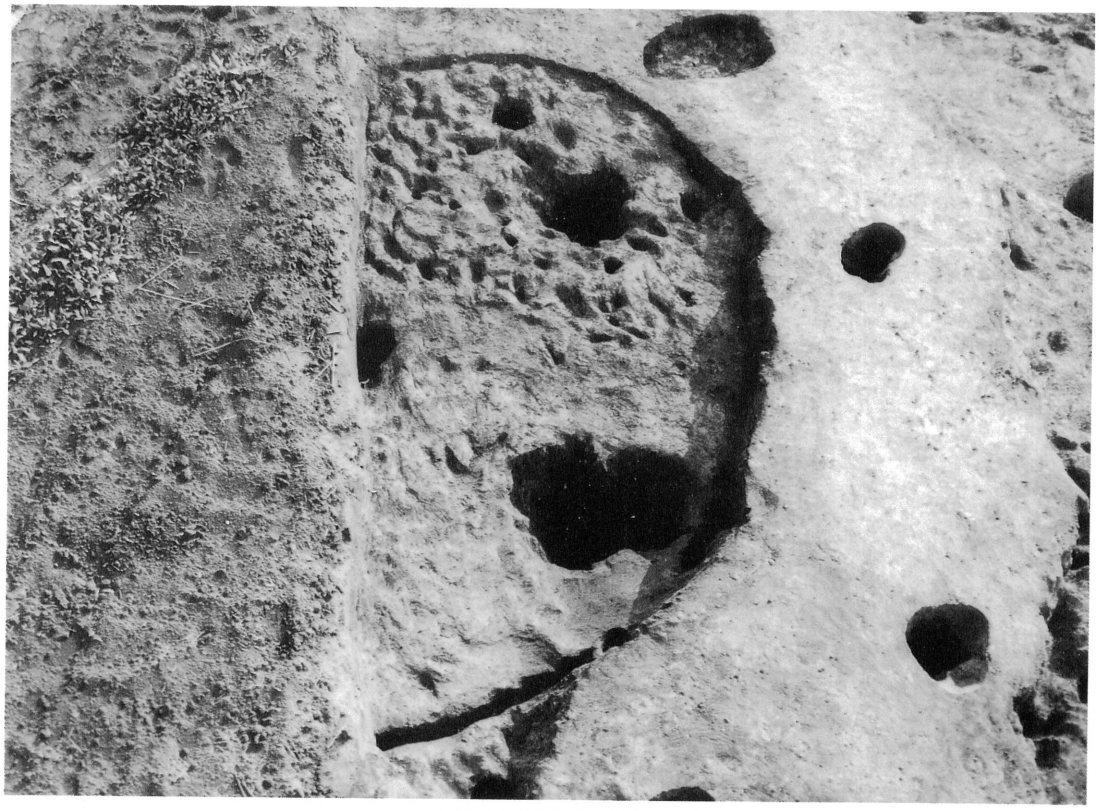
この試みを行うに際しては，このわずかな部分を，歴史的事象の投影されたスクリーンとして頭に浮かべていた。草刈台地全体から比べれば，わずか3859m²のスクリーンであり，そこには，チラリチラリと人々の姿が見え隠れするだけであった。単なる個人的なイメージの世界と言えば，それまでであり，人によってはまた別のイメージを描くかもしれない。しかし，直接現場に携った者としてそのスクリーンで見たことを伝えることも，決して無駄なことではなかろう。今後も，遺跡をスクリーンとして見て，そこに投影されるさまざまな歴史的事象を伝えて行くつもりである。

図版 1

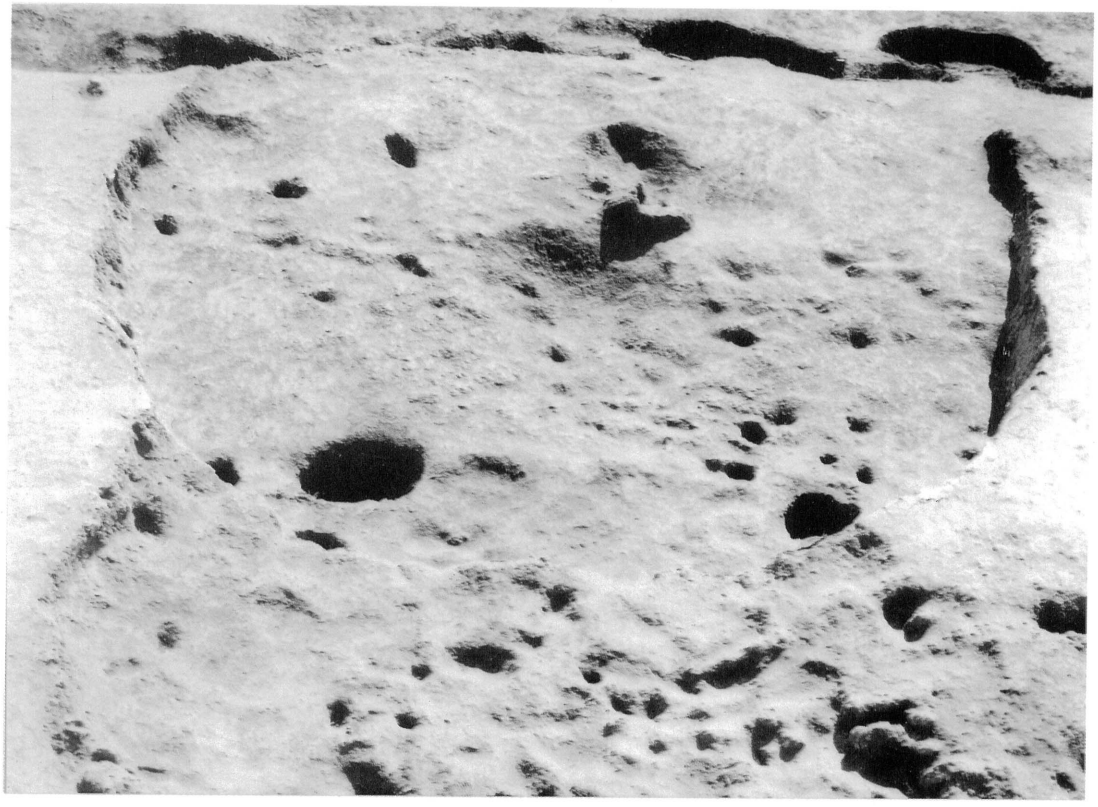
1.　調査区全景（西上空から）

2.　調査区全景（東上空から）

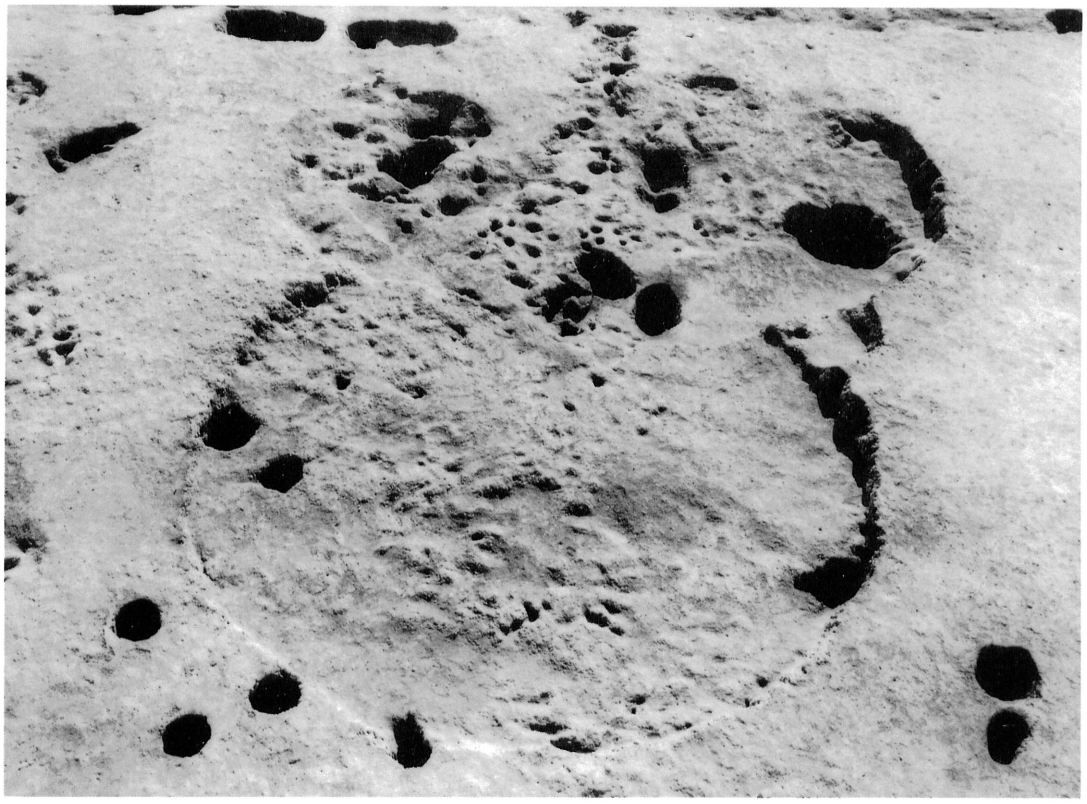
図版 2



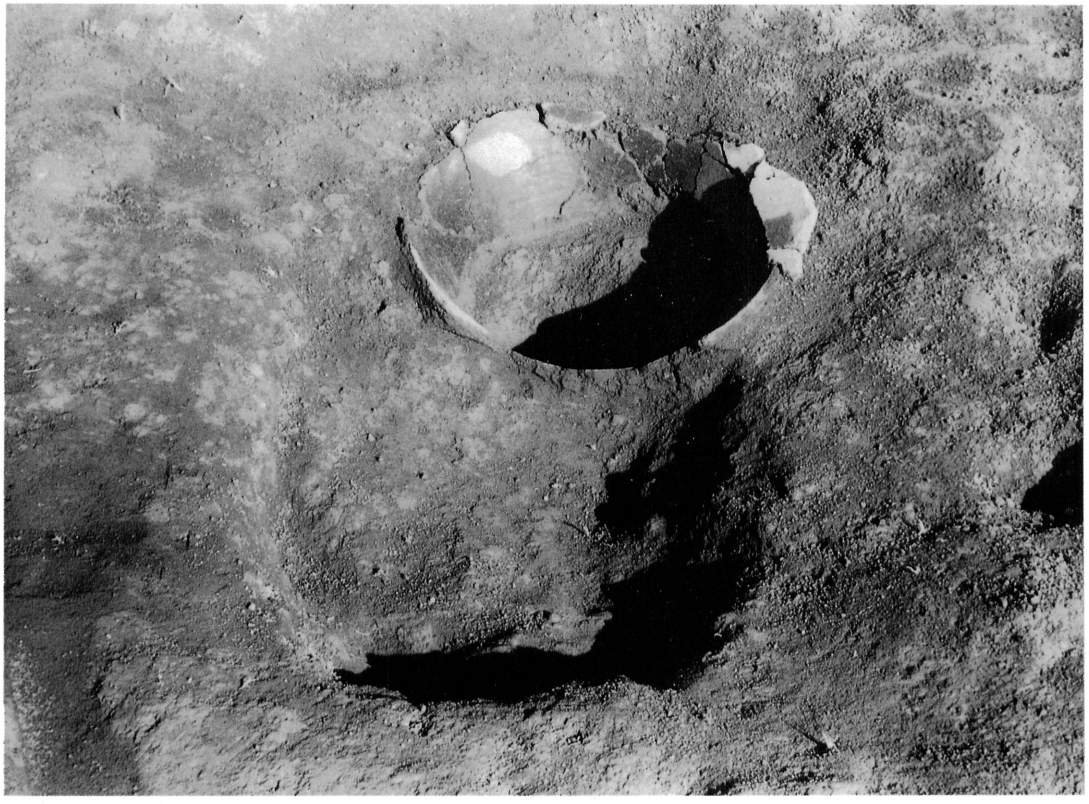
1.　1号住居址全景（北から）



2.　3・4号住居址全景（手前が3号址，北から）

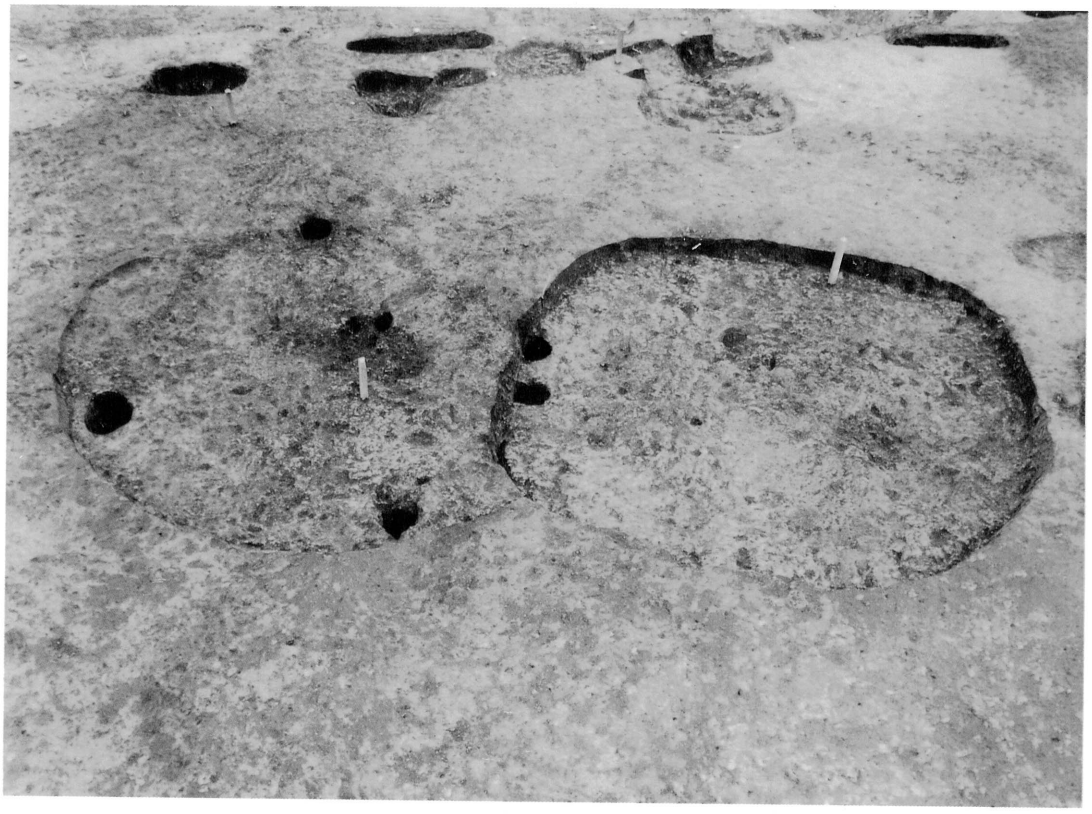


1.　5号住居址全景（奥が5号址，北から）



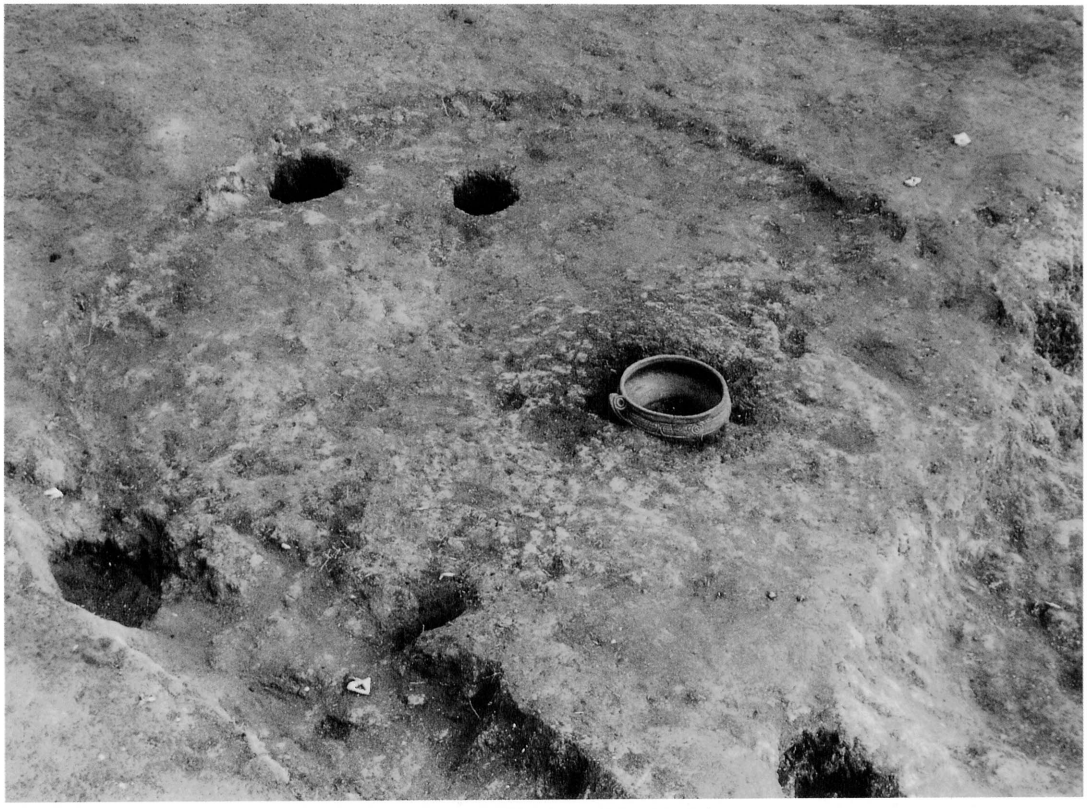
2.　5号住居址炉土器埋置状況

図版 4



1.　6・7号住居址全景（左が6号址，南から）

2.　9号住居址全景（西から）



1.　8号住居址全景（南西から）

2.　8号住居址炉土器埋置状況

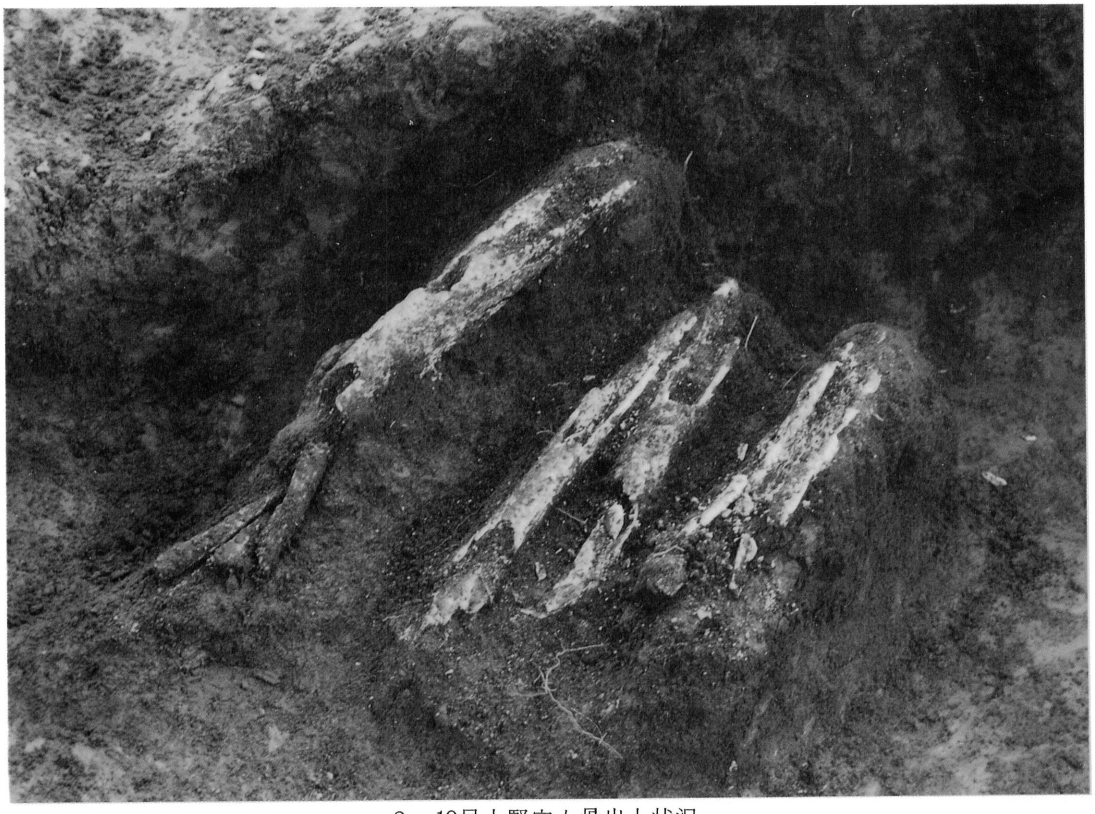
図版 6

1. 10号炉址土器埋置状況（西から）

2. 11号炉址土器埋置状況（西から）

3. 12号炉址土器埋置状況（南東から）

1.　18号小竪穴全景（東から）



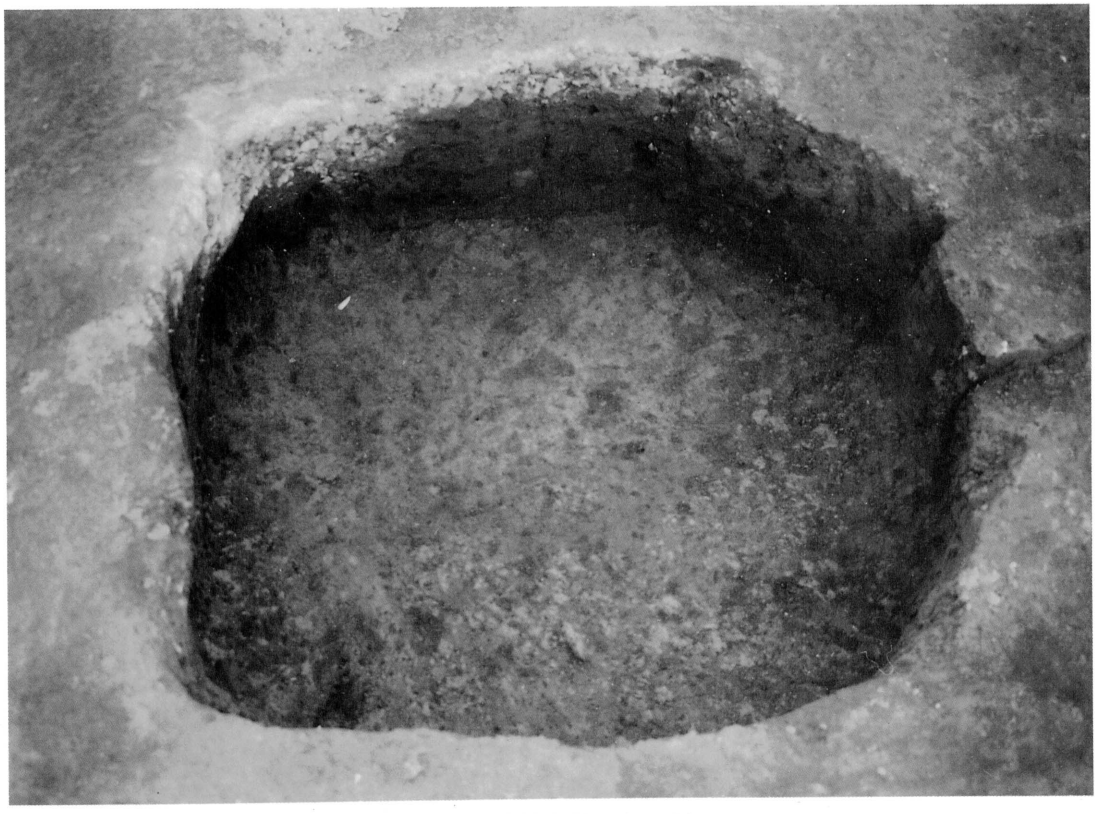
2.　18号小竪穴人骨出土状況

図版 8

1.　13号土壙全景（南から）

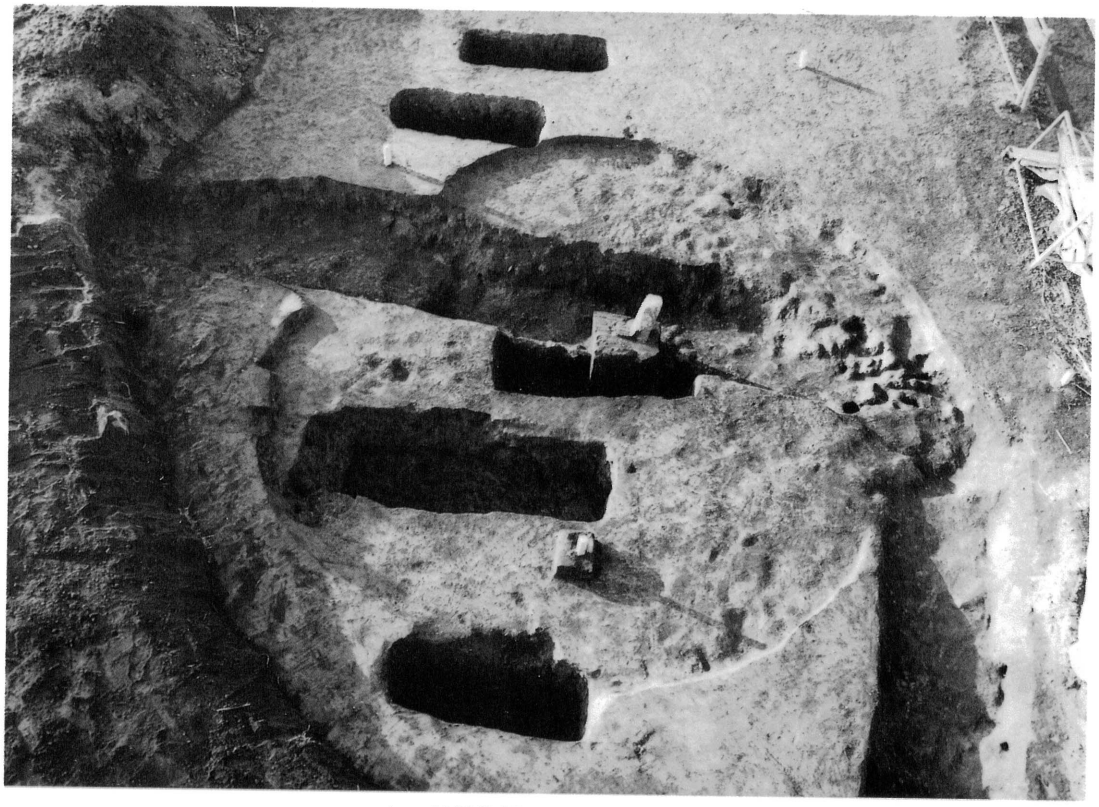
2.　14号土壙全景（南から）

1.　15号土壙貝・土器出土状況（北から）

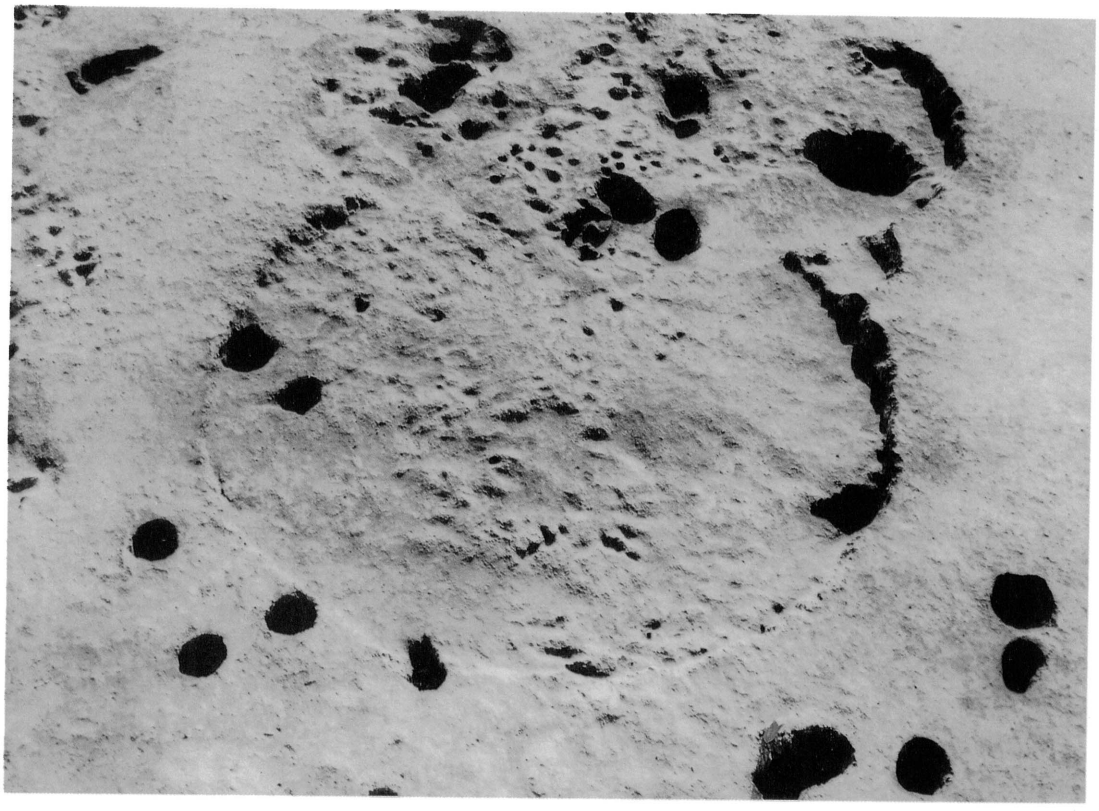


2.　15 号土壙全景（南から）

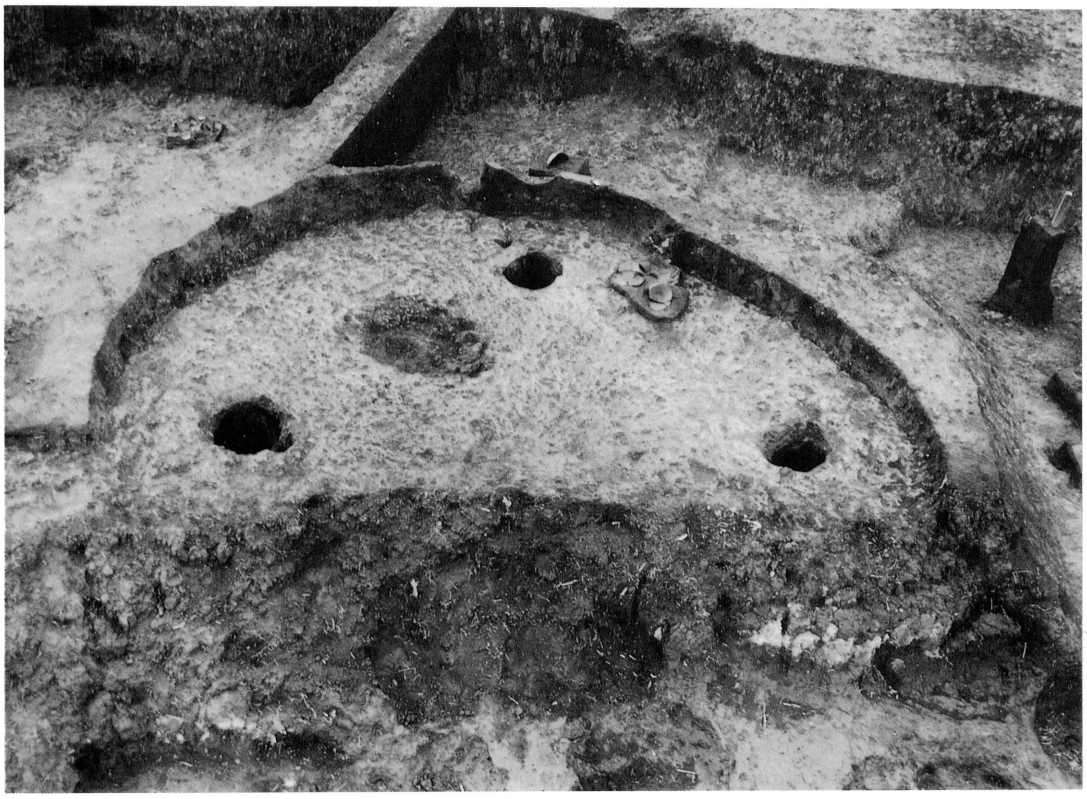
図版10



1.　19号住居址全景（東から）



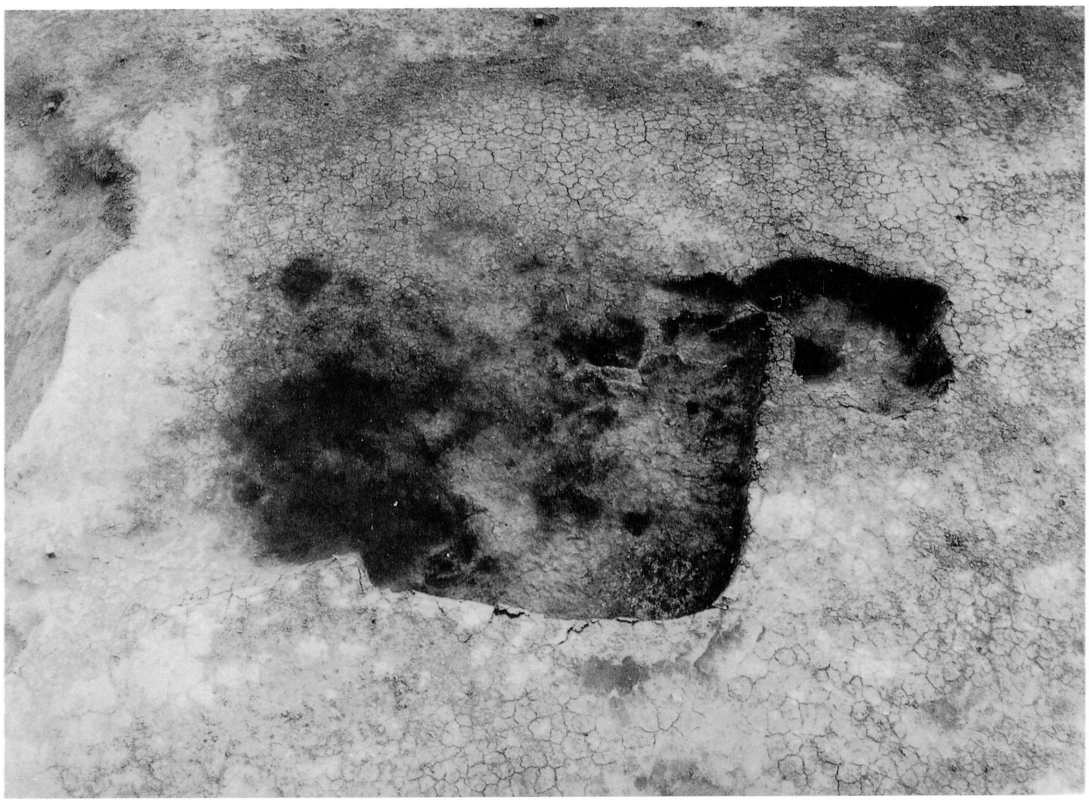
2.　20号住居址全景（手前，北から）



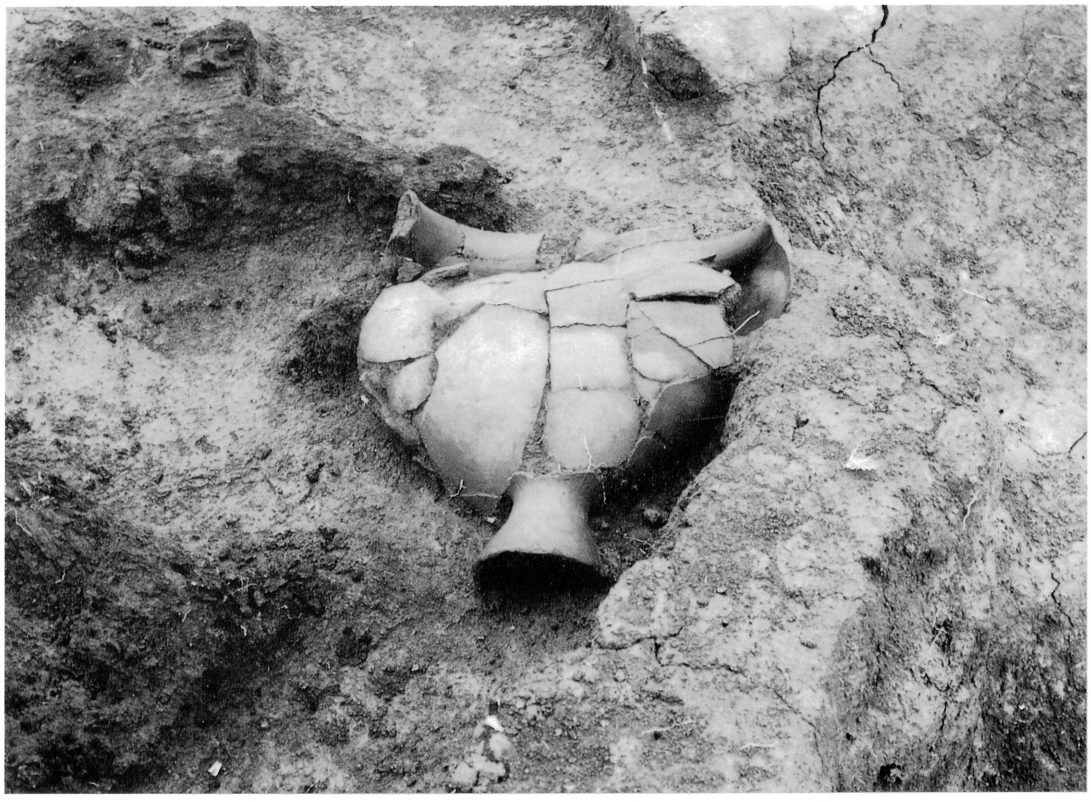
1.　21号住居址全景（南から）

2.　21号住居址土器出土状況

図版12



1.　22号住居址全景（北から）

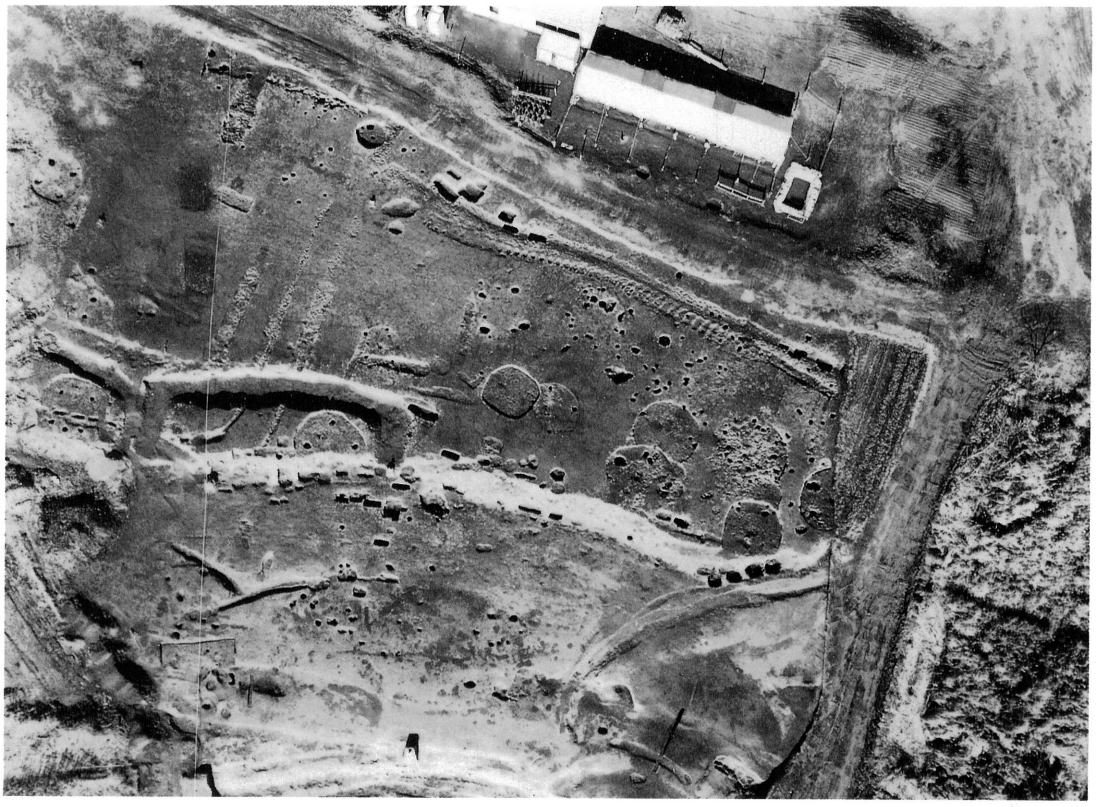


2.　22号住居址台付甕出土状況（東側壁際）

1.　22号住居址壷出土状況（西から）

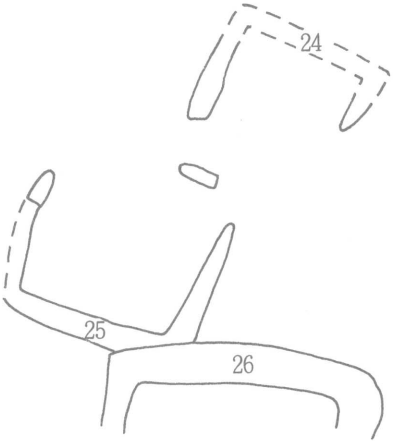
2.　23号址土器出土状況（東から）

図版14



1.　方形周溝墓配置状況

2.　24号方形周溝墓全景（西から）

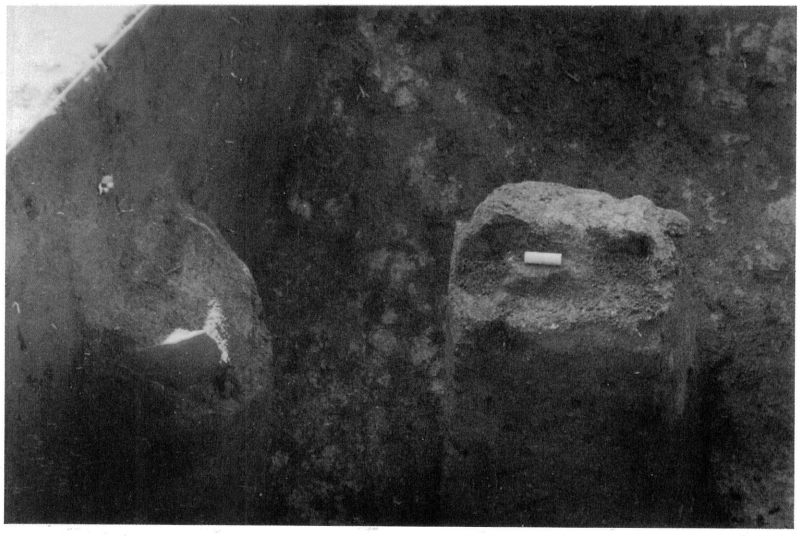

24
25
26

1.　25・26号方形周溝墓全景（下が26号址）

2.　26号方形周溝墓全景（北西から）

図版16

1. 26号址壷出土状況



2. 26号址管玉出土状況

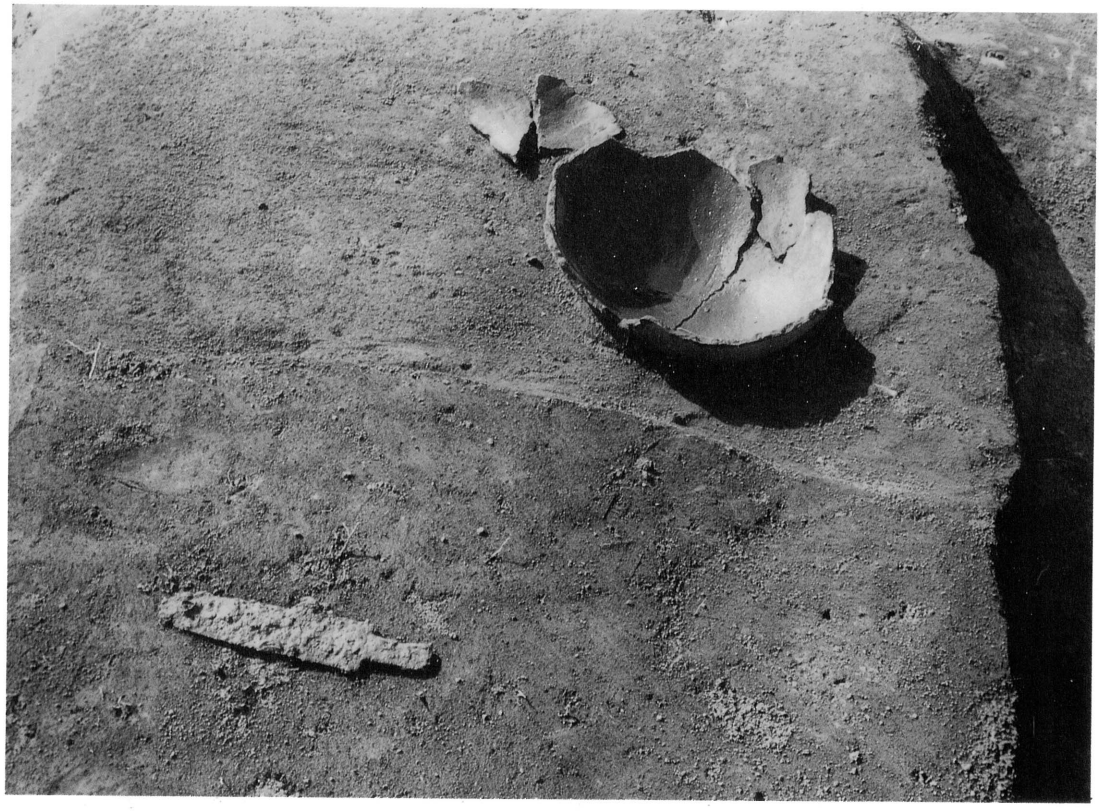
3. 26号址甕出土状況

1.　26号方形周溝墓坩・壷出土状況

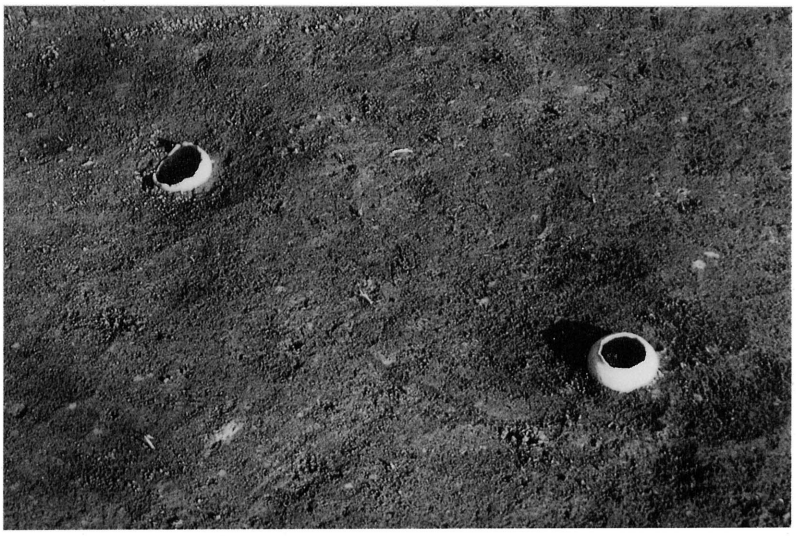
2.　26号方形周溝墓土器出土状況

図版18

1.　27号址土器出土状況（東から）



2.　遺構外甕・鉄剣出土状況（北から）



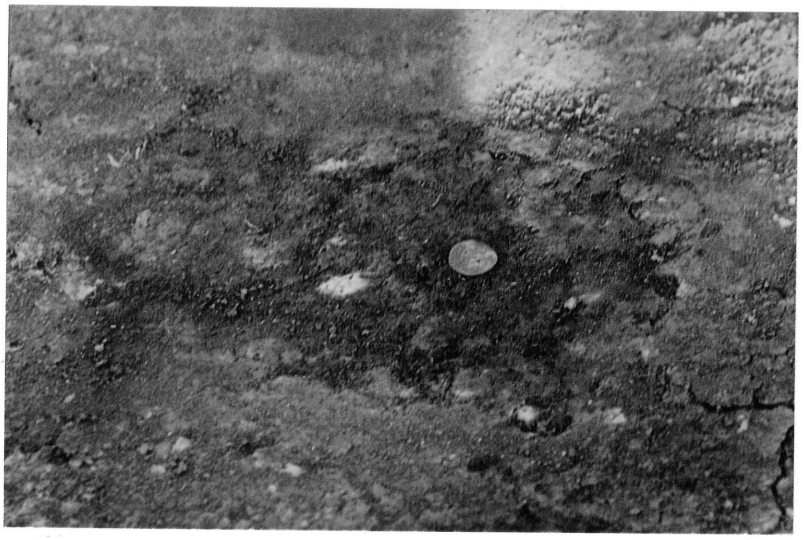
1. 29号址手捏ね土器（1・2）出土状況

2. 手捏ね土器（1）

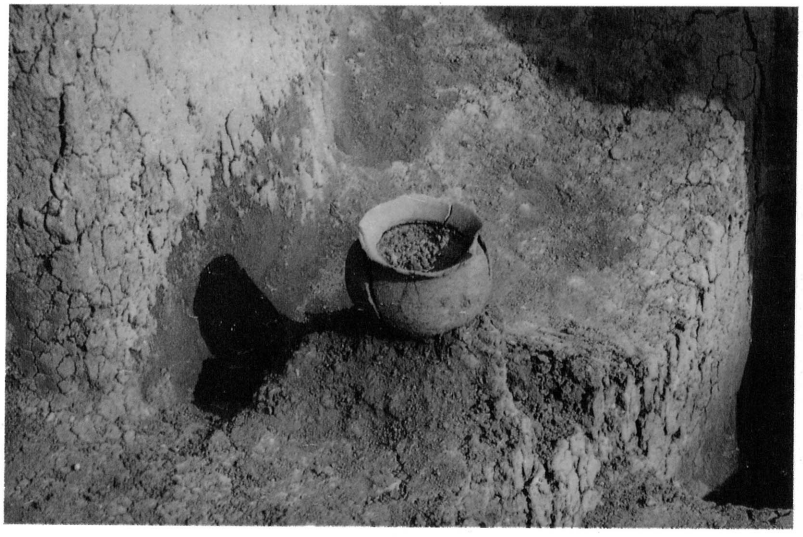
3. 手捏ね土器（2）

図版20

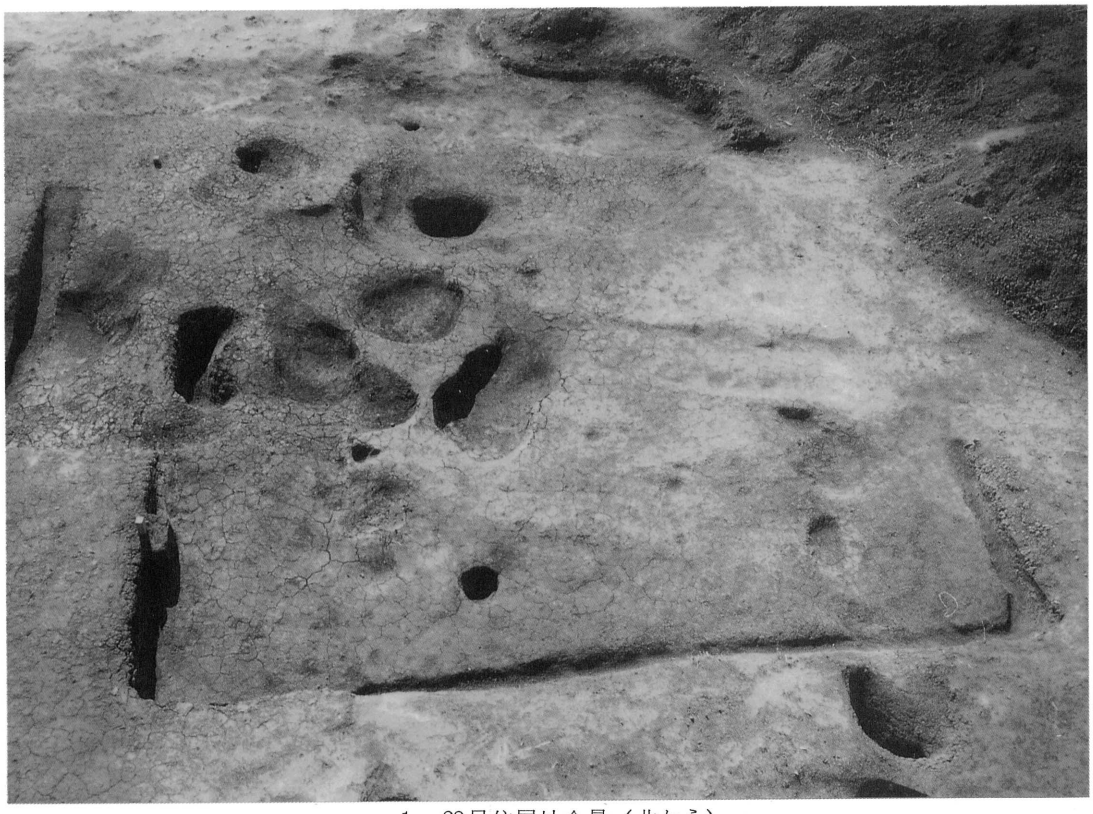
1. 29号址土玉出土状況



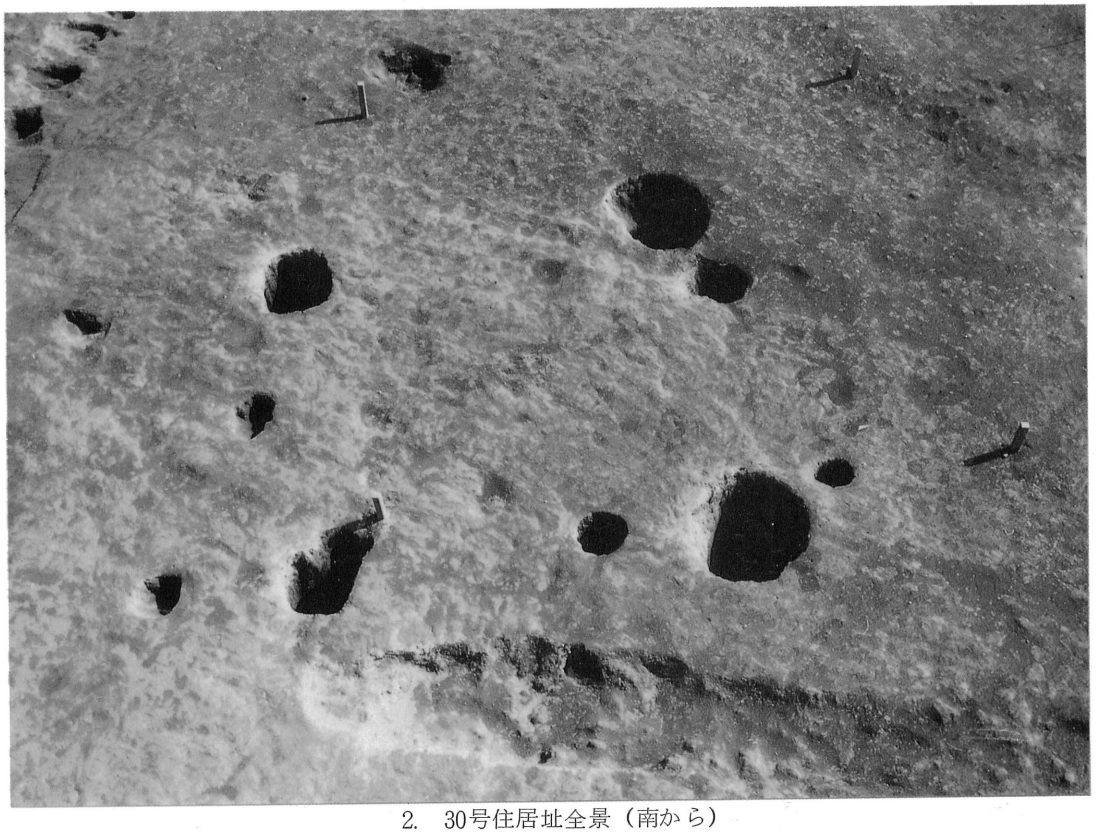
2. 29号址有孔円盤出土状況



3. 33号址小型甕出土状況



1.　28号住居址全景（北から）



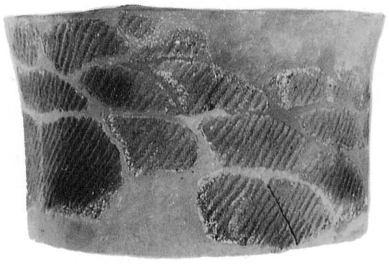
2.　30号住居址全景（南から）

図版22

1.　31号土壙全景（東から）

2.　33号址全景（上空から）

1 (1)

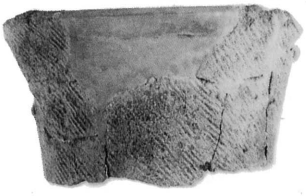


2 (5)

3 (5)

4 (8)

5 (9)



6 (11)

7 (10)

8 (12)

縄文土器(1)（カッコ内は出土遺構番号）

図版24

1(15)

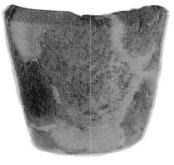
2(18)

3

4(18)

5(15)

6

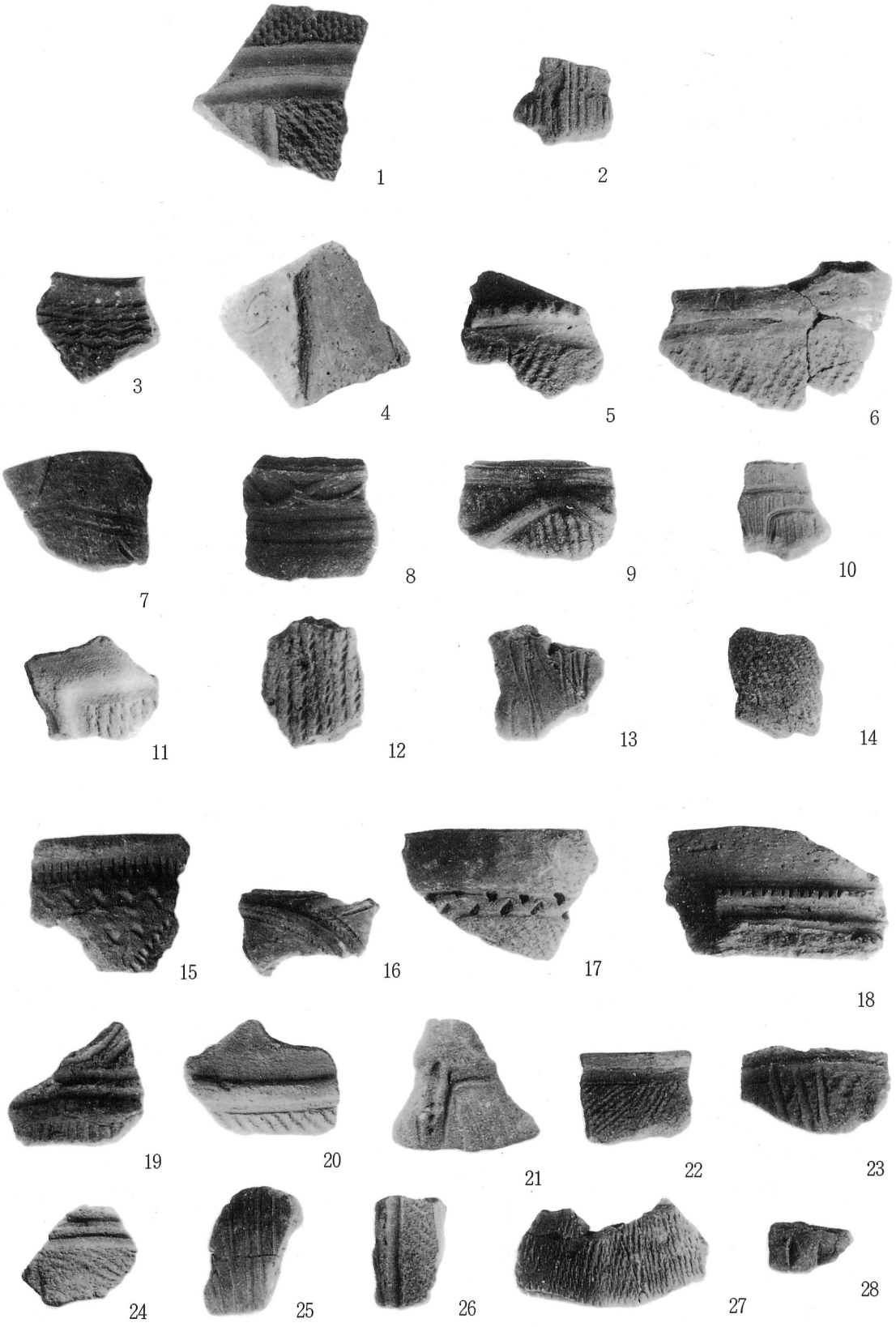


7(15)

8(26)

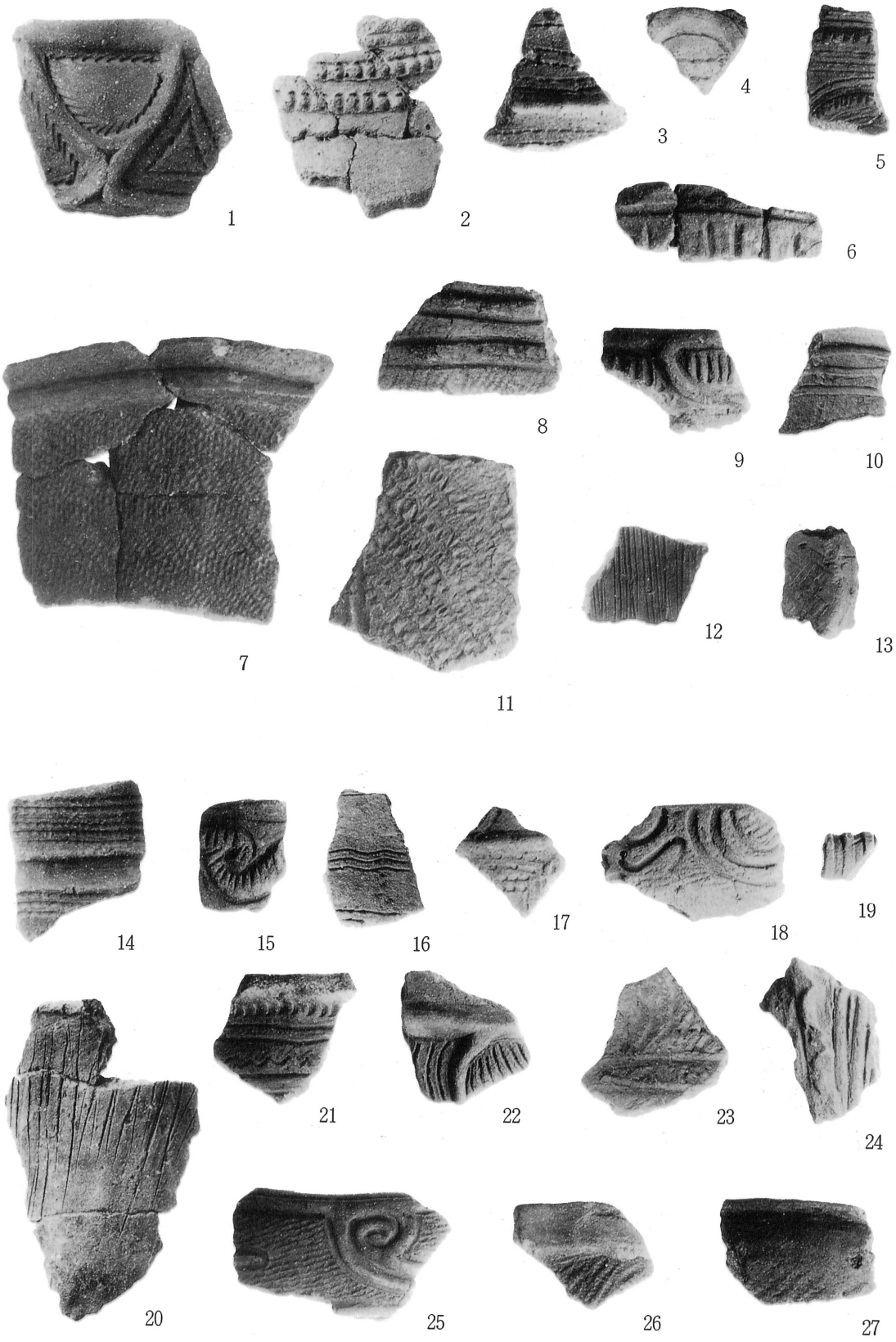
9(13)

縄文土器(2)（カッコ内は出土遺構番号）

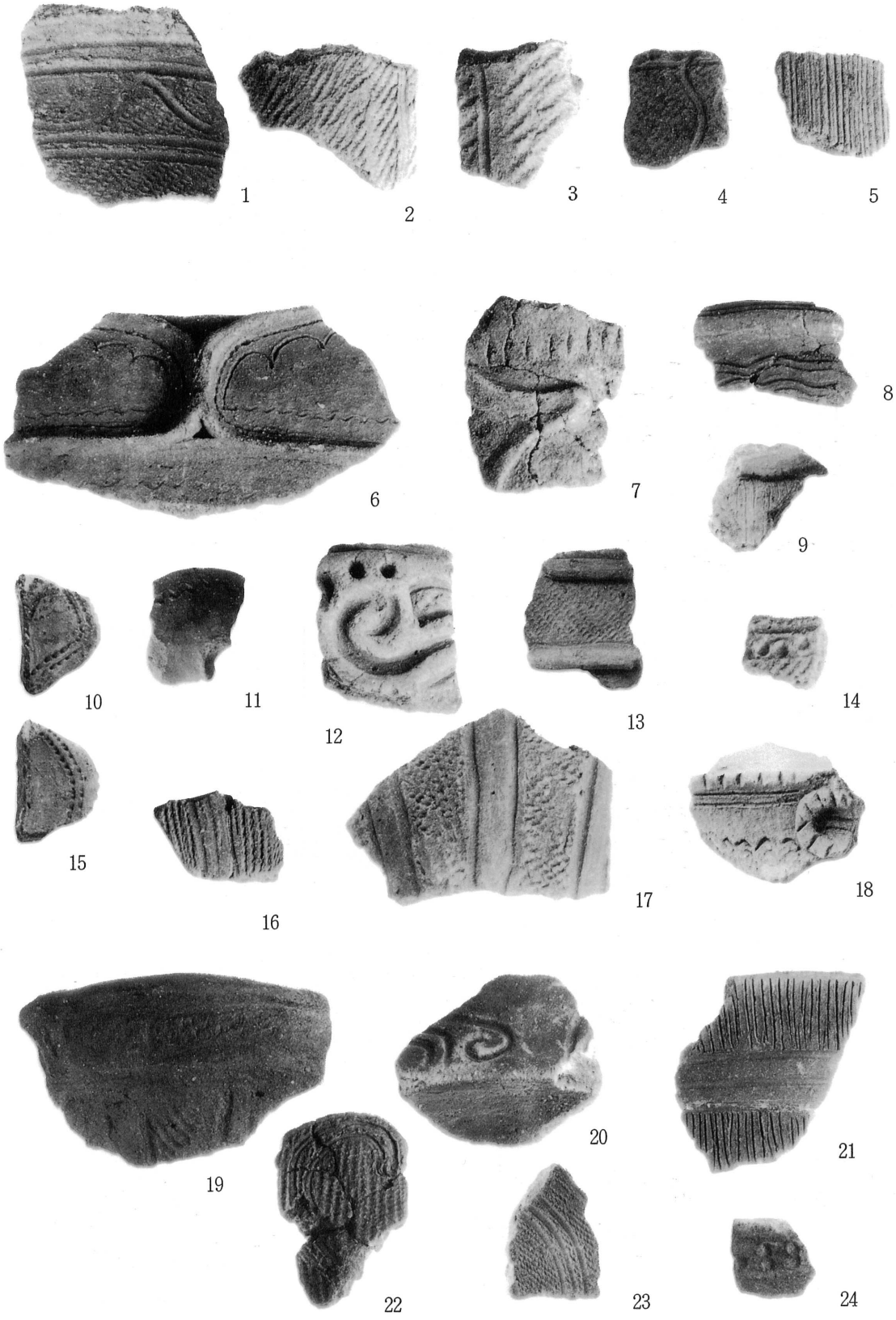


縄文土器(3)（1～2：1号住居址．3～14：2号住居址．15～28：3号住居址）

図版26

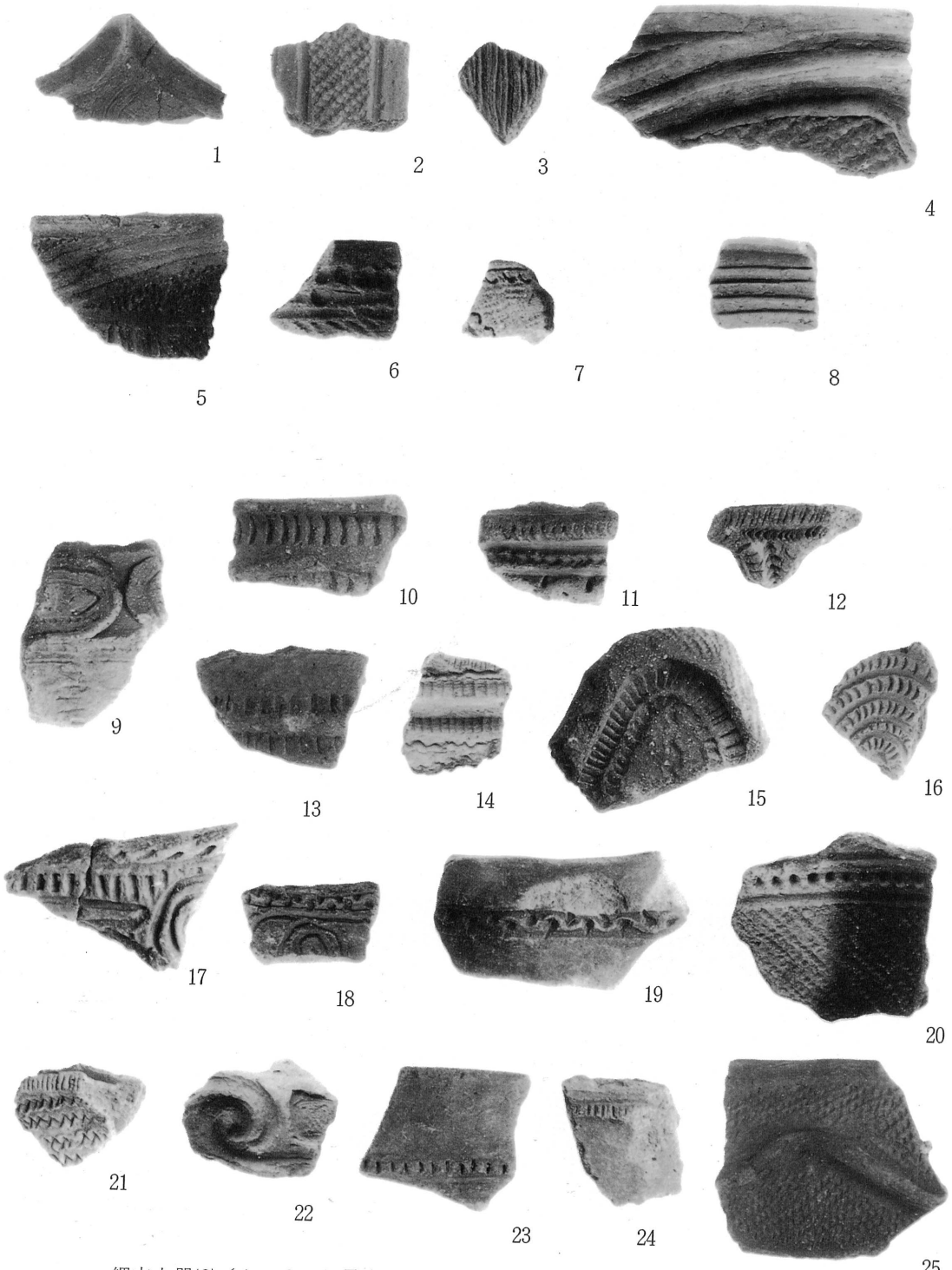


縄文土器(4)（1～13：4号住居址．14～27：5号住居址）

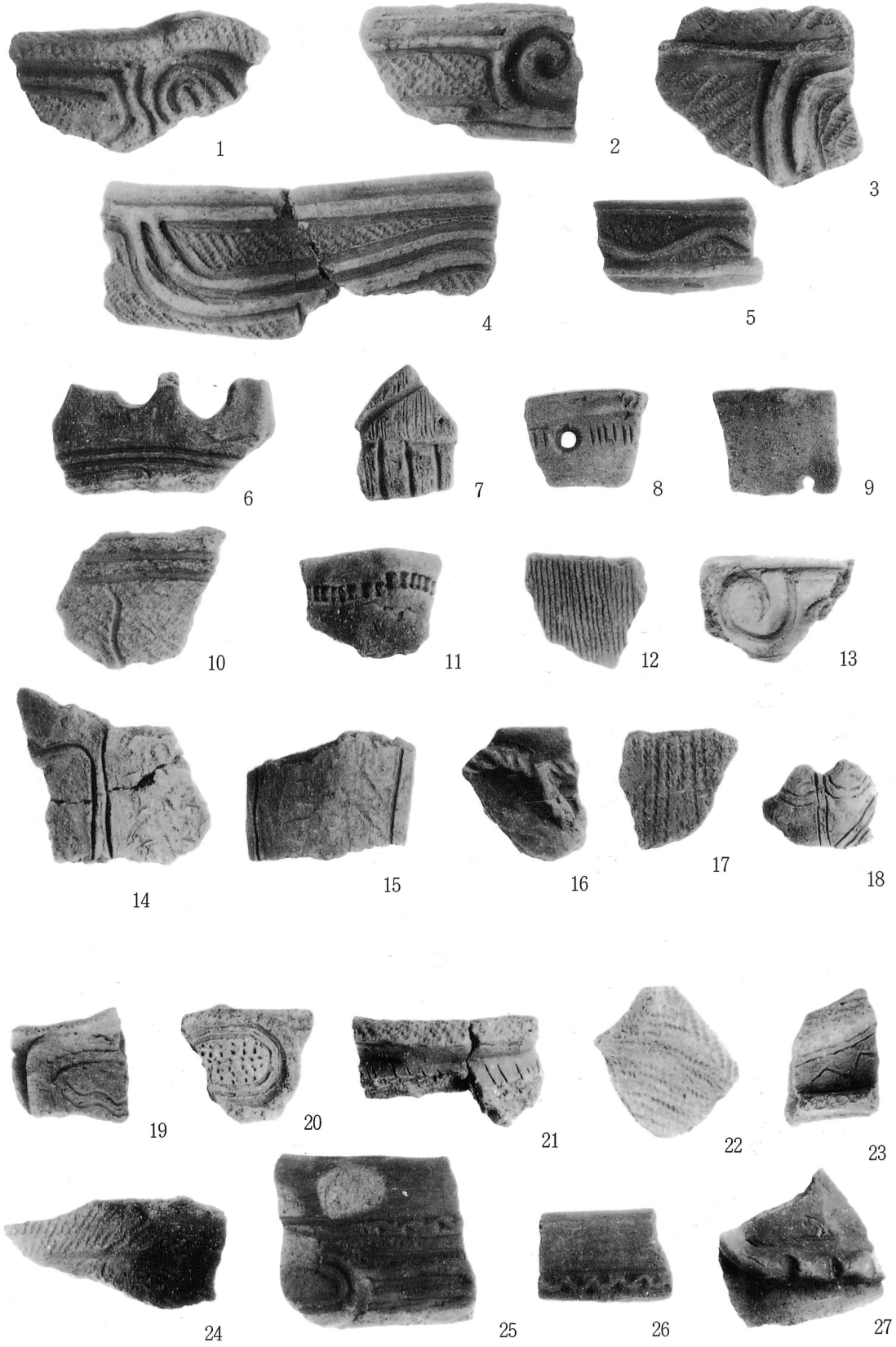


縄文土器(5)（1～5：5号住居址．6～17：7号住居址．18：6号住居址．
19～24：9号住居址）

図版28

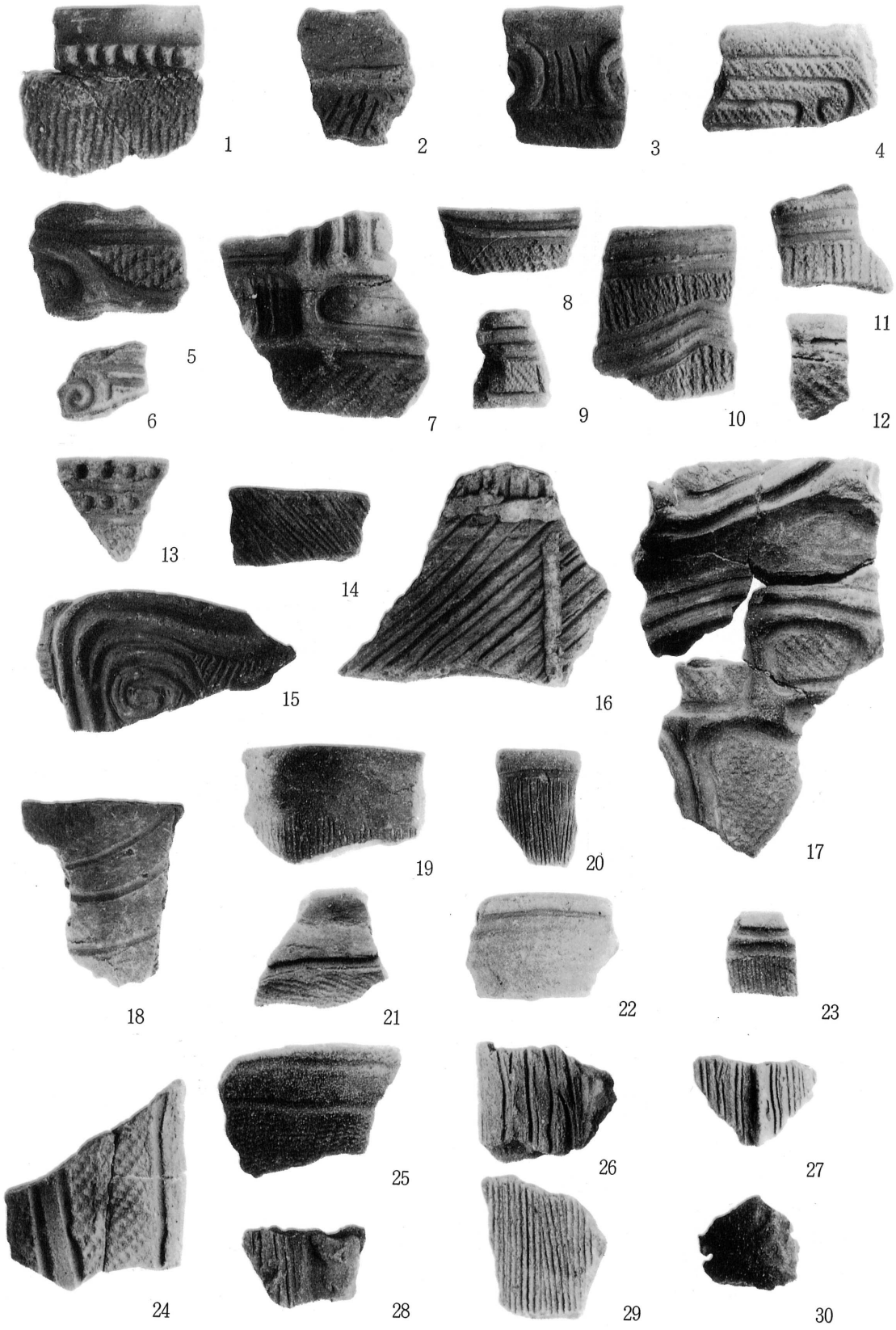


縄文土器(6)（1～3：15号土壙．4．8：17号土壙．5～7：18号小竪穴．
9～25：26号方形周溝墓）

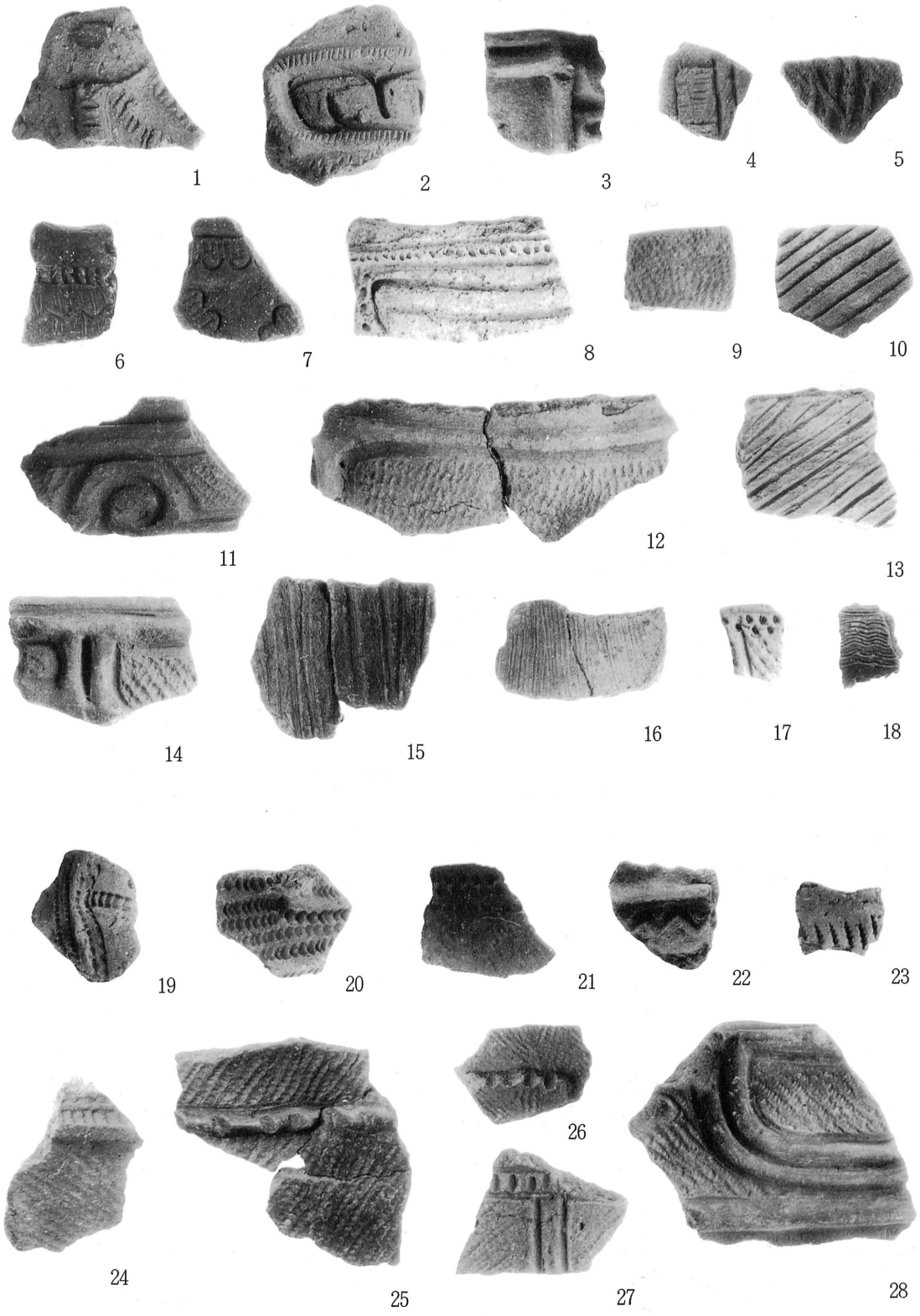


縄文土器(7)（1～18：26号方形周溝墓．19～27：24号方形周溝墓）

図版30

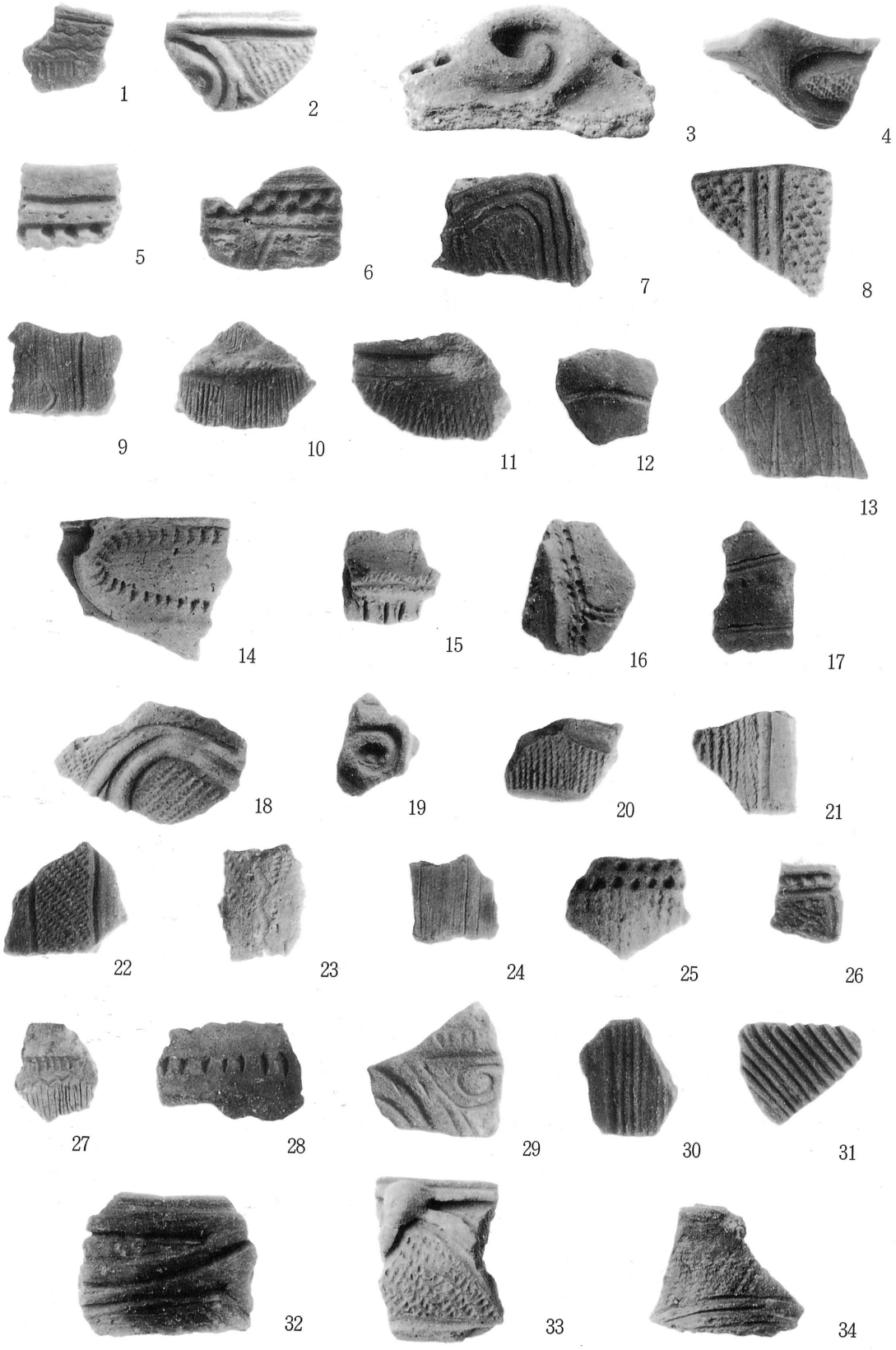


縄文土器(8)（1～30：24号方形周溝墓）

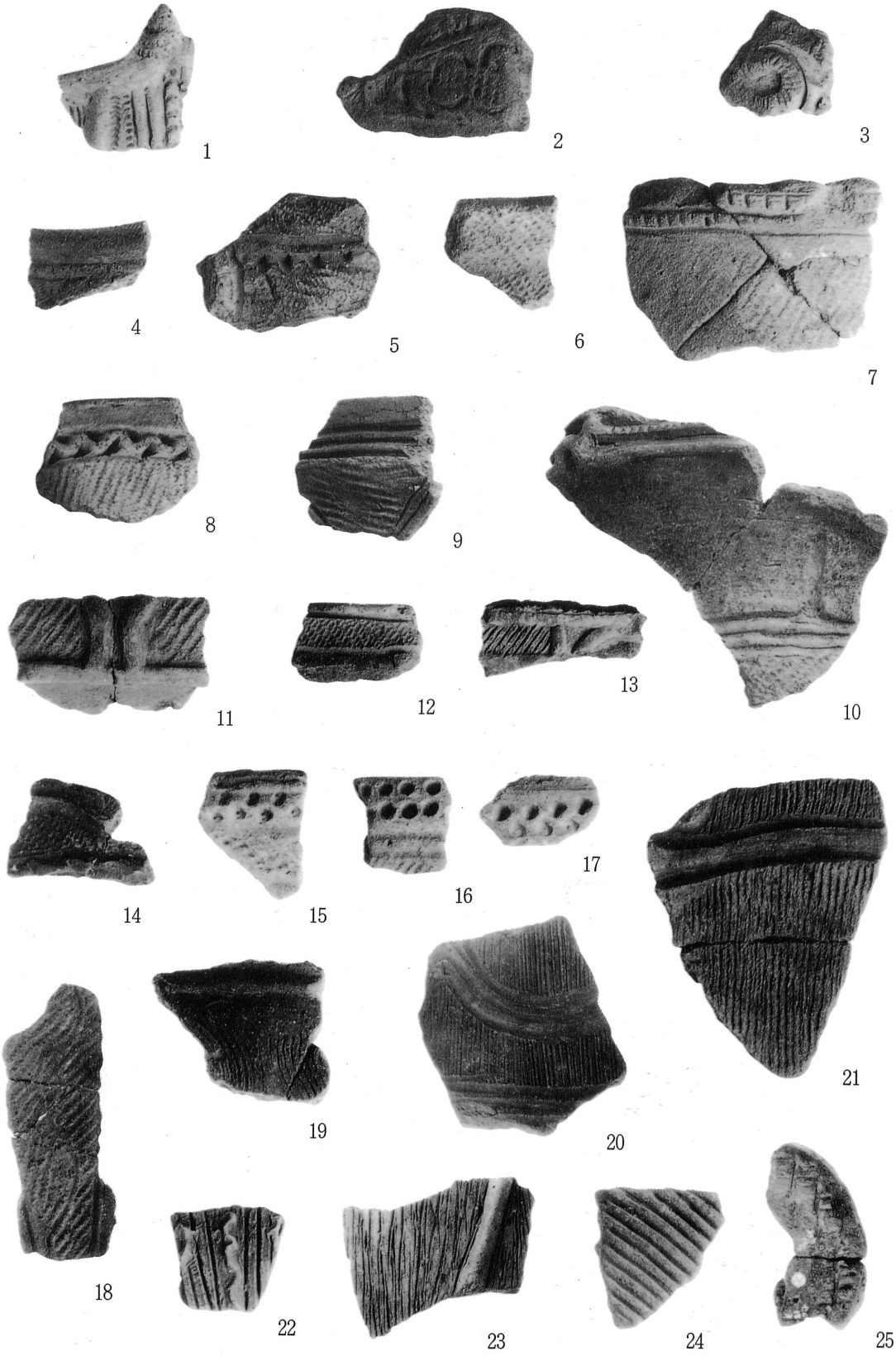


縄文土器(9)（1～18：21号住居址．19～28：25号方形周溝墓）

図版32

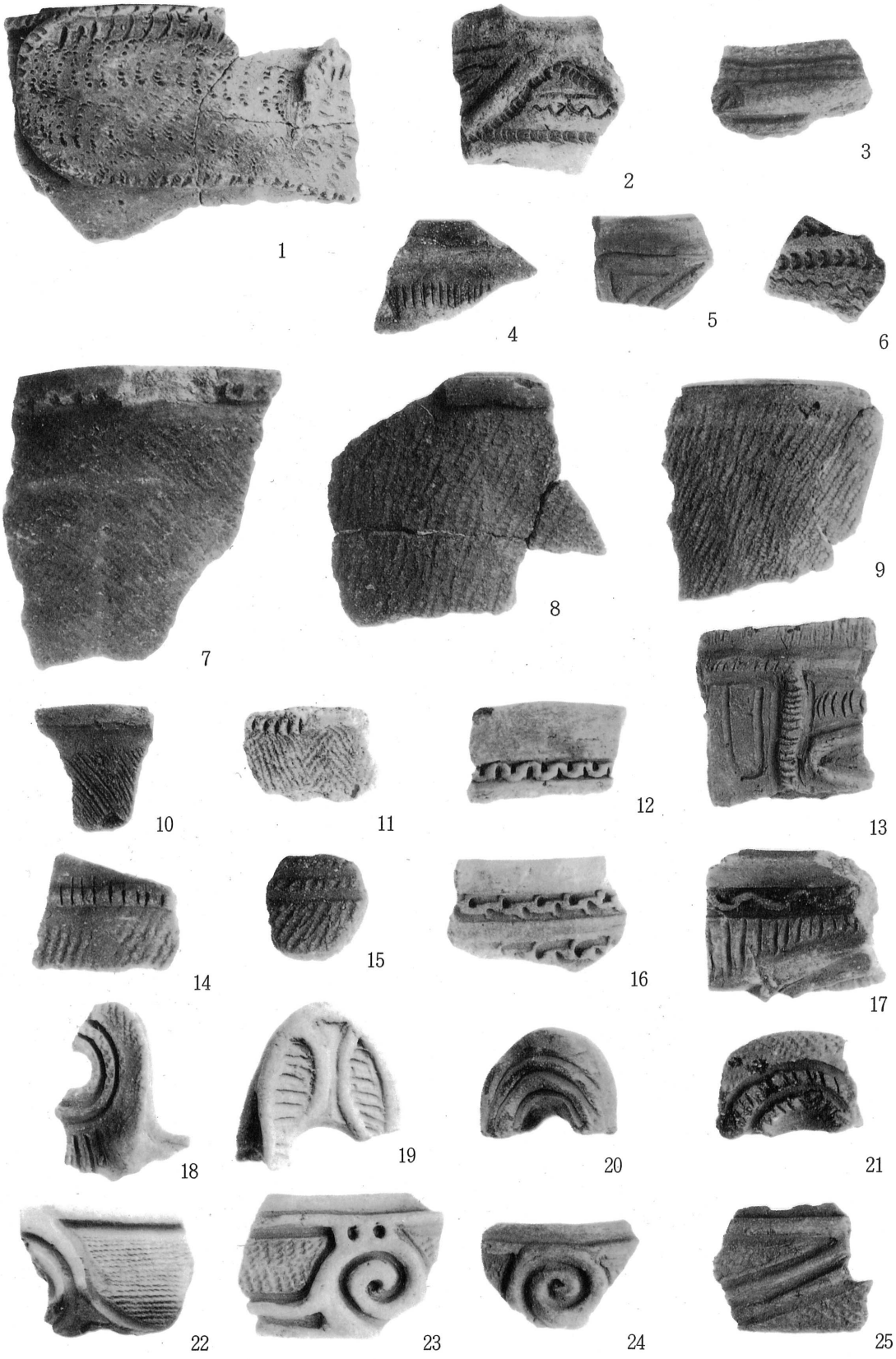


縄文土器(10)（1～13：19号住居址．14～26：20号住居址．27～31：22号住居址．
32～34：27号址）



縄 文 土 器 (11)

図版34



縄文土器(12)（遺構外）

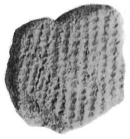
図版38

104

105

106

107


108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

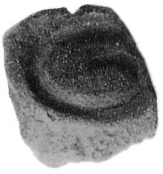
132

133

134

135

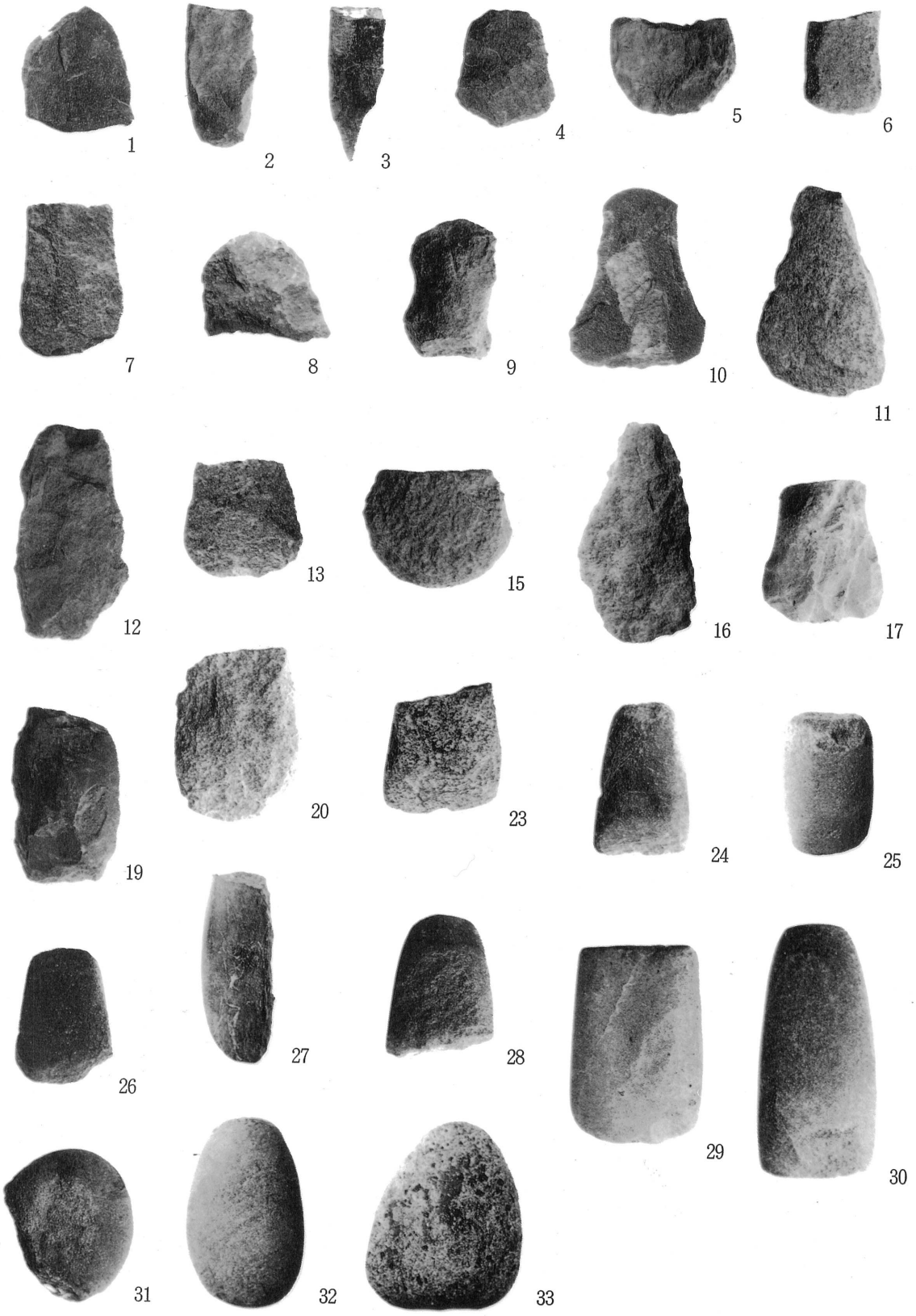
136


137

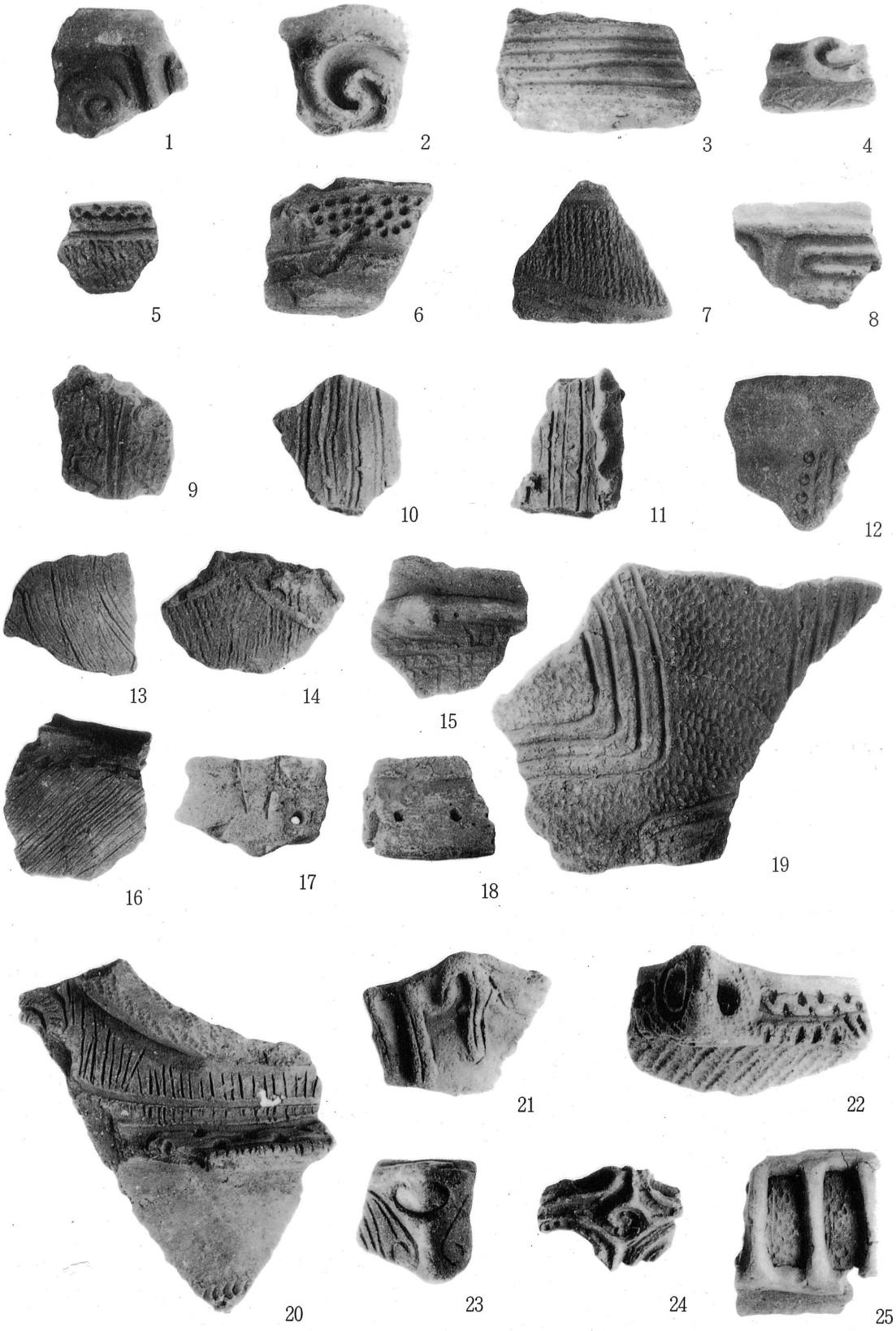
138

土 器 片 錘 (3)

図版42

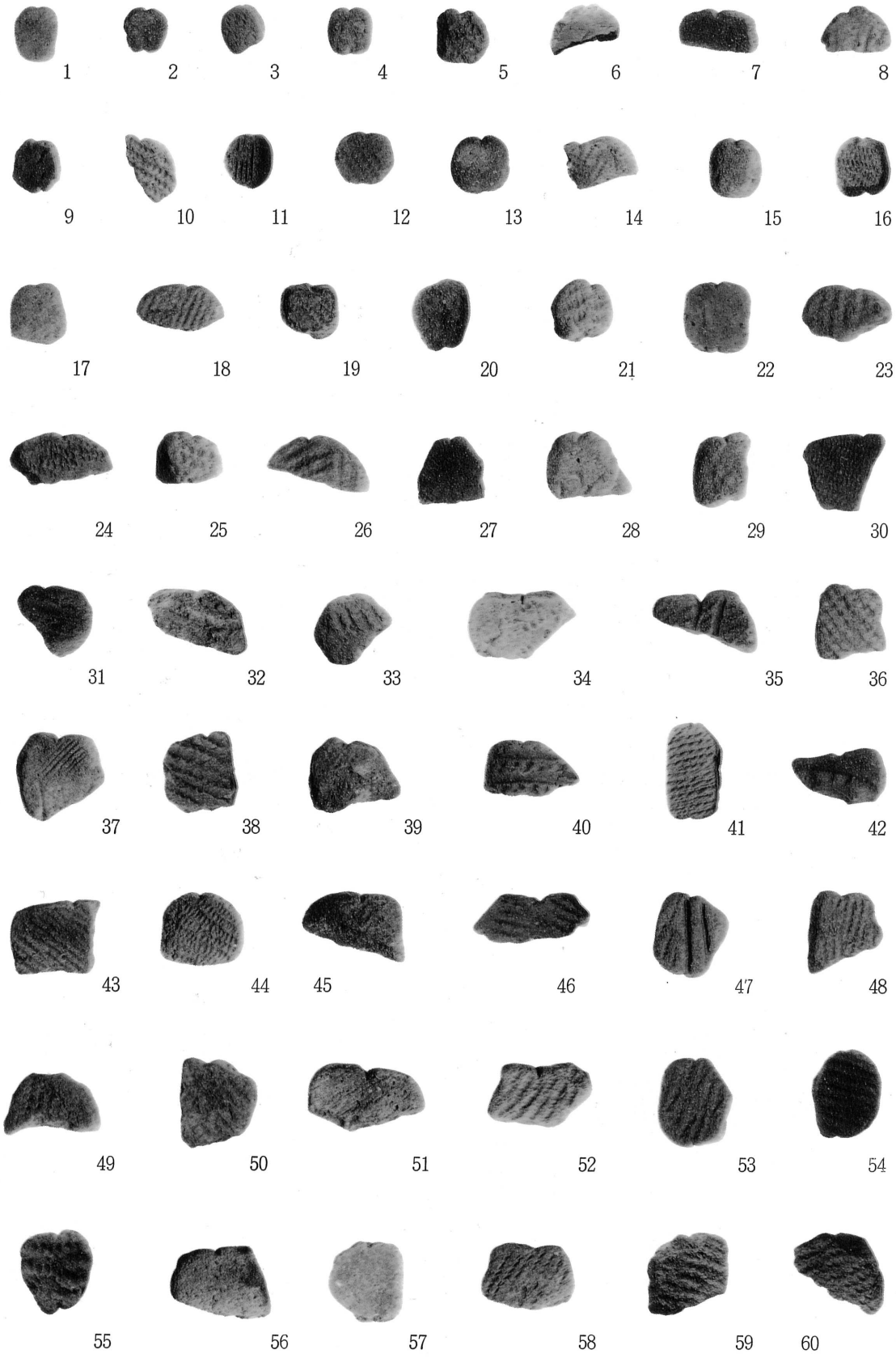


石　器(1)（番号は挿図・表番号に一致）

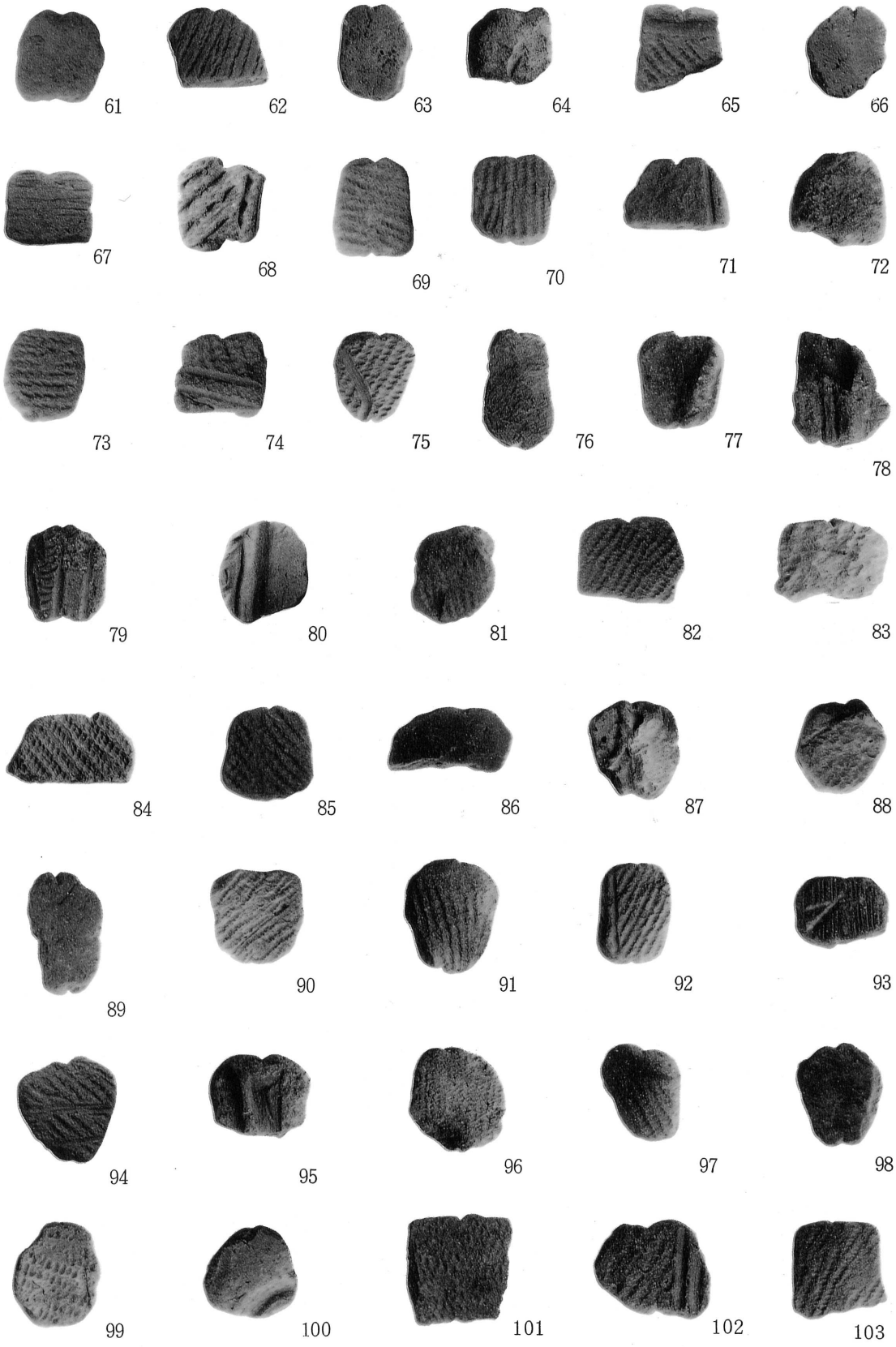


縄文土器(13)（1～19：遺構外．20～25：不採拓遺物）

図版36

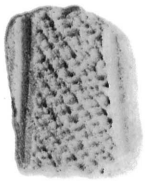

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60

土 器 片 錘 (1)


61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103

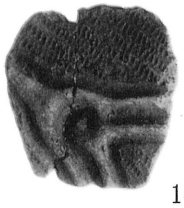
土 器 片 錘 (2)

139


140

141

142


143

144

145

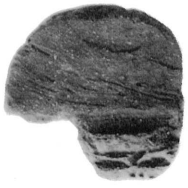
146

147

148

149

150


151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

土器片錘 (4)

図版40

163

164

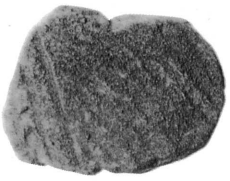
165

166

167

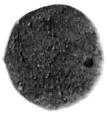
168

169

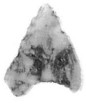

170

171

1

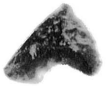

2

土器片錘(5)：土器片利用の円板

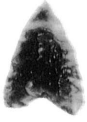

1

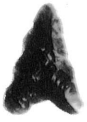
2

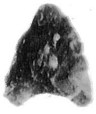
3

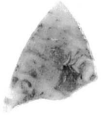

4

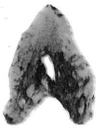
5


6

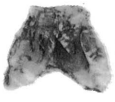

7

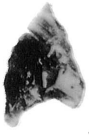

8

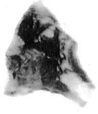

9


10

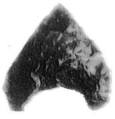
11


12

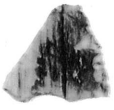

13


14

15


16

17

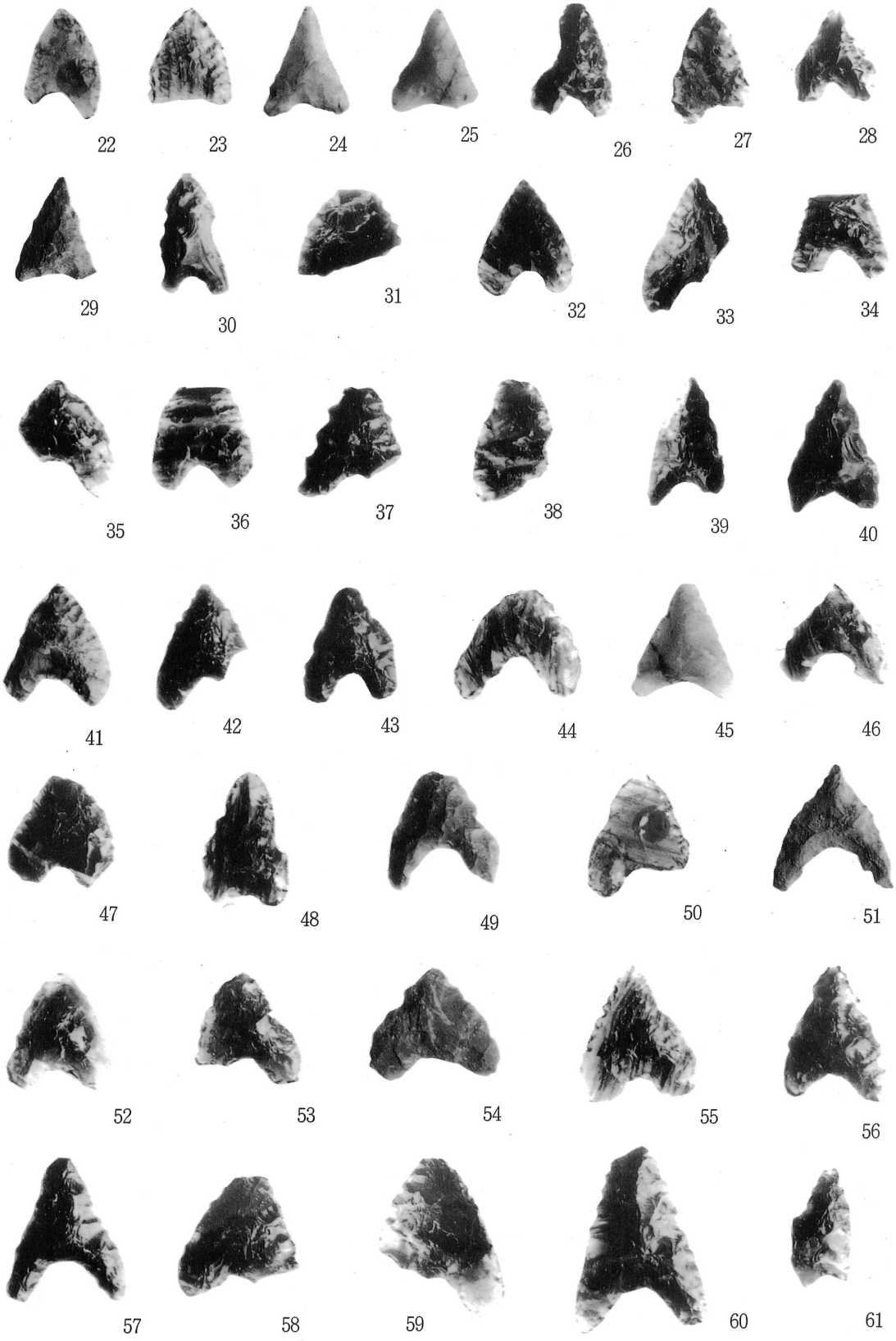

18

19

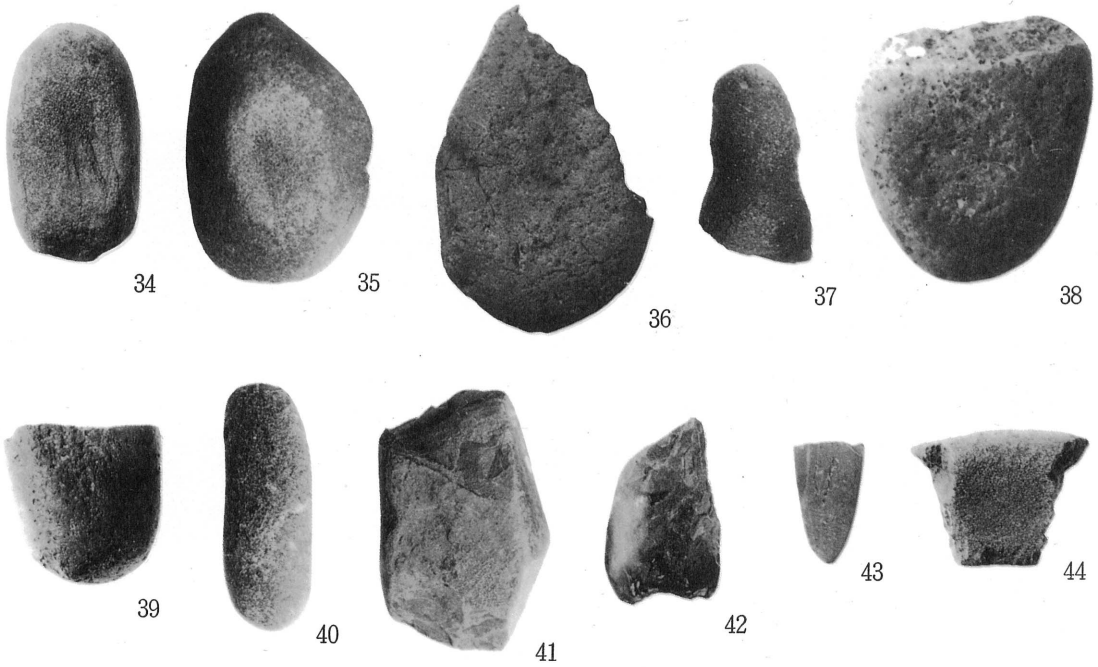
20

21

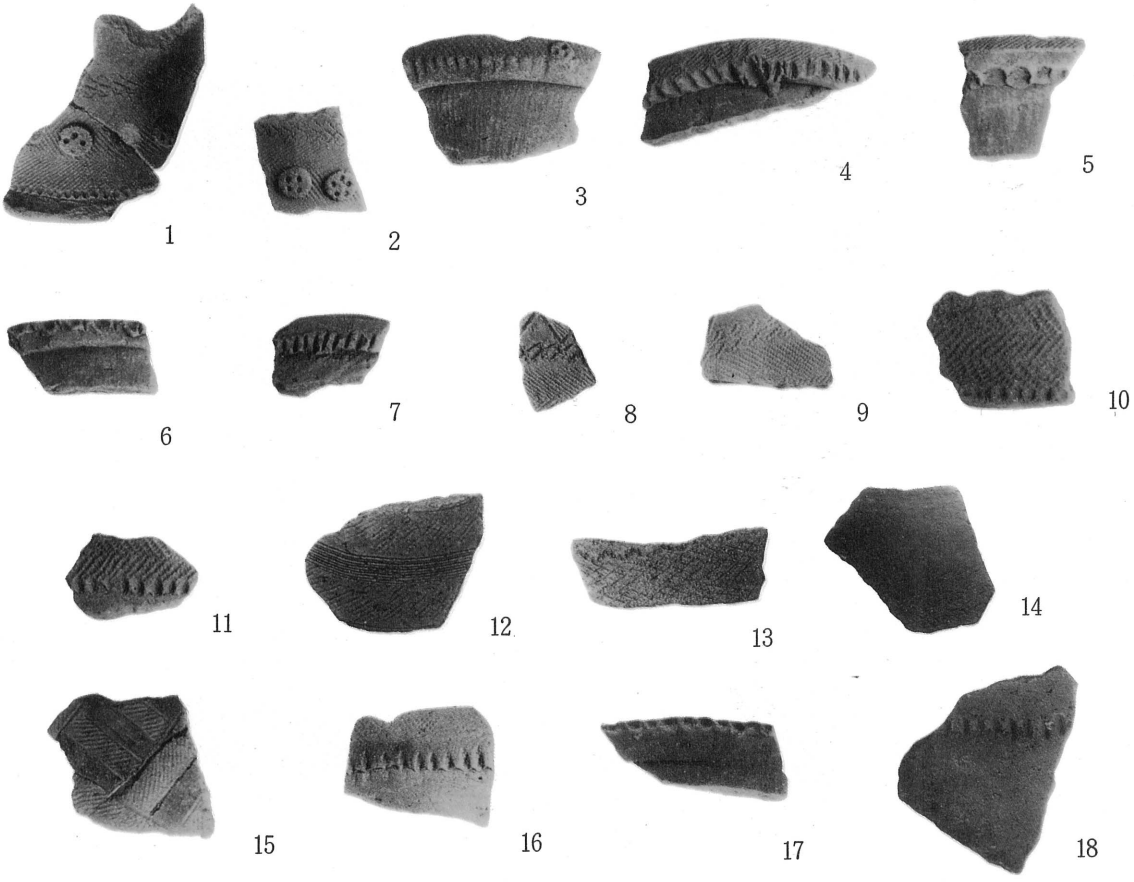
石　　鏃 (1)


22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61

石　　鏃 (2)



石　器(2)（番号は挿図・表番号に一致）



弥生土器(1)（番号は観察表番号に一致）

1 (20)

2 (21)

2 (21)

4 (21)

5 (22)

6 (22)

7

8

弥生土器(2)（カッコ内は遺構番号．７，８は遺構外）

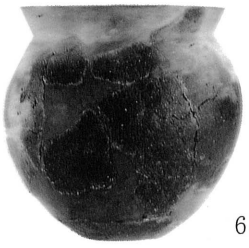
1

2

3

4

5


6

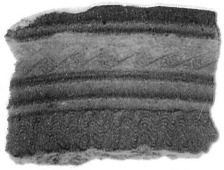
7

8

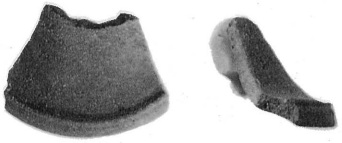
9

26号方形周溝墓出土遺物

1

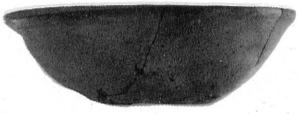

3

2


4

5

草刈型土器（仮称）


6

7

歴史時代土器

8

9

10

11

12

鉄製品

13

鞴の羽口

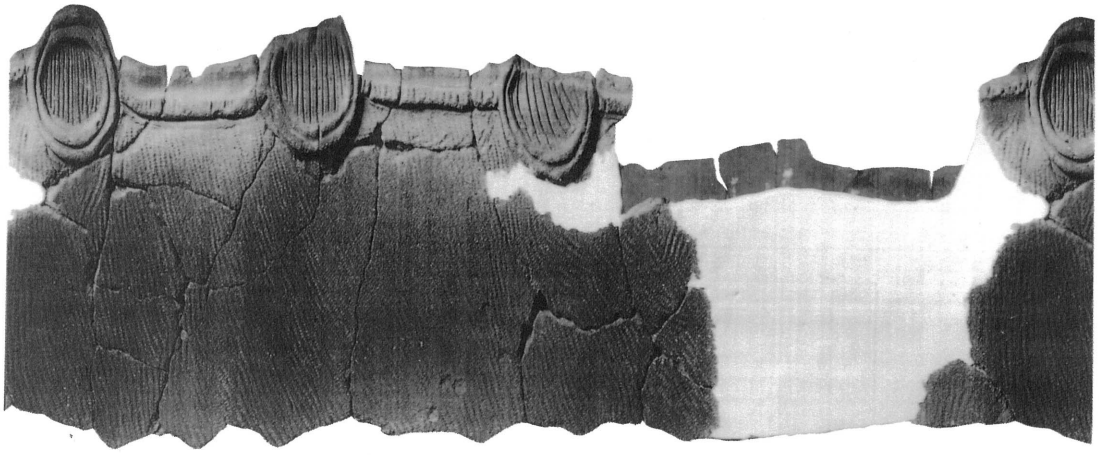
14

15

16

古　　銭

図版48



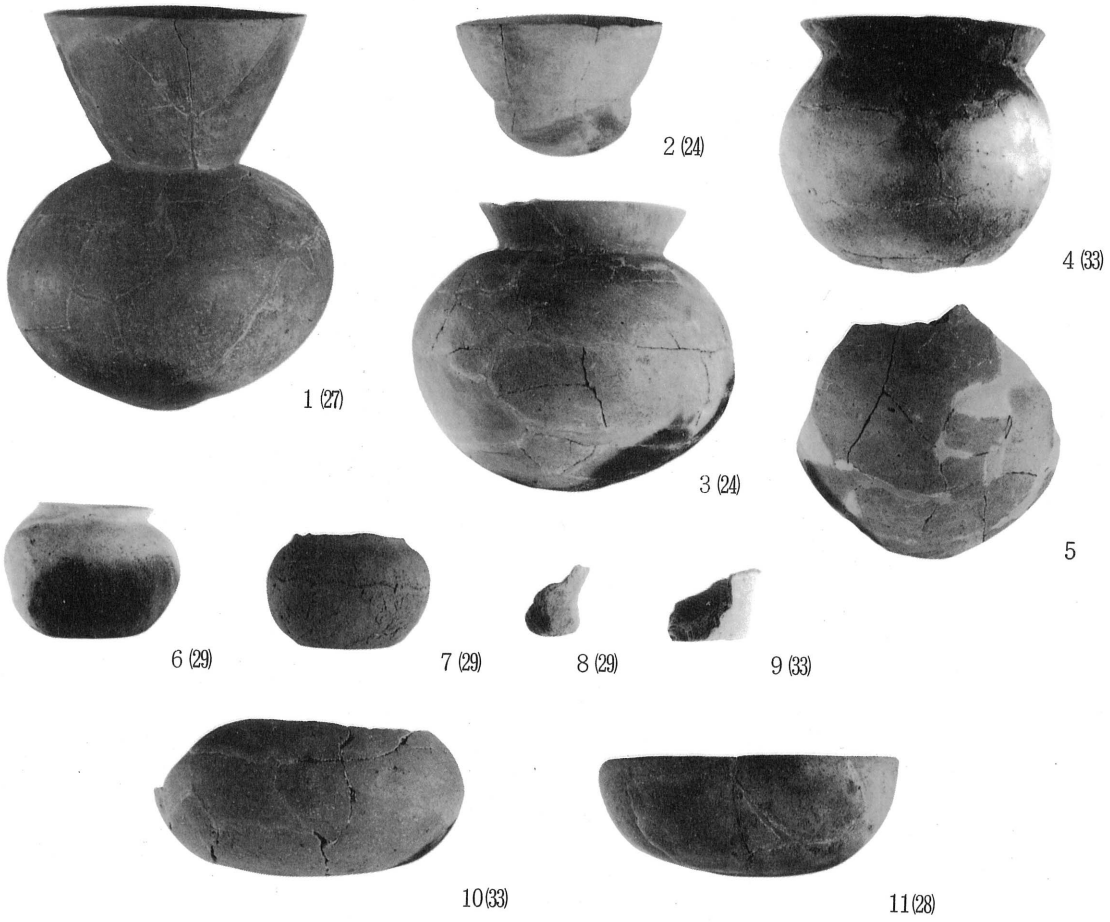
1

8

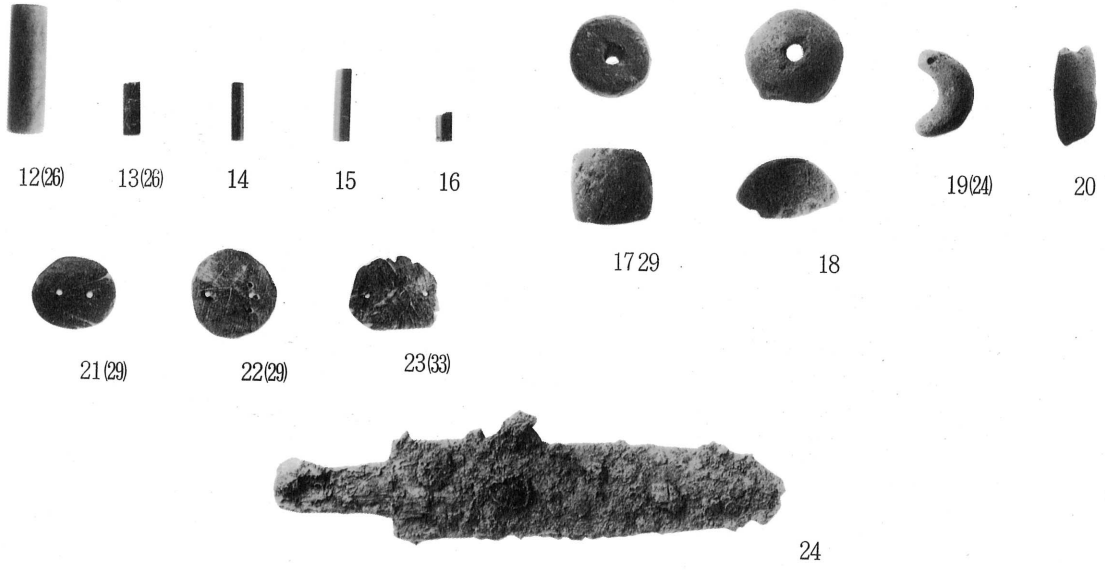
15

縄文土器展開写真（番号は出土遺構番号）

図版46



土師器（カッコ内は遺構番号）



出土玉類・有孔円板・鉄剣（カッコ内は遺構番号）

—— 千葉県市原市 ——

草　刈　遺　跡

昭和60年３月23日　印刷
昭和60年３月30日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター

発　行　　市　原　市　街　路　課
　　財団法人　市原市文化財センター
　　千葉県市原市馬立817番地

印　刷　　三陽工業（株）　市原支店
　　千葉県市原市五井5510の１
　　ＴＥＬ 0436(22)4348